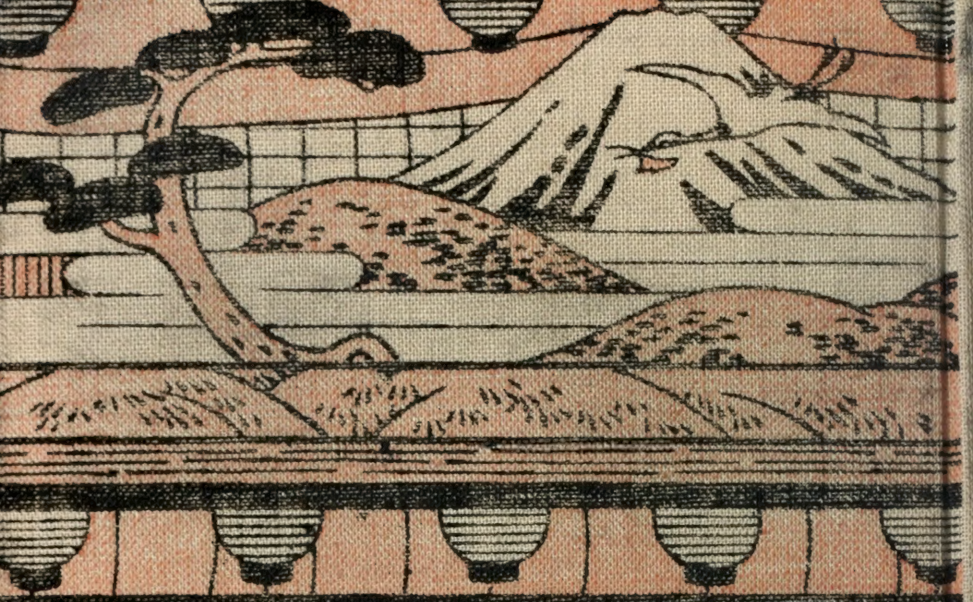


第七巻

め組の喧嘩

三人片輪

上野の戦争

松田の仇討

PL Kawatake, Shigetoshi
767 Sewa kyogen kessaku shu
K32
v.7

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

第七卷

世話狂言傑作集

竹柴其水の卷

東京 春陽堂發行

本集の脚本により上演又は轉載せんとする時は著作權者の許諾を經られ度候

目次

解説……………………………………………一—一〇
◎神明恵和合取組（め組の喧嘩　三幕）……………………………一
◎三人片輪（滑稽浄瑠璃　一幕）……………………………一一九
◎皐月晴上野朝風（上野戰爭　六幕）……………………………一四一
◎一刀流成田掛額（松田の仇討　三幕）……………………………三三七

PL
767
K32
v. 7

UNIVERSITY OF TORON
MAR

挿繪の目次と說明

○天野八郎の囚はれ……………………………卷頭
（芳幾筆の錦繪、上野戰爭金魚屋の場中央が五世尾上菊五郎の天野八郎）

○め組の喧嘩……………………………一頁の前
（國周筆錦繪、喧嘩の場）

○上野戰爭……………………………一四一頁の前
（國周筆錦繪、光仁の落去中村福助の光仁。）

○松田の仇討……………………………三三七頁の前
（稿下當時の繪番附の一部分）

解説

本卷は「竹柴其水の卷」として、其水の代表作を輯錄した。

竹柴其水は去る大正十二年二月七日、七十七歳を以て死去した狂言作者である。弘化四年十月、京橋本材木町六丁目の材木商の家に生れ、始め先代守田勘彌の世話を受けて守田座に出勤し、三世櫻田左交の下にあつて、熨斗進三と呼んだ。後默阿彌(當時は河竹新七)の門に入つて、明治六年四月から竹柴進三と改め、其後新富座で立作者の地位に上つたのが明治十七年。而して同二十年に默阿彌の俳名其水を讓られ、默阿彌第二の高足として認められた。後年明治座にあつて、先代左團次の爲に盛んに新作を稿下、上演し、三世河竹新七と共に、默阿彌歿後に於ける狂言作者界の二頭目として活躍してゐた。

三世河竹著作の大部分が、講談人情噺等の比較的忠實なる脚色であるに對して、其水の著作には、一つの史實又は傳說に創意を加へて構築せられたものが可なりにある。また、三世河竹が純粹に默阿彌の衣鉢を傳へたに對して、其水は努めて新傾向の作風に順應せんとしたの觀があつた。然しながら、思想、素養の根本的に相容れざるものがあつた爲めか、新傾向の作品は渾然たらざる憾みが多いと言つてよい。寧ろ狂言作者として、師の作風に則したものに、代表

作と認むべきものを發見する。現に本集に收めた四篇の內、主なる三篇までは默阿彌在世中の作であり、他の助筆を受けてゐるものなのである。

次に其水の主なる著作を記して見よう。

千石舩帆影白濱（仙石騷動、明治二十一年新富座稿下）。土佐半紙初荷艦（土佐高次郎、同年同座）。那智瀧誓文覺（文覺勸進帳、二十二年三月、中村座）。富山城雪解清水（佐々成政、二十三年、新富座）。神明惠和合取組（め組の喧嘩、同年同座）。皐月晴上野朝風（上野戰爭、同年同座）。一刀流成田掛額（松田の仇討、二十五年、市村座）。石橋山源氏旗揚（賴朝伏木隱れ、二十六年明治座）。遠山櫻天保日記（遠山政談、同年同座）。東花團四郎坊主（市川團四郎の傳、二十七年同座）。男達廓夜櫻（夢の市郎兵衛、二十八年同座）。箱根細工車指物（車善七、三十一年同座）。名高秋田義民傳（義民傳之助、同年同座）。三人片輪（三十一年、同座）。山田長政譽軍配（三十二年、同座）。名慕薩摩踊（薩摩棒打、同年同座）。櫓太鼓出世取組（横綱谷風、三十二年同座）。水澤瀉曠着唐犬（權兵衛、同年同座）。日本晴露領雪解（近藤重藏、同年同座）。天保山眺望大鹽（大鹽平八郎、三十六年、同座）。僞鍍金蓮華組上（一心太助、蓮華往生、三十七年、同座）。墨塗女（四十年同座）。淺妻船島根一蝶（英一蝶、四十年作）。享和春雨國紀聞（お妻八郎兵衛、四十三年、同座）。

千貫樋三島於仙（大正年二作）。百組出世鳶（大正四年、市村座）。元祿薩摩侍（義士傳、同年明治座）。鐘曳鎌倉權五郎（同年、新富座）。

＊　＊　＊　＊　＊

『め組の喧嘩』は明治二十三年三月、新富座に上演された。其水の作中最も普及されてゐるものである。題材となつた實說は、文化二年二月にあつた、神明境內の喧嘩で、講談に脚色されたほどの大事件ではなかつた。

この作に關しては、田村成義氏編の『續續歌舞伎年代記』より摘錄するを便利とする。

「……貳番目め組の喧嘩は其水の作とあれど、喜三郎內より辰五郎內までは默阿彌の筆になり、序幕の島崎樓は（三世河竹）新七の作なるが、角力と鳶人足の喧嘩に、どちらへもひけを取らせず、敵役を出さず、双方に疵の付かぬやう仕組みしは作者の苦心にして大手柄といふべく、此二番目人氣に叶ひ、非常の大入となりたり云々。」

「……例の凝り性の菊五郎、今回の興行辰五郎內の場にて用ふる小道具は總て本物の道具にて、地形の道具、鳶、もつこう等は今猶現存しをる露月町の頭伊之助老人より借り受けたるもの〻由、猶又裏口の障子に記すめ組の印しは餘程むづかしき書き方のものにて、是又同老人に依賴したりと、又興行中喧嘩の時に用ふる草鞋は組合より寄贈し、子役のはく分だけは

其當時の重ね草鞋を用ふる由。此卯之助老人は今にチョン髷を結びをる名代の老人なるが、此回の脚色を大層悅び、菊五郎を始め家橘松助等の鳶の者は勿論、番太を勤むる壽三郎の形りにまでも、我が記憶せる處を以て萬事の指圖をなしたりと云々。」

尙三木竹二氏の劇評を（「月草」より）左に摘錄しておきたい。

「如何に音羽屋が喧嘩を見せたしと云へばとて、喧嘩のみを以て曲を成さんとするは言語道斷なり……喧嘩の起りを瑣末に過ぐと批難せしものあれど、當時鳶の者、相撲等は殆ど喧嘩買を業とせしものなれば、かゝる瑣事より大騷動を惹起し得べし。されば喧嘩の原因はこれにて事足るべけれど、以て戲曲の原因となさんとすれば則ち足らず。唯だ焚出し喜三郎の家と鳶辰五郎の家とは、暗中模索しても默阿彌の筆に成りしを知るべく翁が屢々慣用せる手段なりとはいへど、或點に於ては頗る人情の機微を摘出し得たり。……余が此曲に似たりと思ふ同人の作極附幡隨院長兵衛にて、長兵衛が死を決して水野邸に赴く時、子分唐犬權兵衛は親分に代りて行かんと請ひて止まず、長兵衛聞かずしてかう言つたら分からねえ權兵衛だといふだらうが、武家と町家と日頃から、遺恨重なる白柄組に、引けを取つちやあこの江戶中の達衆の恥、おれも名前が惜しいから、命を捨てるも人一代、名は末代の幡隨院長兵衛、けふが男の立て時故、留めずと器用にやつてくれといへる文句を受け、唐犬が、兄貴おれが惡

かつた、もう無理留はしねえから、それぢやあ早く行きなせえ、骨はおれが拾つてやるといへり。任狹の心、此は陽に說き、彼は陰に寫し、此は長兵衞を主とし、唐犬を客とし、彼の主は喜三郞にして客は辰五郞なれど、其の事は則相似たり。……辰五郞が後を慮りて妻に取らせんとし離別狀を、妻が押戾して爭ふ時、童がこりやあおいらが貰つたよといひ裂捨つるは、眞に是れ咳唾皆珠、幕切の淨瑠璃子別れは徐ゝ幡隨に似たれど、亦能く人をして沸襟を沾さゝしむ。角力打出しの太皷にてさしこを着、手かぎを持ち、花道へ駈入るまで間然すべきなし云々」と。

稿下の時の配役は左の如くであつた。

焚出し喜三郞、九龍山波右衞門（先代市川左團次）。鳶善太郞（市川小團次）。喜三郞女房おいの（先代尾上芙雀）。鳶源助町の金八（坂東彥十郞）。鳶柴井町の藤松（坂東家橘）。め組の辰五郞（先代尾上菊五郞）。鳶露月町の龜右衞門（尾上松助）力士四車大八（先代中村芝翫）等であつた。

『三人片輪』は明治三十一年十月、明治座に初めて上演された。常磐津の新淨瑠璃であつて、其水作中の所作物としては、『墨塗女』と共に、屢々舞臺上に繰返される所のものである。

書卸しの時の役割は、船岡主馬（先代市川壽美藏）。ゐざり太郎助（先代市川左團次）。百日牛之丞（故市川小團次）。瞽女まきの（澤村源之助）といふ顔觸れであつた。

『上野戰爭』は、明治二十三年五月、新富座に初めて上演された。思ひ切つて寫實的の筆致で上野戰爭を取扱つて劇化したものである。劇として見れば新味も少なく、且當時好評でもなかつたが、中堂の燒ける火事場の舞臺裝置は好評を博したらしい。所謂火事場の道具で、大道具方の長谷川が腕を揮つて、手際よく火事の情景を寫し出したものであつたらしい。

然し、今日から「上野戰爭」を見る時は、劇としての出來榮え如何の問題よりも、忠實な時代相の寫生、書留めといふことに興味を惹かれる。上野の宮樣の事、上野のお山に御恩になつたといつて奔走する湯屋の主人。天野の兄弟が全く思想を異にせる家庭悲劇。歩兵隊の亂暴の如き、博覽會の狀景等、世相の寫生といふ點からも、見るべき價値はあらうと信ずる。

此の作も其水の師默阿彌の存生中であつて、「め組」同樣、「天野八郎宅の場」と「本所金魚屋の場」等は、默阿彌の助筆したものであつた。

書卸しの時の役割は次の如くであつた。

高木原源吉、大端の長次郎實は高木原源吉（先代中村芝翫）。後藤鐵次郎、非人ぼうだら

勝次（市川小團次）。金魚屋の女房おわか、田宮の姉娘米子（澤村源之助）。手子雨乞の小吉（大谷馬十）。三介會津領の菅吉（先代市川荒次郎）。早ぶさ菅吉、金魚屋德松（尾上幸藏）。秋本虎之助、銀行副頭取境實（坂東家橘）。天野八郎、金魚屋淸八實は天野八郎、越前屋佐兵衛、篠原國幹（先代尾上菊五郎）。藝者京屋の君勇、天野の下女おたに（市川升若）。天野半左衛門、新門の子分會津の長吉、金魚屋九郎兵衛（尾上松助）。上野の僧光仁、（中村福助、現中村歌右衛門）。長岡悦太郎、桐野年秋、酒井宰輔、執當白王院、天野賢治郎（先代市川左團次）等。

「松田の仇討」は明治二十五年十一月、市村座に初めて上演された。後に「一刀流成田掛額」と改題せられたが、稿下の際には「松名高紅葉京橋」といふ名題であつた。京橋の松田といふ料理茶屋で行はれた仇討であつたから、さういふ名題も附せられたのであらう。次に三木竹二氏の劇評を拔抄して、當時の反響を窺ふことにしたい。

「……これは四十代の人は現に見聞したる松田の喧嘩へ遊女の仇討を書き加へしものとか聞きし折、こいつは滅法面白い世話物が出來やせうと悦びしが、扨筋立を聞いて見ると兩方の關係も古めかしく、かしく役も一向引立たず、つまり御座舩が部屋に變る大仕掛と、松田の立

廻りだけがお目當とは、隨分旨い所のない仕組方かななどゝ高慢な口を利くと、あいら素人が何を知つてといふ嘲笑がどつかの隅から聞えるからこれだけはお成の夢と一緒に黒幕で消す事とすべし……」「左團次丈」の梅田雅樂之助は丸橋忠彌金子市之丞さては安宅郷右衛門などで、毎々出來さるる十八番の劍客者なれば、すつかり嵌りて其人を見るやうなり。かしくとのじやらつきも思ひ切たる野暮の仕打出來能く、師匠との別れは少しく泣き過ぎたるが幕切れの引張りは立派にて、松田の大立廻りはいつもの事とて、烈しくて心地よし、是が呼物になり、この大入はいよ〳〵人氣取の愛敬男々々といふべし。「米藏丈」の久喜萬字のかしくは調子の企切なのと丈イの定らぬだけが憾みなれど容貌はめつぽう美しく、ちよぼに合してのふりも受けたり。「權十郎丈」の郡田小八後に櫻井武雄役、是も人品見掛けはいかにも惡侍に嵌りたれど、演る事は福圓一流の臭味あり、とりわけ松田の二階にて生醉のせりふはお里のナマリが出て、シグサはこけがステヽコを踊るやうな、おまけに自慢づくで膝頭を出すいやさ云へたものにあらず云々。」

書卸しの時の役割は、次の如くであつた。

將軍家慶公、梅田雅樂之助（先代市川左團次）。水主同心宮新太郎、茂々之井舜彦（坂東家橘）。下男金六（市川小團次）。櫻井武雄（市川權十郎）。鳶頭分銅銀次　先代壽美藏）。

久喜萬字屋藤吉（市川壽三郎）。大工赤身の伊太郎（先代市川荒次郎）。久喜萬字の娘おかよ（市川米藏）。松田の女房おきみ（市川升若）等。

當時の世評如何に拘はらず、本卷に輯錄せる右の四篇は、同じ作者の『遠山政談』、『相撲の谷風』、『百組出世噺』並びに時代物に於ける『文覺勸進張』等と共に、竹柴其水の代表作と言つてよいのみならず、默阿彌以後に於て、狂言作者の手に成れる世話狂言の標本と言つてよいものと思ふ。

（本篇は大正十一年の末、此の叢書の計畫された當時、私が其水老人に話しをし、まとめる筈になつてゐたのだが、その翌年同人は歿した。こゝに、やうやくにして生前の約を果すことができて、二卷の內一卷を上梓するの運びに立到つたものである。――大正十五年一月初旬、河竹繁俊記す）。

神明恵和合取組

（かみのめぐみわが子のとりくみ）

神明組和合取組（め組の喧嘩――三幕）

序幕

品川嶋崎樓の場
高輪谷山下の場

役名　め組濱松町の辰五郎、炊出しの喜三郎、め組柴井町の藤松、同濱松町の長次郎、同露月町の龜右衛門、葉山九郎次、三池八右衛門、力士勇野龍治、同荒濱龜之助、藝者おせん、茶めし屋藤介、島崎の若い者佐介、同太助、高輪の時廻り杢藏、四ツ車大八、尾花屋の女房おくら、島崎の抱おさき、同おはる、同おくみ、同おはな、藝者おなべ、小按摩ちよんま、小じよくまめ、同ちぼ、其他。

本舞臺三間通し常足の二重、正面一間鳴崎と記せし長暖簾、上手一間中仕切りのある戸棚、此前に帳場格子、此外一面の板羽目、ずつと上の方、一間千本格子、此前に箱の用水桶あり、同じく下の方板塀、内より見越しの松、二重下の方へ下駄箱あり、是へ下足札の付きしはき物を大分入れ、軒口一面へ注連を張り、入口の左右へ飾りを取りし跡の心にて松を少々宛さしてある。總て品川新宿、鳴崎樓店先の體。爰に獅子舞の男、獅子を冠り舞つて居る、囃子方二人ちやん切りと太鼓を持ち、立ちかゝり、是をおくみ、おはな、女郎の拵へにて店先へ出て見て居る。帳場の内に若い者左介住ひ、帳合をして居る、此の見得獅子の鳴物にて幕あく。と獅子を舞ふ事よろしくあつて、

囃方二人　おめでたうござい。

くみ　もし左介どん、帳合ばかりして居ずと、奥へさういつてやんなさんせ。

はな　毎年家例で内證から、お酒が出るのぢやござんせぬか。

左介　知らせなくつてもさつきから、獅子が來て居るのは知れきつて居るから、いゝ時分に呼びに來るだらう。

獅子　呼びに來るまで待つて居ては、ちつとこつちがだれ込みの氣味だ。

太鼓　御家例のことだ、緣喜をよく、

ちやん切　目出たく、奥へ舞ひこめ〳〵。

ト又囃子の鳴物になり、獅子舞先に、囃子方二人暖簾の内へはひる。

左介　奥で小言が出にやアいゝが。

くみ　ひよつとこ踊りが面白いから、

はな　奥へ行つて見ようわいな。

ト兩人暖簾の内へはひる　跡通り神樂、鳥追の合方になり、花道より尾張屋の女房おくら、肴板の提灯を提げて、先にたち、柴山九郎次、三池八右衛門、兩人とも留守居役の侍、羽織着流し雪駄にて出る。跡より四ツ車大八、二十四五と見ゆる角力の拵へ、勇野龍治、荒濱龜之助、いづれも二段目の角力、羽織着流しにて供をして出て來り、花道にて、

くら　今晩は、大層お早うございましたねえ。

九郎　なか／＼の盛會ゆゑ、終ひまで附合つてをつたら、夜が明けようも知れぬゆゑ、三池氏と申合せ、すつぽ抜けをいたしてまゐつた。

八右　うまい都合にまゐるもので、裏梯子から下へおりると、此の三人が待つて居つて、直ぐに河岸から船へ乘り、丁度汐時もよろしいので、思ひの外に早くまゐつた。

くら　道理でお早いと存じました。どうせ今晩はお相方が、お仕舞になつて居りますから、宜しいと

はいふものゝ、お客さまがお出になりませんと、一同心が落ちつきません。

四車　さぞ今頃は中村屋で、どこへ旦那方がおいでになつたかと、お案じ申してをりませう。

勇野　両国からは吉原が、近いところをお見限りで、南へお出での旦那方。

荒浪　どうぞ大事にしてあげるやうに、橘屋のお内儀へたのみますぞ。

くら　それはおつしやるまでもなく、勤めはなれたおもてなしは、気のかるいやうでございます。

九郎　イヤ、さううまくまゐればよいが。

はな　少しもお早くいらつしやつて、安心させておやんなさい。

ト右の鳴物にて、皆々舞台へ来る。左介帳場から飛んで出て、

左介　これはよく入らつしやいました。皆さんがさつきから、お待ちかねでございます。

ト侍両人下駄箱を見て、

九郎　春は春だけ暮れぬうちから、大分客があると見え、

八右　いづれも知つた名のついた、札のはき物が沢山ある。

くら　いつも繁昌で左介どん、よいお正月が出来ますね。

左介　ヘイ、ありがたいことには、此通り正月早々お客さまがおそろひで、七福神の入船と申すも

の。

四車　女郎の辨天で、若い衆の懐ろは、ナウ勇野。

勇野　松の内から、腹は布袋で、

くら　マア、ともかくもお座敷へ、

九郎
八右　然らば案内。

左介　サア、入らつしやいまし。

ト右の鳴物にて、皆々暖簾の内へはひる。底へ上手よりおせん、おなべ品川の藝者座敷着にて、雪駄をはき出て来り、

せん　ヲヤマア、大そうなはき物だこと。

なべ　大入り芝居のお茶屋のやうだこ〔ト暖簾口より、若い者太助出て〕

太助　丁度よかつた、早く行つたり。

せん　さうしてけふのお客さまは、

なべ　どなただか、お知りでないか。

太助　尾花屋のお客で、五人とも仕舞になつてるお馴染だ。

せん　それでは、聞取の御連中だよ。

なべ　ヲヤマア、それはうれしいねえ。

太助　下の三番だから、早くお出でよ。

せん
なべ　それぢやア、すぐまゐりますよ。

ト両人暖簾の内へはひる。右鳴物きつぱりとなり、花道より露月町の龜右衛門、鳶の者の拵へにて酒に酔ひした　濱松町の長次郎、やはり鳶の者にて腕を肩へかけ、介抱しながら出て來り花道にて、

長次　コレサ、茶屋から送られて行きやといふに、初春早々つツかけに、酔つぱらつちやア見つともねえ。

龜右　何の見つともねえことがあるものか、おらツちばかりあがるのなら、茶屋が附かなきや沽券がわるいが、頭が初寄合の歸りに、向うの島崎で遊んで居るといふから、迎ひとごまかして遊びに來たのだ。茶屋もへつたくれも入りやアしねえ。

長次　手前はそんなにくらつて居るから、外聞も何もかまふめえが、頭の居るのをつきとめて、押しかけて來たやうで、見つともねえ。

亀右　この野郎はおつウ見え振りやがる、どうで頭におんぶの遊びだ。いやなら止せ。おれ一人であがる。（ト舞臺へ來る思入）

長右　コレサ、待てといつたら待たねえか。

ト附いて舞臺へ來る、太助この體を見て前へ出て、

太助　いらつしやいまし、まづ明けまして、おめでたうございます。

亀右　何がおめでてえのだ、おらアめでたくも何ともねえ。

長次　コレサ、ほかのわるいことは云はねえものだ。

亀右　何がほどがわるいのだ。

長次　マアいゝといふことよ。くらつて居るから、堪忍してくんねえ。

太助　大分御きげんさまで、へゝゝゝゝ。

亀右　人を馬鹿にしやアがつて、おつウをかしく笑やアがる。

長次　ときに、頭の居る座敷へ案内をしてもれえてえものだ。

太助　ヘイ／＼よろしうございます。

亀右　よくなくてどうするものか。

太助　こつちへおあがり下さいまし。

ト二重へあがらうとして、徳右衛門ひよろ〳〵とするゆゑ、

長次　コレサ、あぶねえ。（ト抱きとめる。是よりかけりの知らせ。）しつかりしろ。

ト此もやう、騒ぎ唄にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、後ろ品川の海を見たる遠見、見晴し座敷の心、欄間り椽側の手摺り、上の方黄心に九尺の床の間、一面の地袋上て開、下の方同じく黄心に紙骨障子を四枚建切りあり、日覆より大欄間をおろし、舞臺一面薄べりを敷きつめ、鶴龜模樣園の襖、所々に雪洞つきの燭臺を照し、上手に以前の太郎次、八右衛門座蒲團の上に住ひ、この脇に以前のおくみ、おはな住ひ、續いておさき、おはる女郎仕掛なりにて住ひ、この脇に四つ車住ひ、眞中に酒肴の臺の物を取散らし、下手に以前のおせん、おなべ三味線を彈き、角野、荒浪立ちかゝり、角力甚九を踊つて居る。ずつと下手に、おくら燗銅壺にて酒の燗をして居る見得、右の騷ぎ唄にて道具留る。とおせん、おなべ三味線を彈きながら、

せん
なべ　ヨウ〳〵、甚九(じんく)の日(ひ)の下開山(もとかいさん)。

ト ほめる、兩人踊りくたびれたるこなしにて、

勇野　マア、こゝらで水だ〳〵。

荒浪　お内儀、早く銚子をくだんせ。

くら　丁度お燗があつくつきました。（ト酌をして、角力二人酒をのみ居る。）

九郎　イヤ、土俵でこのくらゐ働き居ると、二人とも贔屓がつくであらうが、

八右　兎に角ころ〳〵ころげて居るので、贔屓にしても張合ひがない。

さき　いつも御一緒の水引關は、けふはお見えでありませんが、どうかなすつたのでござんすか。

四車　あれは、けふは名前替への祝ひで、會主のことゆゑ、兩國の中村屋に集つて居ます。

はる　それではあの水引關は、名が替るのでござんすか。

九郎　あの水引清五郎は、去年の暮の本場所で、一日も星がつかねば年寄連がうち寄つて、改名させる出世角力ぢや。

くら　けふの中村屋の御祝會が、お名前替へのおひろめなら、何ぞお祝ひ申したに、少しも知らずに居りました。

八右　イヤ〳〵、出入りの屋敷ばかりで世間へ心配かけぬやうとの、彼が氣質に我々のみけふは打寄つて、祝つたのぢや。

勇野　わしらも名でも替つたら、ところげ出さうにならうも知れぬ。

菊濃　どうか旦那方のお引立で、改名させて下さりませ。

せん　改名といへば、今度水引關には、何といふ名に替りました。

九郎　屋敷の國の山の名を採り、九龍山浪右衛門となつた。

くら　ヲヤ、それでもまだ番附には、水引としてございました。

四草　イヤ、春場所から改めて、えらい名前に替りますが、これといふのも屋敷方の皆お引立にござるところ、ありがたいことでごんすわえ。

八右　いづれ來月番附で、また花角力があらうから、其番附へ九龍山と、名前が替つて出るであらう。

せん　花角力なら見られますから。

なべ　是非ともお供を願ひます。

九郎　イヤ水引の話で持切りで、どうやら座敷が沈んだやうぢや。

八右　水を入れたら兩人とも、もう一騒ぎさわげ〳〵。

勇野
菊濃　ヲイ藝者さん、三味おツぱじいて下せえ。

せん
なべ　アイ〳〵、サアお踊りなさいよ。

ト三味線を彈く、これにて下座の太鼓入り角力甚九になり、勇野、荒浪酒に醉ひしこなしにて、ひよろ〳〵しながら踊る。此うち下手へよろけて荒浪は見切りの障子へ突きあたり、障子を倒す、此外廊下の片遣見、おくらあはてゝ障子を建てようとするを、外より左右へひらき柴井町の藤松、貰の者のこしらへにて、這入り來り立身にて、

藤松　ヤイ〳〵、何で障子をおれに當てやアがつたのだ。

ト此うち勇野、荒浪は下に居て、

勇野　何ぢや障子を當てた、障子を當てた覺えはないわえ、ツイ倒したのぢや。

藤松　イヽヤ當てたのだ。通りかゝつた廊下の外、わざと手めえ達が當てたのだ。（ト下に居る。）

くら　お隣り座敷のお客さま、どうぞ御堪辨下さいまし。

勇野　イヤ、お内儀詫びさつしやるな、こつちに引け手はみぢんもない。

荒浪　よしぶつたふしたにせへ、餘所の座敷へ這入り込んで、挨拶もせず何でごたくをつきをろのおや。

藤松　言はねえでどうするものだ。

勇野 荒浪　なぜ〳〵。

藤松　癪にさはるから、文句をいひに來たのだ。

勇野 荒浪　何ぢやと。（ト替つた合方になり）

藤松　遊所場だから天井や、ねだが拔けてもかまはねえと、騒ぐ奴等に理屈ツぽく愚痴をならべていふのも野暮だが、遊びに來りやア田樂の、豆腐にあやかる二本差しも腰一本の串でん者も、丘一三六どしこみに、障子一重の客仲間、ちつたア遠慮もあらうのに、去年の暮の煤掃きか引ずり俤を見るやうに、大道円がはねまはり、化物じみた大野郎が踊る隣りの騒ぎより、こつちの朧の燗徳利が、踊つてころげる騒ぎになり、やかましくてならねえところへ、廊下を通つて障子をたふされ、たゞ一言の挨拶もねえから文句をいひに來たんだ。

九郎　何ぢや、隣の客だとえ。

八右　コレ四ツ車、つまみ出してしまへ。

四車　よろしうござります。（ト前へ出て）コレ〳〵喜蔵どん、仲間の者が酒の上であたりもかまはず騒いだのは、ちつと無遠慮であつたなれど、こんたも詞が過ぎるでごんせう。とサ、理屈でいへばそんなものぢやが、言はるゝ通り

り遊冶郎ぢや、こつちも今の悪口を、蟲をこらへて堪辨すれば、そつちもくどう言はんせずと、早う座敷へいんで下され。

藤松　イヤそんな挨拶ぢやア立たれねえ、さう〳〵しくつてわるかつたと、詫びることなら歸つてやるが、詞が過ぎると言はれちやア、このまゝあとへは引かれねえ。

四車　ヲヽ痩せても枯れても力士をとらへ、大道臼との悪口は、ちつと詞が過ぎるであらう。

藤松　力士もへちまもいるものか、大道臼といつたがどうした、め組の鳶の三河屋藤松、おれが相手だ、どうともしろ。（トあぐらをかく。）

勇野
荒浪　うぬ、さうぬかせば。（ト立ちかゝるを若者両人にてとめ。）

せん
なべ　マア關取衆、下に居て下さい。

くら　誰より一番お連れ申した、茶屋がとゞかないのでございますから、頭どうか堪辨して下さい。

藤松　イヤ、茶屋なんざア相手にしねえ、大道臼がおれの相手だ。

ト立ちかゝるを、おさきこらへかねてそばへ寄り、

さき　マアいゝから、藤松さん、あつちへ行つて居ておくれ。

藤松　ヱヽ、手前が第一氣にくわねえのだ。（トはりたふす、女郎二人これを見て）

三人　アレ可愛さうにおさきさんを。(ト若者二人下手へ向ひ、)

せん
なべ　誰か來ておくんなさいよう。

ト皆々立ち騒ぐ、此へ下手より、いぜんの長次郎、龜右衛門出て來り、

長次　サア、皆はおれが拾つてやるから、

龜右　藤松しつかりしろよ。

藤松　野郎の刀かけやがつて、めらに、はぢをされちやア男が立たねえ。

九郎
八右　おのれ、無禮千萬な奴ぢや。(ト立ちかゝる、下手よりいぜんの若い者二人出て、)

左介
太助　マア御勘辨下さいまし。(トとめる。)

九郎
八右　堪忍は出來ぬ、とめるな〱。(トちかゝるを皆々とめる。此うちおさき下手廊下へ行き、)

さき　頭、來ておくんなさいよ。

ト呼ぶ流行唄になり、おさき心づかひのこなしにて、廊下へはひり、直ぐ辰五郎、鳶の者のこしらへ、先を引張り出て來り、

頭、後生でございますから、仲人になつておくんなさい。

辰五　マア〱いゝから、騒ぎなさんな。(ト皆々の中へ割つて這入り、)コレ、おれが來たからにやア、

騒がねえでも、事のわかるやうにしてやるから、手前達も下に居ろ。

藤松　兄貴が知つたことぢやアねえ。

長次
龜右　打つちやつておきねえ〳〵。

辰五　ヱ、遊び場所で見つともねえ、靜にしろ。

ト無理に下に居る、此時八右衛門思はず辰五郎を見て、

八右　ヤ、そちは辰五郎ではないか。

辰五　ヱ、（ト八右衛門を見て）コリヤ、旦那さまでござりましたか。

九郎　それでは貴殿が御存じの。

八右　いかにも、彼れは濱松町の、辰五郎といふ鳶の者。

四車　そりや、いゝ者がまゐりました。

勇野
荒浪　こりや野郎ども、かゝつて來んか。

女
皆々　マア〳〵、靜にして下さい。

トよろしくなだめる、是にてみな〳〵下に居る。合方替つて、

辰五　お屋敷さまといふことは、隣り座敷で聞いて居りましたが、あなた様とはちつとも知らず、若

えやつらの隠居に難を出すのも大人氣ないと、さしひかへて居りましたが、酒の上の間違ひにて、此の三人があなた方へ、對しましての失禮は、眞平御免下せえまし。

トよろしく詫びる、藤松前へ出て、

藤松　ヲイ〳〵見苦しい、何をいふのだ、こつちに十分理屈があるのに、どんな因縁があるかは知らねが、そんなに安目を賣んなさんな。

辰五　因縁も何もあるものか、お歴々の旦那方へ對し、失禮しちやア濟まねえから、おれが代つてお詫びをするのだ。手前達アすつこんで居ろ。

鳶三人　それだといつてあんまりだ。

辰五　エヽ、おれのいふことがきかれねえのか。

鳶三人　ヲイ。（トぜひなくひかへる。）

四車　イヤ堪辨はしませうもので、わしもあれらに惡口され、腹が立つてなりませねども、いがめてやらうとは思ひましたが、茶屋の内儀が氣をもむといひ、こつちの内へ氣の毒と、見合せて居りましたが、辰五郎とかいふ男が出て、旦那へお詫びをするとあれば、それで何にもいはねえが花、マア御堪辨なされませ。

九郎　もとよりかやうな遊所場にて、彼等を相手に事は好まぬ。
八右　詫びるとあれば堪忍して、このまゝ濟ませてやるであらうわ。
勇野　大神樂のまりのやうに、手玉に取つてやるところを、
若浪　助かつたのはそつちの仕合せ、しつぽをまいて早く行け。
三人　何を吐かしやアがる。（ト立たうとするをとめて）
辰五　これさ、何にもいふなといふに（ト思入あつて）ときに關取衆、何も相手が角力だからと、それに恐れて詫びやアしねえが此の旦那方へ濟まねえから、血の氣の多いこいつらを、小言をいつて此場を濟ませ、事を丸く納める料簡、それといふも神明へこれからかゝる宮角力、わつちが俺で言はねえでも、いはずと知れため組の持ち場所、お前も贔屓うる渡世で、若し間違ひでもあつたらば、家業の爲によくなからうと、それでおれがとめたのだから、よく此人達にもいつてやんねえ。
藤松　喧嘩の前ぢやア威光をかり、そんなごたくをつくだらうが、土俵へ上つて引つぱたかれ、ど方な負でもした日にやア、二日と見られたざまぢやアねえ。
長次　今度の場所へ出やアがつたら、とらねえうちからけちをつけ、二度と再び神明へは、出られぬ

やうにしてやるから、今のごたくを覺えて居ろ。

龜右　おんやきなこでころがす團子は、彼岸が來りやア賣れるだらうが、砂にころげた團子ばかりやア、どんな茶人な女郎でも、鼻ツつまみで食はなからうよ。

勇野 荒浪　何だと。（トきつとなる。）

辰五　またぐづ〱いひ出すのか。ヲイ姉え達、こいつらをあつちへ連れて行つてくんねえ。

せん　ハイ〱、頭が氣をもんでおいでなさるから。

なべ　あちらのお座敷へまゐりませう。

藤松　大きにお世話だ、うつちやつておけ。

長次　癪にさはつてならねえから、

龜右　言ふだけ言はにやア虫が濟まねえ。

左介　どうぞ何事も御堪辨を。

太助　ともかくもあちらへ〱。

ト藝者兩人と若い者兩人、三人をなだめながら下手へつれてはひる。侍兩人思入あつて、

九郎　アイヤ辰五郎とやら、今聞けば神明近所は其方達の持ち場所ゆゑ、今度出たらば四ツ車にけち

をつけると若いものが、憎まれ口を申したが、其方らのひいきを受けずと、彼れは屋敷の抱へ角力、コリヤ鳶人足とは身分が違ふぞ。

辰五　へヱ、左様なら鳶の者と、角力は身分でも違ひますか。

九郎　角力は帯刀許しあれば、鳶人足とは一つにならぬわ。

辰五　へヱ、さやうでござりますか。

　　ト癪にさはる思入、おくらむつとせしこなしにて、

くら　其の御身分の御高下を、おつしやいませぬが御遊興。モシ頭、あなたもどうぞお聞き流しに。

辰五　身分違ひの人足が、長居をしては失禮だ。それではどうかお二人さん、若えやつらの申し過しは、お聞き流しに願ひます。

九郎　然らば此後力士へ對し、心得違ひをしてはならぬぞ。

くら　ア、モシ、あなた、もうよいではござりませぬか。

八右　お腹も立たうが身共にめんじて。（ト九郎次をなだめ）そちもこのまゝ歸つてくりやれ。

辰五　出入り屋敷の名がなくば。

九郎
八右　ヤア。
辰五　イヱ、大きにお邪魔をいたしました。
　　　ト唄になり、思入あつて下手へはひる。あと浮いた合方になり、
勇野　これから隣へ面當に、もつと騷いでやらうぢやないか。
荒浪　騷ぐにしても肝心の、藝者がどこかへ行つてしまつた。
四車　イヤ旦那方も晝からの、お勞れなればお引けがよからう。
くら　それではお床をのべさせませうか。
九郎　大分醉つたから、それがよからう。
八右　急ぎはせぬが、床ぢや〳〵。
さき　モシ皆さん、今のうち顏を出して來ようぢやないか。
はる　おかみさん、ちよつと行つて來ますよ。
くみ
はな　そんなら一緒に。
　　　ト立上るゆゑ、
九郎　アコレ、枕の番は眞平ぢや。

八右　今宵ばかりは、それでは濟まんぞ。
くみ　アレ、人聞きの悪いことばかり。
はな　どうせ御身分が違ひますからな。
九郎
八右　何ぢやと。
はる　ヲヤ、モウ口説が始まりましたか。
四車　おさきも直に來てくりやれ。
さき　直さへ出せば、直に來ますよ。
くら　ドレ、お座敷をこしらへて來ませう。（と女形皆々下手へはひる。）
勇野　水引關の相方ゆゑ、あのおはるは揚げの女郎。
荒濱　わしらの相方はどうしたか、まだ座敷さへも出し居らぬ。
四車　いそがしいから取卷の、供の方へは廻らぬ筈ぢや。
九郎　イヤ、かくして居れどおさきめは、鳶人足の淵松めに、血道をあげて居るとのこと。
八右　それゆゑ彼奴めがこらへかね、もし四ツ車に取られはせぬかと、喧嘩をしかけに廻つた様子。
四車　鳶とやらが邪魔なければ、懲らしてやるでござりませうに。

勇野　あいらが女郎の油を嘗ひとる。

荒浪　油虫めでござりませうわい。

ト此の時バタ〲、獅子の鳴物になり、下手より小ちよく二人出て、座敷へ逃げ込む、是を追ひかけて、幕明きの獅子舞獅子を冠つて舞ひ込むことよろしく。

四車　女郎の代りに、獅子が來ました。

小ちよく二人　どこぞへかくしておくんなさい。（ト獅子舞頭を出して、）

獅子　七種の御祝儀、おめでたうござります。

九郎八右　イヤ、悪魔拂ひを（ト立上るを道具がはりの知らせ）おさせなされませ。

ト獅子の鳴物にて、獅子よろしく舞ふ、此もやう騷ぎ唄をあしらひ、道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方腰張りの茶壁、ずつと上手折廻しの襖、下の方中ずかしのある塗骨障子の隔て、此外一面の板羽目、よき所に蒲鉾なりの掛行燈、すべて嶋崎樓名代部屋の體、爰に行燈を灯し、六枚折の屏風を立て、絹床を敷き、此上にいぜんの濱松、女郎の部屋着を長襦袢の着附に着替へ、三尺帶をしめて居る、此の見得端唄の合方にて道具留る。とバタ〲になり、下手よりいぜんのおさき、上草履を持ち、はだしにて出來り障子

の中へはひり藤松を見て、

さき　アレ、支度をして歸つちやアいやだよ。

藤松　どうせ今夜の仕舞の客で、お前はあつちへこびりついて、來る氣づけえはなからうから、氣をきかして早く歸るんだ。

さき　大かたそんなことだらうと、座敷の引けるのを待ちかねて、やつとこつちへ逃げて來たが、あんな好かない奴はありやアしない。

藤松　どつちへ行つてもおんなじ文句で、お前の口車にやア乘りたくねえ。

ト下手へ行きかけるを、

さき　アレ、何處へお前行くのだえ。

藤松　どこへ行くものか、歸るのよ。

さき　ばかなことをお言ひでない、着ものを早くぬいでおしまひ。

藤松　大きにお世話だ、おれのよはだ。

さき　そりやア言はないでも知つて居らアね、おぬぎといつたら、早くおぬぎよ。

藤松　裸にされる事はしねえ。

さき　それぢやアわたしのあの部屋着を、寝巻にするのがいやだのかえ。

藤松　角力なんぞにこびりついて居る、女郎の着物はおらあいやだ。

さき　面白くもない、そんなにお前にすねられて、癪をいはれちやアわたしが合はない、着かへるつたら着かへやアがれ。（ト無理に三尺帯を取り、裸にする。）

藤松　ヤイ、裸にしてどうするんだ。

ト屏風にかけてある部屋着をとり、

さき　アノニ、世話のやけた甚助だつちやアない。（ト藤松に着せる。）

藤松　アヽ寒い、ひどく言やアがる。（ト下に居る、おさきそばに住ひなまめいたる合方になり、）

さき　ホンニさつきはわたしでさへ、癪にさはつてならなんだから、お前の怒るのも無理ではないが、いやな所に居るのもつとめ、座敷の引けるをまちかねて、お前の所へ逃げて来た、わたしの心を察しもしないで、歸られちやア合やアしない。

藤松　お前が心底さういふ氣なら、おれだつても歸りやアしねえが、兄貴が出入りの屋敷の留守居が、一緒に居たので引け手になり、指をくはへて引こんだに、こつちの座敷へ寄り付かず、向うにばかり居られちやア、第一二人の前もばつがわるく、一人で寝ちやアゐられねえ。

さき　それだから氣が氣でなく、もし歸られちやア大變と、お前のところへ逃げて來たが、間にあつたのでマアよかつた。

藤松　何にしろあいつらは、屋敷方へ取りいつて、ひいきを受けて居やアがるので、いくら憎くしく思つても、萬人足はかなはねえ。

さき　ナニかなはないことがあるものか、わたしが敵はとつてあげるよ。

藤松　宮城野信夫ぢやアあるめえし、女郎に敵がとれるものか。

さき　そりや地みちの力づくぢやア、所詮敵はとれないが、今夜お前の敵討に、あの四ツ車をあげぼしに、蒲團の土俵へ投げるつもりさ。

藤松　角力はわざと負けるのを、ふつてやつたといふさうだが、角力をふつて敵討は、女郎の意地で面白い。

トこのうち下手の廊下口より、いぜんのおはる出て、障子の外にこれを聞いて居て、うなづいて後ろへはひる。

さき　頭に出て居るあの妓にもちよつと吹きこんでおきたいが、あの妓の座敷はどこだらう。

藤松　イヤ、兄貴はさつき今夜中に、行かにやアならねえ用が出來たと、座敷ぎりで先へ歸つた。

さき　ヲヤ、それだつて今座敷に、頭の羽織が残つて居たもの。

藤松　ア丶、それぢやア急いで忘れていつたのだ。イ丶ヤおれが翌の朝とゞけてやらう。

さき　頭にさはつたやうすゆゑ、それで歸つたに相違ない。それぢやアあの長さんと龜さんも、一緒かえ。

藤松　イヤ、あの二人は居る筈だ。

さき　どこにお出か此事を、ちよつと吹きこんで置きたいものだ。

藤松　たしか二番の名代へ、龜が寢たといふことだ。

さき　龜さんへ出て居る妓は、わたしと仲よしだから、吹きこんで置かう。

藤松　そんなことをいつて、逃げちやアいけねえ。

さき　さういふお前が、お歸りでないよ。（とこれより下座の端唄になり、）

〽天の戸の明くるといへるうれしさに、つい引かさる丶春霞、思ひのたけを言ふ丶しも、さ丶のきげんできそ始め、顔にうつろふ初日の出。

ト此うち藤松ふとんの上へ行く。おさき屛風を建て直し、下手の廊下口へ出る、是にて知らせなしに道具半廻しになる。

本舞臺うしろ一面の廊下の部屋々々、入口に番を記せし名代部屋、いづれも障子建てきりあり、右の端頭にて道具とまる。と上手より、おさき出て來り、下手へ行きかける。此時上手の明部屋より以前のおはる出て、

はる　おさきさん、ちよつとお待ち。

さき　おはるさん、何ぞ用かえ。

はる　外ぢやアないが、勤めの上で、敵をとるのは止しておくれ。

さき　それぢやアお前、聞いておいでか。

はる　藤松さんとひそ〳〵話を、聞いて居たから留めるのさ。（トこれにておさき思入あつて、）

さき　水引樓に出てあるお前、其の兄弟のことだから、肩を持つかは知らないが、わたしもつむじが曲つて居れば、大きな風を吹かせたり、力自慢をする客は、氣にいらないからふるつもり、誰もかうした意氣張りは、勤めをする身にありうちと、聞かない顔をしておくれな。

はる　イヱ聞いたからいゝけれど、もしもそんな勝手をされては、わたしの出て居る水引樓に。恨まれなきやアならないから、いやならいやでさしをつき、出ないといへば濟むことを、ふざけた

眞似をすると聞いては、わたしがだまつちや居られない。

さき　ヲヤマア、それはお氣の毒な。ふるもふらぬもわたしの勝手、お前の指圖は受けないから、一ア異見は聞きますまいよ。

はる　異見を聞かずばわたしも意地、邪魔をするから覺えておいで。

さき　お前に邪魔をされるのが、怖いと云つていやな客を、つとめるわけにはいかないから。其の念には及ばない。

はる　そんならきつと、ふつて御らんか。

さき　ふり通すから、見ておいで。

ト下手へ行きかける、此時下手より、いぜんのおくら、看板提灯を提げ出來り。

くら　おさきさんでございますか、關取がお歸りになります。

さき　ヲヤマア、それはいけすかない。

くら　エヽ。

さき　イエ。いそがしいので行かずに居ました。

はる　ふられぬうちに、氣がついて。

さき　エヽ。

くら　イエ、お天氣は持ち直しました。

さき　こりや聞き違ひで。（トにつこり笑ふを、道具木はりの知らせ）持つたものさねえ。

トこのもやう、合方・時の鐘にて道具廻る。

本舞臺うしろ高輪の海を見たる遠見、書割り並木の松の頭を見せ、よき所に永代常夜燈を記したる立札あり、上の方たゝんである葭簀、下の方に石置場・松の立木などよろしく、すべて八つ山下、海岸表掛けの體、爰に葭簀張りの茶飯屋店をおろし、休み居る、浪の音時の鐘にて、道具留る。と上手にて、按摩笛聞えて、小按摩ちよんまさ宿歸りの心にて、杖をつッ張り出て來り。

按摩　「八つ山下の茶屋女、夜風をしのぐ茶碗酒、」（ト投げぶしを唄ひながら、下手へ行く）

茶飯　ヲイ、ちよんまさん、いゝ聲だねえ。

按摩　誰だえ、茶飯屋さんかえ。

茶飯　ゆうべはしつかり療治があつたと見えて、投げぶしとはいゝ景氣だ。

按摩　ナアニ、此の寒さに晝前で、療治を呼んでも療治の仕手がなからうから、唄でもうたつて通らない

ぢやア此海ばたは通りきれない。

茶飯　唄より茶飯を一ぜん食ふと、よつぽどからだがあつたまる。

按摩　仕舞物でまけるなら、豆腐をぶつかけて一ぜん食ひたい。

茶飯　豆腐だけまけておくから、あつたまつて行きなせえ。

按摩　もつとまけてもらひたいものだ。

茶飯　そんなにまけては元がきれる。

按摩　ム、、うまくいつて居るぜ、おまへは毎日數寄屋川岸の、炊出しの親方へいつて、じごぶへ流れた米をもらつて、それを茶めしにして賣るのだと、すつかり種を割つてゐたぜ。

茶飯　ヱ、人聞きのわるいことをいひなさんな、行くことは行くが、そんなことはありやアしねえ。

按摩　それぢやア行くのかえ、ア、、それぢやアほんとだ〳〵。

茶飯　コレサ、靜にいひねえ、ヱ、仕方がねえ、盛りをよくするから、だまつて居ねえよ。

按摩　ウ、、賄賂を出すなら、おいらだまつて居るよ。

トこのうち茶めしをこしらへ出す、按摩食ふことよろしくあつて、

たうとう十六文散財した。（ト錢を數へて荷の上へ置く。）

茶飯　どうだえ、唄よりあつたまらう。

按摩　あつたまることはあつたまつたが、口の中がどぶ泥くせえやうだ。

茶飯　エヽ、人を馬鹿にしなさんな。（ト突く、按摩ひよろ〳〵として、）

按摩　それではあんまり、イヤ、按摩針。（ト呼ぶ。）

茶飯　あつたかいのを、ためしあんかけ。（ト呼ぶ。）

按摩　あんまー針。

ト両人呼びながら上下へ別れてはひる。あと鳴物きつぱりとなり、上手より以前のおくら、看板をつけて先に立ち、後より四ツ車、着流し一本差しにて、羽織を肩へかけ出て来り、

四車　モウかれこれ夜明け前、わしはこなたの所で駕籠をいうてもらふから、モウ送らずとようごんすわえ。

くら　イエ、どうせ駕籠へ声をかけますから、御一緒にまゐりますが、何にしろ大そうお早いぢやございませんか。

四車　イヤ、明日の朝は場所のことで、神明前に寄合ひがあれば、早く帰つておかねばならぬ。

くら　御場所が初まりましたら、しげ〳〵お出でを願ひます。

四車　屋敷が赤坂と赤羽だから、且那衆とたび〳〵来ますわい。

くら　是非お待ち申して居ります。（ト提灯にて下を見やり、）アヽモシ、関取衆がおゐでござります
よ。

四車　どつこい、モウ少しでぬかるのだつた。

トわきへ寄る、此時石のかげより以前の辰五郎、頬冠りにてうかゞひ出て、看板を蹴とばし四ツ車へつきかゝる。四ツ車びつくりして飛び退き、双方よりうかゞふ。これを忍び三重になり、一寸立廻る。此時上手にて拍子木の音して、時廻り[illegible]、着流し尻端折り、[illegible]にて火の番といふ提灯を肩にさし、拍子木をたゝきながら出て来り、四ツ車につきあたり、ひよろ〳〵として提灯を落し、拍子木を落し、これをさがすこなしにて三人の中へからみ立廻り、よき程に花道揚幕にて駕籠屋の體して、[illegible]屋の看板をつけし四ツ手駕籠を、くりからのほりものある駕籠舁二人かついで、聲をかけながら舞臺へ来る。辰五郎同じく提灯を打落す、駕籠屋二人はびつくりして、駕籠を置いて上下へ逃げこむ。これにて駕籠の中より炊出しの喜三郎、四十二三の人入れのこしらへにて出て、三人の中へはひる。鳴物替つて、世話だんまりのもやうよろしくあつて、トヾ辰五郎、一本ぐさりの煙草入を落し、花道の方へのがれ行く。喜三郎煙草入を拾ひ、四ツ車に行き當り、双方後へさがりて、きつとなるを木の頭、辰五郎は逸散に花道へはひる。四ツ車はおくらを囲ひ、本[illegible]は[illegible]える、この引張りよろしく浪の音新内の合方にて、

ひやうし　幕

二　幕　目　　神明芝居木戸前の場

役名　め組の辰五郎　九龍山浪右衛門、め組濱松町の長次郎、同雲月町の亀右衛門、葉山九郎次、萬代山の住職易隨、職人山内の金、鶴屋の小娃八重菊、職人御成門の松、力士波の花■右衛門、同ゆで蛸八五郎、太鼓持乗り新、芝居の木戸番大常、同新太、座元江戸喜太郎、四ツ車大八、辰五郎女房おたい、同悴吉太郎、鳶おもちや文次、亀屋の小娃染之介、茶屋娘おまつ、同およし

芝居見物大ぜい。

本舞臺三間間こけら屋根、前側左羽目の芝居小屋、眞中三尺の入り口、此左右木戸番の臺、下手四尺程の入口、これに客留の札を張り、やはり番人の臺、軒下に横長の繪の一枚看板、入口の上に千本幟の大名■、下手ワキ狂言と記したる庵り、下手九尺の出茶屋、てうじといふ掛行燈、軒口に役者の

紋附さし團子提灯、茶道具よろしく、床几に毛氈をかけ、上下樓の立木、すべて神明の内、宮芝居前の體。爰に職人山内の兼、同御成門の松、一升樽と竹の皮包みを持ち、少し酒に醉ひしこなし、見た芝居の出方大當、新太の兩人入口の臺の上にて、兩人をすゝめて居る、下手茶屋の娘兩人、辨當箱土瓶などの世話をして居る。此のもやう、芝居の中の舞、流行唄にて幕あく。

大當　只今千本櫻が明いて居りますから、御見物はいかゞでござります。

兼　御殿山の歸りがけに、千本櫻は句が附いて居るが、客留としてありながら、まだ人を入れるのか。

大當　イヱ骨を折りまして、お二人ぐらゐはお入れ申します。

兼　松公、まだ酒が半分の餘あるから、やりながら見て行かうか。

松　品川の勞れと御殿山で、夜櫻をながめながら、ぐつすりやつてこゝまで來たら、めつぽうおらアねむくなつたから、楊弓へでもいつて寢てえのだ。

兼　年よりじみたことをいふなえ。宮の内の者へ聞えると、見つとむねえや。いゝからおれと一緒にへひれ。

新太　丁度只今御殿場でござりますから、忠信の狐の狂ひが、極くよいところでござります。

松　何だ狐だ、昨夜はおれが狐をしたから、けふは役者が狐をするのか。

兼　そんな駄じやれは義經で、静御前はやめにして、此の御持參の樽の口から、たゞのみとしようかえ。

松　イヤ、千本一番のしやれだな、ところが、にしめが少ねえ。

大常　イエ、にしめ屋なら、中に居りますから、御自由にお召し下さりませ。

松　ナニ、にしめ屋がある、イヤ宮地の芝居は調法だ。

トこれにて、やはり右の鳴物にて、松錢を出し両人中へはひる。

新太　角力がかぶつたので、めつぼうお客がつツかけて來るが、いくら入れたくつても中はぎつちり、かういふ大入りに、木戸番は却て錢が出來るものだ。ドレ、おりて一服やらかさう。

ト両人床よりおりて、煙草をのむ。

茶屋娘おまつ　けふはお角力の評判がいゝので、じそうな見物でござんしたが、お客が逢ふとはいふものの、こぼれが大谷芝居へ來たぞえ。

茶屋娘およし　そりやア見物の來るはずさ、御殿場の宙乗りなどは、木挽町の芝居でもかなはないくらゐだとこの近所の評判でござんす。

新太　何でも辻子繁昌でなければ、互ひにいけないが、まづ宮内でも芝居と角力、楊弓店に吹矢にからくり、食物店は大々餅、明神さまのおさい錢から、日蔭町の商人と、其うるほひは大したものだ。

まつ　アヽモシ〱、そんなにならべたてなくても、わたしやア芝の産れだから、よく知つてゐますわいナ。

新太　そんならあとは言はないが、これで屋敷の中間が來ないと、金がもうかつてしやうがないくらゐだ。

よし　それではあんまりうますぎませう。時々お屋敷のお中間衆が來て、常さんも新太さんもげんこつを頂戴するので、それが罪亡しになるのさ。

新太　イヤ折助のげんこつは、芝居ものは眞平ごめんだ。

ト大拍子、流行唄になり、花道より序幕の葉山九郎次、羽織着流し大小雪駄、萬代山の住職易隨十德着流し、鶴屋の小姓染之介、高髷の島田かつら、加茂川染の中振袖、はでなる帶、駒下駄、鶴屋の小姓八重菊、同じく若衆かつら、巾の廣き男帶、着流し駒下駄にて、兩人日傘をさし、後より男藝者乘り新、羽織着流しにて附添ひ出來り、花道にて、

葉山　萬代山の方丈は、衣より今日の御形が御人體に似合ふやうぢやな。

乘新　實に御寺樣とは見えませぬから、八重菊さんと御一緒でも、誰も何とも申しませぬ。

八重　全體が御經ぎらひで、お線香のかほりがありませぬから、お寺樣の中でも通人でありますよ。

易隨　ア、コレ〳〵、さうお寺〳〵といつては困る。何ぼなんでも晝日中、おぬしを連れて歩くのは、チト法外と申すものぢや。

染之　それでもあなた、葉山さんと御一緒でござんすから、かまはないではござんせぬか。

易隨　サア嬉しいと氣味のわるいのと、兩方がごたまぜで、坊主頭へ汗が出てまゐつた。

ト舞臺へ來り、床几へ腰をかける。

まつ　乘り新さん、大そうお早うございましたね。

乘新　總屋のお客が御二方、染之介さんと八重菊さんをお連れになつたから、御案内申しておくれ。

新太　先刻から棧敷を、とつておきましたから、直ぐ入らしつてくださいまし。

ト此うち茶屋娘およし、茶を持つて來る。

葉山　狂言は何の所が初まつて居るの。

新太　ヘイ、千本櫻の御殿場が、明いて居ります。

乘新　チトお遲うございましたから、千本の四の切でございます。

葉山　晝は四ツ、夜は三ツと、玉の切れるのは、承知して居るわい。

乘新　イヱ、このお子さんの玉のことではござりません、千本櫻の四の切でござります。

八重　アレマア、恥かしい、そんないやらしいことおつしやいますな。

易隨　何のいやらしいことがあるものか、明けを買ひに行く客とは違ひ、晝夜の玉をつける客人、掛けてそち達の見得になるのぢや。

八重　アレマア、いやらしい、あんなことをおつしやつて、往來中で、ヲヽ恥かし。

ト顔をかくす、此うち木戸番新太、茶屋より薄團煙草盆を持ち出て來る。

染之　モウ遲いさうでござんすから、早うはひらうではござりませぬか。

葉山　よければ、案内いたしてくりやれ。

新太　サア、入らつしやいまし。

ト流行唄楊弓の音になり、新太案内して皆々木戸の内へはひる。

大常　七軒町の龜屋の子供衆のうちでも、染之介さんはがらもちいさいし、どう見ても女のやうだが、八重菊さんはべらぼうに、とうがたつてゐるぢやないか。

まつ　何のこつたかしらないが、のどへこぶが出て來たから、モウ今年一ぱいくらゐで、あがりだといひましたぞえ。

大常　あの人たちはこぶが出なくつても、初手から男と見える身體だ。

まつ　それでも今のお屋敷さんと、お寺さまの大のお氣に入りで、今日も芝居をせがまれて、つれて來たのでござんすぞえ。

大常　今江戸中で子供屋流行、湯島よし町八丁堀と、神明前の七軒町だが、この四ヶ所の其うちでも、芝が一番美くしい。

まつ　加茂川染の中振袖で、高髷に結つたところは、どうしても女でござんすなア。

よし　あのお寺さんは、下谷ださうだが、湯島や八丁堀へお出でなく、わざ〱遠い芝へ來なさんすとは、この道ばかりは、別なもんでござんす。

大常　ナアニ、あの邊のお寺は近所へ知れると面倒だから、遠くてもこつちの方へ來るさうだよ。

まつ　それで山内のお方は、やつぱり湯島へお出でかねえ。

大常　ナアニ、山内のお寺方は、大てい品川へ行くといふ評判だ。

ト流行唄、拍子の音になり、花道より庄五郎の女房おだい、寅の女房他所行きのこしらへ、倅吉太

郎手遊びのめ組の纏を持ち、おだいに手をひかれ、跡よりおもちや文次こゞ網の皮包みを提げ出て來り。

文次　喜太ちやん、たうとう歩いたね。

だい　こんなにお土産が出來たもの、歩かなくつてどうなるものか。

文次　山内の金つばに、すてきな饅頭を買ひなすつたから、火事が始まつても辨當附きだ。

喜太　文次、おぶつてくんねえ。

文次　常談をいつてはいけねえ、今ほめたばかりぢやアねえか。

喜太　おらアいやだ〳〵に。

だい　コレ、往來中で見つともない、向うへいつて吹矢を見せないよ。

文次　姐さん、マア花屋までお出でなさいまし。サ喜太ちやん、あそこまで歩いて行きねえ。

トだましながら舞臺へ來り床几へ腰をかける。葭簀のかげより、幕明きの茶屋娘出て來り茶を出す。

まつ　今日はどちらへ、お出かけでございます。

だい　少しうかゞふことがあつて、燈籠佛さまへ行つたかへりがけ、いつもきまりで宮の内で吹矢を

見るのでござんすよ。

まつ　ヲヤ吹矢でござりますかえ。どこにもござりますさうなが、神明さまのが昔から相かはらずだと申します。

文次　姉さん芝居は這入りますかね。

よし　毎日大入でござりますのに、只今諸角力がはねましたから、それからまた込みますので容易になりました。

だい　角力はいつまでかゝるだらうね。

文次　此節角力は日和りがつゞき、二月の五日に初まつて今日は三月廿三日、二た月越しの興行でよつてゐると聞きましたが、這入ることはこれも毎日いつぱいでございますよ。

よし　それに今日は相撲の六日目の取組で、いゝ顔ぶれだと承りました。

文次　ム、今日は雷に柏戸、平石に錦木、四ツ車に荒岩でこの三枚が呼びものだつた。

よし　雨が多いので長くはかゝりますが、大そうもうかるので揚りの茶は繁々ださうでござります。

ト此時芝居小屋のうちにて、わや／＼いふ、おだい聞耳立て、

だい　大ぶごた／＼するやうだが、間違ひでもあるのぢやアないかえ。

まつ　客留のくらゐでございますから、只今忠信の引抜きで、大方ほめたのでございませう。
だい　そんならよいが此近所は、組合の若い者がよくほツつき歩くから、大きな聲でもすると、びつくりするよ。
文次　ハツクショ、姉さん噂をいつちやアいけねえぜ。
喜太　文次は弱いくせに、喧嘩が好きだよ。
文次　ヱヽ、見たこともねえくせに。
喜太　ヱヽ、湯屋で喧嘩をして、ぶた安になぐられたぢやアねえか。
文次　あれを見たのか、こいつアしまつた。
喜太　ざまア見やアがれ、いくぢなしめ。

ト此うち始終後ろで、がや／＼する。おだい心づかひの思入あつて、

だい　けふは芝居へ、誰か來て居やアしないかえ。
文次　濱松町の長次と露月町の總は、角力へ行くと内を出ましたが、芝居へは誰も來やアしませぬ。
まつ　お角力がはねてから、お角力衆はお出でになりましたが、組合の衆はぞんじませぬ。
だい　向う見ずの人達ばかりで、實にやるせがありませんよ。

文次　ハックショ、叉嚔をしてはいけませんよ。
喜太　早く吹矢へ行かうよ。

ト此うちおだい巾着より、二朱を出し紙にひねりおいて、

だい　毎度お世話になりまする。
まつ　ヲヤマア、お氣の毒さまでござります。
文次　マアいゝから、とつておきねえといふに。
だい　いゝお世話やきだねえ。（トやはり右の鳴物にて、三人上手へはひる。）
まつ　おかまひもしないで、お氣の毒さまでございます。
よし　濱松町の頭のおかみさんは、この近所で評判のお方でござんすね。
まつ　何でも以前は、いゝ、それしやの果だね。
よし　あれは、それ、以前品川の藝者衆で、大さう評判の賣ツ子だつたね。
まつ　道理で、いゝ氣前だと思つた。

トあたりを片附ける。この以前よきほどに、木戸番木戸口へはひる、此時バタ／＼にて、木戸の口より、木戸番大當、新太走り出て來り、

新太　座元さんは、居ねえかえ〳〵。（ト下手の入口をさがす。）

大常　表にはお見えなさらないが、あわたゞしい。

[illegible]留人　どうしたのでござんすえ。

大常　サ、とんだ間違ひが初まつたので、うつちやつておくと芝居をしては居られない。

まつ　なぜまたお前がたで、とめないのだえ。

新太　どうして相手へ難をつけたから、おら達の手際には行かねえのだ。

大常　何にしろ、困つたものだなア。

トうろ〳〵する。流行唄へ冠せて幕を引く木の音、しやぎりになり、バタ〳〵にて、木戸の口より男女見物の仕出し、「喧嘩だ〳〵」といひながら逃げ出て来り、此中へ幕明きの住[illegible]易随、筆之介八重菊の手を引き、乗り新附いて出て、八重菊アレエ〳〵と泣くを、易随介抱しながら皆々と一緒に上下へ逃げてはひる。此中へ、鳶の者浜松町の長次郎、露月町の鳥右衛門、着流し三尺帯片肌ぬぎにて、幕明きの職人の傘と松のたぶさを持つて引きずつて出て来る。これを九龍山浪右衛門、着流し駒下駄、後より湯の花、ゆで蛸とりてきにて、とも〴〵止めながら出て来り、これを分けようとする、ごつちやの立廻りあつて、九龍山双方を押へ、

九龍　コレサ、お前がたも腹も立たうが、双方とも穏便にしてやつてくだんせ。

長次　イヽヤ、穏便にやア出来ねえ。舞臺に遠い所なら知らず、ツイ土間のはなツ先に居て、大きな聲をしやアがつて、邪魔になつてならねえのだ。

亀右　おまけに傍に見物して居る、百姓をつかめえて、酔つたまぎれになぐるたア、あんまり無法な野郎だから、見るに見かねて、

両人　しよびき出すのだ。

粂　サア、から談をこせへられちやア、あしたから仕事に出られねえ。

松　この談はこゝに居る、仕事師がつけたのだ。サア、どつちともしらちをつけてくれ。

両人　エヽ、生意気なことをいやアがるな。

ト立ちかゝらうとするを、九龍山止める。此うちとりてき両人粂・松に、引受けるから逃げろといふこなし、これにて両人は悪態をつきながら、下手へそこ／＼にはひる。

長次　ヤア、相手を逃しやアがつたな。

亀右　サア、逃したからにやア、うぬが相手だぞ。

ト九龍山と力士両人にくつてかゝる、此うち木戸の口より、四ツ車大八、着流し一本ざしにて出て来り。

四車　何だ〳〵、まだいさかひをしをるのかえ。
九龍　見るに見かねて止めに這入つた、おれを相手とくつてかゝり、言ふことをきかねわえ。
四車　きかざアそのまゝ、しよびき出せ。
長次　四ツ車か、何だしよびき出せ、面白え、サアしよびき出せ。
龜右　これからは角力取が相手だぞ、よく喧嘩を買やアがつたな。
四車　野郎ども、面倒だ、むかひへ突轉ばせ。
兩人　ヲイ。

ト流行唄、大拍子になり、長次郎、龜右衛門立ちかゝるを、とりてき兩人にて突倒す、此うち下手よりめ組の辰五郎、羽織着流し、尻はしをり、股引き草履にて出て來り、長次郎につき當り、顔見合せ、

長次　ヤ濱松町か、いゝとこへ來てくんなすつた。
辰五　見りやア何か間違ひがあつたやうす、いつてへこりやアどうしたのだ。
長次　芝居を見に來て、のんだくれと物言ひをしたを、角力取が喧嘩を買つたが始まりで、
龜右　おらッち二人を表へ突き出し、恥をかゝせやアがつたのだ。

辰五　ナニ、角力取が恥をかゝせた。

ト上手を見やり、思はず四ッ車、九龍山と顏見合せ、

相手といふのは、お前達か。

九龍　いかにも、わしが買つた喧嘩を、丁度一緒に居合せた、

四車　兄弟分の四ッ車が、見かねてこゝへ飛び込んだのだ。

辰五　喧嘩を買つた兄弟分は、しかも此春品川で、出逢つた相手の四ッ車。

長次　あの晩事は納まつたが、又芽を吹いた芝居小屋。

龜右　濱松町が來たからにやア、よもやうつちやつてはおかれめえ。

辰五　そりやア言はずと知れたこと、そこへ行つて辰五郎が、喧嘩のしらちをつけにやアならねえ。

ト皆々入り、はでなる合方になり、三人立ち上り、九龍山は上手、四ッ車は眞中、辰五郎は下手にて、めい／＼床几へかけ、力士は上手、長次郎、龜右衛門は下手へ立身、とゝへ木戸の口より葉山九郎次出て來り、

葉山　委細は木戸で聞いて居たが、これで角力が負とならば、我朋友より出羽と有馬へ此一らつを申し上げさせ、再び出入りをあげさするぞ。ドレ、この邊で見物いたさう。

トずつと上手の花道へかけ、目つかひをする。此内芝居の方、芝居ざわ〳〵する。

四車　出入り屋敷の旦那方に、御贔屓の柴田様が、丁度この場においでなさるは、屋敷へ知れても面ばれに、こつちのためにももつけの幸ひ。

九龍　芝はめ組の鳶の者と、仕合た方が威張りちらし、角力や芝居で言ひてへざんめえ、見るに見かねて買つて出た、いぜんの名前は水引清五郎、今改めて九龍山、たゞあやまつてもゐられぬわえ。

辰五　そりやアこつちも同じこと、幕の内なら知らねえこと、まだ二段目の七枚目、その水引が晴場所から名前を替へた九龍山、力自慢の左利き、鉄砲突につゝかけられちやア、あとへは引かねえ鳶の者、此神明から愛宕をかけ、天狗と仇名の辰が当番あげた上からは、番目の纏をこがすとも、此の消口は取らにやアならねえ。

四車　この春しかも品川で、出逢つた時も指をくはへ、青菜に塩で土俵をおりた、角力でいへば褌かつぎ。

九龍　稽古廻しをしめ直し、一度が二度でも三度でも、地取のつもりでついて来い、いくら相手は変らうと、兄角力の四ツ車と、二人がウンと仕切つたら、毛筋のすきもありやせぬわえ。

辰五　若いやつらが火の中へ、飛び込むところをおれが扱ひ、濟ましてやつたをいゝ氣になり、消口取つた氣だらうが、又燃えあがつたそのごたく御尤もとは聞かれねえから、あほりをくつておツこちるか、たゞしはこのまゝ燒け止まるか。

四車　角力と鳶の達引は、盛りを競ふ遲櫻、

九龍　ちらす火花か神明で、

辰五　命のやりとり、

三人　しようかえ。

ト三人きつと見得。芝居の出方二人、心づかひのこなしにて、

大常 喜太　アヽ誰ぞ來てくれゝばいゝがな。

トうろ〳〵する。此時芝居小屋より、座元江戸喜太郎、羽織着流しにて走り出て來り、九龍山と辰五郎の中へはひり、

座元　どうぞ暫く、お待ちなすつて下さりませ。

九龍　誰だか知らぬが、怪我するぞよ。

辰五　どかれたか〳〵。

座元　イエどかれませぬ。私はこゝの座元、江戸喜太郎でござりますが、今あなた方が宮の内で間違ひになつたも、元は芝居から起つた事ゆゑ、あすから興行が出来ませぬ。それでなくても、今日も打出しましたくらゐゆゑ、どうぞ私を助けると思しめして、穏かに願ひたうござります。

トいへども、だまつてゐるゆゑ、

モシ頭。モシ関取衆。どうぞお聞き済み下さりませ。

ト双方へたのむ、此うち上手の出方に角力、下手は長次郎、亀右衛門よろしく思入。座元は心づかひのこなしにてたのむ。

四車　どうだ水引、座元が難儀になるといふて、このやうに頼むものだ、どうしようか。

九龍　ヲヽよいわ、おいらの方は預けるとしようわえ。

座元　ヤア、ありがたいことでございます。モシ頭、どうでござりませうな。

辰五　元より人の難儀になるを、好むわしでもねえけれど、よんどころない意気張りに、もう引分けにやア行かれえが、こゝはお前に免じてやらうよ。

座元　エヽ、スリヤ、我慢して下さりますとか。アヽこれで安心いたしました。関取、頭、大きにありがたうござります。

ト辰五郎思入あつて、

辰五　大夫元の頼みゆゑ、此場はこのまゝ別れるが、是ぎりぢやア濟まねえぞ。

四車　あすの角力はもはや七日目、モウ三日で打上げるが、出會ふとあるならおら達は、十日とつても芝に居て、けふは車屋、あすは平松、門なみのんで待つて居よう。

辰五　ムヽ、それぢやアきつと逃げかくれは、しねえとこんたはいふのだな。

九龍　何で卑怯に、

兩人　逃げるものか。

辰五　きつと言葉を忘れるな。

葉山　アヽ、さすがは名うての力士だけ、此の場で事を起さぬとは、身共もこれには感心いたした。かげには雜輩が附いて居れば、決して負けては相成らぬぞ。

ト けしかける。此うち長次郎、亀右衛門は心のはやる思入あつて、

長次　アイ／＼頭、さつきからだまつて聞いて居りやア、こゝでは喧嘩をしなさらねえのかえ。

亀右　このまゝ指をくはへた日にやア、組合の名折れになるから、何とかしらちを、

長次
亀右　つけてくんねえな。

辰五　ヱヽ、手前達は文句をいはずと、一切おれに任して置け。

ト立上る、これにて四ッ車九龍山も立上る、長次郎、亀右衛門はいま〳〵しきことなしにて、下手へついて行く。

九龍　それぢやア此まゝ別るゝとも、

辰五　いづれ後日に改めて、

四車　喧嘩の相手は四ッ車と、

九龍　九龍山浪右衛門だぞ。

辰五　ムヽ、濱松町の辰五郎を、肚胸をすゑて覺えて居ろよ。

ト これにて辰五郎、長次郎、亀右衛門花道附際へ行く。

葉山　がうぎにえらいごたくを申すが、後ろ姿は青菜に鹽だな。

浪の　ヤイ、ごくだうめ。

ゆで　ざまア見い。

長次
亀右　何だと。

ト戻らうとするを、辰五郎止めて、

辰五　エヽ、いふなら勝手に。

ト捌し、舞臺の三人と顔見合せるを、木の頭、いはしてかけ。

ト此引張りよろしく、鳴物なしにて、

ひやうし　幕

長次　おらア、どうも、癪にさはらア。

と蔭引きつけると、

龜右　頭どうあつても、

兩人　あいつらを。

トまた行かうとするを、

辰五　エヽ、よせといつたらよさねえかえ。

トこれにて木頭、はでなる唄になり、兩人戻らうとするを、辰五郎後より押しながら、花道へはひる。樂シャギリ。

三幕目

数寄屋川岸炊出内の場
濱松町辰五郎内の場

役名　め組の辰五郎、露月町の龜右衞門、鳶の者春高竹、茶飯屋與助、鳶の者三ッ星半次、力士ゆで蛸八五郎、焚出しの手代茂助、焚出し人足、番太郎杢藏、焚出しの喜三郎、辰五郎女房おたい、喜三郎女房おいの、辰五郎悴喜太郎、品川の藝者おせん、其他。

本舞臺上寄りに三間常足の二重、蹴込板張り、正面紺の暖簾口、上手、まひら戸の押入戸棚、下手鼠壁に二段に出入り屋敷の帳面を掛け、下手一面に平舞臺、平釜をかけし土竈、後ろ折廻し板羽目、ずつと下手に車井戸、上手に米俵十俵ほど積んであり、すべて數寄屋川岸焚出し喜三郎臺所の體。二重上手に手代茂助、羽織着流し、かけ硯を設き、帳をつけて居る、下手に序幕の番太郎、木綿半纏、着流し、くるみ足の膳へ肴を入れし皿を置き、燗徳利猪口を持ち、手酌で酒を飲みて居る。平

舞臺下手に若い者○△の二人裝出しの印半纏、股引三尺帶にて、深い御膳籠へ辨當箱を詰めて居る。同じく若い者□○の二人、一人は四斗樽へ米を入れ、千切にてといで居る、一人は米あげ笊へ米を入れて居る。此下手に茶飯屋、半纏股引尻端折り、草履にて、麻袋を持ち、薪へ腰をかけ、煙草を呑み居る。此の見得住吉踊りの鳴物にて幕あく。

○　茂助さん、神田橋は附きましたか。

茂助　けふは五人ふえたのだた。

○　アイ、さうでございます。

△　筋違と淺草は、いつもの通りです。

茂助　よし／＼兩方とも附けた。

□　茶飯屋さん、けふはいつもより遲かつたの。

茶飯　ゆうべ遲くなりましたので、今朝は少し寢すごしました。

○　それぢやア、しつかりらうかつたね。

茶飯　賣殘つたので、遲くなりましたのさ。

茂助　こつちの内は繁昌だが、世間はよつぽど不景氣ださうだ。

茶飯　こちらのお内の御繁昌は、旦那様の御気性がえらいからでござります。此間も私に、昔のうち台所の下働ひをしろとおつしやるから、あがつて働きましたのは、若い者がとぎあげて出す米が、自然とたまり、流しのどぶが真白で、それをすくひあげますと、小一升はかゝさずあり、それを毎日おもらひ申すは、濡れ手で粟でござります。

番太　そりやアおまへのいふ通り、立ちよらば大樹のかげで、わしなども此頃まで高輪の自身番に定番をして居ましたが、ふとしたことからこちらさまの、一方ならぬお世話になり、昔馴染の番太郎の株を買つておもらひ申し、小商ひに一人では難かろうと女房まで、よいのをお世話くだすつて、二人でかせぎましたので、国に残したお袋を、呼ばれるやうになりました。

○　在所からこの江戸へ、かせぎに出かけて来る人は、形にも振りにもかまはずに、

△　たゞたまるのが一方だから、好きな酒も銭を出しちやア、祝の酒も飲まねえから、

□　二三年もたつ其うちにやア、しつかり金をこしらへて、ハイ左様ならと帰国だ。

○　金せへたまりやア用はねえと、あと足で砂だから、遠国者にやア油断はならねえ。

茂助　杢蔵さんなぞも今のうちは、かうして毎日機嫌きゝに来なさるが、今に金がたまつたら、ハイ左様ならとあと足で、国へ帰る仲間だらう。

番太　どうして〳〵わしなどは、江戸の土になる心、なぜといつて見なさい、内でかゝアが内職をして銭をもうけてくれますから、留守のうちはこれといふ用のない鐡太郎ゆゑ、御贔屓になつた旦那さまの、御機嫌伺ひにあがりますも、ありやうはこの通り、お台所で好きな酒をたらふく飲まして下さりますから、誠にありがたいことでございます。国へ行つたらまづい酒も銭を出さねば飲まれませぬ、それゆゑ国へは帰りませぬ。

茶賣　私なぞもこの春までは、溜めたら国へ帰らうと思つては居りましたが、かういふよいお出入場が出来ては、そう〳〵国へは帰りませぬ。始終はこちらのお家へ来て、荷かつぎにでも使つてお貰ひ申したうございます。

茂助　油屋さんも商売では、やつぱり溜め一方か、ついに休んだことがないの。

茶賣　其日かせぎの貧乏人、一日でも休まれませぬ。

○　向島から橋向うへくらがへをした女があるので、毎晩のやうに出かけるが。

△　大木戸か八ツ山下で、おめえに逢はねえことはねえ。

茶賣　昨年の暮から品川の景気のよいので早く売切り、いつも夜廻しをしますが、廓の大引を聞かぬうち、たいがい家へ帰ります。

□　夜商ひをする者は、どろぼうと同じことで、晝寢て夜のかせぎだが。

○　長い月日のそのうちにやア、怖いことがあるだらうな。

茶飯　往來のない晩などは、怖いことがござります。

番太　怖いといへばわしがまだ、高輪に居た時分、こなたの茶飯を明方食ひ、別れたことがござつたの。

茶飯　あれにしかも此春の、七草の晩だつたが、あの晩何か怖い目にあひなすつたことがありますか。

番太　サア七ツ廻りに出たところ、どういふことかわからぬが、わしが持つてゐた火の番の、提灯を蹴飛ばしたから、何をするといふところへ、江戸の方から早歸りの、四ツ手駕籠がそこへ來ると、それからごつたげへす騷ぎに、横面をはり倒され、ひどい目にあひましたが、相手は逃げてしまひました。

茂助　そりやとんだ目にあひなすつたが、その相手はわからないかえ。

番太　その折は知れませなんだが、神明町の番屋へ來てから、相手の形に氣がつきましたが、組合の衆がよく着ます、當番つなぎを着て居りました。

茂助 それでは相手は組合の衆か。

○ 何にしろ出合頭で、

△ おめえは打たれ損だつたな。

トこのうち、暖簾口より喜三郎羽織着流しのこしらへにて顔を出し、番太郎の話しを聞き、うなづいて奥へはひる。

○ 杢藏さんの話しを聞いて、ときかけた米がふやけてしまつた。

◎ サア／＼、早く笊へあげねえ。

ト米あげ笊へ米をあげ、桶をそのまゝ置く、これを茶飯屋見えぬやうに、米を小桶へあける。杢藏これを見て、

番太 イヤ茶飯屋さんは感心だ、よく殘つた米を集めてあげなさる。

茶飯 これは御奉公でござります。

番太 殘つた米はよつぽどあるの。（トいひかけるを、）

○ ア、コレ、よけいな口を利きなさんな。

番太 それでも感心なことだから、

茶飯　イヤ、早く片付けて歸りませう。

　ト茶飯屋はすばしこく茶を袋へあけ、若い衆へ袋を渡す。杢藏これを見て、

番太　なアるほど、立ちよらば大樹のかげだ。

茶飯　茂助さん、杢藏さんは隅へは置けないね。

茂助　立ちよらば大樹のかげとは、實にこりやア恐れ入つた。

番太　どうだえ。（ト兩人を見やり、）

　わしもよつぽど。

　ト持つたる德利をおくを、道具がはりの知らせ、

氣が利いて來たらうの。

　ト幕明きの鳴物になり、茶飯屋だまつて居ろといふこなし、番太郎のみこむ。此もやうよろしく道具廻る。

本舞臺三間の間平舞臺、上の方一間床の間、東照宮の掛物、三方へ神酒德を載せ備へあり、眞中一間大戸格子、下の方帳場簞笥、帳面入といふ箱、此上二枚引の半襖、上の方障子屋體、下の方打

附格子の中窓、上下夜明目、此所に用水桶手桶積みあり、いつもの所門口、すべて裝出し居間の體。爰に鐵瓶をかけし長火鉢を置き、黑箪笥の上に以前の喜三郎住ひ、傍に女房おいの、背流し世話なりにて住ひ、下手に品川の藝者おせん、遊所行きのなり、力士ゆで蛸着流し、派手なるなりにて住ひ、此の見得一方にて道具留る。

いの　おせんさん、よく尋ねておくれだ。まア、けふはゆつくりしておいで。

せん　ありがたうござります。

喜三　なんだか眠さうな顔付きだが、ゆうべ遲くなつたのか。

せん　ハイ、品川の大一座で夜明しになりましたから、直にそのまゝ寢ませずに、雜木谷へ朝參りに
おまゐり申して、こちらさまへ御無沙汰になりました申しわけに上りました。

喜三　なるほど、けふは廿八日、淸正公樣の御緣日だつた。

いの　雜木谷の蛇の目せんべいを澤山にありがたう。

せん　おいしくもございませんが、甘いものがお嫌ひゆゑ。

いの　かうばしくツてうまいから、いつでも買ひにやりますよ。

喜三　ゆで蛸はけふは休だの。

ゆで　ハイ、きのふの降りでけふあすは、場所が休みでございます。から降りが續いては、あんまりからだが樂過ぎて、皆品川へ入れ上げます。

喜三　今度の角力は降りがちで、初日は二月五日だつたが、けふは三月廿四日、なんぼ晴天の興行だつて、十日の場所をべん／＼と、六十日もかゝつては、勸進元の藤島も、雨にやア弱つて居るだらう。

いの　世間の人の惡口に、あんまり雨がふりつゞくので、藤島とはいはないで、ふりしまだといひますさうだ。

喜三　なんぼ女が見られねえといつて、そんな惡口を利かねえがいゝ。けふのあがりあんばいでは、あしたは天氣は大丈夫だ。

せん　妾どもは本場所は、十日目でなければ見られませぬから、花角力の外はぞんじませんが、おとゝい錦木關と四ツ車關の取組は、面白かつたさうでございます。

ゆで　おとゝひ一の取組で、水を入れて又暫く押合つてをりましたが、つひにあづかりになつた時は、割ツかへるやうでございました。

喜三　屋敷の御用が重なつて、つい見ずに仕舞つたが、どういふ取口であつた。

いの　ゆで蛸さん、話しておきかせな。

ゆで　只今お話し申しますが、おせんさんちよつと相手になつてください。

せん　わたしや角力なぞは、知りませんよ。

ゆで　ヱヽ、毎晩色男と取るくせに。(トおせんの手をとり引き出す。)

せん　アレサ、惡ふざけをおしでない。(トいやがるおせんを無理に立たせて、)

ゆで　マア、形ばかりするのだから、ちよつと立つてくんなせえ。まづ最初錦木關が左をさすを引ぱづし、四つに組んで四ツ車關が、力まかせに押出さうと、ぢり〳〵と押して行き、モウすこしでふみ切るを、さすがは手取りの錦木關、からだをひねつてふみ止り。

(ト此のうち角力太鼓の合方、ゆで蛸いやがるおせんを相手に取組の思入。)

水を入れろ〳〵と御見物が、やかましいので水を入れて取組ませ、又暫く押合うたを、四ツ車關がふりほどいて、鐵砲突きにぽんとつき。

トゆで蛸おせんの胸をつく。

せん　アイタヽヽ。(ト倒れる。皆々びつくりして、)

喜三　どうした〳〵、怪我でもしやアしねえか。

せん　イヱ〳〵、怪我はいたしませぬが、胸をひどくつかれたので、痛くつてなりませぬ。

いの　あの力でつかれてたまるものか、怪我のないのが仕合せだつた。

ゆで　ツイはなしに實がいつて、とんだことをしました、堪忍してくださいまし。（トあやまる。）

喜三　イヤ、この取組はおれが預かり、モウ〳〵よしにするがいゝ。

いの　おせんさん、疵でもつきやアしないかえ。

せん　イヱ〳〵、何ともございません。

ト此うち喜三郎懐中より革の紙入を出し、中より金を出して紙に包み、

喜三　二人にいつぺい飲ませるのだが、けふは屋敷の客があるから、これで自由に飲んでくんねえ。

ト金包みをやる。兩人取つて、

ゆで　これは有難うござります。

せん　おかみさん有難うござります。

ト辭儀をして、金包みを帯へはさむ。ゆで蛸は金包みを持つて、

ゆで　これをお貰ひ申しては、又品川へ行かれます。

せん　増本へおいでなら、これから一緒に行きませうか。

喜三　ア、駕籠をやめるから、乗つて行きねえ。
ゆで　イエ／＼、それには及びませぬ。
せん　妾も金春へ寄つてまゐりますから。
いの　それぢやア、初音屋から乗つておいでよ。
せん　ありがたうございます。
ゆで　まづ品川へ行けるとなつたら、もウおいとまいたしませう。
喜三　ちつとも早く、行くがいゝ。
せん　大師様へいらしつたら、きつと寄つてくださいました。
いの　行きさへすれば、かならず寄るよ。
ゆで　さやうならば、
ゆで
せん　ありがたうございます。（ト門口へ出で）
ゆで　これから[illegible]で、[illegible]してやらう。（ト[illegible]先になり、二人寄り[illegible]て花道へはひる。）
喜三　あのおせんは、いくつになるか、いつも元気でいゝ調子だ。
いの　達さんの女房になつた、おたいさんと一緒に、宿へ出て居たといふからは、もウよつぽどにな

りませう。

喜三　なんといつても色の場所、作りで年から若く見えるが、おだいは今ぢやア子供が出來、世話女房で色氣もなく、すつかりくすぶつてしまつたな。

ト合方にて、奥より手代茂助、帳面を持ち出て來り、

茂助　あしたの納めは、どなたでございます。

喜三　增上寺へ御佛參だから、本社の右京樣へ二百人前、お月番の根岸樣へ百人前、兩方とも芝の納めだ。

茂助　かしこまりました。（ト帳面へ附ける。）

喜三　先月遲くなつたので、役人衆に叱られたから、あしたは早く持込むやうに、手配りをしておいてくれ。

茂助　あすはごく早く持ちこみます。

トきやりくづしの合方になり、花道より辰五郎、紺の腹がけ股引、好みの着附、細帯役半纏、鳶の者のこしらへ、藤くら草履にて出て來り、花道にて思入あつて、直に舞臺へ來り門口を明け、

辰五　大きに御無沙汰をいたしました。

いの　ヲヤ、濱松町の辰さんか。

喜三　久しく見えなんだが、どうしたのだ。

辰五　此間から仕事が重なり、いそがしいので何處へも出かけず、濟まねえことゝ知りながら、わつちばかりか、かゝアまで、御無沙汰をいたしました。

喜三　さういそがしくば來ずともいゝに。

辰五　イエ、あがらなくつちやア濟みませぬ。

喜三　マア、ともかくもこゝへ來ねえ。

辰五　御免なせえ。（ト合方きつぱりとなり、火鉢のそばへ住ふ。）

いの　さうして辰さん、おだいさんはかはることもないかえ。

辰五　宿から家へ來た時分は、よく血の道で寢ましたが、がきが出來てから丈夫になり、あれもこつちへ御無沙汰をしちやア、濟まねえといつて居りました。

いの　さぞ坊は、大きくなつたらうね。

辰五　いたづらばかりしますから、かゝアが一日小言をいふので、さう〳〵しくてなりませぬ。

いの　おだいさんが小言をいつちやア、お前のあとを追ふだらうね。

辰五　どこへ行くにも一緒に行くと、いはれるのには困ります。

喜三　子供は夫婦のかすがひで、どんなに腹立つことがあつても、子供に免じて喧嘩もなく、なんにしてもいゝことだ。（ト辰五郎これを聞き思入。）

いの　さうしてけふは、何處へおいでのだえ。

辰五　何處へも行くのぢやアございません、こつちの家へ來ましたのだ。

喜三　なんぞ用でも、あつてのことか。（ト辰五郎思入あつて、）

辰五　お暇乞ひに參りました。（ト喜三郎合點の行かぬ思入あつて、）

喜三　やぶから棒に暇乞とは、何處か遠方へ出かけるのか。

辰五　よんどころない仕事をたのまれ、遠方へ行きますから、もし歸りが遲くなりましたら、殘して行きますかゝアやがきを、お賴み申しにまゐりました。

喜三　土地の仕事が重なつて、何處へも出ねえといひながら、遠方とは何處へ行くのだ。

辰五　エ、わつちが行くその先かえ。

いの　ついに遠方へ行かないお前が、遠方へ行くといひなさるは。

喜三　いつてえ何處へ仕事に行くのだ。

辰五　出入り場先からたのまれて、甲州の身延山で、五重の塔が修覆になり、足場をかけに行きますのさ。

喜三　塔の足場をかけに行くのか、そいつア危ねえ仕事だな。

辰五　一つ落ちりやア命がけさ。

喜三　ムヽ、さうか。（と喜三郎思入あつて）茂助竹の皮があるめえから、皮屋へ取りにやつておいてくれ。

茂助　かしこまりました。

喜三　おいの、鈴木へ来たところをさういつてやつて、来たら一ぺいつけてくれ。

いの　アイ、直ぐにさういつてやりませう。

辰五　けふはちつと急ぎますから、決してかまつちやアいけません。

喜三　おれも喰ふから、遠慮しなさんな。

いの　辰さん、ゆつくり話しておいでよ。

ト合方になり、おいの茂助奥へはひる。喜三郎立上り、あたりをうかゞひ、戸棚から序幕の紙入を出し、懐にさけ元の所へ住ひ、

喜三　お前身延山へ、足場をかけに行くといふのは、嘘だらうな。
辰五　エ、外なら知らずこつちの家へ、なんで嘘をつきやせう。
喜三　嘘でなけりやアなほのこと、塔の足場とあるからは、てうど角力の櫓くらゐの高さはあるに違えねえ、天狗と渾名の頭だから、落ちることはあるめえが、もし落ちたらば命づく、こりやアよしにした方がよからう。
辰五　おことばをそむいちやア濟みませんが、一旦約束したからは、今更よすにもよされません。
喜三　そりやアお前の氣性だから、よすにもよされめえけれど、獨り身ならば知らねえこと、女房子のある身分なら、思ひきつたらどうだらう。
辰五　ためを思つて親切に、さういつてくんなさるを、用ひねえのも仲間の附合ひ、どうも行かずにやア居られませぬ。
喜三　ふだんはおれがいふことを、よく聞いてくれるのに聞かれねえと、お前がいふのは八つ山下の遺恨ゆゑか。
辰五　なんといひなさる。(ト合方きつばりとなり。)
喜三　いよ〳〵身延へ行くならば、餞別にやるものがある。(ト序幕で拾ひし煙草入を、辰五郎の前へ出

す。）

辰五　ヤ、この煙草入は。（トびつくりする。）

喜三　覺えがあらうな。

辰五　どうしてこれを。

喜三　おれが拾つたのだ。

辰五　エヽ。（ト兩人氣味合の思入。）

喜三　忘れもしねえ此の正月、しかも八日の夜明前、今年はおれも厄年に身の災難をのがれようと、大師川原へ夜をかけて七ツ立に駕籠にのり、通りかゝつた八つ山下、誰とも知らず二三人、打合ふ中へかつぎこまれ、怪我でもしちやアつまらねえと、厄年ゆゑに氣がついて、駕籠からおれもうかゞひ出て、思はず中へ立ち交り、とんだ芝居のだんまりもやう、拔けつくゞりつするうちに、足にさはつて思はずも、此の煙草入を拾つたのだ。（トこれを聞き、辰五郎思入あつて、）

辰五　そいつは思ひがけねえ話しだ、わつちも其晩七草の初寄合ひから友達と、のんだあげくが宿へくりこみ、陽氣にみんなで騷ぎましたが、よんどころねえ用があつて、連を殘して島崎から早歸りにとび出したが、雨氣に星の光りもなく、まつくらやみをやう／＼と、八つ山下へ出たと

ころ、煙管をふき切る癖ならひ、よけるはずみにつき當つた、出違ひがしらの行違ひに相手の胸をふんづかまへようと、摑ふうちに東もしらみ、長持唄が聞えるので、見とがめられちやア面倒と、思ふところへ乘つこんだ行列を幸ひ双方とも、あと白浪と別れたが、その時落した煙草入、とんだ人に拾はれたな。

ト兩人よろしく思入。此時奥より喜太郎の衣裳出かゝり、うかゞひ居る。此以前より女房おたい、半纏がけ世話なり、町の者の女房の拵へ、門口へ來て内をうかゞひ、此話を聞き、下手へはひる、喜藏も奥へはひる。喜三郎案じる思入にて、

喜三　この煙草入は類のねえ、一本ぐさりに金物は、二番組と彫つた短冊、しかも裏附の大ばたきへ、めの字のあるのがたしかな證據、おれだからいゝけれど、もしもお前が目ざす相手の、イヤサ、相手といつてはあるめえが、ほんのその場の出合頭、間違ひぢやアねえ行違へ、よもやお前が遺趣返しとか、遺恨を返すといふやうな、そんなことはあるめえが、あつたらあとで女房子がどんな難儀をするかしれねえ。そりやア内輪のことだから、おれが引きうけ世話をしようが、もしも大きな間違ひになつた時にやア引くに引かれず、め組ばかりか二番組、一同の騒動になるめえともいはれねえ。疾うからお前にいはうと思つて、實は待つて居たところだ。

と餘所ながら異見をする。辰五郎も思入あつて、

辰五 親切づくでさういつて、くんなさるのはありがたい、氣早と人に言はれましてむやみなことをしましたのは、そりやア厄介のねえ時分、こつちのお世話でおだいをもらひ、喜太郎といふがきも出來、町内持になつてから地主方に可愛がられ、少しは人に立てられて今ぢやア子分も出來まして、人に小言もいひますから、決して馬鹿なことはいたしませぬ、安心しておくんなせえ。

喜三 イヤ、その安心の出來ねえのは、ふだんは人の先へ出ず、ひかへ目にする方だけれど、祖父さんからの附渡り、かんしやく持が一つの疵、イデ鎌倉といふ時にやア、一番がけに火の中へ飛び込むといふ負けねえ氣性、鳶の者にやアいゝことだが、頭となりやアそこらをば、愼まにやアいかねえから、それでおれが案じるのだ。これがたゞの子分なら、どうでもいゝで濟みもしやうが、新橋きつてめ組ぢやアなくてならねえ濱松町、もしもお前に間違ひでもあつた時にやアどうもつれし、今もおれがいふ通り、二番組一同の大騷動にならうから、よくそこらを考へたがいゝ。

辰五 ふとした緣から兄弟同樣、わつちを思つてくんなさる、その親切に對しても、むやみなことに

決してしませぬ、七草の晩高輪でまつくら闇でつき當てられ、ちつとばかりの行違ひ、無法なことをしやアしませぬ。

喜三　まだそんなしらをきるのか、おれが力にやアその晩のたしかな證據があがつて居るのだ。

辰五　ナニ、その晩の證據があるとか。

喜三　ヲイ〳〵、杢藏ちよつと來てくれ。

ト奥よりいぜんの番太郎出て來り、

番太　ハイ〳〵、なんぞ御用でござりますか。

喜三　今しがた臺所で、話して居たを聞いてゐたが、此正月の七くさの晩、夜明前に高輪で無法にそなたをなぐつたは、常番つなぎを着てゐた者だな。

番太　ハイ、その時は氣がつきませなんだが、神明町の番太郎になりましてから町内ゆゑ、當番つなぎといふことが、やう〳〵にわかりました。

辰五　それぢやアあの晩出ツくわした、夜番は杢藏さんだつたか。

番太　ハア、、わしが持つてゐた提灯を、蹴飛ばして横ツ面をなぐりつけた無法者は、イヤ濱松町の頭とは、わしはちつとも知りませなんだ。

喜三　かういふたしかな證人が、あつてはしらは切られめえ。

辰五　ム丶。（トぎつくり思入。）

喜三　これから先はいはずとも、日々多人數の入りこむ矢出し、人の噂で聞いてゐる、おれが身では兄弟同様に思ふから案じるのだ、それをおれにしらをきり、かくし立てはそでなからうぜ。

トこれにて辰五郎ぢつと思入あつて、

辰五　こりやアわつちが悪かつた、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

喜三　それがネア身延へ行くといつたも。（ト辰五郎思入あつて。）

辰五　一たん肝が受合つたら、危ねえ足場も合點で、命がけで行きますが、御親切な異見につき、また仕手方と相談して、模様替にして見ませう。

喜三　さうなることなら見合して、丈夫な仕事をするがいゝ。（ト思入あつて。）しかしそれも肝づく、互ひに意地を賣る生業、引くに引かれぬ仕事なら、命がけでやるがいゝ。骨はおれが拾つてやらう。（と辰五郎嬉しき思入にて。）

辰五　ア丶親方、ありがたい、よくいつてくんなすつた、その詞は忘れませぬ。

番太　なんだかさつぱりわしらには、仕事の話しは分らないが、がうぎに仲のよいことだ。

喜三　ヲイ杢藏、臺所へいつて、酒を早く持つて來いといつてくんねえ。

番太　ハイ〳〵、かしこまりました。（ト奥へはひる、と奥にて）

いの　今持つて行きますよ。

ト合方になり、おいの小廣蓋へ酒道具をのせ持つて出る。あとより杢藏鰻の箱を持ち出で、よき所へおく。

鰻の來るのを待つて居て、大きに遲くなりました。

喜三　けふは何か急ぐといふから、早く一ぺいついでくれ。（ト喜三郎猪口をとりあげる。）

番太　ドレ、お酌をしませうか。（と德利をとり酌をする。喜三郎ぐつとのんで）

喜三　いゝ燗だ。サア、一つのみねえ。

辰五　それぢやア一ぱいのみませう。

ト辰五郎は別れの心にて猪口をとる、杢藏酌をする。此うちおいの中皿を出して、鰻を箱から取りながら、

いの　大そうけふのは、大きいね、

喜三　こいつアいゝ魚だ、うまからう。

いの　日本橋から向うでは、筋違の深川屋だが、こつちでは尾張町の鈴木の鰻がいつちいゝね。

番太　こりやア一本どのくらゐします。

いの　一串二朱はするだらう。

番太　ヱ、一本二朱とはたまげたことだ。（ト辰五郎のんで、）

辰五　こいつア野暮に、親方へ。

喜三　ム、、返盃するのか。（ト猪口を受取る、おいの酌をする、喜三郎飲まうとして、）これが別れに。

辰五　ヱ。（ト顔見合せ思入、喜三郎猪口を落し、）

喜三　猪口は割れたか。

辰五　イ、ヱ割れませぬ。（ト猪口を取りあげる。）

喜三　割れぬといふは。（ト道具がはりの知らせ、）いゝさい先だ。

ト思入、おいの手拭でこぼれた酒を拭かうとするを、杢蔵とめて畳の酒を吸ふ、このもやうよろしく、合方にて道具廻る。

本舞臺平舞臺、眞中一間中切障子の出入り、上手視鏡戸の押入戸棚、下手鼠壁、提灯かけ、眞中の

欄間に神棚、眞鍮の神道具を飾り、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方葺きおろしの下家、内に地形の蛸、鋤、鍬、かけや、のこぎりなど道具の書割、すべて濱松町辰五郎家の體。爰に鳶の者春高竹、三ッ星半次、紺の腹掛、半天三尺帶、鳶口を磨いて居る、傍に辰五郎の倅喜太郎廣袖當番つなぎのなり、おもちやのめ組の纏を持つて遊び居る、此の見得本町二丁目の爺屋の唄にて道具留る。

竹　喜太さん、なぜかアちやんと一緒に行かねえのだ。

半次　おいらたら一緒にいつて、おもちやでも買つてもらふのに。

喜太　おいらはどこへいつたのか、しらねえものを。

竹　大方神明樣の吹矢へいつて、歸りは角の太々餅だらう。

半次　太々餅は氣が惡い、二盆ばかり喰ひてえものだ。

喜太　半次はお酒をのむくせに、太々餅が喰ひたいのか。

竹　ナニ半次は盜人上戸だから、酒でも餅でも兩刀だ。

半次　ならうことならきはだのさしみで、グッと一ぺいやりてえのだ。

喜太　またちやんに叱られようと思つて。

半次　こいつア一番閉口だ。

竹　今の子供は油斷がならねえ。

トやはり右の合方にて、花道より以前のおだい出で來り、直に門口へ來る。

ヲヤ姐さん、お歸りなさい。

だい　大きに留守を御苦勞だつた。誰も家へ來なんだかえ。

半次　裏のをばさんが來たばかり、留守に誰もまゐりません。

トおだい内へはひる。

喜太　おつかア、何處へいつたのだ。

だい　日蔭町までいつたのだが、つい先で話しをされ、半時ばかり遲くなつたが、よくおとなしく待つて居たの。

喜太　なんぞおみやを、買つて來ておくれか。

だい　内を急いで歸つたから、いつも來る飴屋が來たら、買つてやるから呼んで來な。

喜太　アイ／＼。

竹　姐さん、頭は何處へ行きなすつたえ。

だい　數寄屋河岸の親方へ、無沙汰になつて濟まねえからちよつと行つて來るといつたが、知つての通り話し好き、數寄屋河岸から何處かへ廻り、話し込んで居るのだらう。

半次　組合内でも一といつて、二とねえ意氣な頭だから、何處へ行つても女に惚れられ。

竹　姐さんの前で何をいふのだ、あとさきを見て口をきけ。

喜太　半次は間拔けなやつだな。

竹　ソレ喜太さんにせへ、間拔けが知れらア。

だい　穴ツ這入りの噂も聞くが、ふだんならいゝけれど、話しこんで居る時でないから、早く歸つてくれゝばいゝに。

竹　すこし姐さん、ちん／＼だな。

だい　そりやア子供の出來ねえうち、今ぢやアそんな苦勞はしないよ。

半次　ほんに姐さんは、いゝ思ひきりだ。

だい　モウ今に歸つて來なさるだらうから、おまへ方も研ぎ上げたら、そこを片附けて置いておくれ。

竹　二本とも研ぎ上げたから、これからどつぷり湯へはひり、

半次　伊勢屋へ行つてさしツ子を、入れかへてもらつて來よう。

ト鍵を下手の下屋へ入れる。

だい　それぢやア早く、行つて來ておくれよ。

竹　直ぐ行つて、

兩人　歸ります。

ト節屋の唄にて、兩人下手へはひる。後におだい思入あつて、

だい　切通しの鐘を聞きそこなつたが、モウ日ざしのあんばいでは、七ツを打つに間はあるまい、早く歸つて來なさればいゝが。

トこれより床の淨瑠璃になる。

〽行く空の日影くもりし春の末、花も名殘りの廿日すぎ、散る間も早き身の上に、思案にくれて我門へ、立歸りたる辰五郎、俄に酒に醉ひし體にて、

ト此うちおだいあたりを片づけ、辰五郎を案じる思入。よきほどに花道より、以前の辰五郎、思案の思入にて出來り、直に舞臺へ來り、思入あつて生醉ひのこなしにて、

辰五　おだい、今歸つた。

〽足もしどろにどつかと座せば、

ト辰五郎よろ〳〵として下に居る。

だい　直きに行つて来るといひなすつて、大さう遅くなつたね。

辰五　数寄屋河岸へ無沙汰をして、久しぶりで行つたから、親方もおかみさんも大さうに喜んで、まづともかくも一ぺいのめと、鈴木の鍋で馳走になり、すきツ腹でめつぽふ酔つた。

だい　ふだんそんなにのめないのに、けふに限つてひよろ〳〵するほど、そんなに酒をのまなければよいのに。

辰五　それだといつて親方と、おかみさんにすゝめられ、のめねえ酒もついのんで、目のまふほどに酔つたのだ。

だい　そんなに酔つて目がまふなら、紫金錠でもおあがりな。

辰五　薬をのむより、寝る方がいゝ。（ト喜太郎そばへ来て、）

喜太　ちやん、何處へ行つたのだえ。

辰五　数寄屋河岸へ行つたのだ。

喜太　おいらも一緒に行きたかつた。

辰五　どうして連れて行かれるものか、數寄屋河岸にやアもゝんぢいが居る。
喜太　もゝんぢいとはなんだえ。
辰五　お化のことよ。
喜太　ちやんの子だから、お化は怖くない。
辰五　生意氣なことをいふな。
喜太　もゝんぢいなら、煮て喰つてやらア。
辰五　何もかも知つて居やアがる。
だい　今時の子に、ゆだんはならないよ。
辰五　コレ姐、ちやんが寢るから、枕を持つて來てくれろ。
　へいひつゝそこへ肱枕、横になるのを引き起し。(ト辰五郎寢ようとするをおだい引き起して)
だい　コレ頭、おまへは此處へゆう〳〵と、枕をして寢る氣かえ。
辰五　のみすぎてせつねえから、横になつて醒すのだ。
だい　たとひ酒に醉つたとて、寢て居ては、濟むまいに。

辰五　雨上りの水道ぢやアあるめえし、済むもすまねえもあるものか、おれがうちへおれが歸るに、誰が何といふものだ。

だい　イヱ、他人は知らずわたしがいひますよ。

辰五　ナニ、手めえがいふとは。

だい　おまへ、けふ親方の所へ、何の用で行きなすつた。

辰五　何の用で行くものか、あんまり久しく無沙汰をしたから、機嫌きゝに行つたのも、後のことまで。イヤ、後の難が先になつて、いひてえことをいはれねえうち、短氣を出すなと異見をされ。馳走になつて歸つて來たのだ。

だい　それではおまへは親方に、短氣を出すなと異見をされ、きのふの仕返しをしない氣かえ。

辰五　ナニ、仕返しとは。

だい　なんぼわたしがぼんやりだつて、そんなに馬鹿におしでない。

辰五　誰が馬鹿にするものだ、色で夫婦になつた上、可愛い子まで産んだ手めえ、馬鹿にするやつがあるものか。

だい　そんならきのふの仕返しを、なぜ忘れてしまひなすつた。

へ膝つきかけてつめ寄る折から、門へ來かゝる龜右衞門、內の樣子を窺ふとも、しらふにあらぬ生醉に、

トおだいきつとなつてつめ寄る。下手より前幕の龜右衞門、着流し三尺帶、駒下駄穿の者のこしらへにて出て來り、門口へたゝずみ、內の樣子を窺ひ居る。辰五郎生醉の思入にて、手をたゝきながら。

辰五　ムヽ、思ひ出した〳〵、宮の內の芝居のことか。

だい　たゞ小商ひの喧嘩なら、お前が我慢をしなさりやア、それで事はすむだらうが、他人にかゝはつて相手になり、立派に約束したからは、それでは組合へ濟みますまい。

辰五　それぢやアきのふのいきさつを、手前は聞いて知つて居たか。

だい　目と鼻の先の宮の內、人の話しに聞いて居たが、家へ歸つて來なすつても、機嫌が惡く、たんにも言はず、女のさし出るところでないから、だまつてゐたが數寄屋川岸の、親方の所へ行きなさるは、大方喧嘩のことゝ察し、案じられるから後をつけ、門にかくれて八つ山下の喧嘩のことから、親方のよそながらの異見まで、立聞きして知つてゐます。

辰五　南無三、それでは聞かれたか。

へ酔ひにまぎれてとり合ぬ、夫を女房はもどかしく、胸づくしをきつととり。

ト辰五郎生酔の思入、おだい胸ぐらをとりきつとなり、

だい　コレ頭、あんまりしつこしがないぢやないか。（トあつらへの合方になり）これが堅氣な商人なら、引こみ思案もいゝけれど、役場へ持つてく鯉よりも、男を磨く鳶の者、役半纏へ諸みますまい。それも六十七十の年よりならば知らぬこと、まだやう〳〵と二十の坂へ足をふみかけた、男盛りの身をもつて、さりとはいくぢのない料簡、なんでお前は親方の、異見を聞いて御もつともとあたまをさげて歸つておいでだ。わたしや女でも口惜しくつて、ゆうべはろく〳〵寢やアしない。（ト傍にある纏をとつて）この纏へ對しても、のめ〳〵しちやア居られないに。

へ傍にありあふ持遊びの纏をとつてさしつくれば、その口惜しさはいはずとも。胸も張りさく辰五郎、無念をこらえしどもなく、飲まぬ酒の酔にまぎらし。

トおだいよろしく思入あつて、おもちやの纏をさしつける。辰五郎よろしく思入あつて、生酔のこなしにて、

辰五　エヽつべこべとやかましい、人の知つたことぢやアねえ。だまつてそつちへ引つこんで居ろ。

〽突きはなせばとりすがり、

ト辰五郎おだいをつきのける、直にとりついて、

だい　イヱ〱、引つこんぢやア居られない。（トおだいむしやぶりつく。）

喜太　おつかア、ちやんをどうするのだ。

だい　あんまりちやんが意気地がないから。

喜太　おいらのちやんを、いぢめちやアいやだ。

〽とりすがる子にひきとめられ、しばしたゆたう門口に、始終を窺ふ亀右衛門、こらへかねてずつとはひり、

トおだい喜太郎にとめられ、是非なくとまる。此時門口に窺ふ亀右衛門、ずつと内へはひり、

亀右　思ひがけなく来合せて、門で様子を聞いて居たが、こりやア姐御のいふのがもつともだ。

辰五　や、誰かと思やア亀か。

だい　ヲヽよいところへ来ておくれだ。わたしのいふのがいゝか悪いか、亀さんよく聞いておくれ。

亀右　聞いた〱、おめえのいふのが本筋だ。少しも悪いことはねえ。コレ兄貴、ふだん[illegible]まねえ話

をのみ、酔つたふりで逃げる氣か、そりやアあんまり卑怯だらう。

辰五　何がおれが卑怯だといふのだ。

龜右　今の話しの樣子ぢやア、數寄屋川岸の異見をきゝ、しかけた喧嘩の腰を折り、くらひ酔つたふりをして、寢るといふのは何のことだ。あんまりわけがわからねえ。仕返しもせずこのまゝに、指をくはへてお前が引込み思案なら、生き死にを一緒にしようと、約束をした藤松や長公と三人で、おらア命を捨てに行く氣だ。他人のことでも組合の恥になりやア火の中へ、飛びこむお前のふだんの氣性、め組ばかりか二番組で喧嘩でひけをとらねえ兄貴、いま姐さんのいふ通り、まだ三十になるかならず、もうろくのしやうが早いぢやアねえか。

〽まけぬ氣性に龜右衛門、詞もあらくつめよるを、辰五郎は耳にもかけず。

ト龜右衛門手拭を握りつめよる、辰五郎はやはり生酔の思入にて、

辰五　手めえ達がワア〱いふので、さう〲しくつて寢られねえ。ヱヽ、喜太や水を一ぺい持つて來てくれ。

喜太　アイ〱。

〽年よりませし喜太郎が、藥罐の水を湯呑へつぎ、こぼさぬやうに持ち來

り、

ト喜太郎文句の通り、湯呑へ藥罐の水をつぎ持つて來て、

辰五　ちやん、水を持つて來たよ。

ヲヽ、よく持つて來た〳〵。（ト一口のんで、）アヽいゝ心持だ、よくいふやつだが、醉ざめの水ぐらゐ、うめえものはねえ、おだい一口のめ。

だい　わたしやア醉つて居ないから、水などはのみたくない。（トツンとする。）

辰五　手めえがいやなら、奴飲め。

喜太　おいらは水は大好きだ。（ト喜太郎一口のんで、）おつかアおめえも飲みねえ。

〽何心なく喜太郎が、さし出す水にうなづいて、

ト喜太郎おだいの前へ茶椀を出す。おだいちよつと思入あつて、

だい　喜太がいふなら、一口飲まうよ。

〽心ありげにのみほせば、（トおだいグツと水をのむ。辰五郎見て、）

辰五　おだい、手めえものんだか。（ト思入、生醉のこなしにて、）下戸の知らねえ、うめえ味だな。

へ浮世の夢の醉ざめに、それといはれど三人が、飲むは別れの水杯。

ト辰五郎、おだい、心のうちで泣く思入あつて、

だい　親子三人思はずも、今飲んだのは水杯。

辰五　ムウ。（トあつらへの合方になり）

だい　頭、わたしやアおまへに改めて、頼みがあるがきいておくれか。

辰五　いつにねえ改まつて、手前がおれに頼みとは。

だい　男の子は男に附くが、昔からの習ひだが、この子はわたしが連れて行くから、夫婦の縁を切つておくれな。

辰五　なんだと。

へ思ひがけなき縁切りに、おだいの心はかりかね、ためらふ傍に龜右衛門、離縁といふをきゝかねて、

トおだいずつけりいふ。辰五郎合點の行かぬ思入。これを龜右衛門腕組みをしてゐたが、これをきいて前へ出で。

龜右　わつちも喧嘩でのぼせて居るから、人の話しも耳へもいらず、ぼんやり默つてきいて居たが、

姉御の方から暇をくれと思ひきつた今の一言、お前の心が読めねえが、どういふ訳のあつてのことだ。

だい　どうもかうもありやアしない。お前達も知つての通り、わたしも惚れて女房になつたが、いひがひのない頭の料簡、こんなしつこしのない亭主を持つて居るより別れてしまひ、一人でくらすがましだから、縁を切る気になつたのさ。

辰五　それぢやアおれに愛想がつき、手前は別れてしまふ気か。

だい　子まで出来た二人が仲、別れたい気はないけれど、世間の人に後ろ指をさゝれるのが悔しいから、わたしや別れてしまひたいのさ。

亀右　こりやア姉御の方がもつとも。人に笑はれるのが悔しいから。子供を連れて別れるといふは、爰が江戸ッ子の[illegible]、姉御お前ばかりぢやアねえ、おれもこれまで兄貴といつた、兄弟分もけふかぎり、これから先は一本立ち、しつこしのねえやつらだと、蔭で人にいはれねえやう、命をきりに亀右衛門だ、やるところまでやらにやアおかねえ。

へ手に持つ手拭にぎりつめ、無念と思へば女房が、

ト亀右衛門悔しき思入。おだい思入あつて、

だい　縁を切れば用のない家、こゝに長居をしようより、サア喜太郎來な。

ト喜太郎の手をとるをふり拂ひ、

喜太　おいらはちやんの所に居たい。

だい　モウけふからはおつかアばかり、ちやんといふのは、ありやアしない。

喜太　いやだ〱。ちやんがいゝ。

だい　えゝきゝわけのない、來いといふのに。

〽いやがる我子の手を引きとり、涙こぼさず氣丈にも、門へ出で行く女房を、

トおだい喜太郎の手をとり、無理に引立て門口へ行く。辰五郎起上り思入あつて、

辰五　コレおだい、待て。

だい　待てとはなんぞ、用があつてか。

辰五　數寄屋川岸の世話になり、夫婦になつて七年此方、出るの引くのといふことなく、子まで出來た二人が仲、見りやア涙もこぼさずに、手前はこゝを出て行く氣か。

だい　愛想がつきて出て行くのに、なんで涙がこぼれるものかね。

辰五　ムヽ、その心なら望み通り、夫婦の縁を切つてやらう。

だい　ヱ、（トぎつくり思入。）

辰五　まだ年若なからだゞから、おれが死んだら、イヤ、神明町が媒人だから、是を持つて早く出て行け。

へ懐さぐり書附をおだいの前へ投げつくれば、心ならずも取りあげ見て、

ト辰五郎懐掛のかくしから、書附を出し、おだいの前へ投げる。おだいとりあげ、開き見てびつくりなし、

だい　ヤ、こりやわたしへの離縁状。

亀右　それぢやアお貴も姐御をば、

だい　離縁する氣でござんしたか。

へいふにこなたも居直つて、（ト辰五郎居直つて、合方きつぱりとなり、）

辰五　若い時から一方ならず、世話になつて兄弟同様、力に思ふ炊出しの喜三郎さんへ餘所ながら、暇乞に行つたのは、けふ仕返しでおれは死ぬ氣だ。

だい　ヱヽ、そんならおまへは。

龜右　仕返しをする氣か。

辰五　しなくツてどうするものだ。日本橋から比べりやア芝の土地は場末だが、水道の水にかはりはねえ。命を惜しんでこのまゝに、指をくはへて引込むものか。たとひ向ふが力士でも、命がけで勝負をする氣だ。

だい　この仕返しをする氣なら、なんで醉つたふりをして、ゆう〳〵と寢て居なすつたのだ。

龜右　お前の肚がよめねえから、おれも肚をたつたのだ。

辰五　それもこれも料簡があつて、おれがしたことだ。角力はけふが七日目に爪もたゝねえ見物人、怪我をさせちやア氣の毒だから、酒に醉つたふりをして、おれがぐづ〳〵して居るのも、場所のはねを待つて居るのだ。手前達と同じやうに今から騷ぎたつたら、若い者は向ふ見ず、場所のあるうち押しかけたら、どんな騷ぎにならうも知れねえ。それゆゑ我慢をして居るのだ。ことにやア親仁が頭取だから、こんなことのある時は若い者を靜めにやア、ならねえ役のおれが先立ち、喧嘩をしちやア濟まねえのも知つちやア居るが穩便に、虫をこらえて居られねえのは、め組がひけをとつた日にやア、二番組の恥だから命を捨てゝ一番やる氣で、あとへ難儀のかゝらぬやう、書いて置いた離縁狀、これを手前に渡しておくから、小倅が末をたのんだぞ。

〽心の中をうちあけて、話すも流石組合で、人の上へも辰五郎、天晴め組の頭なり。

ト辰五郎よろしく思入。

だい　これまで人に負けることの、嫌ひなおまへがけふにかぎり、引込み思案は合點が行かず。

亀右　かういふ心と知らねえから、言ひすぎたことをいつたのは、

だい　どうぞ堪忍、

兩人　してください。

辰五　ナニ、詫びるにやア及ばねえ、おれを人に笑はせめえと、思ふからのことだから、なんで惡く思ふものか。

だい　緣を切るといつたのも、おまへに勵みをつけるため、この去狀は返します。

辰五　緣は切らぬが去狀は、こりやア後日のためだから。

だい　イエ〳〵、これは返します。（ト兩人あちこちとつきやる。喜太郎出て、）

喜太　こりやアおいらが、もらつたよ。

〽取るより早く引きさけば、（ト喜太郎去狀をとつて、何心なく引きさく。）

龜右　コリヤ喜太坊が寝つたか、こりやア何より大でかしだ。(ト七ツの時の鐘。) ヤ、ありやア明通しの七ツの鐘、付刃のはねにモウ間はねえ。

辰五　若い者が出掛けぬやう、おれが行くまで留めてゝくれ。

龜右　案じなさんな、留めておきやす。(ト龜右衛門門口へ出る。)

辰五　早く行つてくれ。

龜右　合點だ。

〽あとをも見ずに龜右衛門、一もくさんに駈て行く。

ト時の鐘、バタ〳〵にて、龜右衛門逸散に花道へはひる。辰五郎思入あつて、

辰五　こりやア大事な役半纏、これを着ちやア行かれねえ、さしツ子を出してくれ。

だい　アイ〳〵。

トこれより早めやうの合方になり、辰五郎上に着てゐた役半纏を脱ぐ、戸棚よりおだい二の字つなぎの長半纏、鬼の首が消札をくはへしさしツ子の半纏を出す、辰五郎すつぽり脱いで半纏を着る。おだい白木綿の三尺帯を出す、辰五郎身ごしらへをして、草履をはく、おだいは戸棚から白鞘の短刀を出し、

頭、これを用意に。（ト出すを取つて、）

辰五　この白鞘をどうして手前が。

だい　数寄屋川岸から駈りだけ、日蔭町のお店へ寄り、番頭さんから借りて来ました。

辰五　こいつア何よりありがたい。（ト頭へさして、半天でかくす。）

だい　数寄屋川岸へはどうしようね。

辰五　模様がへにしようといつたが、骨を拾つてやらうといふ、其一言がこつちの力、あとでいゝやうにいつてくれ。

だい　わたしが行つてお詫びをしませう。（ト辰五郎門口へ出て、）

辰五　それぢやアおだい。

だい　頭。（ト両人顔見合せ、）

辰五　達者で居ろよ。

ト振切りとして顔をそむける。おだいもうつむきぢつと思入。喜太郎ツカ〳〵と傍へ行き、

喜太　ちやん、一緒に行かう。

へすがりつかれて鬼神にも、負けぬ気性の辰五郎、これがこの世の別れぞ

と、恩愛妹脊の愛情に、思はずこぼす一雫、こらへ〳〵し女房が、わつとばかりに泣き伏す時しも、角力のはねに打ち出す太鼓。

トこのうち辰五郎手鍵を持ち出かける、喜太郎ツカ〳〵と行つて、辰五郎にすがる、辰五郎喜太郎を見て、これが別れといふ思入。おだいと顔見合せ、不便だといふ思入にて泣く。おだい是を見て、ツツと泣伏す。此時花道の揚幕にて、角力太鼓を打ち出す、両人きつとなつて、

だい　ヤ、あの太鼓は、角力のはね。

辰五　コリヤかうしちやア。

ト喜太郎をつきたふすを木の頭。

居られねえ。

トきつと見得、角力太鼓バタ〳〵にて、辰五郎手鍵を持ち、勢ひこんで花道へはひる。これと一緒に、舞臺はおだい喜太郎を抱いて見送る、引込みといつぱいに、

ひやうし幕

ト角力太鼓にてつなぎ、直に引かへす。

神明町鳶勢揃の場
神明角力小屋の場
同境内末社裏の場

四幕目

役名　め組の辰五郎、九龍山浪右衛門、焚出しの喜三郎、鳶柴井町の藤松、同濱松町の長次郎、同露月町の龜右衛門、力士大童山文太郎、同勇野龍治、同荒浪龜之助、同團子山五郎吉、同浪の花鹽右衛門、町方同心岡村千藏、神明町の町役人喜兵衛、同新右衛門、め組の鳶大勢、とりてき四人、神明町の番太郎杢藏、四ッ車大八、鳶おもちや文治、同中門前の專坊　同とゝまじりの棠次、同やんま豐、同花籠の喜久松其他。

本舞臺上手九尺材木置場の輪掛け、是に板割大貫杉四分松六分の束を立てかけ、續いて下手へ三間繩からげの板圍ひ、此下手九尺こけら屋根竹を打ちし中窓、袖廻り板羽目、この横手三尺の出這入

口、番太郎裏手の心、此の前火の見の階子、町役人昇るべからずの板、頂上に屋根附の半鐘を掛け圍ひの向ふ通り、町の向ふ側を見たる屋根の中遠見、すべて芝神明町普請場明地の體。爰に藤松、長次郎、専坊、茶次、おもちや文次、やんま響、花籠の喜久松、其外三町總出の鳶の者、いづれも火事場ごしらへ銘々鳶口手鍵、思ひ〳〵のこしらへにて立ちかゝり居る。この見得きやりくづしの合方、聖天の鳴物にて幕あく。

鳶一　こゝの明地に居されねえから、日陰町の石龍師の庭も、ついでに借してもらつたのだ。

二　石龍師の先生は、この喧嘩は末になると、必らず大きくなるといつて、易を見てゐたからは、

三　當時江戸で一二をあらそふ、名におふ芝の石龍師、きつと當るに違えねえ。

四　當つた日にやアお互ひに、常談事とはわけの違ふ、命がけの大喧嘩。

五　さしこの下へ鎖かたびら、又劍術の着込みもあり。

六　かねの鉢卷濡紙で、組合惣出で二ケ所に別れ、

一　頭であひが軍配に、進めと聲をかけるを待つて、

二　飛び出したならばお互ひに、め組の名折れにならねえやう、

三　命をきりにたゝき合ひ、一番二番はいふに及ばず、他の組合にも褒められて、

鳶四　よしんばこのまゝ打殺されても、名の殘るのを儲けにして、
五　やるところまでやツつけにやア、これまで長々世話になる、
六　濱松町や頭であひに、恩を返す時がねえから、
一　命は決して、
皆々　惜しまねえのだ。
藤松　ム、よくいつた、それはさうと日蔭町へ、濱松町は來たらうか。
長次　來りやアこゝへつツかけるが、遲いのを龜が案じて、今がた家へ迎ひに行つたが、モウ疾うに歸る時分だ。
文次　きのふ姉御が山内の燈籠佛さまへ、何のことだか伺ひに行つたから、大かたあそこで凶の知らせに、姉御が止めて居るのぢやアねえか。
喜久　今朝數寄屋川岸へ行くといつたが、まさか引止められて居もしめえが、それとも姉御が案じてゐるのかな。
粂次　そんなことをかまふやうな、頭ぢやアねえはずだが、又喜太さんにとつ付かれ、出にくいのぢやアあるめえか。

豐　人を馬鹿にして居やアがらア、これから喧嘩をしようといふに、子供にとつ付かれて出にくいやつが、どこの園にあるものか。

專坊　モウかうなつたらそんなことに、未練のある人ぢやアねえが、

藤松　どうか早く、

皆々　來なさりやアいゝが。

トバタ〳〵にて、上手の園ひの内より、入口を明け、蔦の者一人出來り、

蔦　みんな、氣をつけねえよ〳〵。

皆々　なんだ〳〵。

蔦　今新錢座の方からこゝへ來る道、この明地の園ひの外で、神明のとりてきが園ひのすき見をしてゐたから、なぐりたふさうと思つたら、ほう〳〵の體で神明の方へ、逃げて行きやアがつたから、あいつがきつと知らせるに違えねえ。モウ油斷は出來ねえぜ。

長次　何だ角力が覗いた、そいつアかうしちやア居られねえわい。

豐　長兄イ、鼻を揃へて大ぜいが、濱松町を待つにやア及ばねえぢやアねえか。

專坊　ム、さうだ〳〵、それぢやアみんなで、

皆々　さきがけしようか。（ト立ちかゝるを藤松留めて）

藤松　コレ、靜かにしろ。

　　トあたりへ思入あつて蔦の一に囁く。一すぐ下手の中窓より、内を覗き思入あつてこちらへ來り。

蔦　ゆうべは明け番をしたと見えて、番太郎は白川夜船だ。

長次　こゝの番太郎はこの正月、高橋から株を買つて來たが、正直いつさんめえといふやつで、めつぽう物に驚くから、みんなを見てびつくりして、濱松町が來ねえうちに、若し騷がれて角力に知れると、こつちが後手になるかも知れねえ。番太郎へは靜かにしねえ。

皆々　承知しました。

　　トやはり右の鳴物、バタ〳〵にて、東の假花道より龜右衞門、さしこごしらへにて汗を拭きながら出來り。

龜右　みんな心配したらうが、濱松町は直ぐ來るから、一足先へ驅けぬけて來たのだ。

文次　龜兄イ、さう〳〵待つてはゐられねえぜ、今向うから見に來たから、モウ油斷は出來ねえのだ。

專坊　もし遲れるとどぢをくむから、頭にかまはず乘つ込まうか。

喜久　おらア石龍師へ行つて、みんなに知らして來るとしよう。
皆々　ムヽ、さうしてくれ〳〵。
藤松　アヽコレ〳〵、まア待らねえ。（ト思入あつて、）それぢやア頭は女房子に、イヤナニ、これまで待つて居たものだ、まア、モウ少し待つてやんねえ。
長次　さういふうちもけんのんだ、かまはねえ出かけろ〳〵。
皆々　合點だ。（ト立ちかゝる。此時東の揚幕にて、）
辰五　待つてくれ〳〵。
　ト、鉦囃子、早めたる合方にて、花道より前幕の辰五郎、火掛りのこしらへ、手鍵を腰にさし。鳶口をかゝへ走り出來り。
　みんなも、待ちどほだつたらうな。
龜右　頭、角力場へ知れたさうだから、早くしねえと、
皆々　後手になるぜ。
辰五　ムヽ、さうだらう、モウこの芝へ二ケ所もかたまりやア、疾うに知れたに違へねえ。それぢやアこゝで立廻ひのかために、水杯をした上で。

長次　ムヽ合點だ、專坊水はいゝか。

專坊　ヲイ。

トこれよりかはつた合方になり、專坊圍ひの後ろへはひる。このうち鳶の者上手に立てかけてある、松板杉板などを束のまゝ一束づゝ所々へたふし、皆々これへ腰を掛ける。こゝへ專坊手桶へ杓柄をつけ提げて來り、其中へ置く、藤松柄杓を持つて立上り。

藤松　それぢやアこゝで、

皆々　水杯を。

辰五　命を捨てる冥土の旅立、逆さまにして若いものから、順にみんなへ廻してくれ。

龜右　まづ此中で若い者は、中門前の專坊に、とゝまじりの榮次に、おもちやの文次、さ榮公から先へ初めろ。

榮次　そんならおらから逆廻しに、

專坊　頭の前で、

三人　水杯。

辰五　初はなにのむのは威勢よく、遲れちやアならねえぞ。しつかりしてのんでくれ。

榮次　頭、大丈夫だ。（ト榮次柄杓より一口のみ、）サ、これでおらの臟ッたまは、すわつたぜ。

專坊　ム、合點だ。

ト榮次より受取り、專坊、やんま舅、文治、長次郎、藤松、龜右衛門と順々に他の皆々へ廻す。

長次　モウ、何時だらうな。

鳶　今がた芝の七ツを打つた。

長次　それぢやアぐづ〳〵して居ると、角力がはねて歸るだらう。

辰五　よしんば角力がはねたところが、きのふ宮の内の芝居前で、この仕返しに來ねえうちは、相手の水引、四ツ車は幾日でも神明近所で、酒をのみながら待つてゐると、へらず口をきゝやがッたから、よもや田舍の花角力へ逃げて行くわけにも行くめえ。

藤松　これから事を起したところが、きのふは座元の顏を立て、けふは角力がはねてからなら、勸進元にも義理も立つ、こゝらはうまく行つたのだ。

トこゝへ文次柄杓を持ち前へ出て、

文次　頭、殘らず、

皆々　濟みました。（ト辰五郎へ柄杓を出す。）

辰五　ム、、さうか、それぢやアおれで納めようか。

ト合方きつぱりとなり、辰五郎立上り、件の水をのみ柄杓を出す。藤松これを取らうとして、兩人ぢつとなり、

藤松　兄イ、おめえはよつぽど運がいゝぜ、石龍師の庭へ行つて見ねえ、この組合の頭であひは、殘らず揃つて待つてゐますぜ。

龜右　組合中の顔揃ひ、あゝも氣の揃ふといふも、實に頭の高運とわつちやア さつきみんなを見たら、嬉し涙がこぼれましたよ。

長次　人となつたらから行きてえ、お前さんのことを聞くと、命をきりにやツつけて、濱松町の名をあげると、口を揃へていひましたが、子分となつてゐるわッちらア、どんなにいゝ心持だつたらう。

辰五　ム、さうか、友達は持ちてえものだな。（ト思入あつて、）それぢやア手前達も今こゝで、末始をしてくれゝば、命がけでやつてくれるな。

蔦一　エ、、濱松町から起つた一件、かういふ時が恩返し。

蔦二　卑怯未練な喧嘩はせず、後の世までも組合の、

鳶三　名の殘るやう、
皆々　やツつけませうよ。
辰五　ムヽ、それぢやアおれゆゑ、命まで、
皆々　あたりめえさ。（ト辰五郎皆々を見わたし、ぢつとなり、）
辰五　ムヽ、ありがてえ、よくいつてくれた。（トぢつと思入、）
皆々　そんなら頭、
番太　出かけようか。

ト皆々立ち上る、此うち大階子へ昇り半鐘をする。此時下手番小屋の內より、前幕の番太郎眼をこすりながら出て、びつくりなし、

番太　ヤア、いつの間にか、火事があるのか〳〵、
龜右　エヽ何を寢ぼけて、居やアがるのだ。
番太　こいつア大變、しくじり道具だ。

トあわてゝ屋體の內より、太鼓を出し舞臺より花道へ出をかけて、うろ〳〵歩く。此うち皆々支度をなし。

辰五　サア、やッつけろ。

ト　これにて賑かな合方へ、やたい囃子と半鐘をかぶせ、花道の揚幕にては、角力太鼓になり、皆々きやりにて花道を勇ましくはひる。番太郎あわてゝ梯子を昇り、あたりを見まはし、又おりようとして二三段上より轉げ落ち、腰を打ちし思入にて撫でながら眞中へ這ひ出る。こゝへ上手の圍ひの入口より、町方同心供をつれ、芝の家主兩人附添ひ出て來り、

家一　コリヤ／＼杢藏、今すつたのは、どこに火事があるのだ。

家二　サア、どこに見えるのだ／＼。（トこれにて杢藏またびつくりなし、）

番太　アノ火事々々／＼、火事は今の組合の衆達が、あゝちゝゝゝゝ。

ト　あわてゝ口がきけぬ思入。此うち所々にて半鐘を打つ、同心聞耳を立て、

同心　今往來を通りかゝりしゆゑ、とりあへずまゐつたが、其方は何を見當に出をかけた、いづれに出火があるのだ。

番太　ヘイ／＼、何あの仕……事……シ……。

ト　どもりながら答へる。

同心　もはや諸方で打ち出した樣子、コリヤ町役人ども、この番人を自身番へつれてまゐれ。

番太　エヽ、何もわたくしは、悪いことはいたしませぬ。

同心　エヽ、出火もないに出をかけたが悪いのだ。それ引きずつてまゐれ。

番太　ヤ、こいつはたまらぬ。

ト逃げにかゝるを同心引きずる、十手にて打つ、これにて杢藏びつくりして、尻もちをつくを道具がはりの知らせ、家主兩人にて、杢藏の手をとり引立てる、此もやう早き合方、半鐘の音にて此道具廻る。

本舞臺一面角力小屋の前側、眞中くゞり戸を開き、此向う土俵の中遠見、小屋の前側八日目取組の張出し、上下櫓の立木。すべて神明境内角力小屋の體。木戸の眞中に琉球疊を七八疊重ね、此上に九龍山鉢卷襷だすき尻はしをりにて居る　同じく序幕の勇野、荒浪に波の花と四人のとりてき、其外力士大童山、いづれも鉢卷襷だすき、竹槍、丸太を持ち立ちかゝり居る。此見得賑やかな合方へ理天をかぶせ道具留る。

とり一　呼出しの音松が、日蔭町で鳶の者につきあたられた上ぶんなぐられ、ほう／＼の體で歸つて來ましたが、

二　聞けば日蔭町ばかりでなく、大門から片門前の方も、いつぱい詰めたと聞きましたが。

三　向うのやつらもこゝは持場所、負けては顔にかゝはること、

四　一生懸命やツつけるだらうが、何だか心が勇み立つて、こんな面白いことはないわえ。

浪の　面白いことは面白いが、向うはめ組が總出だらうが、こつちは若い手合ばかり、しつかりせんぢやいかんぜ。

九龍　火事場ならば知らぬこと、たゞ腕づくでたゝき合ふなら、向うの相手が五十人に角力が一人宛にしても、めつたに負けることぢやアない。

勇野　裏手へ廻つた四ツ車關に、誰か外に居るだらうの。

荒浪　ヲヽ、居るとも〳〵、花車に瀧の音、手車石に大綱關、其外藤島の部屋のものが十六七人廻つてゐるわい。

團子　おらア國で猪狩の時に、けだものゝ中へ飛びこんで、ばらがきにあばれたことがあつたが、それから見りやア人間ばかり、どんなやつが來ようとも熊や猪の料簡であばれりやア負けはせぬわい。

九龍　勸進元や世話役に迷惑かけてはならぬから、早く退いてくだせえとはねて早々たのんだが、どうだモウいんだかの。

大童　いぬにはいんだが、ことによつたら顏役をたのみに、行つたかも知れぬわい。

トやはり右の鳴物、バタ〱にて、花道より力士一人走り出來り、

力士　ヲイ〱闇取茶、今鳶の者が、神明町と日蔭町で勢揃ひをして、モウこゝへやつて來るから油斷しては居られませぬぞよ。

勇野　ムヽ、それぢやアこゝへ。

皆々　やつて來るとか。

大童　今がた裏の四ツ車にも、小屋の竹をひつこぬいて、竹槍にして渡しておいたから、來たら槍玉にあげてやれよ。

皆々　ヲイ。

九龍　手まへは小屋の裏手へまはつて、四ツ車にいうてくれ。

力士　合點だ〱。

トカ士上手へはひる。此うち花道の揚幕の内にて、きやりの聲する。これにて皆々きつとなり、

荒浪　サア野郎ども、向うから來るぞ。

皆々　ヲヽイ、合點ぢや。

九龍　待て〳〵。みんなよう聞いておけ、若し鳶の者がこゝへ來ても、こつちで先へ手は出すな。先から出したらやッつけろよ。

皆々　ヲヽイ。

九龍　よう、しつかりせえ。

皆々　ヲヽイ。

ト これを合方、やたい囃子へ半鐘をかぶせ、花道よりバタ〳〵にて、鳶大勢の仕出しばら〳〵逃げて出て來り、上下へ走りはひる。續いていぜんの辰五郎先に、皆々走り出て來り、直ぐ舞臺にてごつちやになり、立廻つて九龍山上手に柱の折れを持ち、辰五郎下手に鳶口をかまへ、兩人きつと見得、誂への合方になり、

九龍　ヲ、辰五郎か、よくもおぬしは忘れずに、けふ仕返しに出てうせたな。

辰五　そりやアこつちでいふこッた。総身へ智慧がまはりかねる、手前達こそ忘れたらうと、はねるを待つて押して來た所も芝の宮の内、角力と火消の腕くらべ、一ばん勝負をしにやアならねえ。

九龍　大きなごたくをまき出したな。先づわれから先へ腦天を、ぶちのめして見せるぞよ。

辰五　生意気なことをいやアがるな。
九龍　野郎どもたゝきのめせ。
辰五　ソレ、やツつけろ。
蔦皆々　合點だ。

ト双方よりうつてかゝり、ちよつと立廻つてきつと見得。これより跳への鳴物へ半鐘と出の太鼓をかぶせ、一ヶ所でなく舞臺と兩花道と別れて何ケ所にても立廻り、此うち辰五郎、九龍山の肩先へ鉈を打込む、これと一緒に九龍山柱にて辰五郎の胸をつく、これにて双方たぢ〳〵となり、仰向けに、やけに引くりかへる。皆々びつくりなして立寄り、上下へ別れ介抱する。これにて九龍山の肩先血にじみ、兩人苦痛に居せず又立寄り打合ひ、トゞ辰五郎力士と立廻りながら花道へはひる。九龍山蔦の者と立廻り、知らせなしに此道具廻る。

本舞臺少し前へ出して瓦屋根、九尺床、店の裏側、三間ほどずつと下手朱塗りの末社二軒、此間松の立木向ふ境内の向ふ側を見たる中遠見。すべて社内手遊屋裏通りの體。いぜんの鳴物にて道具留る。トバタ〳〵になり、東の揚幕より辰五郎先に、蔦の者大ぜい階子をかつぎ出て来り、屋根へかけて皆々屋根へ昇り、瓦をめくり後ろの境内へ投げる。うしろにてわや〳〵人聲する。よきほどに知らせなしに此道具廻る。

本舞臺正面神明社の中遠見、上手いぜんの店の前側、下手末社何箇も並び、すべて前の表を見たる道具にて納まる。と向ふバタ〳〵になり、四ツ車眉間を韓紅になし、これを鉢卷にて結へ、細だすき一本ざしにて竹階子を持ち、藤松、文次、紫次、長次郎、鳶口にて立廻り出て來り、直ぐ舞臺へ來り立廻つてきつと見得、三味線入り角力太鼓になり、四つ車皆々を相手に立廻りあつて、上手へ追つて行く、此時花道の揚幕より、いぜんのとりてき六人、鳶の者大ぜいと立廻りながら出て來り、ちよつと立廻つてとりてきは鳶の者に打立てられ、上手へ逃げて行くを、鳶は追つて行く。こゝへ上手より辰五郎、鳶口にて出て來り、舞臺へ押し戻し、立廻つてきつと見得、誂への鳴物になり、辰五郎、四ツ車へ皆々からみ立廻りあつて、こゝへ上手より大童山、荒瀧、兎野、鳶の者と立廻りながら出て來り、これにて力士上手に、鳶の者下手に分れきつとなる。バタ〳〵になり、花道より三幕目の炊出しの若い者三人、長提灯をかざし先に立ち、あとより喜三郎羽織の上へ法被を二枚重ね、一本ざし足袋はだしにて走り出て來り、此中へはひる。

喜三　炊出し(たきだ)の喜三郎(きさぶらう)だ。待(ま)つてくれ〳〵。(ト辰五郎喜三郎を見て)

辰五　ヲヽ、數寄屋川岸(すきやがし)か。

四車　誰(だれ)が來(こ)やうとかまふものか。

皆々　たゝきしめろ〳〵。

喜三　サア殺すなら、おれから先へやつてくれ。（ト舞臺の眞中へあぐらをかき、）サア殺せ。コウ喜三郎は殺してもいゝが、此法被へ疵でもつくと、双方ともに其分ぢやア濟まねえぞ。

皆々　ヱヽ。

喜三　コウよく聞け、みんな氣の立つて居るのはもつともだが、是を見て物を言へ。

ト着て居る法被を脫ぎ、

ヤイ、提灯を出さねえか、ヱヽ、震へるない。

若者　ヘイ、ナニ、震へやアしません。

トこれにて若い者あたりを見廻し、氣味の惡き思入にて、喜三郎の前へ提灯を出す。

喜三　こりやア御月番の町奉行、根岸肥前守さまのお印だぞ。しかもこりやア町方だらう。

ト下手の鳶の者へ思入。

こりやア寺社御奉行松平右京之亮さまのお印だぞ。力士は寺社の御掛りとは手前達は知つて居るだらう、サ、どつちも掛りの奉行職、印へ對して止まるか、但しはこれにはかまはねえか、サア〱〱、おれはたゞの野郎だが、よも此印にはかなふめえが。

トきつと思入。皆々顏見合せちつとなる。花道よりバタ〱になり、いぜんの龜右衛門走り出て來

り。

亀右　御出役だぜ〳〵。

皆々　エヽ。（ト此うち舞臺へ來り、）

亀右　ヲイ〳〵。みんな聞きねえよ、今神明町の自身番へ御町と寺社の兩奉行が、御出役になつて、拾ひあげになるぞ。

皆々　エヽ。

喜三　サアうか〳〵しちや居られねえ、まづ喧嘩はこれまでに、此の喜三郎に預けてくれるか、双方返事をきかしてくんねえ。

辰五　ムヽ、命がけで飛びこんだ、數寄屋川岸の詞を立て、おれはお前に任さうが、さうして相手の、

萬皆々　角力の方は。

四車　みす〳〵寺社の御出役と、聞いちやア御上へ濟まねえから。

大童　こりや仲人へ。

角力皆々　預けようかえ。

喜三　それぢやアおれが案内して、
藤松　双方一緒に、
皆々　訴へようか。
辰五　ムヽ。（トうなづくを、木の頭。）
神妙にしろよ。

トこの引張りよろしく、皆々立上る。聖天の入りし賑かな合方にて、

ひやうし　幕

め組の喧嘩（終り）

三人片輪（さんにんかたわ）

三人片輪（淨瑠璃、三人片——輪一幕）

船岡長者廣間の場

長唄囃子連中
常磐津連中

役名　躄、太郎介。盲、牛之丞。主人、船岡主馬。太郎冠者。啞女、まきの。腰元松尾。同、貴船。

本舞臺正面銀地へ松の畫の襖。上手折廻し、同じく竹の畫の銀襖。下手の襖、畫心に四尺、橋懸りと見たる更紗の暖簾口　この下手常磐津の淨瑠璃臺。紅白の段幕を掛け、すべて京の都、船岡長者廣間の體。一セイにて幕あく。と橋懸りの暖簾口より、船岡長者、袴小さ刀にて、十間の扇を持ち出て來り、舞臺眞中に立身にて、

主人　罷り出でたる者は、當洛中に住ひいたす、無間主馬と申す者でござる。其許存ずる仔細あつて、片輪者を數多抱へようと存ずる。（ト少し下手へ向ひ、）コリヤ、太郎冠者はをるか。

ト揚幕の内にて、

太郎　ハアーー。

ト暖簾口より、太郎冠者肩衣、半袴にて出て來り、下手に手をつかへ、

御前に候。

主人　コリヤ、最前女子兩人に申付けたる、高札を見に參つたか。

太郎　疾くまゐりましたれば、最早程なう戻られませう。

主人　然らば是にて相待ち申さん。

ト太郎冠者上手へ具桶を直し、主人これへかける。この時知らせにつき、下手の段幕を切つて落す。こゝに常磐津連中上下にて居並び、浄瑠璃になる。

〽薄曇り、空も一つの花見月、連れ立つ野邊の道草に、二人手に手を鳥鐘のいと睦じさ豐さは、富貴の家につかふ女や、いそ〳〵として戻り來る。

トこの内花道より、腰元松尾同貴船の兩人、京風の島田かつら、中振袖紺土佐の日傘を持ち出て來

り、花道にて振りあつて舞臺へ來り、下手に手をつかへ、

松尾
貴船　唯今戻りましてござります。

主人　おことらに申付けたる片輪者、抱ようと存ずる、高札は建てありしか。

松尾　都の辻々檢分いたせしに、悉く高札を建て、片輪者お抱へと記しあり。

貴船　洛中の人々には、珍しき立札と、皆打寄りてをりました。

主人　それは悦ばしや。追つけ片輪者參るであらう。

〽梅が香や、のつと日の出る山路には、人より先へ薫りはすれど、さて櫻花山吹の、その美しさどこへやら、見えぬ盲目の垣のぞき、耳は人より早咲きに、便り求めて歩きより、

トこの内花道より盲目半之丞、水衣、半袴、座頭々巾、竹の杖にて出て來り、花道にて振りあつて、舞臺へ來り、

盲　物申う。

主人　表に案内がある。

ト調べの入りし賑かな合方になり、松尾下手へ行く。

松尾　どなたでござりますな。

盲　私は高札の表に附いたる片輪者のうち、即ち座頭でござるが、どうぞ御主人にお取次ぎを願ひたい。

トこれにて松尾主人の前へ來り、

松尾　お聞き遊ばしましたか、座頭がまひりました。

主人　オヽそれは重疊、こちらへ通せ。

松尾　ハアー―（ト下手へ來り、）ずつとこれへお通りあれ。

主人　座頭には高札の表について參られしか。

ト松尾手をとり、よき所へ下にゐる。

盲　いかにも左樣、どうぞお抱へ下されたし。

主人　それは此方望む處、異議なく抱へ遣はさん。シテわごりよは產れつきの盲目か、又は中年の盲目かナ。

盲　ハイ、この盲目になりましたは。

〽京の町にていつかどの、米を商ふ物持も、慾に目のなき桝目にて、人の眼

を晦ませし、その種蒔きの報い来て、忽ち曇る眞の闇、これはと驚き歩けども、杖突きのゝ字に歩きかね、心の月は晴るれども、晴れぬこの身の因果者。

トよろしく振りあつて、

これに懲りてその後は、すつかり改心いたしました。

〽雨持つ空にうつ〳〵と、唯うつむいてゐたりける。折柄向うへたはれ女が三十二相揃へども、揃はぬ襟に札かけて、唖の看板押附けに、便る軒端も縁のはし。

トこの内花道より唖女、かつしき、かいどり、端折り、襟に唖と記せし黒塗りの木札を掛け、さゝら一本持ち出て来り、花道にて振りあつて、舞臺へ来り、下手にてさゝらを採む。貴船下手へ来り、

貴船　どなたでござりますナ。

唖女　ワア――。

ト木具を指し、口がきけぬといふこなし。貴船こちらへ来り、

貴船　唖の女子がまゐつてござります。

主人　大方それも高札を見て、尋ねて參つたものであらう。こちらへ通せ。

貴船　ハア――。

ト下手へ行き、唖の手をとり案内して、主人の前へ來る。唖は手眞似にて、高札があつて、それを見て此處へ來たから、頼むといふこなしにて、頻りに辭儀をする。

主人　女子の身にて不便な事ぢや。いかにも抱へて遣はす。コリヤ、貴船。身の上を聞いて見やれ。

貴船　ハア――。（ト指にて下へ書きながら、）お前が、お身の上は。どうぢやいな。

唖女　ハア――。（ト泣伏す、）

〽そもやわたしが身の上は、あの島原で傾城の、其名高尾の山ならで、登る客衆を口先に、まろめておいて呼び通す、その口車廻りよく、深みへはめし報いにて今は因果なワア、アヽ、行末は人を騙せし櫨紅葉。

トこの内盲人を客につかひ、太郎冠者を禿にして、よろしく振りあつて納まる。

ワア〳〵。

〽推量してとうつむけば、

ト涙を拭ふ。主人扇にて書きながら、

主人　いかにも不便なものぢや。この上は心を改め、行末當家に仕へてゐよ。

啞女　ワア〳〵。（トロの利けぬといふこなし。）

へ嵐山から飛んで來る、烏羽根の番ひが羨まし。その翼には引きかへて、躄
近所々々お近所近所、心は急けど捗らず、やう〳〵に進み來て、

トこの内花道より躄太郎介、半袴腰帯にて、兩手へ足駄を持ち、ゐざりながら出て來り、花道にて向うだと心附き、嬉しき思入にて、早く行かうとして腰を立て、又倒れ、悔し泣きに泣く振りあつて舞臺へ來り、

躄　案内申さう。

主人　ソレ、又片輪が參つたと見える。（ト松尾下手へ行き、躄を見てふき出し、こちらへ來り、）

松尾　今度は躄がまゐりました。

主人　何でも片輪でさへあればよい。これへ呼べ〳〵。（ト松尾下手へ行き、）

松尾　イザ、こなたへ通られよ。

躄　ハツ、忝や〳〵。（トよき所までゐざつてはひり、辭儀をして、）私は高札の表について參つた

ろ聾でございます。お召抱へ下さらば、この上なき仕合せにございます。

主人　イヤ、抱へようとも〳〵。シテ、産れつきの聾か、又中年にて聾になりしか。

聾　ハツ。仔細申すも、涙の種。

ヘナ 過ぎし昔は肩衣に、鎗一筋の身なりしも、曲る心に身を持崩し、親の異見のうるさしと、腹立紛れ蹴かへせし、報いは忽ちこの姿。

トこの内ゐざりにて、よろしく振りあつて納まり、

天の御罰の恐ろしく、てんと改心いたしました。

ヘみ 身の行末のあぢきなさ、語るを聞いて實にもと思ひ、

主人　扨も〳〵、不仕合の者共ぢや。左樣に改心いたす上は、性は善なる人心。よい〳〵今日より召抱へるぞよ。

聾　それは忝や。偏にお助け下さりませ。

主人　わごりよ達の身の上を承り、われも不便彌まさり、思はず貰ひ泣をいたした。かく此方に抱へる上は、申付ける事こそあり。某四五日泊り掛けにて、西山の館まで行かねばならぬが、跡は斯くの如く召使ばかりぢや。それに三人とも健忘の病あつて、見る事聞く事直きに忘るゝ

によつて、決して頼みにならぬほどに、其方等に番をさせねばならぬが、先づいつち先へ抱へたる座頭に聞くが、番を申付かつたら、何として守護いたすぞ。

盲　私は御覧の如く皆目見えませぬが、かんは至つてよろしうござるので、蟻の匍ふ音までよう解りますれば、もし盗人などはひらば、必ず人に知らせますでござる。

主人　ム、よし／＼。シテ、唖の女は如何ぢやぞ。（トいへども黙つてゐる故、）イヤ、これは唖ぢやによつて、返事をせなんだか。

ト唖を呼び、盲目達に大小さして、土蔵へ賊が来て、金を取つたらどうすると聞く真似をする。唖立上り、盲の杖を持つて太刀を遣ふ振り。

イヤ、長刀を心得をるとか。ム、よい／＼。シテ、躄は何を心得をるぞ。

躄　私は十三束三つ伏せの矢に、五人張りの強弓を引きます。弓の大名人でござれば、賊が来らば射落してお目にかけます。

主人　成程、弓の大名人とか。ム、、これは躄でも差支なく出来る事ぢや。ム、、先づこれでよし／＼。

〽所持の合鍵とりいだし、（ト懐より木札の附いたる鍵を出し、）

然らば、わごりよ達に申付けるは、それがし帰宅いたすまで、盲には宝物蔵の鍵を預け

るぞ。

盲　ハツ、畏つてござる。

主人　又啞には酒藏の鍵を預けるぞ。イヤ、これはいかな事。啞であつたか。コリヤ〳〵。

ト手眞似にて酒のはひりゐる藏の鍵を預けるから、氣を附けろといふこなし。

啞女　ワア。（トうなづき鍵を受取る。）

主人　次は躄ぢやナ。其方には、錢藏の鍵を預けるぞ。

躄　ハツ、畏つてござる。（ト銘々鍵を押頂き、懐中する。）

主人　斯くの如くおことらに鍵を預け、この上申置く事は。

〽はや算ふれば三年後、風雨烈しき闇の夜に、見越の松を足代となし、忍び入つたる數多の盜賊、寶藏目懸けて入り込みしが、シヤ小賢しと身を固めエヽヤアオヽと討つて出でしが、賊は木の葉の散る如く、ばら〳〵ぱつと逃げ散つたり。

トこの内主人物語る模樣あつて、

必らず心を付けられよ。

躄　お留守は、お氣遣ひなされますな。

盲聾　やがてお歸りなされませ。

主人　心得た。

〽胸に一物艸岡は、西山指して出でゝ行く。

トこの内主人立上り、腰元にちよつと呑込ませる思入あつて　下手へはひる。女形三人は上手襖の襖へはひる。

〽後に三人は愼んで、彼方此方を打守り、ほつと一と息。

トこの内盲はずつと上手、躄は眞中、啞はずつと下手にて、澄まして四邊を窺ひ、

盲　さても〳〵、目の縁がいたく懈うなつてまゐつた。これはチト眼を開いて、草臥を休めてくれう。(ト両眼を開き、見物を見て、)ア、よい心地や。今日御入來の皆様のお顔が見えて、このやうな、清々いたした事はござらぬ。

啞女　ア、さても〳〵。久々にて口を利いたら、咽の道が、清々としました。オ、しんどやなア。

ト唇を甜めるこなし

躄　さても〳〵、足がメリ〳〵いたいた。ヨ、どつこいしよ。ア、よい心地や。ぐつと延ばいた處

は、極樂や〱。

〽互に顔を見合せて、（トこれにて三人思はず顔見合せて、）

三人　ハヽ、ハヽ、ハヽヽヽヽヽ。（ト大笑ひに笑ひ、）

躄　何ぢや、半之丞殿に槇野殿であつたか。

盲唖　太郎介殿か。

三人　ハヽヽヽ。イヤ、これで安心した。

〽あたり憚る者もなく、打寛いで坐を崩し、（ト三人眞中へ打寄る。賑かな合方になり、）

盲　太郎介殿は、何故當家へ抱へられたぞ。

躄　されば、貴樣も知つての通り、不仕合せが續いたによつて、高札を見て片輪を思ひつき、ゐざつてゐて喰はうと思うて、躄でまゐつた。シテ貴樣は。

盲　わしも一生寢てゐて喰はうと、盲になつてまゐつた。

唖女　又わしは長の間お喋べりで喋べり草臥れたさかい、唖になつて來たわいなア。

躄　先づ四五日戻られんというたから、鬼の留守に洗濯とやら、ゆる〳〵樂をいたさうではないか。

盲　オヽその事ぢや。それによい折にはよいもので、當家の召使共は、健忘の病持ちといへば、

啞女　何をせうと直ぐ忘れてしまふから、これも安心ぢや、何にいたせ、此處へ呼んで樣子を見ようではござんせぬか。

ト手を打つ、上手の襖より、以前の松尾、貴船、太郎冠者出來り手をつかへ、

松尾　お客樣、ようお出で、

三人　遊ばしました。（ト三人不審の思入あつて、）

躄　これは面妖な。コレ、お客ではござらぬ。この三人を知らぬのか。

貴船　一向に、

皆々　存じませぬ。

盲　イヤ、いよ／＼妙ぢや。モシ、我々三人は、御當家へ抱へられての、新參でござる。

貴船　左樣なことに、

皆々　一向に存じませぬ。

啞　それは仕合せ、イヤナニ、それぢやによつて御主人が、召仕ばかりぢや、頼むとおつしやつたのぢや。

躄　アヽ、いよ／＼これで、

三人　安心ぢやな。（トこの時太郎冠者不意に立上り）
太郎　アヽ、思ひ出した。
盲　エヽ、びつくりした。それではわしらを、思ひ出したか。
太郎　イエ〳〵、思ひ出したは、都の巷。
〽四方の御贔屓打集ひ、都へ花の咲き満らし、其の入札の限りなく、千萬億の數々は、惠も深き徳の海。（ト都新聞投票の禮の振りあつて納まる）
盲　成程、それは都にて大評判のおぬしの噂。身にも應ぜぬ事であつたが、
瞽　御贔屓下さる入札は、わしらも共々何れも樣へ。
三人　御禮申上げまする。（太郎冠者列なり一統辭儀をする。）
啞女　いよ〳〵これで安心なれば、銘々土藏の錠を明け、命の洗濯しようぢやないかえ。
瞽　オヽよい〳〵。コレ女子衆、持參の酒を開くによつて、酒盛道具を貸して下され。
松尾　酒盛道具は、
貴船 松尾　何になされますナ。
瞽　ハテ、今いうた持參の酒を、これにてあけうと存じて。

松尾　そのやうな事、

松尾
貫船　仰せありしか。

〽不審顔にて腰元は、小首かたげて出て行く。（ト忘れたるこなしにて、考へ〳〵上手の棲へはひる。）

瞽　イヤうまい〳〵。今いうた事今忘れるとは、主人が戻るとも大丈夫。

盲　されば我等は西藏より、数多の寶物取出し、

唖女　わたしは預かる酒藏より。

瞽　又錢藏より錢を出し、

盲　数盃傾けその上にて、

唖女　寶を持つて、

三人　遊山と出掛けう。

〽一人合點二人三人、藏前さして、

うまいぞ〳〵。

〽入りにけふ。

ト主人摺り足にて、下手暖簾口へはひる。この時正面の襖を左右へ開き、向う雛段にて長唄連中居並び、これより上下掛合になる。

唄〽見渡せば、嵯峨野につゞく嵐山、春の景色は九重の、雲井に近き洛中に、ここに豊な一構へ。浄るり〽笑顔こぼるゝ人々は、誰に遠慮も長廊下、運ぶ廊間に座を構へ、

トこの内下手より盲人臺附の枝珊瑚珠を持ち、躄は臺に載せし錦の袋を、重さうに持ち、唖車の臺附の上へ酒の瓶を載せ、綱にて曳き出て來り、よき所へ直す。上手の襖より、松尾三方に大杯を載せ、これへ桃色の房附の切をかけ、貴船長柄の杓子を持ち出て、よき所へ置く。

唖女　酒宴の興に御舞ひさぶらへ。

トこれにて松尾貴船扇を持ち、前へ出て、

浄るり〽長閑さに、矢走へ歸る眞帆片帆、勢田の夕照山影に、三井の晩鐘音も暮り、唄〽はや唐崎の夜の雨、晴れ間を松の石山に、月待つ宵の樂しみは、

浄るり〽ほんにあはづに歸らりよか。

トこの内兩人扇をつかひ、八景の振りよろしくあつて、この時忘れたるこなしにて、ぢつと立上る。

盲　ア、、健忘で後は忘れたか。

ト肩を叩く　これにて思ひ出せしこなしにて、早き振りになり、

〽堅田へ落つる　雁の、ちら〳〵ぱつと立つ浪に、〽降り來る比良の暮雪の山々は、名にし近江の八つの景。

トこの内よろしくあつて納まる　三人の片輪はこの間拍子にて瓶の酒を杯につぎ、かはる〴〵酒を呑み、追々醉の廻りしこなしにて、

盲　ア、よい心持になつてまゐつた、大層呑口のよい酒でござるの。

躄　それはよい筈でござる。これは當時有名の、石崎の澤の鶴と申す酒でござる。

啞女　石崎のお酒が、この酒藏にあらうとは、この鍵番も知らなんだ。

躄　何となく、氣が浮き〳〵いたいて參つた。

ト躄手拍子を打ちながら、

〽まだ花の、春は清水のたゞ頼め、頼母しき春も千々の花盛り。

ト謡にて躄瑠璃珠の臺を持ち、立たうとして醉つて立ちかね、躄にてよろしく舞ふ　啞浮れ出し、

浄るり　へいとし若衆に小鼓は、締めつ弛めつ弛めつ締めつ、チ、タツポ。へ鳴るか鳴らぬか調べの糸の、解けぬ思ひの縁の端。

ト袋の寶物を鼓につかひよろしくある、盲杖を金剛杖にして前へ出て、

うたやま　へ山から下りる小山伏。浄るり　へ腰に法螺貝お手に珠數、御客僧は受け給ふ、兜巾越しに物言はう。へ功力通じて有難や。

ト盲人祈りの振りあつて納まる。

うた　へこれは近頃評判の、動物園に一構ひ、熱帯地方の誼とて、隣りづからの象見舞。

トこの内松尾かいどりをすつぽりかぶり、扇を鼻にして象の振りにて、倒れある盲人を起す。これにて盲人桃色の件の襦袢をかぶり杓子を持ち、瓶の側へ起き上り、猩々の心得。

浄るりしやうぐ　へ猩々眠氣にうつとりと、起されて見る瓶の酒。へ下戸は知らぬが醉醒めの、水にはあらで石崎の、澤の鶴とて一本生。浄るりよ　へ醉うたく上野の山で、寒さ凌ぐは、浄るりさけ　へ酒の蔭。

ト猩々の振りよろしくあつて、三人ひよろくして其儘皆々寐る　松尾貴船思入あつて、三人へ三方、

杓子、車附の瓶の薬を紐にて腰へ結びつけ、

松尾　健忘といひて心を許させ、様子を見たる二人の振舞。

貴船　お庭口より忍び出で、御主人へこの事を。

兩人　さうぢや／＼。

〽主命重きかしづきは、支度とり／＼走り行く。

ト橋がゝりへはひる。

〽引違へて戻り來る、主人は門に彳みて、

ト下手より以前の主人出て來り、

主人　ハテ心得ぬ事である。唯今戻りがけ、土藏の戸前を見廻りたるに、錠前が明いてゐる。（ト聞耳立て、）これはいかな事、酒藏の瓶を引出し、正體なき有樣。ハヽア、かねて腰元共に申付けおいたが、我許へ知らせにでも參つたか。よし／＼、一つ脅してくれう。（ト有合ふ杖をとつて、トン／＼と叩き、）アノ、こゝな、大盜人め。

〽梢をおろす夜嵐に、散るや木の葉の寄邊なく、

トこれにて三人目をさまし、主人を見てびつくりして慌てながら、盲人は唖になり、聾は盲にな

り、唖は聾になつて、

唖　これは、お踊りなされましたか〳〵。（トゐざつてくる〳〵廻る。）

主人　おのれは唖の癖に、口を利きをるか。

唖　エヽ。（トびつくりして唖になり。）ワア〳〵。

主人　ヤア、おのれ聾の癖に、盲になつたか。

聾　エヽ。（トびつくりしてゐざる。盲慌てゝ。）

盲　ワア〳〵。

主人　エヽ、おのれも盲目の癖に、唖になつたか。

盲　エヽ。（ト慌てゝ目を閉ぢる。）

主人　アノ、こゝな、大盗人め。やらぬぞ〳〵。

三人　これは、いかな事。

主人　やるまいぞ。

うた　〽濱松風にざんざめき、吹立て〳〵吹送る、追ひつ追はれつくる〳〵〳〵。

浄るり　〽巡る因果も一興の、納まる御代ぞ、双方　〽目出たけれ。

ト三人逃げにかゝると、紐にて結びつけたる品を引摺り逃げにくいを、主人追廻す。賑かな鳴物をかぶせ、追掛けよろしくあつて、

先づ今日はこれぎり。

ト日出度く打出し

三人片輪（終り）

皐月晴上野朝風

さつきばれうへの、あさかぜ

皐月晴上野朝風（上野戰爭――七幕）

上野山下袴腰の場
廣小路松源樓の場
池之端仲町裏の場

序幕

役名　酒井宰輔、金魚屋九郎兵衛、春日左衛門、田宮新八郎、佐藏伴次郎、歩兵大佛銅藏、同井之端左九郎、願人すちやらか三次、同のつぺり才六、齒抜き高井清介、高井の奴藤介、小代浦太。藝者京家の君勇、同あやめ家小花、同立花家小竹、同新柏家小榮、刀屋女房おはつ、同娘おかね、同下女おてつ、願人女房おもん、松源の女中○△、其他。

本舞臺下手より上手へ斜に石垣、此の上草土手。松の立木の葭簀。よき所に開帳札を澤山に立て、上下櫻の立木、ずつと上手は見世物小屋の横手にて見切り、此前床几の上へ太刀三本、齒拔きの道具、下手に床几二脚。すべて上野山下葭簀の體。齒拔の見世に高井清介、着附袴にて立身、下手に齒拔の小僧藤介扇を持ち、此下手に仕出し六人、友達娘四人見物してゐる。ずつと下手に、願人のつぺりオ六、吉原冠り着流しにて、三絃を彈き、すちやらか三次同じなりにて、木魚を打つてゐる。これを仕出し四人娘形三人程見物してゐる。この模樣見世物の鳴物にて幕あく。

清介　齒の拔けたるは、第一人相の妨げにいたしまして、これを其儘に捨て置く時は、幸ひも禍ひとなり、上運も不運と變るは、拔齒を其儘にいたして置きますゆゑ。甚だ不爲でござりますから、これは第一人の心掛でござります。

藤介　アイ〳〵、左樣でござい。

娘○　半時ほど前より立つてをりますが、まだ太刀を拔きませぬね。

娘△　お花見の人が多いから、直ぐ後へ人が立ちませうに。

娘□　早く拔いて見せればよいこと。

娘◎　待遠しうござんすナ。

清介　昔よりござりまする、長井兵助源水などゝは格外の違ひにして、手前方の齒の療治は、日本無類家傳でござります。もし虫齒でもお惱みのお方は、一つけ用ゐてお試しなさい。

藤介　アイ〱、左樣でござい。

三次　扨世の中は仲もよく、先づ其内で中なるものは、何であらうと尋ねて見たらば、お染久松藏の中、幡隨院長兵衛は駕籠の中、石川五右衛門は釜の中。

清介　しかし藥ばかり賣りましては、愛嬌がござりませぬから、居合拔をいたして御覽に入れます。

三次　お飯と杓子はお櫃の中、はしらと三つ葉は椀の中。

藤介　アイ〱、こちらでも御用とおつしやる。

三次
才六　すちやらかぽく〱。

才六　なだべこちやら〱。(ト上下にて爭ふ。)

清介　オイ〱、隣りに出たお仁、それでは邪魔をするといふものだ。ちつと靜かにしたがいゝ。

三次　お前方こそ遠慮して、ちつと小さくなるがいゝ。山崎町から出て來りやア、この山下は繩張内だ。

才六　長井兵助の僞物で、高井清介といふ胡魔化しもの。死んで地獄へ行つた時、齒より舌を拔かれ

なさんな。

藤介　オイ、人の生業の邪魔をして、胡麻化し歯抜とは何のこッた。玉井兵助の本家から附渡つて来たこの小僧、聞いては黙つてゐられねえ。

才六　聞いてゐられざア、どうともしろ。

ト此件り鳴物にて、才六三次、清介を目がけて打ちに掛るを、藤介飛び附く。ごつちやの立廻り。これにて見物の仕出し花道へ逃げる。この時揚幕より花見の仕出し六人、女形交りて逃げて出る。この後より歩兵大佛銅蔵、井之端左九郎、筒ッぽだん袋、紺足袋、麻裏草履、大小にて、壹升樽とこも縄に結びし折をさげ、金魚屋九郎兵衛金魚の荷を擔ぎ、この天秤棒を大佛銅蔵携へ、刀屋女房おはつ、着流し雪踏、同娘かね、着流し雪踏、同下女おてつ、小包を持ち、銅蔵左九郎酒に酔ひたるこなしにて、娘おかねの手を携へ出て来る。これにて見物又舞臺へ戻る。これにて皆々ごつちやになり、この内歩兵両人、願人歯抜を殴り倒し、皆々上下に別れる。見物衆は逃げてはひる。

銅蔵　わいらは皆相手だぞ。

左九　一人も共分には置かんぞ。

見○　飛んだ喧嘩に枝が咲き、後へも先へも動かれず、

見△　居合を見ようとしたばつかり、

見□　到頭掛り合に、

皆々　なりましたなア。

九郎　突當つたとおつしやりますが、金魚は唯今お得意先に、納めて參つた歸りがけ、この人込でござりましても、自由自在に除けられますから、決して打附けはいたしませぬ。

銅藏　ばかな事をいへ、慥に手前達が我々に突當つたに相違ない。

左九　手前の家はどこだ、サア、それを申せ。

九郎　サア、わたくしの宅は。

銅藏　目高金魚と呼び歩く、まだ時候には早いながら、大方立派な金魚屋で、出入り屋敷へ持つてまゐつた、戻りがけと見拔いたぞ。

左九　サア、早く家を申さんか。

九郎　サア、私の家はナ。

左九　言はれたきやア手前達を召連れ、唯今出逢つた松源へ行つて、聞いて見たら知れるであらう。

九郎　ア、モシ、松源様はお得意先。唯今金魚を納めたばかり。そんな御迷惑かけては相濟みませぬ。

銅藏　アヽ、扨は金魚の問屋だナ。これはなか〳〵物持だわえ。丁度よい、こゝへ連れて來た上さんも、一緒に屋敷へ連れて行く。齒拔も願人も引くるめ、皆引張つて行くとしよう。

皆々　エ。

てつ　そのお腹立は御尤もでござりますが、女子のことでござりますから、どうぞ御堪辨下さりまして、お見のがしを願ひます。

かね　それに此方から突當つたと申す譯ではござりませぬ。池の端から出て參つたを、あなた方お二人が、わざと此方へ突當り、

はつ　アヽコレ〳〵、さうではない。つい粗相したのぢやから、お詫してゐるのぢやわいの。

てつ　それでもあなた、あんまりゆゑ。

はつ　ハテ、默つてゐやいの。

ト制す。この内銅藏左九郎は樽の口より酒を吞みゐて、

銅藏　貴樣達は口を揃へ、へいつくバツタ同樣に、頻りと勘辨してくれと、あやまつてばかりゐるが、百萬陀羅申しても、一旦屋敷へ連れて行かねば、この儘には濟まさんぞ。

左九　ヤイ願人、酒がおつもりだ。どこぞそこらへ行つて、一升注いで貰つて來い。

三次　どうして、私共に一升などゝは。
左九　願人坊主にはよこすまいが、公儀の歩兵が申附けると、横柄に言つて行け。
三次　それでも値を遣らなくつては。
左九　錢には及ばぬ。たゞ持つて來い。
三次　それは御無理でござります。
銅藏　エヽ、早く取つて參らぬか。（トキツといふ。才六三次びつくりして）
両人　ヘイ、唯今行つてまゐります。
銅藏　待て／＼。一人は人質に、此處に殘つてをれ。
才六　ヘヽエ。（トこれにて是非なく才六殘り、三次樽を受取り、）
三次　アヽ、たゞ酒を呉れゝばよいが。（ト下手へはひる。）
銅藏　しつこしのねえ町人共だ。この位あたまを揃へてゐても、片ツ端から盲目ばかりだ。
左九　この間も廣徳寺前の山田屋で間違ひをした時、流石は芝居者だけあつて、酒肴で扱つたが。
銅藏　今日無禮をいたした奴等は、そこへ心附かぬとは、死人も同様な奴だナ。
トこれを聞き、九郎兵衛おけつ思入あつて、下手にてちよつと囁き、銅藏左九郎の傍へ來り

九郎　唯今あれにて失禮をいたしました人達が、一統お詫の印として、御酒のお肴を差上げますれば、どうぞそれでお屋敷へ、お連れなされまするのは。
皆々　御免なされて下さりませ。
銅藏　バカ申せ。酒の肴を出したくらゐで、これが料簡出來るものか。
かね　かゝさん、こりやどうしたらようござんせうナ。
銅藏　イヤ可愛らしい聲を出したナ。その聲を聞いては、皆の代りにこの娘を連れて參らう。
左九　コリヤよい思附きだ。オヽ幸ひ此處に大太刀がある。これを差して警固してまゐらう。（ト出し臺の上にある大太刀を差し、）都合三本で、市川流の梅王のやうだ。
銅藏　イヤよい事がある。今此處へ酒が來たら、この娘を山へ連れて參つて、酌をさせながら花見と致さう。
左九　それはよいが、此奴らを一緒に連れるは、却つて難儀ぢや。
銅藏　オヽ、幸ひ池の端の蓮玉に朋友がをつた。彼奴らに此奴を引渡し、君は花見の方へ來なさるがよい。
九郎　それではどうでも、お屋敷へ、

はつ　連れて行かれるので、

皆々　ござりまするか。

左九　サア、ぐづ〳〵せんで一緒に來んか。

ト注打になり、左九郎大太刀を差した儘、九郎兵衛清介の襟がみを取り、才六を先に立て、兩人を引ずりながら、下手へはひる。藤介心配なし、

藤介　モシ〳〵親方。見世が一人ぢやア始末がつきませぬよ。（ト下手へ行かうとするを、）

銅藏　始末がつかざア、勝手にしろ。

ト藤介を足蹴にする。これにて藤介びつくりして上手へ逃げてはひる。この内おはつおかね、おてつの三人は氣味の惡きこなしにて、

はつ　旦那樣へお願ひでござりますが、宿で連合が案じてをりませうから、どうぞお返しなされて下さりませ。

銅藏　歸りたい。勝手に歸れ。その代り娘は借りて行くぞ。（トおかねの手を取る。おかねワッと泣伏す、）何だ、泣き出したか。此奴ア妙だ。こゝが千兩といふ所だ。酒の來るまで待つてもゐられぬ。お袋、酒が來たら持つて來てくれ。ドレ、一足先へ花見としようか。

トおかれを引張り、立ちかゝるを、

はつ　アヽモシ、滅相な。これをお連れなされましては。

銅藏　エヽ、邪魔をいたすとぶつた斬るぞ。

ト[illegible]にて九郎兵衛、おはつ捨ゼリフにて留めるを銅藏振拂ひ、おかねを連れて上手へ行かうとする。矣へ上手より春日左衛門、割羽織、大小、中下駄にて鐵扇を持ち出て來り、この中へはひり、兩人を左へ、眞中へ來る。この間仕出しそこ〳〵に上下へ逃げてはひる。銅藏キッとなり、

銅藏　ヤア、何故往來の妨げするのだ。

左衛　何事かは存ぜぬが、女子を捉へて連れ行く樣子。見るに忍びず留めましたが、如何なる無禮を致せした。（トこれにて床几へかけ、）

銅藏　無禮といふのは此店にゐる、娘とお袋と見える女が、おれに突當つて無禮をしたから、唯今屋敷へ連れて行くのだ。

左衛　然らばこれにゐる者共は、皆詫びてゐるのでござるか。

銅藏　殘らず無禮をしましたのだ。

左衛　それに何で娘一人、無理に引立て、他の者にお構ひはござらぬな。

銅蔵　エ。

左衛　彼は子供も同様ぢやに、選りに選つて連れ行かるゝとは、粋狂なお人であるな。

トせゝら笑ふ。下手より三次一升樽をさげて出て來り、

三次　大きにお待遠様でございました。

銅蔵　太儀であつた。先刻から待ち兼ねてゐたのだ。

三次　旦那、どうしても酒をよこしませんから、歩兵様の御用だと申しましたら、この頃そんな事をいつて贋があると申しまして、よこしませんから、仕方なく自腹で買つて参りました。

銅蔵　オヽ、御苦労であつた。相手は助けやるから、勝手にこの男を引取るがよい。

三次　それは有難うございます。(トあたりを見廻り、)彼奴はどこへ参りました。

銅蔵　今連雀へ連れて参つた。あれへ行つて、勝手に連れて行け。

三次　何のこッた。此處にゐねえ位なら、この酒は買はねえものを、バカな目に逢ふものだ。

左衛　コリヤ、其方は何れの者だ。

三次　ヘイ、山崎町にをります願人でございますが、この旦那に無禮をしたといつて、到頭酒を買はされまして、なけなしのお銭を立替へました。

左衛　ナニ、酒を求めて參つた。武士たる者が、町人に酒の無心をいたすとは、さて〳〵法外千萬な事ぢや。

トこの内少し銅藏面目なきこなし。

左衛　コリヤ、幾ら出したか、身が取らすぞ。

三次　ヘイ。一升は一升でござりますが、代は安うござります。

左衛　どの位ぢや。遠慮なく申せ。

三次　實は三合ぶり拂ひまして、七文と五十でござります。

トこの内銅藏不審に思ひ、樽の重みを引いて、口から呑んでゐる。左衛門は錢入より二朱と錢を出し、

左衛　コリヤ一朱が二つに、錢が附いてゐるぞ、これを持つて早くまゐれ。

三次　エヽ、それではあなたが下さいますか。それは有難うござります。（ト三次金を受取り、）これでやう〳〵立前が埋つた。

左衛　重みは慥に一升あるが、これは滅法水ツぽい酒だな。

三次　實は三合酒を買つて、後は水を入れて來ました。

銅藏　ウヌ、人をバカにしやアがつたナ。

三次　エヽ、斬るなら斬つて見やアがれ。（ト言捨てゝ下手へ走りはひる。）

銅藏　エヽ、不屆きな奴め。何で逃がすものか。

ト辻打になり、銅藏負ばるる〳〵これをしほに、後追ひ掛けて下手へはひる。

左衛　よいしほにして逃げてきゐつたが、實に憎むべき奴ではあるわい。

ト合方になり、皆々下手にて手を突き、

はつ　どうなる事と存じましたに、あなたがお出でになり、娘が命が助かりました。

てつ　何とお禮を申しませうか、有難いことで、

兩人　ござりまする。

左衛　市中の取締は彰義隊の方々にて、町人に難儀を救ふる由、專ら噂高きゆゑ、御府内の警衞あれど、なか〳〵隅々まで行屆かぬゆゑ、かゝる輩の横行なすは、徳川家の御恥辱。目に餘らば懲らしてやれど、實に苦々しき事ぢやわえ。

ト　タ〳〵にて、下手より戸前の九郎兵衛、清介太刀を擔ぎ走り出て來り、左衛門を見てびつくりなし、

九郎　ヤ、また後釜が、

兩人　ござつたかな。

　　トギヨツとする。おはつ思入あつて、

はつ　アヽモシ、お案じには及びませぬ。このお方樣は、一人殘つた歩兵さんを、遠ざけて下さりました。娘のためには命の親、お救ひ下さつたのでござりまする。

九郎　オヽ左樣でござりましたか。實は私も三橋向うで命拾ひをして參りました。

左衞　扨は其方等も歩兵に出逢ひ、難儀をいたした者なるか。

九郎　ハイ、唯今揚出しの所まで參りますと、あなた方に似たお方が中へおはひり下さりまして、扱つて下さいましたが、一向に聞入れませず、實に憎い奴でござりました。

淸介　さう致しますと、二言三言いひ募る內、先の奴が刀の柄へ手を掛けたを、その旦那が扇にて急所を打つと、大層びつくりいたしました。

九郎　すると泡を喰ひまして、雲を霞と池の端の方へ、一目散に逃げてまゐりましたわえ。

はつ　そんなら此方衆も助かつたかい。シテそれは、何れのお方でござりましたナ。

九郎　それはこの頃彰義隊へはひつた天野八郎と申すお方、實に命の親でござりますわえ。（ト手を合

せ拜む。)

はつ　シテあなた様のお屋敷は、何れにゐらつしやりますか。お聞かせなされて下さりませ。

左衛　イヤ、身共らは當時浪人、どこと申して屋敷はござらぬ。

てつ　お宿にても構ひませぬ。いづれお禮に上りますれば、どうぞお教へ下さりませ。

左衛　禮などゝは無益な事。つまり斯やうな難儀を救ひ、公儀の恥辱を雪ぐのがやく

九郎　そんならこれぎりお禮さへ、

はつ　申上げられぬので、

皆々　ござりますか。

左衛　我目に掛る其時は、この末難儀は救うてやるぞよ。

（ト見世物の見物となり、左衛門下手へはひる。みな〳〵後を見送り、）

九郎　同じ人と生れても、人に難儀をかけるもあり、

はつ　又人の難儀を救ふもあり、

かね　十人寄れば十色とやら、

てつ　花さへ八重と一重あり、

清介　同じ武士にも刃金と鈍刀。

九郎　實に今のは刃金ぢやな。

ト感心せし思入。この時上手より藤介出て、

藤介　アイ〳〵、左樣でござい。

九郎　エヽ、びつくりした。（ト手拭で鼻を拭ふを道具替りのしらせ。）オヽ齒拔の小僧さんか。

トこの模樣よろしく、辻打にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺。上手眞心に九尺の床の間、交山の軸、置き花活けに山吹を入れ、この下四尺の地袋、續いて茶壁、上手一間二枚銀地光琳松の繪の襖。下手折廻し二階の廊下、椽廻り手摺、向ふ樹木の梢と二階家を見たる中遠見、すべて松源樓二階廣間の體。上手に酒井幸輔割羽織、袴、大小、小代浦太同じこしらへ、田宮新八郎同じなり、この三人上手に住ひ、次に以前の春日左衛門、佐藤作次郎、銘々吸物膳を控へ酒肴を出し、下女○△酌をなし、藝子君勇、小花三弦を彈き、小竹、小榮音頭を踊つてゐる。この見得、京の四季にて道具留まる。

ト藝者小竹、小榮振りあつて納まる。あと合方彈き流し、

新八　近頃は諸方にて踊りが流行いたすと聞いたが、今日圖らず數寄屋町の酌人の踊りを見ました

は、これも浦井氏のお心入、恐れ入つてござりまする。

峯福　それに今日座敷へ出でし、この若明は、當年の春京都より參りたる、江戸には珍らしき都の藝妓、これが各々がたへ御馳走でござる。

若明　まだ御當地馴れんさかい、ちよつとも御樣子が分りませぬから、よろしうお願ひ申します。

小花　若明さんが參りましたので、京の四季の本家本元、この頃はどちらの御座敷でも、四季が流行ものでござります。

浦太　久々にて浦井氏に拜顔を得ました上、殊の外酩酊いたしたが、とんと失念しましたが、何年振りでござらうナ。

峯福　それ程に長くもござるまいが、拙者はお目附を勤めしきり、絶えて世の中へ出ませぬ故、御同樣に長いやうでござる。

新八　浦井氏お下されし此眼前の繼娘に、一人として洩れもなく當樓へ來りしは、これも盡きせぬ奇縁といふもの。

左衞　何となく、元の將軍家へ歸りたるやうな心地がいたし、

伴次　大政返上前の料簡で、眞に今宵は過しまするて。

宰輔　御ゆつくりとお過し下さい。

トやはり右の合方にて、藝者酌をして、皆々酒を呑みゐる。この内下女再び出て來り、

女△　唯今店二階のお客様が、お邪魔とは存じますが、ちよつとお目通りいたしたいと申され、伺ひに出ましてござりまする。

作次　何人なるか、許しませうや。

宰輔　遠慮なく通すがよい。

女△　ハイ〳〵。

ト下手へはひる。みな〳〵酒盛よろしく、爰へ直ぐ女中△案内して、おはつおかねおてつの三人出て來り、

お連れ申して參りました。

はつ　誠に失禮ではござりますが、先程のお禮に出ましてござりまする。

左衛　オヽ、先刻のお女中でござつたか。ア、參らずともよいことに。

はつ　一命助かり安心いたし、ちよつと支度に當家へ立寄り、二階へ參りしその節に、お見掛け申しました。お禮を申さなくては濟みませぬゆゑ、ちよつと出ましてござりまする。

かれ　半程は一命をお救ひ下さりましたので、母も安心いたしました。
てつ　お供いたせし私共まで、有難いことで、
三人　ござりまする。
浦太　何か間違ひでもござつたかナ。
左衛　この内儀は山下にて歩兵に難儀を申し掛けられ、困却なしたを通り掛り、救つてやりました。
浦太　ムヽ、スリヤ噂に違はずして、歩兵が町を荒しますとナ。
新八　亂暴極まる致し方、新徴組の警固では、なか／＼防ぎゝれますまい。

ト宰領ずつとなつて、

宰領　事によつたら、我隊も。
浦太　エ、
宰領　イヤ、かく世の中が亂れては、必らずこれは運らん。
小花　そんなお話をお聞き申すと、何だか身の毛がよだつたやうで、夜のお座敷には出られませんね。
小竹　小花姐さん、お聞きなさい。一昨日の晩も車夫で、三人とか斬られましたとサ。

小榮　あれを轉つたお人は、ソレ何とかいふ下谷の方の劍術の先生だとさア。

新八　ナニ、下谷にゐる劍術の先生とは、ム、。（トちつと思入。）

左衛　京都の戰爭以來、實に世間が亂れたの。

新八　君勇はあの頃は、まだ上方にをつたかナ。

君勇　居つた所ではおまへん。日も忘れんが、去年の十二月九日であつたさかい。御所の御門のお固めを附けましたは、薩摩様に土州様、藝州様でおました。わたい大徳寺へお詣りの通りがけ、仰山感心しましたさかい、よう覺えてをりますわい。

小竹　姐さん、戰を見たのでござんすかえ。

君勇　ナニその時は戰などないけれど、みんなから筒袖に股引の仰山太いのを穿きよつて、長い刀を差したはつて、皮の足袋や紺の足袋に草履草鞋を穿きなはつて、よう塗つた笠を冠り、御門の門々にずらりと並びよつて、大砲小砲取り並べ、かういふ鹽梅に力んでゐなはつたが、實に禁裏様の御威光は、仰山なものであつたさかい、今に目に殘つてゐますわい。

小榮　その時分には、江戸の公方様は、御留守でござんしたが、彼方でござんしたかえ。

君勇　オ、彼方とも／＼。其時は公方様は二條のお城にゐなはつて、それから十二月十二日の晩大

阪へおたちなされたさかい、京の町は何か様子は分らんが、徳川様の御家來が、今にごてごて始まると、えらう騒ぎ立つて來ましたのサ。

小竹　ソリヤどつちが惡いのでござんせうね。

君勇　ソリヤわたい達には分らんが、わが故郷を褒めるぢやないが、都へ來たらどだい公方様は及びまへんナ。

（ト一同浮舟みな〳〵は、酒を呑みながら聞いてゐる）

はつ　私どもの生業は、徳川様のお蔭にて、これまで樂に世を送りましたが、唯今のやうなお話を承はると恐れ多く、何とも申上げやうがござりませぬ。

君勇　それは御尤もでおますが、京の者は徳川様で大きな難儀をしましたわいナ。

新八　將軍の爲に難儀をしたことは、それは如何なる事であつたナ。

君勇　サア、當年の春は[illegible]町では、逃げるの退くのといふ騒ぎ、しかも正月三日の日暮れに、大阪へお歸りなさつた公方様が、又東へお出でなさると定りますと、鳥羽と伏見へ關門をこさへ、そこでキッチリ留めたさかい、それからゴテ〳〵〳〵と到頭戰が始まつて、京にゐてさへ氣味惡うて、私や八瀬の里へ立退きましてござりまする。

小花　お上の御樣子は分らないが、何ぼ何だつて公方樣のお通り筋へ、關門を拵へるとは、あんまり酷いぢやアありませんか。

君勇　サア、それだつて普通のお供で行きなはつたら知らんこと、三萬とか軍人を連れて行きなさつたから惡うござんす。

てつ　それでも關門など出來たのは、何だか穩かでないと思ひますねえ。

君勇　あなた方、さういひなさるが、それから毎日戰があつて、七種の翌朝に、德川樣は大阪から紀州へ落ちられ、姿を變て、船でお江戸へ戻られたさかい、マア惡いは知れてをるナ。

小花　ソリヤ向うは禁裏樣ゆゑ、それで敵はないから逃げたのでござんせう。

君勇　イエ、阿呆らしい。惡いから逃げたのでござんす。

小花　イヽエ、謂はゞ御主人も同樣ゆゑ、わざとお立退きでござんしたらう。

君勇　イエ、そりやお前方の言ふのが嘘ぢや。

小花　イヽエ、德川樣が態とお立退きで、

三人　ござんすわいナ。

君勇　イヽエ、逃げたのに相違ないわいナ。

ト藝者爭ふ。この内宰輔は皆々を窺ふ思入。作次郎藝者達をとめて、

作次　コリヤ、ちと靜かにいたすがよい。君勇は京の産れに土地の肩を持つのも尤も、小花等當地の者は、江戸を褒めるは當然ぢや。

左衛　尤も人情の然らしむる所ぢやが、どちらが惡いと申すまでもなし、かく成行くも皆時節。最早双方申さぬが花ぢや。

君勇　ツイ暮から春へかけ騷ぎましたさかい、言募り、申譯がござりませぬ。

はつ　私も又お禮に上り、大きに長座をいたしました。

宰輔　唯今話を承はれば、徳川の爲に今日まで樂に暮せし刀屋の由、それほど將軍が有難いと思ひをるかの。

はつ　徳川樣のことなれば、御恩は山程ござりまする。

宰輔　ム、左樣か。シテ宅は何れぢや。

はつ　ハイ。御徒士町一丁目で、鎌倉由兵衛と申しまする。

宰輔　オヽ左樣か。（トちつと思入あつて、）又近日何か頼むであらう。

はつ　どうぞ、御用を願ひまする。左樣なれば何れも樣、これにて、」

三人　お暇仕りまする。

君勇　大きに失禮、

小竹
君勇　いたしました。

ト端唄の合方になり、女中案内して、おはつ以下三人下手へはひる。

君勇　つい都のお話に身がいつたので、仰山失禮いたしました。

小花　江戸は江戸の肩を持ち、もし負けたら、此方三人で言負かさうと思ひましたよ。

小竹　小花姐さんのお言ひなさる通り、公方樣が負けたと思ふと、

小葉　悔しくつて、

小竹
小葉　なりませぬわいなア。（トこれを皆々聞き、）

宰輔　ヤア潔い。これが誠の大和魂でござるなう。

ト皆々感心なす。爰へ女中燭臺を持ち出て來り、置く。

小花　自分の勝手にお喋べりをして、申譯がござりません。

君勇
小花　何ぞお唄ひなさいまし。（ト三味を取上げ調子を合せる。）

宰輔　コリヤ〳〵、チト此處で内談あれば、暫く下へ行つてゐてくりやれ。

小花　オヤ、左様でござりますかえ。それではよい時分に、
君勇 小花　お呼びなすつて下さりませ。
伴次　承知いたした。
君勇　そんなら下で、
三人　お待ち申してをりますわいなア。

ト流行唄になり、君勇以下三人下手へはひる。これにて左衛門、伴次跡を見送り、

左衛　彼等は遠慮いたしてござるが、
伴次　シテ、遠ざけられし、
皆々　その趣意は、
宰輔　久々にて拝顔を得し、各々方もお聞きならん。唯今女子が物語りし、鳥羽伏見の戦争より、御帰城あらせられし成行は、いかゞ思召しますぞ。
浦太　言ふに言はれぬ意味あれど、かく成り行きし事どもを、
新八　今日となり考ふれば、實に本意なき、
皆々　事でござる。

宰輔　御承知もありつらん。御勅使江戸へ入城ありて、宣旨へ添へし別紙の趣。

　　トこれにて宰輔切手水をなして居直り、懐中より書附を出す。皆々も下手にちつと傍向く。

「第一條。慶喜去ル十一月以來天朝を欺き奉り、剩へ兵刀を以て皇都を犯し連日錦旗へ發砲し、重罪たるに依り、追討として官軍差向けられ候處、段々眞實恭順謹愼の意を表し、謝罪申出で候に付、祖宗二百餘年治國の功業少からず、殊に水戸贈大納言、積年勤王の志業淺からず、旁々以て格別深厚の思召しあらせられ、左の條件實行相立ち候上は、寛典に處せられ、德川家名立て下され、水戸表へ退き、謹愼罷在るべき事。」「第二條。城明渡し、尾張藩へ相渡すべき事。」「第三條。軍艦銃砲を引渡し申すべし。追て相當差返さるべき事。」「第四條。城內住居の家臣共城外に引退き、謹愼罷在るべき事。」「第五條。慶喜叛謀相輔け申し候者重罪たるに依り、嚴科に處せらるべきの所、格別の寛典を以て相當の所置いたし、之を言上すべき事。」（ト書附を卷き納めながら、）この五箇條の儀御承知あられ、違背之なき段御受ありたり。文中に慶喜叛謀相輔け候者、重罪たるにより嚴科に處せらるゝと。御同樣に臣下なり、公は則ち主人なり、主を思へば嚴科に處すとは。

　　ト互ひに顔見合はせ、扇を膝につき、氣味合の思入。これを誂への合方になり、

左衛　將軍恭順謝罪の爲、東叡山の大悲院へ御閑居あらせられし時の、御心根を察し奉れば、假令嚴科に、

皆々　處せらるゝとも。

ト ぢつとなり俯向き、悲ひの思入。宰輔この様子を見遣り、

宰輔　これにて互ひの胸中も。（ト思入あつて、気をかへ〔）イヤ、座敷が大分しめつて参つた。藝子を呼んで飲直すと致さう。

ト 手を叩く。藝者お酌女中出て來り、

君勇　オヤ、もう御用濟みで、

皆々　ございますかえ。

新八　此方へまゐつて、酌をしてくりやれ。

ト 小花新八に酌をする。君勇は宰輔に酌をする。宰輔猪口を取上げ飲みかけ、床の軸へ思入あつて

宰輔　「南山に鼓打つて北山に舞ふ。」南山に鼓打つて北山に舞ふとは、面白いナ。

浦太　落款は深川の山で名高い、交山おやナ。

左衞 交山とは交はる山。
新八 山に交ろ、
伴次 南山の上野に鼓打つて。
宰輔 北山の陸奥に舞ふ。
新八 その北山は、
左衞 會津か。
伴次 新八 函館。
宰輔 イヤ、言はず語らず胸中が。
浦太 一つに合ふはこれも又、
左衞 盡す忠義は常磐木の、
伴次 十八公の松源に、
新八 酌みかはすとは深き緣。
宰輔 やがてぞ山に交はりて。
女皆 エ、

幸輔　又も酒宴を、（ト浦太と顔見合せるを道具替りのしらせ）聞くでござらうナ。

ト氣を替へる、この模様太鼓入りの座附唄にて、道具廻る。

本舞臺、正面不忍池、中島を見たる夜の中遠見。よき所に柳の立木、上手建仁寺垣、下手黒塀の見切り。すべて池の端仲町裏手の體。[illegible]すわつて上手の合方にて道具留る。と上手より薄ぎたなき才六、三味線を彈き、三次と倶に[illegible]一人、本釣を合せながら出て來り、

三次　けふは朝ッから附が惡いから、もういゝ加減にして歸ろとしようぜ。

才六　此處まで來たものだ。[illegible]しまで[illegible]やあしめえか。

○　[illegible]には[illegible]なるが、さう[illegible]れてたまるものか、[illegible]れるだけ運を見るがいゝ。

三次　所がけふは廣小路で、[illegible]に取りかゝつて、なけなしの[illegible]を取られたのだ。

○　おらア淺草へ行つてゐたから、ちつとも様子を知らなかつたが、[illegible]い目に逢つたナ。

三次　所が天の助けはあるもので、[illegible]屋に出てゐるお侍が、その[illegible]を救つてくれて、[illegible]の
お[illegible]が出してくれたから、先づ[illegible]は[illegible]つたが。

才六　まご／＼すると打つた[illegible]られ、こんな[illegible]な世の中はねえ。

○　お上のお取込が酷いので、今にも戰が始まるやうだが、役人衆も面喰つて、歩兵などを拵へたが、ちつとも爲になりやアしねえ。

三次　どうして爲になる所か、商人遊所場こちとらまで、上つたり大明神だ。

才六　おまけに毎晩人殺しはあるし、早く錦切の附いたお侍が市中を廻つてくれたけりやア、うつかり表も歩けねえ。

三次　實に力にするものは、この頃では錦切だが、何とかいふ唄が流行るぢやアねえか。

才六　おれは三味線を知つてゐるから、德、唄つてくれ。

○　よし〱。

三次　おれもあたまを言つてくれりやア、後は思ひ出す。

トこれにて才六三味線を彈き、三次、○木魚を打ちながら、

○　「皆さん〱お馬の前に、ひら〱するのは何ぢやいな。あれは朝敵征伐、錦の御旗を知らないか。」

三人　トコトンヤレトンヤレナ。

トこれより下座へとり、四人鳴物を合せ、花道へはひる。この内よき時分に、上手に以前の宰輔、

浦太、左衛門、伴次郎、新八、松源の貸提灯をつけ出て來り、後を見送り唄を聞いてゐる。

宰輔　歩兵が市中で亂暴なすゆゑ、既に庶民が政治向きを悪しざまに言ひなすは、聞くに忍びざる事ぢやわえ。

浦太　これも時節と存ずれど、

左衛　斯くまで世の中亂れしか、

伴次　今の唱歌を聞くにつけても、

新八　ハテ苦々しき

皆々　事ではある。

ト ぢつとこなし、新内の合方、按摩の笛になる。下手より蔀あきの歩兵銅藏、左九郎、[illegible]りにて、目前の一升徳利と箸折を一つ持ちゐ、酒に醉つて出て來り、

銅藏　サア、これから天鍋へ行つて、又一杯飲み直し、この勢ひで吉原へ行かうではないか。

左九　天鍋はもうしまつたらうが、もしまつたらこの折で、酒を出さして飲むと致さう。

銅藏　オットそのこと、やつちよろね。（ト兩人上手へ來り、左衛門と突當り）エヽ、氣を附けねえか。

無禮者めが。

左九　コリヤ、武士たる者に突當つて、詫をしねえか。

ト左九郎は左衛門の顔、銅藏は胸ぐらを取る。伴次郎はさげたる提灯にて兩人を見せ、

伴次　オヽ、此奴は晝間の浪人ではござらんか。

左衛　左樣であつたか。（ト振拂ひ、）また無禮いたしをるか。（トこれにて銅藏左九郎ひよろ／＼として、）

銅藏　ヤア、此奴、不埒な事を申す。

左九　ウヌ、その分にはしねえぞ。（ト歩兵兩人刀へ手をかける）

新八　斬つてしまへ。

トこれにて左衛門拔打ちに歩兵兩人の胴を一刀に斬る。これにて兩人苦しむ。伴次郎は提灯にて宰輔、濱太に見せる。

宰輔　莫迦め。

ト刀を落し差しにする。歩兵兩人はバッタリ倒れる。これを木の頭。

皆々　ムヽハヽヽヽヽヽ。

ト大笑ひに笑ふ。この模樣、やはり新内按摩の笛にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

下谷竹町湯屋の場
凌雲院應接所の場

役名　天野八郎、越前屋佐兵衛、長岡龍太郎、大久保軍右衛門、春日左衛門、田宮新八郎、佐川伴次郎、小代浦太、上野鐘五郎、三助越後の音吉、同會津領の松藏、凌雲院の徒弟隨念、齋藤數馬、　士、天野娘おはな、同下女おたよ、刀屋女房おはつ、湯屋女房おひさ、長屋嬶おすゞ、同おてふ、其他。

本舞臺一面の平舞臺、正面一間の湯屋の入口を、内より見たる障子、[illegible]と記し、この内番臺の蹴込、上下三間の壁。これより上へ斜に下駄箱、上手大臣柱寄り物を入れる棚の裏を見せ、この間より流しへ行く出入口。上手の下手寄ごとろに上格子、この内竹簾をおろし、[illegible]やはり着物を入れる棚。すべて上野町湯屋を内より見たる體。番臺に湯屋女房おひさ、前[illegible]し前[illegible]にて住ひ、[illegible]を詰めてゐる。下の方に長屋嬶おすゞ、湯上りにて着物をきりつゝ[illegible]、[illegible]に着物を着

せてゐる　この膝に同おてつ、帶を締めてゐる。番臺の近邊に三助吾吉、半纏三尺帶にて雜巾がけをしてゐる。この見得赤子笛、稽古唄にて幕あく。

すゞ　よく／＼まあギヤア／＼泣く子だね。氣のほせがしてなりやアしないよ。

てつ　お晝前だからまだよいが、これが夕方でゞもあつた日にやア、着物を取られても知れやアしないね。

すゞ　イエ、そりやア此處の湯は安心さ。昔からお客の物は足袋片々なくならないのは、こゝの湯の名代だから、それはどんなに込んでも大丈夫さ。

てつ　さう言へば此處の親方は癇性だと見えて、隅から隅まで心持よく掃除をするから、實はお晝前など私共が來ると、斷られやアしないかと思つて、少し氣が咎めるのさ。

ひさ　どう致しまして、どなたもお客樣、そんな御斟酌はござりませぬ。

てつ　それでもあんまり綺麗だから、何だかお氣の毒に思ひますよ。

トこの内吾吉、だん／＼下駄箱の蔭へ、板の間を拭きながらはひる。おてつは帶を締めながら、

お前の處では、昨夜は仕事からお歸りかえ。

すゞ　イヽエ、昨日も一昨日の晩も泊りきりだから、又小塚原へでも引掛つたのではないかと、實は氣

を揉んでゐるのさ。

てつ　私の所でも丁度二晩歸らないから、樣子を聞いたら、上野に大急ぎの仕事が出て、毎晩夜明しをするのだと、棟梁のお上さんから聞きましたよ。

ひさ　セシ〳〵、その急仕事と申すのは、本當でござりますかナ。

てつ　それでは急仕事の譯を、お知りなさいませんかえ。

ひさ　詳しい譯は存じませんが、一昨日からお山の廻りを猟矢來で圍ふといつて、この近所の人足衆を大勢引上げたとの噂。人の話で分りませんが、戰でもなければよいと、湯屋などの稼業の者は心配してをりまする。

すゞ　あの廣い上野の廻りを、矢來で圍つて、どうするのだらうね。

ト この内亭主に着物を着せ、自分も前垂を締めてゐる。爰へ上手戸口の陰より、前幕の刀屋の女房おはつ湯上りにて、手拭と糠袋を持ち出て來り、

はつ　此方のお家は御山の御用で、上野のお出入りでござんすから、お聞き申したら分るでござんせうが、私の所なども、この頃は刀の研ぎが立込んで、夜業をしても間に合はぬほど、急に忙しくなりましたが、戰の噂は本當でござんせうかね。

ひさ　皆さんは日々の見物や御殿へも上りますが、宅へ歸つては何も申しませぬから、一向樣子も分りませんが、どの時にも困りきりますな。

はつ　旅の稽古が重なんで忙しいのは何よりだが、もし山で喧嘩でも始まると、上野近所は一面に燒拂はれでもしはせぬかと、内の人も案じてをりまする。

すゞ　それではお山で始まると、此處らもむづかしいのでござりませう。

はつ　どういふものだか分りませんが、まあ危いかと思ひますね。

てつ　どうせ店借だから、私共はそんな事に構はないから、内の人の仕事があつて、甘いものが食べられて、芝居の一と幕も見る方が、呑氣でいゝかも知れませんよ。

すゞ　この三月二丁目へ行つた時は、市村が花子の松若で、左團次が男達をして、明石屋が忍の惣太だつたね。あれを思ひ出すと何か始まつて思ふさまお金を儲けて、芝居へでも行きたいのさ。

てつ　大層靜かになつたね。

すゞ　やう〳〵寢ついたのさ。万屋のお上さん、ごゆるりとなさいまし。

はつ　モウお歸りでござんすかえ。

すゞ　お先へ御免なさい。

トやはり合の唄にて、雨、風音をおろし、入口より奥へはひる。

はつ　今のお上さん達も、大層お好きでござんすナ。

ひさ　いつも元氣なお二人ゆゑ、御苦勞なしで世間の噂をなさいますが、あゝいふ事は言ひ當てるものでございますナ。

はつ　何だかソハ〳〵して、厭なことでございます。

トやはり右の合方にて、表の入口より亭主佐兵衛、羽織着流し駒下駄にて、思案のこなしあつて出て來り、店へ上りながら、

佐兵　オイ、今歸つたよ。

ひさ　オヤ、大層遅うござんしたナ。

佐兵　これはお上さん。お出なさいまし。

ト會釋して番臺の傍へ立つてゐながら煙草を吸ふ。

はつ　夜になると出られないので、お晝前に來ては、長湯をして行きますわいナ。

佐兵　相變らずお忙しうございますかナ。

はつ　忙しい所ではありません。深夜業をしてゐます。

佐兵　ヘエ、、刀屋さんはそんなに當時は、お忙しうございますかナ。
はつ　得意主でございますが、諸方から來ますので、職人を入れてやつてをります。
佐兵　この頃は、刀細工流行でもござりますか知らぬ。
はつ　ナニ、さういふ譯でもござりませんが、この節上野や根岸邊のお寺方へお出なすつたお方達だと申すことで、皆初めての御注文なれど、御身分のあるお方と見え、お拂ひなどの几帳面には、實に褒めてをりますのさ。
佐兵　お客と申すのは、さういふお方でござりますか。

ト腕組をなしちつと思入、この内おはつ身支度をなし、おひさ煙草をつけて出す事などあつて、風物をおろし、

はつ　さやうなら。
佐兵 ひさ　お歸りなさいまし。

ト合方にて、おはつ奥へはひる。佐兵衛は踏臺へ腰をかけ、ちつと考へてゐる。おひさ番臺にある錢を集めようとして、土間へバラ〳〵と落す。おひさ是れを取りに土間へ下り、錢を拾ひながら、佐兵衛の樣子を見て、

ひさ　モシ、見れば顔色もよくないし、何だか塞いでお出でだが、どうかしたのでござんすかえ。

（トいへども、佐兵衛黙つて考へてゐる。）モシ旦那、どうしたのだえ。

ト佐兵衛の傍へ下にゐる。これにて佐兵衛心附き、

佐兵　おらア事に関つて堪らねえのだ。

ひさ　今朝から妙にびつくりするわね。何ぞ喧嘩でもしておいでのかえ。

佐兵　ナアニ、喧嘩はしれえが、山内をいつて来たのだ。

ひさ　エヽ、それは何処でお言ひのだえ。

トこれにてちよつと流しへ思入あつて、

佐兵　上野のお山さんか。

ひさ　昨日は昼もお出なさらないよ。

佐兵　それだからいゝ。さあかういふ訳だ。（ト改つた合ひになり、）今朝廣小路の三河屋から、名主様の御用があるから、おれにちよつと来てくれと、呼びに来たから行つてと見ると、大勢顔を揃へてゐて、何だか恭しく言立てるには、今度宮様が京都へ愈々お立になるにつき、この道の目付として、山内の護衛隊へ四天侍従どんがおはひりになるから、官軍御用とした札を掛ける

といふのだが、あんまり莫迦ンきつてゐやアがるのだ。

ひさ　何もお寺へ札を掛けたつて、お前怒る事はないぢやアないか。」

佐兵　ムヽ、さうぢやねえ。札を掛けるだえ。

ひさ　それだから、凌雲院へ掛けるのだらう。

佐兵　莫迦言へ。おれの家へ掛けろと言ふのだ。

ひさ　エヽ。（トびつくりなし、）宿屋でもしろと言ふのかえ。

佐兵　ナニ、さうぢやねえ。御用といふ札を掛けて、官軍を湯へ入れろといふのだ。それからおらアさう言つてやつた。それはいけません。越前屋佐兵衛は、親の代から東叡山のお掃除御用で、お山中のお掃除をして、拝領物は年中たゞ貰つて、おまけに年に七十俵宛の米を貰つてをりますから、徳川様と上野に對しちやア大恩があるんでございます。そりア官軍だつて天子様の御家來だから、惡いといふ譯は決してありませんが、江戸の恩人へ對していけませんと、おらアキツパリ断つて來たのだ。

トこれを聞き、おひさ悦ばしき思入にて、

ひさ　そりやアよく言つておやりだ。それで向うが承知したかえ。

佐兵　ナアニ承知しねえのだ。そんな手前のやうな事をいつては、上へ對して濟まねから、何でも耳に用を足すがいゝと、大勢で勧めるから、癪に障つてたまらねえのだ。それからおらア斯う言つてやつたのだ。佐兵衛は徳川様と宮様の爲なら、命でも捨てます料簡だが、外の事には用はありませんのだ。（トキッと思入。おひさ裏へ心遣ひのこなしにて佐兵衛の袖を引くを、佐兵衛振りもぎつて、）ナニ構ふものか。それとも達つて入れろといふなら、エヽようございます。今夜の内に滑稽を叩き毀してしまひますといつて、直ぐ表へ出掛けると、まあそれだけは待つがいゝと、寄つてたかつておれを留めたが、いまだにヂリ／＼してたまらねえから、もし何とか言つて來たら、直ぐ打毀す積りだから、手前もその氣でゐてくれろ。

ひさ　そりやアいゝ心持だつたね。それではいよ／＼御殿では、京都へいらつしやるかえ。

佐兵　下々の者にやア分られえが、事によつたらさうなるかも知れねえ。

トむつとなりうつむく。おひさもむつと思入。とゝへ上手流しの口より、以前の三助音吉出て來り、

音吉　親方、いゝ心持な事を言はつしやるの。

佐兵　オヽ音公か、聞いてゐたのか。

普吉　ハイ、聞いてゐましたが、どうかわしも若しもの時には、御用に遣つては下さりませぬか。

佐兵　ムヽ、それでは手前もお上を思つて、骨を折る料簡か。

普吉　ハイ、公方様と宮様の事なら、どんな事でもする、といふのは、生れは越後の直江津、庄屋を出てから江戸へ来て、これまでお世話になりましたが、御領主様に対しても、徳川様の事ならば、骨を折らねばなりませぬ。

佐兵　ムヽよく言つてくれた。おれも親から江戸ツ子で、永年下谷に渡世をしてゐて、講中仲間で立てられるも、一に上野と二には親の陰。その太平の続いたも、この宮御殿で様子を聞くに、今度はいよ／＼怪しい塩梅。もしも話が纏まらず、イデ鎌倉となつた時は、こゝが日頃の御恩返し。丁度御本坊から来た米が、積んであるこそ幸ひだ。生業廃めても其時は、手の届くだけ市中で、兵士方のお世話して、炊出しをする積りだから、手前も一番手を貸してくれ。

普吉　それは丁度いゝ役だ。あぢアさアの事ならば、しなくつてどうしべい。

トこゝへ上手流しの口より、三助松蔵、半纏三尺にて、手を拭きながら出て来り、

松蔵　親方、おれ入れてくれねえのは情ねえ、恨みでございますぞ／＼。

ひさ　そんなら、お前もこの御用へ。

松蔵　おらも矢張り大津領、十年前の凶年の旱天續で、木拾ひしてゐたを、此方の家へ引上げられ、三助にして下された、大恩ある親方さん、省くといふも水臭え。どうぞ遣つてやつて下さいまし。

トよろしく思入。これにて佐兵衛ぢつとなつて、

佐兵　音公のみか松蔵まで、共に思つてくれるのは、おれの身にとつては有難え。遣はねえでどうするものだ。

松蔵　エヽ、そんなら遣つておくんなさいますか。

音吉　これで御上様の味方が出来た。

松蔵　エヽ、有難うござりますわえ。

佐兵　おひさ、今から言つて置くが、いよ／＼事が起つたら、おらア直ぐに御殿へ行くだ、その時には捕られてしまふか、又は敵に向つて死ぬか、そりやアうんぷてんぷだから、お上の爲だ、泣いてはならねえぞ。

ひさ　アイ。（トぢつとなる。）

佐兵　おらア根から町人だが、何だか今から力瘤がはひつて、こんな好い心持な事はねえ。何だか氣

が嵩んで來たやうだ。

ト腕を叩き、きつと思入。この時入口より女形〇、着流し前垂駒下駄にて手拭を持ち出て來り、番臺へ錢を置く。これにて皆々氣をかへ、

ひさ　今日はやう〳〵、お天氣になりました。

女〇　さうでございますね。

トこの内女形〇下駄棚へ履物を上げ、上手の口へはひる。おひさ思入あつて、

ひさ　松、お湯が出ろよ。

松藏　ハイ〳〵。（ト慌てゝ上手へはひる。佐兵衞立上り）

佐兵　音公、今の事は御本坊の御迷惑になるといけねえから、他人には決して言はねえ方がいゝぞ。

音吉　ハイ、それは大丈夫でございます。

佐兵　おひさ、今番臺へ誰か寄越すよ。（ト幕あきの合方にて、佐兵衞流しの口へはひる）

音吉　お上さん、大きに有難うございます。わしもこれで大安心をしましたわえ。

ひさ　あゝいふ事を聞く度に、湯に來てお出での天野樣を、思ひ出してもお氣の毒で、實に胸が一杯になるよ。

音吉　町馴れねえから、湯へ來てもまごまごしてゐさつしやります。ハヽヽヽ。

ト こゝへ湯しまひ口より天野の娘お花、屋敷風の人柄のよき娘、下女お谷、両人湯上りにて手拭と糠袋を提げて出て來る。

ひさ　もうお上りでござりますかえ。

お花　お晝前ゆゑ、中も靜かで、ゆるゆるはひつてをりました。

ひさ　町の湯へはいらつしやる内に、嘸お[illegible]がお[illegible]りござりませう。

お谷　どういたしまして、唯今の内參りますると、お家のお湯より餘程心持がようござりまする。

ひさ　それでもよく御湯へ、おはひりつけなされましたな。

お花　この町ははじめて開けましたので、色々[illegible]下の變つた事が澤山あるので、見る物聞物にめづらしうござります。

ト この内お谷[illegible]をお花に渡し、これをお花つかふ。

音吉　[illegible]、晩程お屋敷へ御機嫌伺ひに參りますが、[illegible]は[illegible]でござりまする。

ト お花[illegible]をなさける、お谷これをあいしらひ、

お谷　實にどうかござりましたか、定めしはひるでござんせうね。

晋吉　はひろ席ではござりませぬ。それに昼席でござりますから、私なども時々に見世の間を見て、あすこの路地へ立聞きに行きますわな。嬢さん、チトお供致しませうか。

ひさ　コレ〳〵、何を言ふのだ。黙つてゐないのかね。

お花　谷、涼しくなつた。モウ帰りませうわいナ。

お谷　ハイ〳〵。

トこの時おひさ流しを見やり、思入あつて、拍子木を打つ、これにて晋吉上手へはひり、お花お谷の思入あつて、

お花　あれは何だえ。

トお谷に聞く。おひさは笑ひながら、

ひさ　これはお湯を出します知らせでござります。

お花　初めて私はこ

ト手拭にて襟を拭ふを道具替りの知らせ。これへもおひさ又木を二つ打つ。

承はりましたわいナ。

トこの模様、稽古唄、角兵衛の鳴物にて、この道具廻る。

本舞臺眞中後へさげて二間の玄關、上庇、式臺、正面白地の襖、上下瓦燈窓のある白壁の前づら、褐通り板羽目、上の方に程よき葉櫻の立木、下の方に用水桶、すべて車坂上凌雲院門内の體。こゝに彰義隊の有志三人、○△□羽織袴なり、大小にて立掛りゐる。この見得木魚の入りたる替つた合方にて道具留る。

○ 各々、何か椿事出來いたしましたかナ。

△ 今黒門より注進には、總督の使者が參ると申すが、我々一圓合點がゆかぬ。

□ この間中幾度まで參りし使者が、又今日參ると申すは心得難し。多分官軍に相違ござらぬ。

○ ナニサマ、全く總督より、又使者が參るものなら、その前以て山内へ、届けのあるべき筈なるに、不意の使者とはその意を得ませぬ。

△ コリヤ黒門へ見張の者が、

□ 聞違ひに相違あるまい。

○ 隊中の者が門内へ知らせに參つた様子なれば、篤と糺して御覽なされい。

△□ 左様致さう。

ト此うち上手になり、揚幕より有志一人、同じく割羽織なり大小にて出て來り、

× 各々それにおいでなされしか。黒門よりの知らせには、總督の使者として、長岡悦太郎殿これに參られ、隊長に面會なさんと、押してこれへ參ると申せば、先へ馳抜け參つてござる。

○ スリヤ隊長にもなかつたか。

△ 長岡殿これへ參るとあらば、

□ この由奥へ申入れん。

ト この時正面の襖を開け、小代浦太更けたる浪士の拵、羽織袴大小にて共に立ち、佐原伴次郎同じく浪士のこしらへにて出て來り、

浦太 イヤ、その知らせには及び申さぬ。

○ 扨は御承知、

四人 お聞きありしか。

浦太 如何にもあれより承つたが、總督よりの使者として、長岡殿が參るとあらば、定めし兵士も多人数引連れ、これへ參るに相違なし。

伴次 不意に參つて隊長へ、押して面會なさんなどゝは、油断のならぬこの時節、こりや用心をせず

ばなるまい。

× イヤ、知らせの者に尋ねしに、黒門までは供も附けしが、あれより内へは供も附けず、唯一人平服にて、これへ參ると申すこと。大膽不敵た事でござる。

浦太 イヤ、平服にて參るのが、多分は彼の手段でござらう。

伴太 油斷ならねば各々には、奥へ知らせて警固せられよ。

四人 心得てござる。（ト三人奥へはひる。）

浦太 これへ參らば唯一人にて、[illegible]して奥へ通さん。

伴太 名に負ふ[illegible]太郎殿、如何なる手段あらんも知れず。

浦太 樣子を試した上ならでは、

伴太 滅多に奥へは通されますまい。

（ト浦太玄關へ[illegible]、この時[illegible]下手より[illegible]八人がベルの[illegible]を持ち出て來り、）

○ これに控へてをりませうや。

浦太 イヤ、門内所々へ二人宛、左右に立つて警固召され。

八人 心得てござる。

ト花道へ行き、一人づゝ並びよく並ぶ。これにて誂への鳴物になり、揚幕より長岡悦太郎、鶴羽織平袴にて短刀を帯し、中間草履にて出て來り、花道の皆々の前を恐れもなく通る。これにて皆々案に相違のこなしよろしく、トヾ悦太郎舞臺へ來るを、八人後より附添ひ舞臺へ來り、左右へ四人づゝ分れて取卷く、浦太作次郎思入あつて、

浦太　これは／＼長岡殿には、總督よりのお使者として、お先觸れなき不意の御入來。

作次　火急の儀ゆゑ、警固としても人數揃はず。

悦太　恐れ入つたる仰せ、悦太郎謝しまする。（ト禮をなし、）唯今申入れし如く、隊長方へ面會なし、お談じ申す事あつて、又候今日推參致せば、何卒お傳へ下されい。

浦太　委細承知仕る、

作次　イザ長岡殿、お通りあれ。

悦太　然らば御免。

ト式臺へ上り掛ける。左右の八人わざと鐵砲を向ける。悦太郎これを見返りにつこり笑ふを道具替りの知らせ、

御苦勞な事ぢや。

トよろしくこなし。この模樣時計の音にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、正面九尺の床の間、佛畫の掛物好みの置物。左右一間宛地袋違ひ棚。上の方畫心に中形の襖、出道入りあり。同じ下の方襖の出道入り。花道揚幕の所杉戸の出道入り、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、すべて池田邸廣間の體。上手に大久保軍左衞門、割羽織袴一本差し、續いて田宮新八郎陪長分、下に少し離れて春日左衞門、上野直五郎、齋藤數馬、何れも羽織袴一本差しにて住ひ、誂への合方にて道具留る。

數馬　唯今使者の來りし趣、池田殿より上樣へ言上をなされんとて、御殿へお出にござりまする。

軍左　オヽ、官軍方から中院三位使者を立てし後、池田殿も本坊へ入來あつて、その砌り事は濟みしが、又候今日來たりしとは、何とも以て心得ず。

新八　もし手切れにも相成る時は、その用意おさ〳〵怠りなく、警固の手配り申附けしが。

左衞　何と申して參りしか、長岡殿が使者の趣、早く承知がしたいものぢや。

直五　多分は警固の多人數に、ゲベルをもつて取巻かれ、

數馬　恐怖いたして玄關に、尻込みいたした事でござらう。

トこゝへ花道より以前の伴次郎出て來り、直に舞臺下手、下にゐて、

伴次　ハッ、御舘より使者に立たれし赤垣殿を案内致し、唯今これへ小代殿が參られてござりまする。

軍右　シテその軍使は誰なるや。定めて多人數引率なし、使者に參つたでござらうナ。

伴次　拙者も左樣存ぜし所、唯一人にて平服を着し、小刀のみにて臆する體なく、推參致してござりまする。

軍右　ナニ、小刀のみにて參りしとナ。

伴次　ハッ。

軍右　天野氏へ通じて下さい。

伴次　委細承知いたした。

ト伴次郎上手杉戸の内へはひる。合方きつぱりとなり、花道より以前の浦太先に、以前の桃太郎出て來る。これと一緒に上手より天野八郎割羽織袴一本差しにて、伴次郎附添出て來り、上手へ住ひ、この内桃太郎舞臺へ來り、下手へ刀を置き、無刀になり、よき所へ住ふ、これにて皆々よろしく上手へ住ふ。八郎思入あつて、

八郎　當山の執頭白王院、並びに隊長酒井宰輔、面會致すべきの所、外出致して居合さず、身不肖ながら天野八郎。

軍右　大久保軍右衞門。

新八　田宮新八郎。

左衞　その他有志列座の者。

鐐五　總督よりのお使者の趣、

八郎　仰せ聞けられ、

皆々　下されたし。（ト愍懃に禮をなす。）

悦太　イヤ〱、左樣に改まつては拙者甚だ痛み入る。實は今日推參致せしは、總督よりの使者にあらず。拙者一個の料簡にてお談じ申しに參つてござる。

浦太　ハヽア、左樣でござつたか。

八郎　シテ御入來の下されしは、如何なる次第にござるよナ。

トこれより誂への合方になり、

悦太　されば、先頃澤三位公御本坊に於て公命を奉じ、拙者に於ても各々へ懇々申上げたる通り、前

上様朝廷へ對し奉り、恭順謹愼遊ばされしに、彰義隊及び諸隊の者、當山に屯集なし、錦旗へ敵たふ色ありと、その嫌疑紛々たり、御譜代の各々方が、斯かる兆のある事を、萬一總督がお察しあらば、御謹愼中なる上様の御不爲ゆゑにその由を、池田覺王院の御門跡所へ御評議召され、速かに解散あつて、京師の御沙汰を御待ちあるが肝要なりと存ずるゆゑ、竊に入來致してござるが、天野殿には如何なるや、御心底の程承りたし。

八郎　御懇切なるその御意見、忝く存ずれど、假令何樣評議なすとも、一度屯集致せし上は、當隊初め諸隊共、解散致す所存はござらぬ。

悦太　スリヤ解散はあられぬとナ。シテ、屯集致されしそのお見込みは、如何なる譯か、その趣意をお聞かせ下され。

八郎　如何にも、お聞かせ申すでござらう。（ト合方きつぱりとなり）當春二月十二日、殘念ながら上樣には、謹愼謝罪乞はせられ、御城までもお開きあつて、當山にて御恭順遊ばされ、それのみならず、又候や、水戸へ御退去遊ばされ、三百年來續きたる、將軍職を奉還あつて、かゝる時世に成行きしは、嘸御無念にござらうと、その御心中は如何ばかり。（トホロッと思入あつて、）お察し申せば恐れ入る、數代受けたる御恩澤、報ぜんものと當山へ、屯集なせし我々共、長岡

殿にも御譜代なれば、諸隊の者の胸中を、よしなに賢察下されたし。（トロ惜しき思入。）

軍右　それも上樣伏見にて、御指揮に依つて錦旗に向ひ、發砲なせし事なれば、是非なき事と存ずれど、少しも上には御存じなき事。

左衛　先手の者の過ちより、起りし事に相違なければ、大阪城を退き給ひ、直ちに江戸へ御歸城遊ばし、

新八　如何なる御處置に相成るかと、晝夜心痛いたす我々。

作次　京師の御沙汰なき內に、無念に堪えかね總督へ、從ふ諸藩へ粗忽あつては、

數馬　お上の御趣意に叛くゆゑ、宮樣御警衞のその爲に、かく當山に屯集なし、

浦太　恨みを含む者あらば、諸隊へ加へ外出を、止めて御沙汰を待つ所存。

八郎　大政奉還遊ばされ、諸藩の列に加はるとも、八百萬石の御領分、その儘御領地相成らば、申さずとても國主の上席、長く泰平續きしは、東照宮の御武德なれば、お高に疵の附かざるやう、幸ひ、貴殿は總督へ、拜謁召さるゝ御身ゆゑ、譜代の者の安堵なすやう、偏にお賴み申し入れる。

悌太　お恨みなくとも拙者とて、お家のお爲を思へばこそ、推參致せし儀にござれど、各々方のお見

込では、却つてお上のお不爲かと、この悅太郎は存じまする。

軍右　如何なる譯にて上樣の、お不爲なりと言はるゝか、拙者に於ても合點がまゐらぬ。

浦太　お見込あらば逐一に、これにてお述べ下されい。（ト合方替つて、）

悅太　各々方の仰せには、當宮を守護召され、殊に諸藩に粗忽あつては、お上の不爲と申さるゝが、然らば何故過日來、この近邊にて藩士等を、害せし事を總督へ、屆け出でしは度々なりと承はりしが、各々には、それ等は御存じござらぬか。

皆々　ム、。（ト皆々顏見合せよろしく思入。）

悅太　斯やうな事が重なりなば、止むを得ずして官軍より、兵端開く儀もござらば、いよ〳〵以て朝敵の、汚名を受けねばなりますまい。これらの邊は各々にはお心附きはござらぬか。

トこの內始終天野立腹の思入にて、

八郎　默らツせえ、長岡氏。この近邊にて諸藩士を、害せし者がござらうとも、我々共の存ぜぬ事、このお膝許に住居なすは、武家は素より町人百姓穢多や非人に至るまで、お上の御恩を思はぬ者は、唯の一人もござるまい。それ等が藩士を恨むは尤も、誠に亂れしこの世の中、浮浪の徒がその口に困り、切取いたす者もござらうを、我々共は天下の旗本、無禮致さば切捨てゝも、

差支へなき身分なれど、愼み中に何故に、左樣な事を致さうか。貴殿の樣に言はるゝと、東叡山に屯集せし、諸隊の中に害せし者がござるやうに聞ゆるが、それとも何か證據がござるか。

トキッと言ふ。

悦太 證據ござれば忽ちに、總督よりの御沙汰にて、官軍襲ひ來るべし。さはなくとても官軍方、當隊中の業なりと、見込をつけて兵端を、開きし時は逐一に、辯解いたす暇もなく、止むを得ずして戰起らん。さある時には當春より、深く謹愼遊ばれし、お上の御趣意をもどくのみか、三百年來續きたる、御領分も滅する道理、それ故解散お勸め申す。大事な時節でござる故、同じ譜代の長岡が、詞をお用ゐ下されい。

トこの内浦太成程といふ思入あつて、

浦太 長岡殿が斯くまでに、我々共を思召し、解散せよとのお勸めは、尤もに存ずれば、仰せに從ひ小代浦太、退散致す所存でござるが、何れも方には如何でござるナ。

數馬 小代殿には血迷はれしか、當隊中へ加盟なす時、誓詞神文なしながら、唯今と相成つて、脫隊なすとは未練な事。

鐵五 よくのめ／＼と滿座の中にて、斯くの如き詞を吐き、赤面をなされぬぞ。

伴次　今にも官軍襲ひ來るやう承つて恟怖なし、命が惜しくなられたか。近頃卑怯至極でござらう。

浦太　ヤア無禮なるその詞、命は些か惜しまねど、事ある時は上樣の、お不爲なりと承り、それ故解散致すと申すに、何で卑怯と言はるゝぞ。

新八　武士たる者が神文なし、約せし事を變ずれば、全く卑怯に相違ない。各隊へ見せしめに、拙者が手の內見せてくれん。

浦太　お望みなればお相手致さう。（ト兩人立掛るを、）

軍右　同隊中にて爭論致すは、堅く誡めあること故、御兩所共にお控へなされ。

左衞　大久保殿のお詞なれば、田宮氏、斯樣な者にお構ひあるな。

トこの始終天野腹の立つ思入にて、

八郎　先刻より承はれば、屯集致せし諸隊の者、解散致すは上樣の御爲筋だと仰せあるが、當春以來上樣には、降伏謝罪を願ふといへど、今日に至るまで、寬典の御處置もなく、既に先頃勝安房殿、東海道の參謀たる西鄕吉之助に面會なし、お城は素より兵器まで、お渡し申せば品川より、內へ兵士を入れざるやう、再應歎願致されしに、其儀すらお許しなく、御直參の方々が、

萬一謹愼致しをれど、一旦謹愼致しをれど、萬陪臣者に手を下るも、全く君侯を思へばこそ、無念を怺へ耐へ忍び、

一官軍當山へ、侵撃致さば花々しく、一戰なして死を決する所存でござるが、貴殿には大目附までお勤めなされし御身分柄でありながら、殘念には思はれませぬか。それとも理窟がござるなら、我々共の得心なすやう、道理を解いてお聞かせ下せえ。

ト思入にて言ふ。長岡わざと氣をかへ、

悦太　奥御祐筆のお家柄、天野殿の思召しも、又悦太郎の存ずる所も、上を思ふは一なれど、万ひに言戰を致せし所が詮なき故、思ひし事をお話し申せば、お氣にされずにお聞き下さい。（トこれより好みの合方になり、）戰爭致して勝敗を極める事なら伏見にてお供の人數は十萬餘、東海道を參謀がきるゐる途中は皆御譜代、防ぐ所は幾らもござろうし、それを易々通せし上、お城は元より兵器まで、京師へ渡して上樣には、水戸へ御退去遊ばしたも、昔からして源平初め、北條足利豐臣など、何れのお家も行末が、旨く纏りがつきませぬ故。御當家樣は明日にも、京都よりして寛典の御沙汰がござればお勝許は、鼠一匹も殺さずに、この大變が納まりましたら、德川天下の引揚げは、上手にやつたと後の世まで、龜鑑になるでござりませう。そこを思つて上樣が、御謹愼遊ばされしは、全く深き思召し。イヤ恐れ入つた事でござる。

八郎　成程、貴殿の仰せの通り、その思召しでござらうが、萬一京師で寬典の御沙汰がなくば其時に、御譜代衆が散り〴〵になつてをつては、イザといふ時、致し方がござるまい。（ト思入あつて、）イヤ、然し御懇篤のお詞ゆゑ、又隊中にて相談いたし、御返答申上げん。

悅太　御返答下さるとあれば、これまでにて申上げません。早やお暇致すでござらう。

八郎　武門の意地に無禮を申し、惡しからず思召し下されい。

悅太　それは御同樣に、その場合に依つてはお互でござる。（ト思入あつて、）左樣ござらば各々方。

皆々　長岡殿。

悅太　何れも失禮をいたしました。（ト立上り下手へ行き、下にゐて刀を差し、花道へ行き、思入あつて下にゐて、）御隊名の外に、臥龍、活氣、貫義、神木、遊擊、まだ其外にござつたナ。（ト指を折りながら言ふ。）

八郎　其他は純忠、萬字、旭、松石、白虎以下、十八番隊でござる。

悅太　その各隊へ落のなきやう、これより直ちに赴かん。（トぢつと思入。）

八郎　イヤ、それは當方より傳達致すでござる。

悅太　何卒落のなきやうに。

八郎　承知仕る。

軍右　お見送り。

悦太　イヤ、その儘。

ト八郎と顔見合せるを木の頭。この引張りよろしく、寺鐘のキザミ。これと一緒に悦太郎花道揚幕へはひる。後シャギリ、

幕

三幕目　御徒士町天野宅の場

役名　天野八郎、同弟賢次郎、同父半左衛門、天野の用人宗兵衛、三河島の植木屋源次、天野娘お花、同女中お谷、小代の娘おいの、お酌小竹、同小榮。

舞臺三間の間常足の二重。一段の踏段。正面上手一間の床の間。續いて一間小形の襖出這入り、下

手一間地袋戸棚、跡茶壁。上の方一間障子屋體。下の方九尺の玄關。本庇式臺附。向うはキラ形の模、下座の所黒塀にて見切り、二重と玄關の間、中窓のある張物にてつなぎ、すべて御徒士町天野宅の體。二重に小代の娘おいの島田かづら屋敷娘の拵へ、小竹小榮好みのかつらお酌の拵へ、三人共黒塗小判形の盆へ盆石を並べ、砂を打つてゐる。傍に盆石の道具よろしく、稽古唄にて幕あく。

小竹　おいの樣、御覽下さいまし、この石はかう使つた方がようございませうか。

いの　モウ少し右へ寄つた方がよいと思ひます。

小竹　それではこの位に致しませうか。

と盆の上の石を直す。

小榮　私のも御覽下さいまし。よくお師匠樣がおつしやいますが、位置といふものがむづかしうございますね。

いの　私などには分りませぬが、繪を書くと同じ事で位置が第一でござりますが、お二人共に怠らず、よく精をお出しだから、大層位置がよくなりました。

小竹　もう少しで出來上りますから、口を利かずに精を出して、

小榮　早く仕上げてしまひませう。

いの　お前方に負けぬやう、私も精を出しませう。

ト合方にて、下手より植木屋源次、紺の腹掛股引紺の印半纏三尺帯草履にて、牡丹の鉢植を持ち出て來り、玄關口にて、

源次　お頼み申します〳〵。（ト奥にて、）

宗兵　どうれ。（ト合方にて、玄關正面より宗兵衞、紋附の着附、縞の袴、用人のこしらへにて出來り、）オヽ、誰かと思つたら、植木屋の源次殿か。

源次　お臺所へまゐりましたが、お谷どんが見えませぬから、お玄關へ出ました。

宗兵　以前と違つて無人ゆゑ、臺所はお谷一人、大方奥に用があつて、臺所にゐなかつたらう。外ならぬ貴樣だから、玄關から上るがよい。

源次　左樣なら、御免下さいまし。（ト牡丹の鉢を持つて玄關へ上り、）例年お上へ差上げます牡丹が咲きましたから、御覽に入れませうと持つて參りました。（ト牡丹の鉢を前へ出す。）

宗兵　それはよく持つて參つた。嘸奥でもお悦びのことであらう。

源次　不順な氣候にいつもより、今年は遲うござりました。

宗兵　旦那樣も此頃は御心配が多いので、何處へもお出なさらぬから、御覽なされたら、お氣晴らし

になつてよからう。

源次　こちら様は御内福で結構なお身分だのに、何が御心配がござりまする。

宗兵　貴様達も知つての通り、先達御知行が半地になつて、引續き伏見に於ての戰爭から、御知行が上つてしまひ、お仲間の内でも内福と、評判のよい御當家も、坐して喰へば減るばかり。一年増しにお暮しが約るゆゑに、お前にもお庭の垣根が損じても、挿竹さへもなさらぬから、御用がなくて氣の毒だ。

源次　イエ、この節は何方でも、薩張り御用はござりませぬ。

宗兵　今奥へ申上げるから、ゆつくり休息して行くがよい。

源次　有難うござりますが、遠方でござりますから、お暇をいたしませう。

ト この時奥よりお谷、前垂下女のこしらへにて、盆へ茶碗をのせて持ち出て來り、

お谷　源次殿、お茶を呑んで行きなんせ。（ト茶を出す。源次茶碗を取つて、）

源次　これは〳〵有難うござります。

ト 合方になつて、奥よりお花島田かつら屋敷娘のこしらへ、小さな羽箒を三本持ち出て來り、

お花　おいの樣、浪の打寄せを附けるには、この箒をお使ひなさいまし。（ト羽箒をおいのにやる。）

いの　ハイ左樣でござりまするか。

お花　餘程附けようござります。お前達これをお使ひ。（ト羽織を小竹小榮へやる。）

兩人　有難うござりまする。（ト宗兵衛お花に向ひ、）

宗兵　お孃樣三河島の源次が、牡丹を持つてまゐりました。

お花　それはよう心に掛けて、相變らず持つて來てくれた。牡丹は父樣がお好きゆゑ、嘸お悦びなさるであらう。

源次　この間から御機嫌伺ひに上りませうと存じながら、忙しいのに取紛れ、御無沙汰をいたしました。

お花　マアゆる〳〵と話したがよい。

源次　有難うはござりますが、まだこれから猿若町の、二丁目の太夫元へ參りませねばなりませぬ。

小竹　オヤ、植木屋さんは市村の家へ、仕事に行きなさんすか。

源次　ハイ、出入場でござります。

小榮　オヤマア羨しい、私も植木屋さんになりたいものだ。

宗兵　聞けば、家橘は菊五郎になるといふ噂があつたが、いよ〳〵改名しますかの。

源次　この秋には、五代目菊五郎になりますと申す事でござります。

宗兵　家督は親の羽左衛門より、祖父の菊五郎に似てをりますから、名を襲ぐ筈でござります。

お花　お母様にお貰ひ申した、錦絵の菊五郎に、よく面差が似てをります。

いの　菊五郎を存じませぬから、その絵を拝見したうござります。

小竹　私どもにも御相伴に、

小染　お見せなされて下さいまし。

お花　文庫へしまつて置いたから、明日出して見せませう。

源次　私はチト急ぎますから、お暇いたしまする。

宗兵　急ぐとあるなら歸るがよい。

お谷　又この邊へ來なさんしたら、

源次　必らずお尋ね申上げます。

ト合方にて、源次辭儀をして玄關より下手へはひる。

宗兵　大殿様がお好きゆゑ、この牡丹の鉢植はお奥へ持つて參りませうか。

お花　御心配のある中へ心ないやうではあれど、少しはお氣の紛れを散じる事もあらうから、奥へ

持つて參つたがよい。

ト合方にて、宗兵衛牡丹の鉢植を持ち、奥へはひる。

いの　お花樣、この波打際へ使ひます砂は、どれがよろしうございませう。

お花　藥袋紙のたゝうにある水晶の砂がようございます。（トおいのの盆畫を見て、）おいの樣は御上達で、この金華山などは、大層よう出來ました。

小竹　昨日お稽古を願ひました、蓬萊山の石の積みやうは、どうしても覺えられませぬ。

お花　景色と違ひ蓬萊山は餘程形のむづかしいものと、佐藤榮中樣仰せゆゑ、容易には出來ますまいが、先づ思ふ通りに拵へて、先生のお出でまで、床の間へ崩さぬやう、飾つて置いて上げようわいの。

小竹　どうぞお願ひ申します。

お花　小榮さんの須磨の浦も申分なく出來ました。その濱邊の打寄せへ貝殼をあしらふと、一入見榮えが致しませう。

小榮　貝殼の使ひやうを、お教へなされて下さいまし。

お花　かういふ具合にお使ひなさい。（トお花、箱にある貝殼を出してあしらふ。）

小樂　有難うございます。

ト辭儀をする。この内奥より宗兵衞出て來り、お花の盆畫を敎へるを見てゐて、

宗兵　ア、お愛しうござりまする。（ト手拭を顔へ當てゝ泣く。）

お谷　コレ宗兵衞さん、何をお前は泣きなさるのだ。

宗兵　これが泣かずにゐられるものか。

お谷　そりや何故に。（ト合方きつぱりとなり、宗兵衞涙を拭ひ、）

宗兵　この宗兵衞は十代から、御當家へ親子共御奉公致しまして、永年御恩になりましたが、以前に變る世の成行、お孃樣が盆畫などのお稽古をなされまするは、時世時節で仕方がないが、それもお組合の孃樣方なら兎も角もござりますが、町家の内でも藝者屋などの

ト言ひかけるを、お　宗兵衞の袖を引く。宗兵衞心附き、

イヤ、以前と違ひ近年は、藝者衆もよい方のお座敷へ出るゆゑに、お孃樣藝の盆畫などを、かうして習ひにござるさうだが、そのお稽古をなさいますのが、お愛しうござります。

お花　何がいとしい事があらう。幼い時より盆畫を好み、習ひ覺えた技なれど、打棄ておけば自然と怠り、遂には忘れてしまふ故、小代樣のおいの樣や、又この妓達へ敎へるも、覺えた技を忘れ

ぬやう、この身の爲にする稽古。榮中様もよい事と、お悦びなさいましたわいの。

いの　お花様、私もお二人も出來上りましてござりまする。

トこの内おいの、小竹、小榮は盆石を拵へて、

小竹　御覧なさつて、

兩人　下さりませ。（トお花盆石を見て、）

お花　何れも見事に出來ました。多分明日は先生が、お出でなさるお日取りゆゑ、この儘床へ飾つて置いて、お目に懸けませうわいな。

兩人　有難うござります。

お谷　もうヒつを打ちましたれば小竹さんも小榮さんも、お暇をしなさんしたらようござんせう。

小竹　晩にお座敷がござりますれば、

小榮　お暇を致しませう。

いの　もうお歸りでござりますか。

小竹　あなたはお後で、

小竹
小榮　ごゆるりと。

お花　夜中なれば又明日。

小竹
小菊　お稽古に上ります。

ト稽古唄にて、小竹、小菊玄關より花道へはひる。

宗兵　あの子供達は座敷へ出て、人馴れてをりますから、よく口まめに喋べりますナ。

お谷　さうおつしやいますが、盆石でも習はうといふ心ゆゑ、おとなしやかでございます。

ト合方になり、奥より半左衛門、胡麻塩かつら着流し、更けたるこしらへ、[illegible]眞田の紐つきし掛物の箱を持ち出て来り、

半左　最早数寄屋町の子供は歸つたか。

お花　唯今歸りましてござります。

半左　いのはよく精が出るの。

いの　毎度お花様にお稽古を願ひ、餘程数を上げましてござります。

半左　定めて上達したであらうナ。

お花　一日毎にお上りゆゑ、この間もお師匠様がお褒めなされてゞござりました。

いの　それと申すもお花様の、御丹精ゆゑでござりまする。

トこの内半左衞門眞中へ住ひ、

半左　指南をいたす榮中殿が、四谷の住居に下町まで、出稽古はなか／＼出來ず、幸ひ娘が幼年より、習ひしだけを敎へさせるも、以前に變る世の中に、末々藝が身を助ける、夫の諺が身に當る事もやあらんと先を思ひ、先達より稽古をさすも、これ皆人の爲ならず。そなたもそれを心得よ。

お花　父上の思召しを、私もお察し申し、望む者に敎へますが、町家の者の附合は、餘程武家とは違ひます。中にも今の二人などは、人馴れてをりますゆゑ、いろ／＼な話をいたし稽古をいたしまするので、よい保養をいたします。

いの　世間見ずの私などと違ひまして、二人共お世辭のよいのを承り、人附合を覺えます。

半左　おひ／＼町家の交りいたせば、これも一つの學問だ。宗兵衞、水屋に御酒が注いであれば、これへ持つて來て呉りやれ。

宗兵　畏りました。（ト合方にて、宗兵衞奧へはひる。）

半左　いのは久しく泊らないが、宅でさへ案じずば、今宵は泊つて行くがよい。

いの　ハイ／＼今日は御厄介になります積りで、參りがけにお母樣へお斷り申して參りました。

半左　他と違つてこちらとは、兄弟仲の縁家ゆゑ、宅でも安心いたしてをらう。
お花　さうしてお前のお父様は、お歸りになりましたかえ。
いの　十一日の夕方に、上野へお出でなさいましたが、いまだにお歸りがございませぬ。
半左　ムヽ、小代は未だ歸らぬか。(ト思入あつて、)谷、其方も手を貸して、盆畫を奥の床の間へ、崩さぬやうに並べておきやれ。
お谷　ハイ、畏りました。(トお谷おいの盆畫を奥へ運ぶ。)
お花　東照宮様のお祭りを、いつも四月になさいますのに、何故お延ばしなさいました。
半左　イヤ、六月の十七日は、上には水戸へ御退去にて、殊の外のお取込に、心ならずも用があるゆゑ、當月に延ばしたのぢや。

トこの時奥より宗兵衛、三方に神酒徳利を載せしを持ち出て來る。半左衛門は箱の中より圓相に神君の像を書きし掛物を床へ懸け、神酒を取つて、

ドレ、御神酒を供へませう。(ト掛物へ神酒徳利を供へ、)サア、娘も宗兵衛も拜をいたせ。
兩人　ハツ。(ト掛物へ向ひ拜む。時の鐘、床の淨瑠璃になる。)
へ東臺の森も緑の若葉どき、卯の花くだし降るほどに、山ほとゝぎす啼く頃

は、行足早き雨催ひ、晴れぬ思ひに賢次郎、わが家の門へ歸り來て、

ト この内時の鐘、花道より賢次郎、羽織袴大小佩き下駄にて、本を包みし紫の袱紗包みを持ち出て來り、花道にてちよつと思入あつて、舞臺へ來り、玄關より二重へ出て、

賢次　唯今戻りましてござりまする。

半左　オヽ、賢次郎戻りしか。

お花　今日は、お早うござりましたナ。

賢次　稽古に暇を取らぬゆゑ、少しは早いかも知れぬ。（ト賢次郎よき所へ住ふ。）

半左　兄弟二人の戻るのを、先刻から待つてゐた。東照宮のお祭を閏月の今日に延ばし、今御神影を飾つた所、これへ參つて拜を致せ。

賢次　ハツ。

〽はつとばかりに神前へ、賢次郎は進みより、禮儀を盡し拜すれば、

ト賢次郎掛物の前に行き拜禮をする。

半左　賢次郎は戻つたが、八郎はまだ戻らぬか。

お花　お午過ぎから車坂の高木原先生へ言傳するとてお出でゆゑ、程なくお歸りでござりませう。

半左　これまで年々御祭禮に、親子五人打揃ひ、拜禮をいたせしが、五年後に妻に別れ、一人缺けたる其頃より、はや段々と替る世に、上には水府へ退去され、數代御恩を蒙りし、臣下の者も心々に、朝臣になる者あれば、歸農いたす者もあり。穩かならぬ當時の成行、心ならざる時に臨み、兄八郎が今日の、御祭禮の御拜をなさぬは、何とやら心掛り。

〽眉をひそめて子の行末、案じる親の心休めに、

賢次　高木原殿のお宅とあれば、程なくお歸りなされませう。左樣な事まで御心配なさると、第一にお身體の毒になりますれば、御心配なさいますな。

お花　直ぐに歸るとおつしやつたれば、今にお歸りなさいませう。

宗兵　お心掛りにござりますなら、車坂へ私がお迎ひにまゐりませう。

半左　直ぐに歸ると申したら、今に歸つて參るであらう。わざ〲迎ひに行くに及ばぬ。

お花　兄い樣、お召替なされませぬか。

賢次　駿河臺の師匠より教示を受けし廉々を、筆記いたして置きたいから、後に着物は着かへよう。

お花　左樣ならお召替へのその時に、お呼びなされて下さりませ。

賢次　東照宮へ御拜をなせば、手前は御免下さりませ。

半左　奥へまゐつて休息いたせ。

賢次　後程お目に掛りませう。

へ一禮なして小包を、携へ奥へ入りにけり。（ト賢次郎辭儀をなし奥へはひる。）

お花　曇りしせゐか常よりも、早う暗うなりました。

半左　コリヤ谷よ。燈明を持て來い。

お谷　ハイ〳〵。（ト合方にて、お谷佛前の燭立を持ち出て來る。）

半左　御佛前へ供へて置け。

お谷　畏りました。（ト床の間に供へる。半左衞門思入あつて）

半左　八郎といひ賢次郎といひ、天晴の若者だが、一腹一生でありながら、あゝも心の違ふものか。

宗兵　八郎樣は武道にのみお心を入れられて、日々劍術槍術のお稽古をなされまして、お上の爲なら一命を捨てゝ、戰をなされる御所存。

お花　それに引替へ賢次郎樣は、文道がお好きにて、日々學問にお出なされ、順逆の道をお守りゆゑ、戰などをなされますお心は少しもなく、蘭書をお學びなされまする。

お谷　昨夜も夜更けて私が眼を覺めまして見ますれば、まだ御本をお讀みなされて、御らんなつて

でござりました。

半左　どちらもどうとも言はれぬが、二人の心が一致なさば、第一親が安心なれど、

お花　お二人共にお心の、

宗兵　合はぬといふも世の成行。

半左　分けて娘が孝心ゆゑ、二人の心が一致せば、

宗兵　御男子二人に御女子が一人。

お谷　この上もなき御兄妹。

半左　世に子福者と言はれんに、

お花　そのお心の合はぬといふは、

半左　これも宿世の因果ぢやなア。

〽子故に迷ふ宵闇に、月の出汐を、

ト皆々よろしく思入。時の鐘三重にてこの道具廻る。

本舞臺四間通し常足の二重、長押附本庇三尺の椽附。正面上手一間床の間、好みの掛物、釣り花活

けに蘭を活け、以前の盆石二面並べあり。續いて一間違ひ棚。うしろ二間墨繪の襖。上の方役へ下げて一間丸窓のある附屋體。この前御影の石燈籠、常磐木、四ツ目垣、いつもの所枝折戸の庭口、二重との間四つ目垣。下の方役へ下げて土塀、三尺の引戸。こゝにも常磐木を置く。すべて天野宅奥の間の體、こゝに二十足の置行燈を置き、唐机の上にブックを載せ、以前の賢次郎腹這ひの書を見てゐる。下手に以前のおいの、蓬萊山の盆石を直しゐる。緣に牡丹の鉢を置き、よろしく三重にて道具留る。

ヘ松蔭の、暗き卯月の雨空に、星の影さへ中庭の、緣端近く書見なす、賢次郎のかたはらに、おいのは何かおもはゆく、

トこれより琴入りの合方になり、おいのこれを聞き思入あつて、

いの　モシ賢次郎様、あの琴の音はいづれでござります。

賢次　あれは隣家の山田の娘が、時折夜分復習ふのぢや。

いの　三絃と違ひまして、琴の音は奥床しく、よいものでござります。

賢次　よいか知らぬが書見の邪魔ぢや。

いの　御邪魔と申せば私も、今宵は御厄介になりまする。

賢次　以前と違ひ今日は、案内も至つて無人ゆゑ、お前が泊つて下さると、妹も大きに力を得て、賑かでようござる。

いの　私も亦お花様に、盆石のお稽古を受け、この身の得になりまする。

賢次　相變らず盆石の稽古に、精が出ると見えるの。

いの　ハイ、唯今も數寄屋町のお前の子供と三人で、諸所の景色を仕上げましてござりますが、明日四谷の先生が、お出でなさると申すことゆゑ、お床へ飾つて置きましたが、少し砂地が寄りましたから、唯今繕つてをりまする。（ト賢次郎盆を見て、）

賢次　何れも見事に出來たやうぢやが、私などにはどれがよいやら、一向に分らぬが、今お前が直してゐるのは珍しい形だが、それはいづれの景色ぢやナ。

いの　これは小竹と私と、二人して拵へました。蓬萊山でござりまする。

賢次　いかさま是れは內國に、見慣れぬ山の形にて、波の打寄せ石の位置、見ぬ外國の山などは、斯くもあらんと思ひ遣られ、一入の詠めにて、見れば見る程よい出來ぢや。

いの　まだお床の間に金華山と、須磨の浦がござります。

賢次　イヤ、私が望みは蓬萊山、金華山や須磨の浦、日本の景は望みでない。

いの　シテ蓬萊山と申しまするは、いづれの國でござります。

賢次　未だ淺學の事なれば、確かには申し難し。これから日夜勉強なし、やがて望みが叶ひなば、蓬萊山に等しき山ある外國へ渡海なし、わが日本の器量を彼地へ、（ト思入あつて、）未だ學問未熟の某、積學のうへ話すであらう。

いの　どうぞお聞かせ下さりませ。

賢次　又後に話しにござれ。

いの　有難うござります。

〽親しき仲も武家育ち禮儀正しく奥へ行く。（トおいの辭儀をなし奥へはひる。）

〽跡見送りて賢次郎、蓬萊山の盆石を、つく〴〵と打見やり、（ト賢次郎盆石を見て、）

賢次　外國船を見たならば、猶豫いたさず打拂へといふ、神君の御掟を守り、外夷は利非の判らぬ者と、わが日本でさみせしは、大いなる誤りにて、蘭書を廣く閲なせば、はるかに勝る文明國。政治は元より軍事の備へ、なか〳〵以て及ばぬ事のみ。それ故早く彼地へ渡り、留學なして百般の事業を會得なさんものと、疾より臍を固めし某、一日も早く父上のお許し受けて航海な

し、地球の内を一周なして、望みを遂げる我が存念。ア、時来るのが待たるゝわえ。

〽洋行なさん望みをば、思はず口外なす折しも、兄八郎が槍たづさへ、庭に始終を窺ひをりしが、

ト賢次郎は盆石を見て思入。この内上手より燈籠の蔭へ八郎、袴つまみ股立、大小、草履にて、手槍を持ち窺ひ出て淨瑠璃の切れにてツカ／＼と出て、

八郎　ヤア、徳川譜代の家に生れ、多年恩澤の祿を受け、人と成つたる身を以て、わが日本の禁となす、外夷に深く心を寄せるは、言はうやうなき國賊なり。兄弟同志にあらざる印、今槍玉にあげてくれん。

〽言ふより早く椽先より、躍り上りて突出す槍、有合ふ扇で拂ひのけ、身構へなせば、繰戻し、又突出すを上を下、よけつ拂ひつ挑みしが、シヤ面倒と槍投棄て、刀を拔いて斬りかゝれば、心得たりと拔合せ、兩人庭へ飛下りて、暫く打合ひ戰うたり。

ト文句の如く八郎二重へ上り、槍で突いてかゝる。賢次郎傍にある扇にて拂ひのけ、立廻りあつて、槍を捨て刀を拔いて斬つてかゝる。賢次郎拔合せ立廻りあつて、平舞臺へ下り、文句の切れよ

り大小入りの鳴物になり、立廻りよろしくあつて、

〽折から立出る宗兵衛が、それと見るより恟りなし歯の根も合はずがた〳〵と、足もしどろに震ひながら、

ト奥より宗兵衛出て来り、これを見てびつくりなし震へながら留める。

宗兵　これは如何なる譯あつてか、マア〳〵お待ち下さりませ。

八郎　エヽ、邪魔致さずと、

兩人　退け〳〵。

〽邪魔立すなと蹴倒せば、宗兵衛慌てゝ奥へ向ひ、

ト宗兵衛ふるへながら留めにはひるを、蹴返される。宗兵衛ふるへ聲にて、

宗兵　大殿様々々〳〵。大變でござります。早くお出で下さりませ。

〽呼ばゝる聲に奥の間より、半左衛門は立出でゝ、打合ふ中へ割つて入り。

ト奥より半左衛門出て来り、立廻りの中へはひり、兩人を留め、

半左　我に思ふ仔細あり、兩人ともに暫く控へよ。

〽鶴の一聲兩人も、是非なく暫し躊躇ひて、（ト兩人是非なく控へて、）

八郎　仔細ありとは何事なるか。」

賢次　父の一言背かれず、

八郎　控へまして、

兩人　ござりまする。

　　へ刀を引いて控へれば、宗兵衛ホッと一息つき、（ト兩人刀を引き下にゐる。）

宗兵　すんでの事に魂が、でんぐり返りをする所であつた。

半左　今兩人に申す事あり、刀を納めてこれへ參れ。

八郎　ハツ。

　　へはつとばかりに顔見合せ、刀を納め、塵打拂ひ、兩人緣へ控へれば。

　　ト八郎賢次と顔見合せ、うなづきて刀を納め、袂の手拭を出し足を拭ひ、八郎上手、賢次郎下手に上り住ふ。

半左　奥御祐筆を勤め、五百石の俸祿賜はり、いざといはゞ一廉の、お上のお役に立つべき身の上、その用人を勤めながら、僅か二人の立合に、恐怖なしたる今の有樣、頼み少なき事なるぞ。

宗兵　恐入りましてござりまする。

半左　上の瓦解も尤もぢやな。

へ宗兵衛有無の返事もなく、天窓を押へ控へれば、折から立出る二人の娘。

ト宗兵衛天窓を押へ、面目なき思入、奥よりお花おいの出て来り、

お花　今宗兵衛が父上を、お呼び申す詞を聞き、何事なるかと窺へば、

いの　お兄い様お二人が、刀を抜いてのお立合。どうなる事かと存じましたに、

お花　お怪我がなうて何よりで、

両人　お嬉しうござりまする。

半左　両人こゝで果し合ふも、深き所存あつての事、疾くより承知致しをる。

八郎　スリヤ両人が胸中を、

貫次　父には疾くより御承知とナ。

半左　それ故今日両人とも、親子の縁をきつたるぞ。

皆々　エ、（ト皆々驚き、）

へ思ひがけなき一言に、

お花　スリヤお兄イ様お二人の、御心をきるとおつしやりまするか。

半左　親子の緣をきつてやるも、望みを叶へさせんが爲。

八郎
賢次　何とおつしやります。

半左　それにつき兩人へ、申聞かす仔細あり。他聞を憚る事なれば、宗兵衞、あたりへ心をつけよ。

宗兵　心得ました。

へ前後左右を窺へば、半左衞門は威儀を改め、

ト謠への合方になり、半左衞門思入あつて、

半左　仔細と申すは外ならず、兄八郎はこの程より、高木原殿の道場にて、槍劍に心を委ね、日夜武藝を勵むのは、前將軍の御恩澤報ぜんといふ心組、天晴なる所存なり、又弟賢次郎は、幼年より蘭學を好み、よく外國の事情に通じ、語學も餘程出來る樣子、盆畫に作る蓬萊山、これを外國の山と見て、心の內に悅ぶは、渡海なして文明の國の事情を探らんため、これも天晴なる心底なり。今兩人の果し合ひ、優り劣らぬ手練と手練、篤と見屆け安堵せしゆゑ、今日限り緣を切り、兩人の望みを果さす所存、互ひに包む心中を、半左衞門に打明かせ、

へ星を指されて兩人は、しばし默してゐたりしが、親の情を無にせじと、八郎は進み出で、

ト半左衞門よろしく思入にていふ。八郎思入あつて、

八郎　かく御存じの上からは、何をか包みかくし申さん。舊冬上樣京都へ御進發あらせられしが、當春伏見街道にて、先手の者の爭論より、止むを得ずして戰端を開き、終に朝敵の汚名を蒙り、ひそかに江戸へお歸り後、寺入りなして御謹愼。程なく官兵御下向にて、江戸御城を召上げられ、今日水府へ御退身、數代御恩を蒙りし、臣下の身にて安閑と、これを見捨てゝをられませうか。然し朝廷へ對し奉り、弓引かんなどゝいふ、左樣なことはあらされど、せめての事に御代々の、重器を御守護仕り、まつた上野の御門主を、護り奉る存念にて、彰義隊へ加盟致す、深き意味ある拙者の心中、かくの通りでござりまする。

〽詞淀まず八郎が、わが心腹を打明かせば、

ト八郎よろしく思入にていふ。

半左　シテ、賢次郎が心中は。（ト賢次郎思入あつて。）

賢次　又私の心中は、御推量の通りにて、過ぎし嘉永年間に、アメリカの使節ペルリ氏浦賀港へ渡來なし、數回應接なせし後、和議を結びて歸國なし、横濱開港なせし後は、諸臣の心二つに分れ、一は無謀の膽力に、鎖國攘夷を主張なし、一は泰平打續き武威衰へし今日に、戰端開くは

よろしからず、開港和親が良策なりと、頻りに申す者あつて、私の情に拘るのみにて、ここと愛國の心にあらず、この二派一致なすは、文明進歩なせし後、されば手前は衆に先驅け、航海なして西洋の、百般事情を探りし上、日本の武威を外國へ、輝かさんわが所存、斯くの通りにござりまする。

〽兄に劣らず爽かに、包む心中物語れば、

ト賢次郎思入あつていふ。半左衛門は感心せし思入。

お花　スリヤ、八郎様は彰義隊へ、御加盟あつて、有志の方と共々に、上野へお籠りなされまするか。

いの　賢次郎様は外國へ、修業にお出でなされまするか。

宗兵　それは飛んでもない事だ。上野へお出でなさるのも、外國へお出でなさるのも、どちらも危ふい命づく。もしもの事でもあつたらば、水の泡になりますぞえ。

八郎　一つ橋様さへ水戸表へ、御退去なさる時節なり。

賢次　よしや父へ不孝になるとも、天下の爲には替えられぬ。

〽臍を固めし兩人の、心中父は感じ入り、（ト半左衛門思入あつて、）

半左　舊冬上樣御進發の節、お留守居の周防守殿、御城へ幕府の諸臣を集め、上樣の御名代にて、各々の存じ寄りを憚る事なく言上あれと、仰せありし其時に、朝臣又は無祿居住か、二つに決心せよとの趣。その後當春上樣が御歸城の折、又再び前の趣仰せ渡され、必らず心得違ひをせず、朝廷へ無禮なきやう、懇々の御說諭ありたり、その時我は歸農なし、今日樂に世を送れば、最早武士にあらざる某。然し悴等兩人共、武士の道を磨くゝ居るは、天晴なる事なるぞ、兄は德川の臣下を護りて彰義隊へ加盟なし、又弟は朝臣となり、御國の爲に力を盡す、何れを何れと言ひ難し、唯願ふのは兩人共、心得違ひを致さぬやう、御國に美名を遺してくりやれ。これのみ父の賴みなるぞ。

ト半左衛門よろしく思入。八郎も思入あつて、

へ父は悴、健氣なる、心を賞し言諭せば、兄八郎はうなづきて、

八郎　これまで厚き御敎育の御恩も報ぜず脫走致すは、人たる道に缺けてはゐれど、今父上のお諭しは膽にえりつけよく守り、心得違ひを致さぬ決心、これにつけても恨めしきは、伯父小代浦太殿、おいのが實の父ゆゑに、爰で申すも氣の毒なれど、一旦加盟致したながら、長閒よりの說諭に服し、退隊せしは卑怯の武士、彼等如き振舞は、八郎決して仕りませぬ。

賢次　一途に左様思はれな、退身ありしは卑怯にあらず。小代殿は誠の武士。長岡殿の御說諭は、順逆二つの道理にて、一旦與せし約を解き、退身ありしは御國の爲を思召しての事にこそ。

八郎　イヤ、退身なせしは臆病なり、善にせよ惡にせよ、一旦加盟なしたる上は、何處が何處まで約を變ぜず、意を貫くが大和魂。

賢次　イヤ、さう言はるゝは僻事なり、順を守り平穩に計らふが、これ愛國の誠を顯はす大和魂。

八郎　イヤ〳〵、假令逆にもせよ、主恩忘れず報ずるが、臣下の者の道なるぞ。

賢次　イヤ〳〵、それは一途の御料簡なり、後の榮えを思はねは、主へ對して不忠なり。

八郎　然らば我を不忠といふか。

賢次　如何にも不忠と申しまする。

八郎　さう聞く上は、先刻の勝負を、

賢次　お望みならば、

兩人　この場で決せん。

へ又も刀へ手をかけて、既にかうよと見えければ、お花おいのは縋り留め。

ト八郎賢次郎刀を持ちキッとなる。お花は八郎、おいのは賢次郎を留めて、

お花　マア〳〵お待ち下さりませ、折角最前父上がお留めなされてお二人の、お望み叶へんその爲に、親子の御緣をおきりなされし、思召しをおもどきなさるか。

兩人　サアそれは。

いの　兩虎爭ふその時は、必らず一虎は仆るゝと、物の本にもござりまする。父の御慈悲を思召さば、大事を控へし御身の上、どちらにお怪我があつてもならぬ、小事はお捨てなさりませ。

兩人　ムヽ。

〽理の當然に兩人も、實もと怒りを鎭むれば、聞きゐるおいのは打案じ、

ト お花兩人を留める。兩人も尤もと刀を下に置き控へる。おいの思入あつて、

いの　お二人さまのお爭ひも、元はといへば我父ゆゑ、久しくお歸りなさらぬは、如何なる事と存じましたが、今承りしお話では、この行末が案じられ、どうしたらようござりませう。

〽途方に暮るゝも道理なれ。半左衞門は默然と、手を拱いてゐたりしが、

ト おいの泣くを、お花宥める。この内半左衞門俯向きゐて思入あつて、

半左　シテ、兩人共望みあつて、臍を固めし上からは、最早此家にゐるまいな。

八郞　仰せの如く彰義隊へ加入の上は、今日にも東臺へ赴きて、諸臣と評議なす所存。

賢次　又某も朝臣の、御恩があらば今宵にも、神奈川表へ罷越し、身の方向を定むる心底。

半左　オ、兩人共に尤もなり。今日親子の緣をきれば、我へ孝行すると思うて、御國へ忠義を盡さうぞ。

八郎　その儀は心得、

賢次八郎　をりまする。

お花　男であらば私も、何れへかお附き申し、とも〴〵忠義を盡したけれど、甲斐なき女子の事なれば、お二人樣になり代り、後にお殘りなされし父上へ御孝行を盡しますれば、お心置なくお二人共、美名をお揚げなされませ。

八郎　男勝りの妹が心底。

賢次　承つて安心いたす。

半左　コリヤ、神前の神酒をこれへ。

宗兵　ハツ。（ト宗兵衛奥へはひる。）

半左　決心なせば兩人共、この家を脫走する身の上、人目を厭へば夜に紛れ、これよりひそかに立退きやれ。

八郎　寸善尺魔の譬もあれば、父の仰せに從ひて、

賢次　これより直に支度なし、お暇いたすで、

兩人　ござりまする。

ト兩人袴の紐を締め直す。

ヘ折から奥より宗兵衞お谷、神酒土器を携へ出で、

ト奥より宗兵衞、以前の神酒徳利をのせし三方を持ち、お谷土器をのせし三方を持つて來り、よき所に置く。

宗兵　持參致してござりまする。

半左　親子身内が一世の別れ、目出たく杯致して參れ。

八郎賢次　有難うござります。

半左　先づ身共が呑んでやらう。（ト半左衞門土器を取る。宗兵衞酌をする。これより床二挺になり）

ヘ幾歳も、家の榮えのかはらじと、土器とりて年毎に、祝ひし春に引きかへて、憂を重ぬる卯の花の、月を重ねし十七日、けふを名殘りに酌みかはす、酒もこの世の別れぞと、口にいはねど胸せまり、袖に涙の雨催ひ、汝も哀

れを身に知るか、ともに音を啼く時鳥、死出の田長といふ名さへ、心にかかる人々は、空に血を吐く思ひなり。

トこの内浄瑠璃に構はず、半左衛門呑んで八郎へ差す。八郎呑んで半左衛門へ返す。半左衛門呑んで賢次郎へ差す。賢次郎のを半左衛門、お花へ順杯にしろといふ思入。賢次郎心得お花へ差す。お花呑み、おいのへ差す。おいの呑み宗兵衛へ差す。宗兵衛有難き思入にて呑み、どうしようといふ思入。半左衛門お谷へまはせといふ思入。宗兵衛お谷へ差し、酌をする。この内立役へは宗兵衛酌をなし、女形へはお谷酌をなす。皆々これが別れ　いふ愁ひの思入よろしく、宗兵衛お谷はお流れを頂戴して、有難いが情ない事だと、兩人にてよろしく置く。半左衛門これらを見て愁ひの思入よろしくあつて、

半左　今よりしては武士を捨て、町人となる半左衛門、涙もろきは許してくれ。（ト鼻紙を顔へ當て泣く。）

八郎　君のため御國のため、是非なき事にはござれども、

賢次　子の本分を遂せぬは、父へ對して不孝の至り。

　　〽濟まぬことよと恩愛に、落涙なせば妹が、

お花　それはお案じなさいますな、及ばずながら三人前、御孝行を致しまする。

八郎　最早言ひ置く事なければ、
賢次　この庭口より東西へ、
八郎　別れ〳〵に、
兩人　立退かん。
〽西と東へ立出づれば、（ト八郎賢次郎上下へ行きかける。）
半左　兩人待ちやれ。
兩人　ハツ。（ト後へかへる。）
半左　これなる牡丹を見るにつけ、富貴の餞別遣はさん。
〽用意の金子を投げやれば、（ト半左衞門袱紗包みの金を、二人に投げやる。兩人取上げ、）
兩人　この金子は。
半左　用意に致して、はな〴〵しく、
八郎　鎧草の鎧を着るか、
賢次　名取草の名をあげるか、
半左　吉左右待つぞ。

兩人　ハッ。

ヘ親子の緣も切戸口、行くをしばしと引留めて、別れを惜しむ兩人に、振拂ひかね彳めば、

ト八郎は東、賢次郎は西へ行きかけるを、お花おいの引留め、宗兵衛お谷も共に名殘りを惜しむ思入よろしく、半左衛門思入あつて、

半左　思へば先頃上野にて、慶喜様が御謹愼中、詠じ給ひし一首の和歌。

兩人　なんとおつしやる。

半左　「國のため民のためとてしばし身を、忍ぶが岡に墨染の袖。」

ト八郎賢次郎思入あつて、

八郎　「國のため民のためとてしばし身を、」

賢次　「忍ぶが岡に墨染の袖。」

半左　このお歌をば忘れまいぞ。

兩人　ハッ。（ト本釣鐘を打込み、）

ヘ折から告ぐる鐘の音に、胸に時打つ思ひにて、立別れてぞ。

ト八郎、賢次郎行きかけ、思入あつて後へ戻り、半左衞門と顏見合せ、みな〲名殘り惜しむ思入。本釣鐘、三重にてよろしく。

幕

四幕目

上野黑門口の場
同山內戰爭の場
同御隱殿裏の場

役名 篠原順藏、天野八郎、桐野夏次郎、酒井宰輔、秋元虎之助、後藤鐵次郎、大久保軍右衞門、春日左衞門、田宮新八郎、佐藤作次郎、福岡散太郎、高木原源吉、同弟縫之助、同門弟、竹本次郎、新門の子分會津の長吉、手古雨乞の小吉、三助越後の音吉、三助越後の松藏、八代熊五郎、齊藤數馬、凌

雲院の徒弟隨念、官兵、脫走兵、新門の人足等。

本舞臺正面右の方新黑門。左の方九尺の黑門。左右柵矢來、內より荒木の板を打附けあり。上下揚通り石垣。上草土手、松の立木。柵矢來の前、黑塗りに胡粉にて入山形を記したる年番大名の天水桶。すべて上野黑門口の體。こゝに彰義隊の浪士六人、うしろ鉢卷鎧下、右の腕へ白布を目標に貼り附け、拔身にて立ちかゝりゐる。この見得、木を直し、二三發大砲の音して、後合方早鐘にて幕あく。

浪一　此黑門は我彰義隊にて、門の內外嚴しく固め、見透かれぬやう致しあれば、
浪二　敵手許まで繰込むとも、容易に內は窺はせまじ、
浪三　又南門は遊擊隊にて、內は嚴重に固めをれど、
浪四　隊長心を勞されしは、密告ありて分かりたり。
浪五　茅町裏なる高木原の邸內へ、備前の兵が繰込んで、
浪六　大砲を備へし由、不忍を差渡せば、その町數も僅かなり。
浪一　この長雨に明方より、昨夜にまさりて南風強く、殊の外味方の苦戰。
浪二　何分向うが見透せぬが、手許へ來るを、

皆々　心をつけん。

ト合方早鐘になり、東の花道より所化隨念、うしろ鉢卷尻端折りにて、茶碗と大藥罐とを持ち、同じく一幕目の三助松藏、夜籠へ竹の皮包みを澤山入れ、これを擔ぎ出で來り、

隨念　皆樣、息つぎに水をお上がりなされませ。

皆々　オヽ、これは忝い。（ト皆々水を呑みながら、）

浪人　其方は何れの徒弟ぢや。

隨念　私は淺草寺の弟子の内で、隨念と申しますが、武士でないから戰は出來ず、とあつて逃げるも卑怯と存じ、せめてもの御恩報じに、御武家方の息つぎに思ひつきし藥罐の水、どうぞ上つて下さりませ。

松藏　皆樣。水も上りましたら、辨當はどうでござりますナ。

浪〇　イヤ今朝根岸の元光寺で、食事をいたして出たばかり、まだ兵糧には及ばぬわ。

松藏　そんならこれから山内の、御本營へ行つて參りますが、昨日から昨夜も夜通し家のお上さんは握飯をこしらへ、彰義隊方は今朝明方、御本坊へ驅けつけて、それ〴〵手配りしてゐますので、駐屯する三隊は、とや〴〵山内へ運びますが、段々往來が出來なくなり、もうこれで後の辨

當は濟びきれまいと思ひますわえ。

浪〇　これは奇特な心掛だが、三助と申すは湯屋のことかナ。

松藏　ハイ、上野町の越前屋といつて、上野の御掃除方をして、その芥を焚つけにお貰ひ申してゐた、このお山では大恩受けた、內の親方でござりますわえ。

浪△　なにしろ此處は構ひ所、追々敵も近寄る樣子、もし流れ彈でも來ると危い、早く中へはひつたがよい。

隨念　假令彈丸に中つて死んでも、公方樣の御祈願所で、死ぬのは少しも厭ひませぬ。

松藏　オヽ、さうぢやとも／＼。わし等なども、これといつて誰に賴まれた譯でもないが、何となく氣が勇み、いくらか御用を足す心で、かうして働く上からは、命は少しも惜しみませぬ。

ト合方早鐘になり、花道より二幕目の齋藤數馬、若衆かつら鉢卷腹卷の鎧、附太刀にて、手槍を持ち、黑毛の馬上にて、竹笠にて出て來り、直ぐ舞臺へ來て、

數馬　各々御油斷あるな。唯今淸水門より不忍下谷と巡見いたし參りし所、はや根津御成道邊まで、敵軍おひ／＼繰込む樣子。合圖の發砲いたせしからは、程なく開戰になりまするぞ。

浪二　山內の手筈整ひし上、山王臺にも物見の者あれば、必らず油斷は致しませぬ。

浪三　唯だ困却致すのは、唯今までの強雨にて、向うが一向見え分かず、これにはほとんと弱りまする。

數馬　これより再び取つて返し、敵軍の様子を探り、猶も吉左右お知らせ申さん。

皆々　御苦勞にござる。

數馬　御免。

ト數馬引返して花道へはひる。これと一緒に東の花假道より、二幕目の三助、音吉、鉢卷湯屋の印半纏草鞋にて、背負ひ葛籠を背負ひ出て來り、

音吉　オヽ松藏。無事に來られたかナ。

松藏　オヽ音公か。よく此方來られたノ。

音吉　これで五度目だが、もうこれぎり向うへは行かれぬわえ。

隨念　此方衆は兵糧方だに、葛籠をどこから持つてござつた。

音吉　これはわしの計略だ。

松藏　計略とは何のこつた。

音吉　もう御徒士町邊は官軍で一杯になり、往來さへ出來ぬから、ハイ親類へ逃げて行くのでござり

ますござりますと、衣類と見せて脊負つて來た、葛籠の内は實は辨當、ちよつと出して見てくらッせえ。

ト隨念葛籠の蓋を明け辨當を一つ出し、

隨念　成程、中は竹の皮だ。

浪△　イヤ、町人にしては天晴心掛け。慌てゝはならぬぞ。心を落着け怪我せぬやう、山内へ持つて參れ。

音吉　それはお案じなさいますな。これ程の計畫を企てるこの三助。何で慌てゝよいものだ。

トきつと思入。この時南京玉二三發落ちる。音吉松藏びつくりして尻餅をつく。

浪□　イヤ、唯今の口の下から、左樣に恐怖してはならぬ。早く門内へまゐるがよい。

音吉　參りますとも／＼。コリヤうつかりしてはゐられぬわえ。

隨念　早う立たつしやれ／＼。

ト音吉松藏隨念、氣味わる／＼立上り、浪士二門外より呼び、內より開け三人はひる。又二三發南京玉の音する。皆々きつとなり、

浪○　いよ／＼發砲いたす樣子。各々心をつけられよ。

皆々　承知いたした。

ト合方バタ〳〵にて、花道より二幕目の春日左衛門、頬冠り草鞋掛け、松坂屋の日よけを雨除けに着て出て來り、直ぐ舞臺へ來る。皆々ためらふ。これにて件の日除けを脱ぐ。下は陣羽織たッつけ大小のこしらへ。皆々禮をなし、

浪一　いまだ往來が出來ますかナ。

左衛　往來はもう出來ん。御成街道より廣小路へかけ、薩州肥後因州の兵が繰込み、まつた湯島より來るは茅町へかけ、肥前肥後筑前の手にて來れば、この小止みを幸ひに拔刀にて、三枚橋まで總がゝりにて斬込まん。

浪一　唯今齋藤氏もお戻りあつて、敵陣の模樣注進あつて、あらまし樣子相分かれば、

浪二　有志が心は勇み立ち、御沙汰を待つて斬込む所存。

浪三　よくば是より、

皆々　打つて出でん。（ト皆々立かゝるを、）

左衛　イヤ、左樣に逸るは惡かりなん、小人數は最危ふし、門內の兵と一緒に斬込まれよ。

浪二　さういふ內に三橋向うへ、早や敵軍の間近くなりたり。

浪三　加勢は君よりお通じ下され。

浪四　各々、斬込まん。

皆々　ソレ。（ト皆々抜身にて逸散に花道へはひる、）

左衛　かく心の勇むのも、幕府を思ふ心中より。ハテ、頼もしき武士ぢやわえ。

トきつと思入。この時揚幕の内にて、二三發大砲の音する。これと一緒にバタ〳〵になり、以前の六人の浪士と齋藤數馬、馬上にて、官軍八人抜刀にて、戰ひながら出て來り、ジリ〳〵舞臺へ押して來り、この内口覆より南京玉を落し、入混りの立廻りあつて、トヾ兩黑門を開く。これにて數馬と浪士みな〳〵内へはひる。左衛門此後を相手にちよつと立廻り、トヾごつちやになり、皆々はひる。これにて兩方の扉ぴつしやりと閉める。凪の音を打上げ、これより床の淨瑠璃になる。

〽時しも皐月なかばにして、此年春の初めより、續く霖雨に小止みなく、籠る青葉の東叡山、朦朧として見えにける。

ト文句よき程に、知らせにつき、上下の袴腰と大箱の天水桶を殘し、黑門柵矢來を上下へ引いて取る。

本舞臺正面奥深に太鼓堂より通天、中堂邊を見たる切出しの中遠見。前側所々に杉の立木、よき所に高麗緣の疊十疊程積み重ね、この傍にゲベルの小筒八挺、組合せあり、すべて東臺山門内の模樣よろしく道具留る。ト文句の止め、床のメリヤスになり、前側一面本雨を降らし、よき程に上手の疊の蔭より、二幕目の酒井宰輔うしろ鉢卷陣羽織、襠下、甲州形裏金の陣笠、拔刀にて立上る。

ト あたりへ思入あつて、疊の上に立上り、拔刀を構へ、

へ樣子窺ふ霧隱れ、向うをきつと見透かして、

宰輔　氣を附けイ。

ト 號令をかける。この時上手より浪士右の腕に白布を結び、思ひ〳〵のなり、草鞋にてツカ〳〵と出て來り、整列する。宰輔これを見て、

解けエ。

ト 號令をかける。これにて皆々組合はしたる鐵砲を解き、二列になる。宰輔これを見て、

宰輔　肩へ筒。（ト號令をかける。これにて皆々鐵砲を抱へる。）

篭めエ。

ト 號令をかける。これにて皆々鐵砲へ彈丸を篭めかんをつける。この時日覆より南京玉を抛る。これにて宰輔初め皆々腹這ひになり、

睨へ。

ト號令をかける。皆々寢たる儘、下手の揚幕へ睨ひをつける。宰輔立上り、

撃てエ。

トこれにて一時に發砲する。この時調練太鼓、バタ〳〵になり、花道より秋元虎之助、鎧下陣羽織、義經袴にて、手槍を持ち、以前の敵兵六人と立廻りながら出て來り、舞臺へ來る。これにて舞臺の八人亂發になり、號令なしにて發砲なし、トヾ手許へ斬込むゆゑ、ゲベルの先にて突いてかゝり、立廻りあつて、虎之助浪士と共に敵兵を花道へ追ひながらはひる。

〽心ならねど黑門の、方を見渡し馳せ行かんと、息をついたる後より、豫て期したる一發に、

ト宰輔花道を見込み、心遣ひのこなしにて下手へ行く。この前よき時分より上手水箱の内より篠原順藏、赤熊の冠り物、黑の筒つぽ、だん袋、腕に錦切れを附け、草鞋背負ひ太刀にて半身出し、ゲベルにて覘ひをつけ、酒井宰輔が花道へ行きかゝる時、引金を引く。ドンと音して左の足へ當り、俯向きに仆れ、キツとなつて起上り、ちんばを引きながら舞臺へ戾り、上手を向きキツと見得。この内順藏又水箱の内へ身をかくす。

〽急所の傷手を事ともせず、

宰輔　確かに覘ひをつけたる發砲、扨は敵軍山内に、忍びゐると覺えたり。

へ豪氣の池田は太刀風切り、又追ひ行かんとなしたる折柄、躍り出たる篠原順藏、錦の光り輝きし、鋭き威勢に挑み合ふ、その勢は龍虎の爭ひ、

トこの内酒井宰輔キツとなり、上手へ行かうとする。この時立木の蔭より順藏、ゲベルの銃にて突き掛からうとして飛び出る。文句の止り鳴物になり、兩人ちよつと立廻りの内、花道より官兵の福岡散次郎、鎧下たツつけ、腕に錦切、拔刀にて走り出て來り、この中へ加はり三人立廻りの内、花道より以前の秋元虎之助戻り來て、順藏散次郎へ打つて掛り、立廻つて散次郎虎之助に追はれ、上手へはひる。後に宰輔順藏立廻りの内、本鐵砲の音して宰輔の右の肩へ當り、バツタリ仆れる。これと一緒に順藏も一緒になる。本釣鐘、床のメリヤスになり、順藏窺ひながら立上り、ゲベルを抱へ宰輔の樣子を窺ふ。

へ折柄烈しき木がらしに、ばら／＼／＼と散り來る武士。

ト文句の止りバタ／＼にて、下手より以前の浪士八人走り出て來り、順藏を目がけ打つてかゝり、これを相手に立廻りながら、花道へ追つてはひる。

へこなたは傷手にこらへ得ず、苦痛に自由もならざる所へ、木の間へあたる砲聲を、事ともなさず忠と義の、心動かぬ新門の、子分に名を得し合津の

長吉、息せきこの場へ馳せ來り、

トこの文句の内バタ〳〵になり、花道より會津の長吉更けたるかつら、鉢卷の上へ陣笠を冠り、臥龍隊大砲方の法被、三尺帶一本差し、素足へ草鞋がけにて、金葵の御紋、猩々緋二重ばれんの差物を擔ぎ、走り出て來り、宰輔につまづきびつくりなし、抱起して顔を見て、

長吉 ヤ、彰義隊の隊長ぢやアございませんか、此奴アしまつた事をしたなア。おい、旦那様。しつかりおしなせえ〳〵。

〽聲をかぎりに呼び生れば、

トこれにて宰輔心づき、キッとなつて花道へ行かうとするを、長吉留めて、

長吉 旦那、わつちでござります。會津の長吉でござりますよ。

宰輔 オヽ長吉か、殘念だわえ。

長吉 エヽ、わつちも忌えましくてなりませぬ。

〽無念面にあらはるれば、

宰輔 頼みとなせし南門より、官軍込み入る上からは、所詮この上見込はない。コリヤ長吉、斯くの如き我が深傷、これにて切腹いたすから、汝わが首を討つてくれ。

長吉　エヽ。（トびつくりなし、）モシ／＼そりやアいけません、五十になつても喧嘩なら、若えものよりはな棒で、火の中へでも飛び込みますが、お武家の首が何で斬れますものか。そんな事は堪忍しておくんなさいまし。

宰輔　今際の其方へ頼みゆゑ、どうでも致して首を討ち、知れぬ寺院へ埋めてくりやれ。

長吉　そりやアどんなにしても埋めますが、斬る事はどうも出來ませぬ。

宰輔　エヽ、我が恥辱を思ひくれぬか。

〽苦痛ながらに勵ますれば、

長吉　臥龍隊の大砲組へ使つてお貰ひ申したからは、これでもわつちは侍だが、敵なら知らず味方の首を、討てといふのは何たる事か。こんな苦しい事はねえ。

宰輔　右の腕を打拔かれ、どうしても刀が持てぬ、もうよい、この儘で斬つてくれ。

トこの内南京玉をはふる。宰輔あせり、

サア、斬らんか。

長吉　エヽ、今斬ります／＼。

宰輔　山王臺もはや敵軍、恥辱になるぞ、斬つてくれんか。」

長吉　ヘエ、斬ります。

宰輔　エヽ、臆病者めが。

ヘはつたと睨み左手にて短刀取上げ右手の方、がばと突立てきり／＼、最期の程ぞ勇しき、長吉足の踏所なく、

トこの内宰輔左手にて短刀をとり、鞘を口にくはへ、中身を拔き、左にて右の脇腹へ突込み引廻す。長吉これを見て顫へる。この内宰輔ばつたり倒れる。こゝへ南京玉を投げる。これにて長吉飛上り、彈丸をよける事などあつて、

長吉　此奴ア所詮近づけねえ。

ヘ心を定めて長吉は、討たんとすれど手先の狂ひ、引くに引かれぬ思ひ出に、とつおいつなす其中へ、聲もかれ／＼走り來る。

トこの内長吉宰輔の刀を取つて首を切らうとして切れぬこなし、これにて思ひ切つて鋸挽きにする。よき程に東の花道よりお手古雨乞の小吉、火事頭巾、春日山の法被、股引白足袋、草鞋がけにて、鈴蟲の鐵棒をかい込み、以前の所化隨念、幕あきの大藥鑵を冠り走り出て來り、長吉の首を挽くを見てびつくりなし、兩人仰向けにひつくりかへる。長吉一心に首を挽く。小吉起上りキツとな

つて、

小吉　臥龍隊へ味方をすると、立派な事をいやあがつて、裏切りをする卑怯な野郎。ウヌ、この鐵砲で打殺すぞ。

ヘ打たんとなすを飛退きて、

長吉　カウ待て〳〵、成程、味方の首を切るので、さう思ふのは尤もだが、こりやア此處で打倒れた隊長の遺言で、首を持つて此處を落ち、寺へ葬つて上げるのだから、決して裏切りをするのぢやアねえ。

小吉　それぢやアきつと、裏切りぢやアねえのだナ。

長吉　おれも新門の子分だ。そんなケチな事をするものかえ。（トその内隨念半輔の死骸を見やり、）

隨念　オヽ、しかも二ケ所の鐵砲疵、ヤア、腹を切つてゐなさるわえ。

小吉　ムヽ、此奴アおれが早まつた。こりやア裏切りぢやアねえ。

長吉　運惡く二發喰つて、もう叶はねえと諦めなすつて、悔しまぎれに左の手で、逆に腹を切りなすつたが、おらアゾツとしてしまつた。

小吉　さういふ事なら少しも早く、首を持つて落ちるがいゝ。おらア骸を隱して上げよう。

長吉　ムヽ、それぢやアさうしてくれ。

〽義心は強き兩人が、かくす死骸も宿世の緣、口に出さねど胸の内、空晴れやらぬ思ひなり。

トこの内小吉隨念手傳ひ、宰輔の死骸を下手へ荷ひ行く。長吉は斬首の鉢卷をほどき、これをひろげ首をくるみ、腹へ卷からとして心づき、差物のばれんの中へかくして結びつけ、この内小吉隨念出て來り、

小吉　サア早く落ちて、葬むつて上げねえ。

長吉　オヽ合點だ。（ト差物をかつぎ下手へ行くを、）

小吉　オイ、それ彈を氣をつけねえよ。

長吉　ムヽ、大丈夫だ。案じるねえ。

〽勇み進んで立出づる、向うに風を切つたる一發、

トこの内隨念は又藥鑵を冠る。小吉は上手へはひる。この時本鐵砲の音して、長吉の擔いだる差物の葵へあたり、微塵にこはれる。これにて長吉たぢ〳〵となり、差物を持つたまゝ仰向けにひつくりかへり、直ぐ起上つて、

長吉　ヘ長吉聲を顫はして、

エ、コレ、遊撃隊の差物で、葵の御紋が捨てゝあつたを、粗末にしちやア勿體ねえと、こゝまで大事にして來たも、御紋へまともにあたるからは、此奴ア所詮追付かねえか。エ、癪に障るなア。

ヘ無念面にあらはるれば、

ト隨念この內うつむきゐて、顏を上げ

隨念　こなたの志しは感心だ、この御紋はわしが拾ひ、粗末にならぬやう埋めるから、其首を取られぬやう、早く行かつしやるがいゝ。

長吉　ムヽ、よくいつてくれた。それでは粗末にならねえやう、お前に頼んだぞ。

隨念　合點だ〳〵。

長吉　ドレ、敵の中を切拔けにやアならねえ。

トメリヤスにて、ばれんの內より首の包みを出し、これを抱へ花道へ行きかゝる、隨念は差物の壊れしを集め、ばれんをちぎり取り、これにて結ぶ。この內南京玉を投げるゆゑ、兩人びつくりしては飛び歩く。ト隨念は上手の杉の立木へ登り、葉の間へ顏をかくす。長吉は花道へ行かうとして

彈丸に恐れ、行かれぬこなしにて、舞臺へ戻り、首をはすに背負ひ、有合ふ疊を一疊とつて兩人にてさし、彈丸をよけながら花道へはひる。この内一發隨念にあたり、ばつたり舞臺へ落ち倒れる、これにて杉の立木へ乘りになる。こゝへ小吉出て來り、これを見てびつくりなし、

小吉　此奴も到頭やられたか。

ト死骸をかゝへ上手へはひる。やはり合方早鐘の音にて、花道より高木原源吉、うしろ鉢巻下着の襷、袴股立草鞋、講武所方のこしらへ、引はだの刀拔刀を兩の手に持ち、先頭に龜岡嶽次郎、貫兵八代熊五郎と立廻りながら出て來り、舞臺へ來てきつと見得。誂への鳴物になり、高木原源吉兩人を相手に兩刀の立廻りあつて、この内花道より壽あきの浪士六人走り來り、この中へ加はり立廻つて、嶽次郎兩人を上手へ追込む。こゝへ花道より高木原鐘之助、うしろ鉢巻、鎖の素袷、袴股立大小、草鞋、竹本次郎、若衆かつら、鉢巻、劍術の胴、袴股立にて出て來り、

先生、御無事なりしか。

源吉　オヽ、車坂より坂本へ切つて出でんと致したが、敵充滿して出る事叶はず、又も此處へ引返したが、兩人共危ふいから早く當山を落ちてしまへ。

鐘之　兄上のお詞ながら、日頃の御恩を報ずるは、則ち今日唯今なり、彈丸にて死したら知らず、敵には一命渡さぬ所存。

次郎　先生、何卒お指圖下され、何れの手にても助太刀なし、見事に戰ひたうござります。

源吉　日頃稽古に身が入るゆゑ、天晴なる心立、我れもそれは感心致すが、何にも致せ彈丸烈しく、迂闊に往來も出來難い。チト見込あれば、暫く待て。

兩人　ハツ。（ト合方バタ〳〵になり、花道より以前の秋元虎之助出て來り、）

虎之　オヽ先生、これへござられしか。

源吉　オヽ秋元氏、黑門口の模樣、如何でござるか。

虎之　いけません、破れました、僅かの間に切込まれ、拙者下寺口の防戰なす内、三橋より雁鍋岡村の邊に出火なし。その虚に乘じて破られましたが、かやうに殘念な事はござらぬ。

源吉　エヽ、それでは愈々破られしか。

〽[illegible]さたゆみどつかと坐し、思案途方に暮れにける、折柄敵の虎口をのがれ、馳せ來る浪士の落合つて、

トこの中源吉ぢつとなり、無念の思入あつて、樽の酒を呑みゐる。この内上手より以前の春日左衞門出て來り、

左衞　各々方、御無事でござるか。

虎之　オヽ、春日氏も傷を負ひしか。

左衛　南門の内に止まり、血戰いたしをつたるが、殘念なは山下より、打上げたる砲彈にて、山王臺の社を燒き、一圓の猛火となりしが、所詮これではもういかんぜ。

虎之　最早亂軍となる上は、互ひに覺悟が肝要なり。先づこの人數にてしめし合はさん。

〽流石勇士に事ともせず、各々地上に坐を占めて、

トみな〳〵あたりへ思入あつて下にゐる。

〽諜じ合さんその所へ、又も打合ふ修羅道の、劍の音の凄じく、

と文句の止り、合方にて、花道より後藤鐵次郎、うしろ鉢卷、鎧下、義經袴、所々ちぎれ、手負ひにて、敵兵四人と立廻りながら出て來る。舞臺のみな〳〵花道を見込み拔刀を構へる。この内舞臺へ來り、ごつちやになり、四人を上手へ追込む。これにて鐵次郎どうとなるを、皆々介抱なして、車座になり、

鐵次　各々、殘念でござる〳〵。

左衛　御尤もだ。推察いたす。

鐵次　シテ我隊長には、お逢ひなさらぬかナ。

左衛　我が活氣隊が車門より當山へ繰込む砌、吉祥閣の横手にて兵士を引率せられし時、拜顔得しまま其後は逢はず、何れに指揮なし在するか。

虎之　はや隊長には、今頃は御存命ござるまい。

鐵次　ナニ、御存命ござるまいとは。

虎之　大隅殿が最初より、心痛なされし黑門口。我もあれに加はりをりしが、廣小路邊の出火にて、三橋邊が一向分らず。殊に南風烈しくして、篠つく强雨に見渡せず、よもやと思ひし其内に、拔刀隊に斬込まれ、忽ち黑門破れてござる。

〽聞くに手負は齒嚙みをなし、

鐵次　本願寺を初めとして、御本坊凌雲院と、再三再四會議の度毎、互ひに心を勞せしが、はや黑門破れし上は、拙者は自殺と覺悟せり。

左衛　それは身共も御同意なり。見受けし所餘程の深手、御心中お察し申すが、しかし拙者は其身の無事ゆゑ、自殺いたすは不本意なり。

源吉　如何にも、一命だにあらん限りは、わが佩刀の續かんだけ、敵を引受け防戰なさん。

〽刃風を切つて腕試し、

鐵次　まだこの分では兩刀で、五百や千の敵兵は、確かに討てるでござらうわえ。

それ聞く上は一つの安堵、われは所詮覺束なければ、何卒君等は手分けして、御本坊を御守護下され。

縫之　それが一の目的なれば、然らば我々左右へ分れ、

次郎　御安危伺ひ、

兩人　奉らん。

虎之　もし御殿が危險とあれば、北の山手の境を破り、

〽言はんとせしが四邊を憚り、（ト皆々囁き合ふ）

源吉　然らばこれより、二人を連れ、

鐵次　何卒御守護を、

三人　心得た。

〽忠義に凝つたる三人は、右と左へ分れ行く。

トこの内源吉は上手、縫之助と次郎とは下手へはひる。

〽又もやこゝへ向うより、おひ／＼集まる味方の武士。

トこの内鐵次郎殘念なる思入。花道より幕あきの齋藤數馬、右の腕を討たれ　鎧ちぎれ〳〵になり、手負ひにて馬に乘り、東の假花道より田宮新八郎、筒袖だん袋、手負ひにて刀を杖につき、双方一時に出て來り、花道にて舞臺を見やり、

新八　地。（ト合言葉をかける。）

左衛　月。

數馬　賢。

虎之　仁。

と合言葉して舞臺へ來り、この時數馬どうと落馬する。皆々介抱する　馬は下手へはひる。

左衛　オ、田宮氏か。

鐵次　齋藤なりしか。

左衛　齋藤氏、數馬の注進、御苦勞でござるぞ。

虎之　双方殊の外手を負うたが、しつかり致しやれ。

左衛　シテ、黒門の樣子は如何に。

數馬　初發黒門の破れし後は。

へ三枚橋より切込みたる、藝州勢の勢ひ猛く、馬上ながらに戦ひしが、
初めに同志の眞先駆く、三橋向うへ進軍なせしが。
へ御成橋に仲町の、横合より打掛け〳〵、不意をうたれし彰義隊、篠つく雨
に刃の稲妻、てうてうてうと打合ひしが、
前後を挟む大軍に、所詮防戦なし難く、
へ此事味方へ知らせんと、鎧の袖の雫を拂ひ、青葉隠れに不忍より、穴の稲
荷へ登りしうしろへ、飛び来る彈丸に腕を打たれ、
へ事の故由物語れば、田宮も血汐に咽喉をうるほし、
やう〳〵これまで参つたり。

新八　身共も唯今車坂より、見明院へ赴く途中、はや寛王院の玄關口へ、坂平より討込んだる。
へ敵の彈丸雨霰、行きつ戻りつ何これしき、義は金鐵の內兜に、
田宮殿の御奥屋敷まで、間近く寄らん所存にて。
へ有合ふ疊おつ取つてひらりと退いては右へそれ、右へ退けては左へそれ、

〽竹の臺まで進みしが、

いかにも烈しき彈丸に、今は異なき中堂も、所詮見込の附き難し、

〽取つて返せし山王臺、最早敵地に入り難く、無念面にあらはれたり。

ト皆々キツとなり、

虎之　スリヤ、山内も程なくして、

鐵次　敵の巷と、

皆々　なりゆく事か。

〽猛き心の武士が、胸も張り裂くばかりなり。

數馬　この上は一手なり、君を守護する外はござらぬ。

鐵次　各々方は當山を、落去と決心下されて、我等に構はず、

數馬
新八　御本坊へ。

左衛　イヤ、潔き御覺悟。然らば秋元氏、各々の自殺お見屆け下されい。

虎之　ム、承知いたした。然して後に直樣後より。

左衛　各々の誠忠、恐れ入つた。

〽勇み進んで出でゝ行く、又もやこゝへ馳せ來る壯士。

トこの内左衞門手負を見てちよつと愁ひの思入あつて、氣をかへ、三重にて逸散に下手へはひる。

入替つて上手より佐藤伴次郎、うしろ鉢卷襷の着込、稽古袴無腰、やはり手負にて槍を持ち出て來り、

伴次　何れもお悦びなされ〳〵。

虎之　何事でござるナ。

伴次　最早御本坊には誰もをりませぬぞ。

鐵次　ヱヽ、スリヤお立退きなされしとナ。

皆々　チエヽ忝い。

〽人々安堵の思ひをなし、苦痛をこらへ山内見渡し、

トこれにて皆々ちつとなり、

虎之　三百年來泰平の、打續きたる徳川の、

新八　淸き流れを汲みし身も、時至らねば報國の、

伴次　その企の果さずして、この東臺の屍となり、

數馬　十六年を一期として、慶應四年五月今日、
鐵次　澤長岡が說得に、順逆二道を說かれしが、
虎之　用ゐざりしも武士の意地。
新八　今日此處に及びしも、
鐵次　是非もなき世の、
皆々　成行ぢやな。

〽勇む心のたつか弓、弦の張さへたゆたうて、しめり勝ちなる五月雨、落ちて流れて不忍の、池もあふるゝばかりなり。（ト皆々手を取交し、愁ひの思入。）

鐵次　賴むはこの上、彼方の、
新八　御先途、
四人　願ひ奉る。
虎之　承知いたしした。

〽あの世を急ぐ武士が、迷ふ道さへ露もなく、勇み立つたる劍の切先、健氣

の程ぞ見えにける。

トこの内鐵次郎短刀にて切腹する。新八郎咽喉へ突立てる。伴次郎無腰ゆゑ手槍を踏折り、これで咽喉へ突立てる、數馬咽喉へ突立て、その刀にて我が顏を十文字に斷ち、倒れる。この内虎之助自殺を見屆け、ぢつと思入。文句の止り、早鐘メリヤスになり、花道より幕あきの三助晋吉、竹竿の上へ蚊帳をかぶせ、これを振り廻り出て來り、花道にて、

晋吉　ヤレ恐ろしや〳〵。この戰爭に出て働くは、お上のお爲と思つて出たが、どこも彼處もどんどんと、鐵砲丸の音ばかり。見る間に山王樣のお宮も燃え出し、（ト身顫ひをなし、）ヒウー〳〵と天窓の上を、彈丸が飛ぶので眼の球が、引くりかへつて膽玉が、これではでんぐりかへりさうだ。

〽足もわな〳〵三助は、怖氣立つてぞ歩き寄り、

ト舞臺へ來り、みな〳〵の死骸を見やりびつくり尻餅をつく。

虎之　コリヤ〳〵、其方は何れの人足だ。

晋吉　イエ、人足ではござりませぬ。御徒士町の湯屋でござりますが、このお山のお味方する氣で兵糧を運びましたが、なか〳〵烈しい戰に、辨當をあがらつしやる間もなく、到頭黑門が破れ

ましたので、もう逃げなければなりませぬが、これから何處ぞの穴を見つけ、もぐり出る氣でござります。

虎之　ム、、然らば德川家お味方の者ぢやナ、それぞ幸ひこの死骸、手傳つて向うの森へ、かくしてくりやれ。

晋吉　エ、。

心も空に見廻して、（ト傍へ行き、死骸を見てびつくりなし、）

これは皆樣、お死になされましたナ。

虎之　屍を置くは殘念ゆゑ、早うかくしてくりやれ。

晋吉　これはちつと、氣味が惡いが。

虎之　エ、臆病者め、打た斬るぞ。

ト峰打にする。晋吉ハ尻餅をつき、體を撫でゝ見やり、何ともなきゆゑ、

晋吉　アヽ、斬られたのではなかつたか。（ト虎之助を見やり下手へ飛び退き、）唯今片附けますから、御勘辨願ひまする。（ト虎之助あたりを見廻し、）

虎之　新門々々。

ト　これにて下手より新門の人足、新門の印半纏、股引、草鞋がけにて出て來り、

子分　ヘイ、何御用でございます。

虎之　この死骸を片附けるに、手傳つてやれ。

子分　ヘイ、畏りました。

ト音吉と共に片付ける。この内虎之助身支度をしてゐる。音吉は念佛を唱へながら、氣味わる〳〵一人々々死骸を擔ぎ、上手の蔭へはひる　音吉この度毎にびつくりするをかしみよろしく、

〽又もや聞ゆる人聲に、秋元きつと向うを見やり、

ト虎之助、東の花道附際にて、揚幕を見込み、

虎之　これより山王臺へ赴いて、花々しき働きなし、十六番隊の手並を見せ、君に一命捧げ申さん。

〽阿修羅王の荒れたるが如く、猛火の中を事ともせず、山王臺へと走り行く。

ト虎之助逸散に東の花道へはひる。子分上手へはひる。この内音吉まご〳〵して、

音吉　どつちへ行つたら逃げおふせるか、人並よりも大きな體、かうヒウ〳〵飛ばれては、きつとあたるに違ひないわい。

〽心も空に音吉は、沼田も同じ山内を、しどろもどろに踏み迷ふ。折柄響く大砲に、

卜この内音吉あちこちと逃廻る、文句の止り、大砲の音する。これと一緒にひつくり返る。

こりやア魂げた事になつた。

〽震へる足を踏みしめて、腰もがた〳〵逃げ行けり。

卜音吉よろしくあつて、花道へはひる。又一發大砲の音する、

〽湯島臺より打込みし、一里砲にて忽ちに、今迄ありし樓閣も、あがる猛火の凄じく、

卜この寺正面の中堂、通天、太鼓堂へ一面に火の手上る。文句の止り、上下二挺の合方へ早鐘の音、南京玉を使ひ、花道より大野八郎、うしろ鉢巻、筒袖、義経袴、草鞋、抜身、桐野敬次郎、紫合の鉢巻、紺の筒ツぽ、だん袋、肩に錦切をつけ抜身にて、両人立廻りながら出て来り、花道にてちよつと立廻つて左右へ分れ、

八郎　我に向ふは何奴なるぞ。

敬次　參謀局係吉之助の附屬、桐野敬次郎なり。

八郎　ム、、我は彰義隊中、天野八郎なり。
敬次　イデヤ手柄を致してくれん。
八郎　何を。

ト立廻りながら舞臺へ來り、双方へ分れきつと見得。これより大砲の音をあしらひ、雨の烈しき立廻りあつて、トヾ上下より高足、以前の浪士出て來り、ゲベルにて突いて掛る立廻り、この内知らせなしにこの道具廻る。

本舞臺、五尺程の高足、上手一面苫矢來この下一面に伏せの草土手、平舞臺の下手丸竹の竹藪、前側上より廻りたる割矢來、上下所々に杉の立木澤山。すべて錦隱殿裏の體。東の三重にて道具留る。

へ降りしきる小止みを松の木下闇、敵か味方か亂軍に、こゝを先途と戰ふ武士。

ト文句の止り、誂への合方、大砲の音をあしらひ、割矢來の内へ、以前の大勢立廻りながら出て來り、双方入混りの立廻りあつて、トヾ矢來のよき所ミリミリと壞れ、敵味方ともバラバラと平舞臺へ落ち、上下へ逃つてはひる。この中へ天野八郎桐野敬次郎組打にて土手を辷り落ち、双方平舞臺

にて組打の立廻り、よき程に花道より大久保軍右衛門、うしろ鉢巻、鐺下、陣羽織、義經袴、大小草鞋、東照宮と記したる幟を背負ひ、手槍を持ち走り出て來り、敬次郎へ槍をつける。敬次郎これをあしらふ。トゞ八郎下になるをはね返し、敬次郎下になる。軍右衛門これへ槍をつける、こゝへ上手より以前の八代熊五郎、福岡敬次郎に四人附添ひ拔身にて駈付け來り、八郎、軍右衛門に打つてかゝり、双方一時の立廻り。この内八郎枝の垂れし丸竹へ飛びつき、其儘うしろへ飛込む。ソレといつて四人下手へ追ひかけはひる。この途端本鐵砲の音して、軍右衛門の胸先へあたり、俯伏せに倒れる。敬次、打たうとしてためらふ。

〽浪士は血汐の面を見ひらき、

ト熊五郎敬次郎軍右衛門を起す。軍右衛門血汐になり、

軍右　官兵の貴所に申入るゝ事あり。

敬次　何事なるぞ。

軍右　烏合の勢に屬きかれ、かゝる場合に至りしが、全く錦旗に對し奉り、發砲せしに非ざれば、偏にお含み下されい。

〽今際に殘す一言に、思はず浮む涙をこらへ、（トこれを聞き敬次郎ぢつとなり、）

敬次　その詞、總督の許及び參謀へ、桐野敬次郎確かに傳うるでござる。

軍右　チエ、忝ない。

へ苦痛の中に安堵の思ひ。三十五年を一期にて、惜しき花をぞ散らしけり、

桐野死骸を打見やり、（ト軍右衛門落入る、敬次郎ぢつとなり、）

敬次　現在胸を打たれながら、錦旗に對する一言は、あつぱれ將たるこの振舞、惜しき武士を失うたわえ。

へ折柄馳來る一個の武士。

トバタ〳〵になり、花道より官軍一人竹の子笠、袴にて走り出て來り、

官軍　桐野氏、御油斷あるな、唯今三河島の方へ志し、出家を守護なす落人あり、此段密告に及びまする。

敬次　ナニ、出家姿で落ち行きしとナ。

熊五　それぞ正しく、目指す御方。

皆々　ソレ。（トッカ〳〵と下手へ行くを、）

敬次　ア、コレ、暫く待つた。

熊五　デモ外ならぬ、

熊五
敬次　事件ゆゑ。(ト敬次郎の傍に下にゐる。敬次郎ちつとなり、)

敬次　三河島より戸田へ登らば、道中無事に會津まで。

皆々　エ。

敬次　イヤ、合圖を致すを(ト拔身の血をふるひ)待つたがよい。

〽企の程ぞ、

ト向うを見込み辭儀をする。三人不審の思入。三重、風の音にてよろしく、

トあと早鐘、風の音にてつなぎ、直ぐ引返す。

幕

五幕目

三河島不動前の場

役名　越前屋佐兵衛、執當白王院、非人ぼうだら傳次、春日左衞門、三助越後の晉吉、同會津領の松藏、上野の衆僧頓念、官兵等、高木原源吉、同弟縫

之助　上野の信光仁、高木原門弟竹本次郎等。

本舞臺一面の平舞臺、後ろ奥深に三の輪辺より千住を見たる遠寄の遠見。後に打返す誂へあり。上の方に石の道知べ。この上に坐像の不動尊。前に納め立の石、左右に古びたる納め幟。下の方雲疊、ずつと上下植込の葉物にて見切り、すべて三河島田甫不動前の體。こゝに官兵六人捕手の棒を持ち、立ちかゝりゐる。下手に前幕の三助松藏、縄付の上へ菰をかぶせしを置き、両手をついてゐる。この見得、三味線入り一つ鉦にて幕あく。

官○　コリヤ、其方はどこへ通る。

松藏　ム、――。

官○　コリヤ、物を申さぬか。かくし立をすると相成らんぞ。何れの者で何處へ通ると、詳しく申せ。

松藏　ム、――。（ト松藏口が利けぬといふ仕方する。）

官△　何ぢや、唖か、早く手眞似を致せばよいに。

官□　こちらへばかり口を利かせ、餘計な手數をかける奴ぢや。（トこの内松藏は會釋をする。）

官○　コリヤ、その内は何ぢや。

ト手眞似にて開く。松藏大工のこゝな打ちをして、こつぱといふ眞似をする

官○　何だ、大工か、その内を見せろ。（トこれにてこゝな打をしてはあやまる、）イヤ、改めんければならん。

ト二人職人を押へつけ、一人箱を取つて内を見る。この中に前幕の竹の皮包澤山ある。

官□　コリヤ、木端と申したが、皮包みの辨當があるが、これはどうしたのぢや。

トこれにて職人ふるへながら地上へ置く。

官○　何ぢや、大工の辨當だ。中々御馳走でござるナ、江戸の大工は斯くの通り、竹の皮包みの辨當を用ひますかナ。

官□　それはちと不審の辨當でござるが、中は何たものでござらうかナ。

ト官人寄へ來る、一人箱の内の皮包みをこなし、中はり喜の行方にて、上手より眞似して音吉、けれども人箱の皮包の稲を二つ、武藏坊に一刺で、何年職三尺なりにて出て來り、見事ある〳〵

下手へ行き掛るを、

官○　コリヤ〳〵待て。

音吉　へイ、誰に御用でござりまする。

官○　其方は何處の者だ。
音吉　ハイ、私は根岸の者で、小塚ツ原の天王前まで、出前を持つてまゐります。
官○　出前とは何ぢや。
音吉　ヘイ、蕎麥の出前でございます。
官△　ムヽ、こゝへ見せるがいゝ。
音吉　ハイ。（トもぢ〳〵してゐる。）
官△　エヽ、見せんか。（トけんどんを明けようとして、蓋も何もなきゆゑ、）コリヤ、中に何もないではないか。

ト音吉ふるへゐる。下手にて松藏、この聲を聞きつけ、すかし見て、うつかりして、

音吉　ハヽア、それでは此處へ參る道で、皆振り落してしまつた、コリヤ駄目エしましたわえ。
松藏　オイ、音公ぢやアねえかの。
音吉　エヽ、松公も來てゐたか。
松藏　今ふん捕まつたよ。
官○　ヤ、啞が物を申すとは、此奴僞だナ。

音吉　ヤア大變だ。

逃げにかゝるを官軍捕へる。

官△　逃げるには及ばん、一應調べをすればよいのだ。

松藏　ヘイ……。

官○　コリヤ、其方はよい、早くまゐれ。

松藏　ヘイ〳〵。

ト音吉慌てゝ件の箱を擔ぎ、一目散に花道へ逃げてはひる。

松藏　旦那方、どうぞお助けなされて下さりませ。

官△　イヤ、僞りし廉一應取調べし上、放免いたし遣はす。

松藏　それではどうもいけますまいか。

官□　コリヤ其の籠擔ぎ、一緒に參れ。

松藏　ヘイ〳〵。

トやはり右の合方にて、松藏氣味わる〳〵件の飯籠をかつぎ、官兵附添ひて上手へはひる。合方替つて、花道より上野の僧四人、うしろ鉢卷、衣のつゆをとり、縄襷、尻端折り、草鞋にて、あめ色

網代の乗物を舁き出て來り、舞臺へ來る、この時以前の見張六人槍を持ち出て來り、

官〇　ソレ急々。

ト乗物を止める。これを四人行かうとする立廻り。トゞ駕籠を下ろし、官兵四人駕籠の戸をあける、内より白玉院、茶色紗の衣の露をとり、白の單衣、素足草鞋がけにて、短き鐵の棒を錦の袋に入れしを持ち、片手に律宗染の網代笠を提げ出で、兵士を相手にちよつと立廻り。よき程に花道より前幕の高木原縫之助、同門弟、竹本次郎、うしろ鉢卷襷がけ拔身にて馳付け來り、

縫之　私助太刀仕る。

次郎　早くこの場を落ち給へ。

白玉　奇特の助太刀、忝ない。

トこれより兩人からみ、烈しき立廻り。この内白玉院うしろの薮へ脱れる。こゝへ花道より僧頓念茶色麻の衣、白の單衣にて走り出て來り、この中へはひり、まご〳〵する。これを兵士白玉院と心得捉へる。

頓念　どうさつしやる〳〵。

トいふを矢庭に駕籠の中へ押込み舁き上げる。これを僧、縫之助、次郎支へながら下手へはひる。あと木魚鐘誂への合方、蛙の聲になり、薮疊の内より白玉院件の笠を冠り窺ひ出て、上下を見廻し、ほ

つゝ思入。合方きつぱりとなり、東の歩花道より春日左衛門姿を變へ先に立ち、次に二幕目の湯屋越前屋佐兵衛好みのこしらへにて、僧光仁、黒の麻衣、白の單衣、白綸子の胴衿、白足袋、草鞋、律宗の網代笠を冠り、これを佐兵衛背負ひ、後より前幕の高木原源吉頬冠りやつしなり尻端折りにて、何れも無腰にて、みな〳〵竹の杖をつき、窺ひ〳〵出て來り、花道にて舞臺をすかし見やり、

左衛　御執當(こしつたう)かナ。

白玉　オヽ、先生(せんせい)ぢやナ

源吉　わしもをります

白玉　早(はや)く〳〵。

トこれにて四人舞臺へ來り、光仁をおろし、堂の前の線香立の石へ腰をかけさせ、三人下手にゐて、

源吉　嘸(さぞ)御窮屈(ごきうくつ)にいらせられん。

左衛　長(なが)の時化(しけ)の出水(でみづ)にて、往來(わうらい)も腰(こし)きりありしを、お負(おぶ)ひ申(まを)してこれ迄(まで)參り、嘸(さぞ)草臥(くたぶ)れた事(こと)であらうナ。

トこの内白玉院佐兵衛を見やり、

白王　其方ャ何者ぢや。
佐兵　へイ、湯屋でござります。
白王　ハヽア、遊撃隊の者か。
佐兵　イエ、上野町の越前屋佐兵衛と申します、湯屋でござります。
白王　ナニ町人か、かゝる難儀な場合をお供申し、奇特な者ぢやノ。
佐兵　ハア。
　トこの内白王院、左衛門と思入。左衛門心得、懐中より安政小判を三十枚程紙に包み、
左衛　これは些少ぢやが、常座の褒美に取つて置きやれ。
佐兵　難有うはござりまするが、私は金が欲しくツてお供したのではござりませぬ、不断御恩になりますから、かういふ時の御恩返しと、命掛けで参りましたが、金なら少しは此方から、御用立てる氣でござります。
源吉　イヤ、いつも佐兵衛の俠氣には、感心いたす事ぢやわえ。
左衛　各々、感心でござるナ。
　トこの内光仁、草鞋の紐解けてゐるゆゑ、結ばうとして結べぬこなし。

光仁　如何いたして結びてよきや。

佐兵　ハヽ。

ト佐兵衞、鞋の紐を結ぶ。この内白王院花道附際へ行き、向うを見込む。源吉、左衞門は上手と束の方を心附け、元の所へ來る。この内光仁愁ひの思入。白王院これに心附き、みな〳〵と顔見合はせ、ぢつとなり、とも〳〵に泣く。左衞門紛らして、

左衞　シテ、これより落ちる先は。

白王　三の輪通りは必らず固めあらん、これより裏道を落ち行かんが、案内なくては心許なし。

佐兵　それは私が御案内いたして、これより上尾久村の農家にて、川端の治右衞門と申す方まで參り、もしそこにても危ふい時は、同村の長兵衞宅まで一と先お落ちなされませ。

白王　然らば、案内してくりやれ。

源吉　餘り多人數になります上に、この邊手前の顔を存じをれば、それが爲め却つて露顯のおそれあり、お殘り惜しくはござりますれど、これにてお別れ申しまする。

白王　オヽ、左樣か、御盡力でござつたナ。（トこの内佐兵衞は向うを見やり、）

佐兵　アレ〳〵、又お山へ火の手が上りましたが、今頃何處が燒けますことか。

左衛　青く火勢の上るのは、御本堂の邊であらうか。（トこれにて白王院ちつとなつて、）

白王　はや灰燼と。（トちつとなる。この時鳥笛になる。みな〳〵氣味合の思入あつて、）

佐兵　追手まゐらぬ其内に、

白王　わが東臺を後になし、

左衛　落ち行く先も白河の、

光仁　間路をしのぶ陸の奥、

源吉　左樣ござらば、御機嫌よろしう。

白王　後日にお目にかゝらん。

ト木魚鐘、誂への合方、蛙の聲になり、光仁杖をつき立上る。皆々上下に手をつき、愁ひの思入あつて、上手外を廻り上へ白王院佐兵衛、光仁の介抱なして出る。左衛門は前後の官兵を心附けることなし。源吉ずつと上手へ出る。この内知らせなしに、蛇の目廻しになり、上手内側の不動堂下手へ廻り、裏手になる。下手より外側へ檜林の新芽一面に出て來り、これと一時に後の遠見打返し、上野の山、青葉の梢の蔭より火の手見える遠見になる。これに灯入り十五日の月を出し、上手よりこれを見送りながら、三人介抱して花道へはひる。源吉舞臺より花道を見込み、ほつと思入。バタ〳〵になり、下手より以前の縫之助糸立をかぶり出て來り、

縫三　兄上、天野氏より御傳言でござる。

源吉　如何いたした。

縫之　職人體に姿をやつし、吾妻橋より本所の方へ。（トいひかけるを、

源吉　コレ。（ト押へるを木の頭。）ア、、よい月にならしつたなう。

ト氣をかへ、百姓の思入になり、我耳へ指をさす。これにて縫之助囁く。この時上手楷の間へ非人ぼうだら傳次、菰をかぶり出て窺ふ。この模様、時の鐘、合方蛙の聲にてよろしく。

ひやうし　幕

六幕目

北割下水金魚屋の場

役名　金魚屋九郎兵衛、金魚屋雇人清八、實ハ天野八郎。非人、ぼうだら傳次。魚賣閑乙の小吉。金魚賣、徳松、實ハ隼高吉。酒屋の丁稚、三太。金魚屋女房、おわか。天野の娘、お花。同下女お谷。

本舞臺、上寄りに、二間常足の二重、柿葺の屋根。向う上手一間障子の出這入り。下手三尺眞壁、大小のさで二本懸けてある。上の方あとへ下げて、中窓のある屋體の張物。下の方一間葭おろしの下家、内板羽目。金魚入りの盤臺積んであり。上手平舞臺に金魚入りの池、布張り、金魚の書割。いつもの所丸木の木戸、竹を打附けし三尺の開き戸。玉椿の生垣。この開きより屋臺へ鳴子の繩引いてあり。下の方生垣の間路地の心。すべて本所割下水邊金魚屋の體。こゝに金魚賣德松、紺の眞半纒三尺帶、金魚屋のこしらへ、草鞋にて、誂へ金魚の荷を傍へ置き、さでにて金魚を分けてゐる。傍に酒屋の丁稚三太、角太師のかつら、柿素の着附、紺の前垂草履、紐の附きし德利を提げ立掛りゐる。入口の外に菰冠りの非人寢てゐる。合方飴賣りの唐人笛にて幕あく。

丁稚　をぢさん、お前の金魚はみんな色が惡いぢやアないか。

德松　今年は入梅前から降り續いたので、どこの金魚も色が惡い、それだから丸や琉金の上物はさつぱりねえ。

丁稚　この間家の坊ちやんが、此方の家で和金を買つたが、いつもより高いやうだ。

德松　その金魚の値の高いのは、根津谷中の金魚屋が、この五月上野であつた戰のために家を荒らされ、おまけにあの折水が出て、みんな代物を流したから、この本所と白金の樹木谷ばかりゆゑ、品がないので高いのだ。

丁稚　もう金魚もしまひだね。

徳松　今年は時候が遅れてゐるので、まだ緣日では賣れるのサ。

ト合方にて、奥より金魚屋女房おわか、前垂掛けにて出て來り、

わか　徳さん、お前まだ遊つておいでか。

徳松　明日西河岸の地藏樣へ、晝前から出掛けますから、今日遊つて置きますのサ。

丁稚　池田屋でございますが、何ぞ御用はございませぬか。

わか　今日は何にもよかつたよ。

丁稚　炭のよいのがございますが、お買ひなすつて下さりませ。

わか　いゝのがあるなら二三俵、明日持つて來ておくれ。

丁稚　薪はよろしうございますか。

わか　風除けの松の木を五六本伐つたから、今月内はいらないよ。

丁稚　それぢやア炭を明日持つてまゐります。

ト丁稚徳利をさげて花道へはひる。

徳松　あの小僧は年に似合はず、商賣上手でございますナ。

わか　あゝいふ小僧を置き當てたのは、その主人が仕合だね。
德松　ときに、お家で置きなすつた若い衆はどうでござります。
わか　何といつても素人だから、商賣用には足りませんよ。
德松　見掛けは大層氣の利いてゐる人のやうに見えますが。
わか　見掛けによらず氣の利かないのと、根が田舍者だから、何の用にも足りないが、長降りでもした時に、水車でも踏ませるのが、あの男の使ひ道さ。
德松　長降りといへば、時化つゞきで出商人は困りましたが、やう〳〵の事で天氣になり、大仕合でございます。
わか　これでは今宵のお月見も、拜まれさうでございます。
德松　暮方でお氣の毒だが、もう少し選らして下さりませ。
わか　遠慮なくゆつくりと、選り分けて行きなさんせ。
德松　有難うござります。

ト又唐人笛の鳴物になり、花道より雇人清八實は天野八郎、單衣の上へ紺の印半纏、三尺帶、尻端折り、草履にて竹笠をかぶり、岡持とぼうふりを持ち、さでを擔ぎ出て來り、花道にてちよつと思

入あつて、舞臺へ來り、直ぐに内へはひり、

清八　おかみさん、今歸りました。

わか　オヽ、清八歸つたか、大層遲かつたの。

清八　遠方まで行きましたので、それで遲くなりました。」

徳松　清さん、今日は赤探りかえ。

清八　エヽ、赤探りとは。

徳松　お前は符喋を知らねえか、赤といふのは赤ばうふら、」糸といふのはさしの事だ。」

清八　ハア、さうでございますか。

わか　それだから仕掛のまだ用には足りませんよ、さうして、今日はどつちの方へ行つたのだえ。

清八　やう／＼お天氣になつたので、晝から近所へ出掛けましたが、本所居廻りは水が多く、さつぱりぼうふらが湧かないから、阿部川町から下谷の方へ、ついうか／＼と行きまして、今日はがつかり致しました。

わか　草臥れ休みに湯へはひり、早く今夜は寢るがいゝ。

清八　有難うございます。

徳松　清さん、お前は外へ出ず、内でばかりしてゐなさるが、何故商ひに出なさらねえのだ。

清八　まだ商ひは出來ませぬから、緣日へは出られませぬ。

徳松　腹からの町人でなけりやア商ひは出來ません。お前は以前武家だらうね。

清八　エ、ナニ、わしは元は百姓サ。

徳松　そりやア百姓か知らないが、どう見ても腰つきは、以前大小差したやうだ。

清八　武家と見たのはお前の目違ひ、腰へ差すのは鎌ばかり、なんで大小を差しますものか。

徳松　さういひなされば百姓だらうが、一體お前の在所はどこだえ。

清八　エ。（トギツクリ思入。）

わしが在所は下總の。（トいひかねる。）

わか　清八が在所は、小金村でござりますよ。

徳松　ヘエ、小金村でござりましたか。

わか　又この清八が外へ出ず、内の用ばかりしてゐますのは、徳さんお前も知つての通り、家の親方が出好きだから、外の用は自分でするから、清八は家へ置きますのサ。

徳松　成程、此方の親方は、人の世話をするのが好きで、よく親切になさるから、仲間内でも何ぞあ

ると、皆んな此方へ持込むから、家にゐる間はない筈だ。

わか　さうして、ぼうふりはどうしたえ。

清八　わざ〳〵行つた甲斐もなく、下谷近所も水が多く、それにうつかり探つてゐると、人に目を附けられて、飛んだ目に逢ひますから、匆々家へ歸りました、今日も無駄足を致しました。

ト　おわかへ思入にていふ。

わか　それぢやアこれを裏へ持つて行つて、芥をよく拾つて置きナ。

清八　畏りました。徳さん、御免なさい。（ト合方にて清八網持とさでを持つて下手へはひる。）

徳松　イヤ、私も暮れぬその内に、

わか　早くしまつてお歸りなさい。

徳松　九郎兵衞さんに、よくいつておくんなせえ。

ト合方にて荷を擔ぎ門へ出る。おわかは奥へはひる。時の鐘、門口の寝てゐる非人、徳松の擔いでゐる金魚の荷を引寄せ、徳松たぢ〳〵として荷を下ろす。非人起上ると、門並目のぼうだら傳次にて、徳松に囁き、兩人よろしくこなしあつて、徳松は花道へ行き、

徳松　日高金魚。

ト呼びながら揚幕へはひる。傳次後を見送り又寢る、管居の笛、合方になり、花道より二幕目の雨乞の小吉、魚賣りになり、長半纏三尺帶草鞋にて、魚の荷を擔ぎ「今日はよろしう」と呼びながら出て來る。この後より三幕目の天野下女お谷、下女のこしらへにて、小さき風呂敷包みを持ち、雪踏にて出て來り、花道にて、

お谷　モシ〳〵、魚屋さん、ちよつと承りたい事がござります。

小吉　アイ、何だえ。

お谷　この御近所に金魚屋はござりませんか。

小吉　割下水邊は、金魚屋は門並だが、名は何といひなさる。

お谷　その名はしかと分りませぬ。

小吉　名が分らなくては知れにくい。今もいふ本所には、何軒あるか知れねえから、門並聞かずば分るまい、早速向ふが金魚屋だから、あすこへ行つて聞いて見なせえ。

お谷　それは有難うござります。（ト兩人舞臺へ來る。）

小吉　今日はよろしゆうござい。（トいひながら、生垣の下手へはひる。お谷は門口の側へ行く。）

お谷　ちよつと承りたうございます。（ト内にて返事のなきゆゑ。）　モシ〳〵ちよつと承りたうござ

ります。（ト小吉下手より出て來り、）

小吉　そこでいくら呼びなすつても、住居が奥の方だから、なか／＼滅多に聞えやアしねえ、この門の戸を向うへ明けると、鳴子がついてゐますから、直ぐに奥へ聞えます。

ト入口の戸を向うへ開けると、奥から以前のおわか出て來り、

わか　オヤ魚屋さんかえ、今日は遲かつたね。

小吉　少し捌口が惡いので大きに遲くなりました、もう二三軒お得意を廻つて今日はしまひます、イヤ、私よりか、このお方が、金魚屋さんを尋ねてゐなさるから、今お家を教へたのだ。

わか　何ぞ御用でございますか。（トお谷内へはひり、）

お谷　ちと妙な尋ねものでございますが、こちらのお家へ若い男が餘所から參つてをりませぬか。

わか　男も一人をりますが、何といふ名でございますえ。

お谷　サア、その名前は。（トいひかねる思入。）

小吉　なか／＼こりやア占者にでも、見て貰はなきやア分るまい。この間に裏の合羽干し場へ、商ひをして來ませう。（ト小吉荷を擔ぎ、生垣の間へはひる。お谷はあたりを見て、）

お谷　もし、違ひましたら御免下さりませ。此方のお家へ、この夏頃から、御奉公に參つてゐる、若

い男はござりませぬか。

わか　ハイ。この五月から置きました、若い者はござりますが、お前さんのお尋ねなさるのは、どんな男でござりますえ。

お谷　サア、田舎者でござりませうか、又江戸者でござりませうか、私にもさつぱり分りませぬ。

わか　私共にをりますのも、田舎か江戸か分りませぬが、年の頃は二十四五で、形は少し小さい方だが鼻筋が通つて目が涼しく、口許が尋常で、言分のない好い男、當時の役者でいはうなら、二丁目の太夫元家橘によく似てをります。（トこれを聞く内、お谷は違ひないといふ思入。）

お谷　私の尋ねますのは、その人でござります、よくお敎へなされて下さいました。

ト嬉しき思入。おわか情人だと思ふこなし。

わか　何處から尋ねてお出だか、今に私が逢はして上げます、思ふ男の在所が知れて、嘸嬉しうござんせう。

お谷　誠に嬉しうござります。

わか　知らぬ所をあちこちと、尋ねて歩きなさんすも、惚れた仲では無理ではない。

お谷　イエ〳〵、さういふ譯ではござりませぬ、私の勤めてをります御主人の、お孃樣にお逢はせ申

したいのでござりまする。

わか　私は又お前さんと好い仲のお人と存じましたが、お勤めなさるお孃さんのお使ひでござりましたか。

お谷　唯今お連れ申しますから、御免なされて下さりませ。

ト　お谷逸散に花道揚幕へはひる。おわか後を見送り

わか　今の女中はそは〳〵と、どうした譯か分らないが、肴でも持つてゐて、生三堀か藪の內で、つまゝれたのではないか知らぬ、お孃さんを連れて來ると、一目散に駈けて行つたが、何だか分らぬ事ぢやなア。

ト　合方にて、おわか思入あつて奥へはひる。門口の非人傳次起き上り、向うを見て、

傳次　今の女も怪しいわえ。

ト　向うを見ながら後へ下り、入口の戸へ寄りかゝる。これにて鳴子の音して、奥よりおわか出て來る。傳次びつくりして寢る。おわか思入あつて、

わか　鳴子の鳴つたは、今の女中が來た事かと思つたら、さうでもないのは。

ト　柱へつかまり、表を見るを、道具替りの知らせ。

風か知らぬ。（ト稽古唄にてこの道具廻る。）

本舞臺三間常足の二重。柿葺の本屋根、本椽附。向う上手一間床の間、牛の御前の掛物をかけ、續いて一間障子出這入り。下手一間戸棚、まいらさんの戸、上の方を後へ下げて一間本屋根、小窓のある雪隱の覆物。兜鉢の手水鉢、樹木をあしらひ、舞臺前上下に金魚池あり、廻りは柵、中は水の布張り飛込む事あり。下の方同じく池の書割の遠見、池の周り玉椿の生垣。所々に芒の茂み、叢畳。すべて前の屋體續き、奥住居の體。平舞臺上手に以前の清八、ぼうふりの芥を箸で選り分けてゐる。下手に九郎兵衛肴流し、低き下駄にて亭主のこしらへ、さでにて金魚池の水草を取つてゐる。

この見　、床の二重にて道具留る。

へ入相の、鐘も哀れな秋の暮、隣しらずの本所に、構へもひろき金魚屋の、軒に名殘りの蚊の聲は、これも所の名物なり。

トこの内兩人芥を選り、水草を取りて、

九郎　清八、もう日が暮れたから明日の事にしたがよい。

清八　歸りが遲うございましたので、ぼうふりを選り分けますのが、つい遲くなりました。今夜は月夜でございますから、夜業をして片附けませう。

九郎　ナニ、夜業をするには及ばない、明日少し小早く起きて、朝飯前にするがいゝ。

清八　それぢやア明日の事にしませうか。

ト合方になり、さでをおいて二重へ上る。清八岡持とさでとを縁の下へ入れ、二重へ上り、下手へ住ふ。

九郎　今夜は十三夜の月見だから、後に蛤で一杯やらう。

清八　先月のお月見には、大層お酔ひなされましたぜ。

九郎　仲間の者に押込まれ、つい一升が三升と、仮寝りに酔倒れたが、片月見ゆゑ今夜も呑むが、貴様と二人で初めよう。

清八　有難うございますが、私は酒を呑みませぬ。

九郎　成程、貴様は断つてゐるナ、それぢやア団子にするがいゝ、豆や芋は畑のだから、喰つて見ろ。余程うまい。

清八　八百屋が持つて来るのと違ひ、とり立は違ひます。

〽話すその間に暮れかゝる、黄昏時に女房が、行燈たづさへ立出でゝ、

ト奥より以前のおわか角行燈をさげて出て来り、

わか　今し方淨光寺の入相を撞いたのに、もう暗くなつてしまつた、日が短くなつたので、忙しなくなりました。

九郎　今夜は月夜で一杯に内へさすから、燈火はいらぬ、又油が上つたから、無駄に點けるには及ばない。

わか　ナニ、及ばないことがあるものかね、曇つて來たので月はなし、暗闇にゐられますものか。

九郎　よくつべこべと口答へをする、消せといつたら消してしまへ。

わか　それぢやア消しておきませう。

トキツといふ。おわかツンとして、

へともし灯消せば暗闇を、これ幸ひと淸八を、主人は上座へ敬ひて、

トおわか行燈を吹消す、九〻兵衞淸八の手をとり、先づ〳〵と上手へ直し、

九郎　嘸御窮窟でござりませう。日が暮れゝば商人の來る事もござりませぬ、一日のお氣休めに、お樂においでなされませ。

ト謡への合方になり、淸八思入あつて、

淸八　過ぎし五月の戰爭に、味方破れて上野より、奥州路へ立退いて、再び事を起さんと、思ひし内

に八方へ、官軍方の手が廻り、嚴しい圍みに遁れ無く、却つて燈臺元暗し、江戸に忍んで時節を待たんと、人足共の半纏で、姿を變へて夜に紛れ、いづれへか身をかくさんと、思ふ折から三河島で、こなたに出逢つて便りを得、この本所へ尋ね來て、世間を憚り田舎出の奉公人といひなして、今日までこの家に隱れ忍び、空しき月日を送りしは、我父上の安否を聞きたく、御無事にあらば明日にも、當地を立退きいづれでも、身の方向を立てる所存、長居いたして露顯なし、この家へ難儀をかけては濟まぬ。實にこなた衆夫婦の恩は、詞に禮は盡されぬ。

〽両手をついて禮をなす、その手を主人は取上げて、

ト清八手をついて禮をいふ。九郎兵衛はその手を上げさせ、

九郎 エヽ、勿體ない事おつしやりませ。何のお禮に及びませう。しかもこの蓮池の端で、酒に醉ひし歩兵に出逢ひ、既に命を取られる所、あなた樣に助けられ、危い難儀を脱れました、嬉しさそれにお名所も承はらずにお別れ申し、お宅が知れねばお禮致さず、心掛りでをります内、遂に上野で戰が始まり、三河島の親類へ、見舞にまゐつた歸りがけ、思ひがけなくお出逢ひ申し、今日からうして私方へおかくまひ申しまするも、その時受けた御恩返し、いつまでなりと御遠慮なく、手前においで下さりませ。

〽眞實面にあらはれし、心の内ぞ殊勝なる。

清八　その志しは忝いが、最前來る金魚屋の、徳松殿が根問ひといひ、油斷のならぬ時節ゆゑ、父の安否が知れ次第、直ぐに他國へ立退く所存。

わか　先刻お歸りなされし時、下谷へお出でなされしとおつしやいましてござりますが、御親父樣の御樣子は、お分りになりませぬか。

清八　五月以來人目を憚り、内にのみをりましたゆゑ、運よく今日まで脱れしが、明日をも知れぬ科ある身の上、見咎められぬその内に、立退く所存で今日下谷へ、笠をかぶつて面をかくし、ぼうふりを探りに參つたが、何分四邊の人目もあるので、問合はす事もならず、空しく歸つてまゐりました。

わか　それは本意ない事でござりましたらう。

九郎　さういふ事なら私が、明日尋ねて上げませう。

清八　御苦勞ながら舊宅の、近所へ行つて尋ねて下さい。

九郎　承知しました。

〽密事を語る折しもあれ、鳴子の音に驚きて、

ト三人打寄りて話す。この時軒の鳴子なる。三人びつくりして、

わか　ヤ、誰やら表へまゐりし様子。

九郎　早く行つて見て來やれ。

わか　アイ／＼。

〽あいと返事も身も輕く、女房は表へ急ぎゆく。（トおわか奥へはひる。）

〽跡は又もや主從が、席をば變へて座を構へ、（ト九郎兵衛上手へ住ひ、清八下手へ住ふ。）

九郎　さつき女房に聞きましたが、あなたを尋ねて若い女中が、參りましたと申しますが、お心當りはござりませぬか。

清八　女などに尋ねられる、心當りはなけれども、もしや妹が。

九郎　エ。

清八　イヤ、いづれの者が尋ねて來たか。

九郎　うつかり油斷はなりませぬ。

〽折から女房が立出でゝ、（ト奥よりおわか出て來る。）

九郎　表へ來たのは誰であつた。

わか　先刻お前に話しておいた、あなたを尋ねて來た女中が、十六七のよい娘を、一緒につれてまゐりました。

九郎　何處の者か名を聞いたか。

わか　如在なく聞きましたら、苗字はおつしやいませぬけれど、花と谷と申す者、どうぞあなたに逢はしてくれとおつしやいましてござりますが、お心當りはござりませぬか。

清八　名前が花と谷とあれば、妹が尋ねてまゐりはせぬか。

わか　お出でなすつた娘御は、大層美しうござりますが、もしや以前の。（トいひかけ、）イヤ、お心遣ひをなされませずと、早うお逢ひなされませ。

清八　イヤ、暫時待つてくりやれ。

〽障子の破れより隙見をなし、（ト清八障子の破れより奥を見て、）

妹の花に下女の谷、二人の者に相違なければ、ひそかにこれへ通して下さい。

わか　ハイ〳〵。

〽又わかとつかは出でゝ行く。（トおわか奥へはひる。）

九郎　扨はお出でなすつたは、お妹御様でござりますか。

清八　父上の御身の上、お案じ申せし心が届き、妹がまゐらば分るであらう。

九郎　さういふ事なら月夜を幸ひ、ゆるりとお遊びなされませ。（ト奥にて、）

わか　サア、こつちへとお通りなされませ。

〽さあ〳〵こちへと女房の、案内にお花はしづ〳〵と、下女諸共に入り来り、兄を見るより思はずも、

ト奥よりおわか先にお花旅装のこしらへ、女中のお谷附添ひ出て来り、清八を見て、

お花　オヽお兄様、ようお達者でござりましたなア。

〽うれし涙にくれければ、

ト神妙にゐて嬉しき思ひにて、清八も思入あつて、

清八　其方も無事で、このやうな悦ばしい事はない。

お花　上野から奥州へお落ちなされましたともいひ、又は果敢なく討死をなされましたとも申し、生死の程が分りませず、誠にお案じ申しました。

清八　さうして此庭にゐる事を、どうして其方は知つてゐた。

お花　母様のお祥月に、お寺へまゐりましたれば、お住持様のお話に、本所の金魚屋に八郎様がお出でなさるを、垣越しにお見かけ申したが、大事の御身に噂にも、人には決して申しませぬが、内内お知らせ申しますと、承はりしを便りにして、谷と二人でこの邊を、お尋ね申してござりまする。

お谷　最前こちらへ上つた時も、お名前も憚りますれば、誠に空な尋ね者で、どちらで聞いても分りませず、どう致さうかと存じましたが、やう／＼の事で知れました。

九郎　この本所は金魚屋が何軒もござりますから、嘸お困りなさいましたらう。

わか　それもお尋ねなされまする御一心が届きまして、こちらにお出でなされまする事が分りまして、お兄い様にお逢ひなさり、嘸お嬉しうござりませう。

お花　誠に嬉しう存じまする。

清八　最早この世で逢はれぬ事と、存じをつたに計らずも、今日面會なしたるは、この上もない悦びなり、それにつき早速承はりたいは、疾うからして心に掛るは父の身の上、お變りもなくおいでなさるか、それを早く承りたい。

お花　ハイ、父上は。

〽あと言ひさして俯向けば、

清八 御無事なるか、但し又、お煩ひでもなされはせぬか。

お花 ハイ。

清八 お變りなさる事はないか。

お花 ハイ。（ト清八思入あつて、）

清八 返事のないは案じられる、早く御様子聞かしてくりやれ。

〽いふに妹、是非なくも、浮む涙をのみこみて、

ト床の合方、お花うれひの思入、涙を拭ひ、

お花 申上げるも涙の種。父上には戰爭を深く御心配なされしゆゑか、其後御氣分が常ならず、廿日過ぎにふと風邪の熱に冒され給ひしゆゑ、直にお藥を上げましたが、次第々々に病が重り、諸方の御醫者をお頼み申し、いろ／＼と手當を致しましたが其の甲斐もなく、七月の廿九日に果敢なくも、お亡なりなされました。（ト泣く）

清八 エヽ、（トびつくりなす。）スリヤ父上には御病氣にて、果敢なく御死去なされしとか、殘念な事をいたしたり。シテ弟賢次郎は、その折江戸にをつたるか。

お花　戦争の二三日前、神奈川よりのお手紙に、よい便りあつて長崎へ明日赴くことになり、彼所より外国へ、渡海なして学問修業み、人となるまで修業なされば、くれ〴〵父上の御身の上、私へお頼みありて、其後お便りがござりませねば、何れにおいでなされまするか、お知らせ申す術もならず、父宗兵衛も長の病気に遂に床へ臥してしまひ、詮方なく私と、これなる弟と二人して、御看病をいたす内、次第々々に衰弱なされ、御臨終の前日より、死ぬる御覚悟なされまして、御苦痛もなくすや〳〵と、眠るが如く明方に、よい往生をなさいました。

　涙ながらに妹が、父の最期を物語れば、聞く八郎は茫然と、しばし詞もなかりしが、

ト お花涙ながらにいふ。清八ぢつと思入あつて、

清八　五十五年を一期となされ、父には御最期なされしか、現在男子の兄弟が、二人までありながら、脱走せしゆゑお側にをらず、後に残りし妹の、其方一人にてお世話いたし、遂に御死去なされしとは、誠にもつて本意なき事。しかし孝心深き其方なれば、男子が看護なすよりも、手は届きしに相違なけれど、我々二人お側にをらず、返す〴〵も不孝の至り、済まぬ事をいたしたり。

へ勇気すぐれし八郎が、先非を悔いての落涙に、側の私も涙を拭ひ、

ト清八思入あつて、涙を拭ふ。

お花　シテ兄上には此所より、いづれへお出でなされまする、思召でござりまする。

へ問はれて八郎打うなづき、（ト誂への合方になり、）

清八　其許へ頼み置なせば、疾より江戸にはゐられぬ体。それを今日まで姿を替へ、この家に忍びをつたるは、厳しい詮議を遁るゝ為、又二つには父上の、御存否を伺はんと、今日も彰義隊におはせし、御宅の前まで様子を聞きにまゐりしも、人目繁く望みを果さず、帰るに帰られず其まに過ぎ、日光宮の御一行、奥羽へ渡らせまして、我望みを遂する所を、思しそれも詮なければ、品川沖に碇泊せし榎本氏の許へたより、奥羽へ渡航いたす所存。さすれば再び面会たすれ、再びして一生は叶はぬか、何時知れぬ我が身の上、殊に順逆二つの内、弟は朝に随ひて、賊徒となる身なれば、進むとも甲斐なく、其方と二人で父上の、此難を暫く守り呉れ、弟は朝に随ひて、過ぎし五月十五日にて、彰義へ対して奮戦なせば、今日にては嫌疑なり、人目を忍ぶ身の上に、他聞を憚へば其方は、長居致さず帰りくりやれ。

へ言淀まず滔々と、わが心中を打明かせば、

ト清八よろしく思入あつていふ。

お花　その御決心の上からは、所詮お止め申しても、お止まりはござりますまい、是非なき事と諦めますれば、御身を大事に奥州へ、御發足なされませ。

清八　オヽ、よくぞ諦めくれたるぞ。其方もその身を大切に、心細くも谷と二人で、父の追善供養を頼むぞ。

お花　ハア――。

ト時の鐘。

清八　あの鐘はもう五つ、この本所は淋しいゆゑ、二人は早く歸るがよい。

お花　お名殘惜しうござりますが、

お谷　途中が案じられますれば、

お花　お暇をいたしまする。

九郎　コレ、吾妻橋までお送り申せ。

わか　アイ。それは承知でござります。

お花　左樣なればお兄樣。

清八　煩はぬやうにいたせ。

お花　あなたもお身を大切に、

清八　氣遣はずと急いでまゐれ。

お花　ハア。

〽惜しむ名殘りに立ちかねるを、さあ〳〵早うと女房に、せり立てられて、是非なく〳〵、跡を見かへり出て行く。

ト　お花名殘りを惜しみ立ちかねるを、おわかせり立て、お花お米の手を取り、振り返り見て奥へはひる。

〽これが此世の別れぞと、跡を見送る八郎の、心を主人は察し入り、

ト　清八跡を見送り、愁ひの思入。九郎兵衞こなしあつて、

九郎　ア、お愛しうござります。（トいひながら行燈の灯をつけ、）これからは又奉公人、ゆつくり足でもお出しなされ。

清八　イヤ、最早暇乞いたし申し、今宵の内に立退かん。

〽又も鳴子に打驚き、（ト軒の鳴子鳴る。清八びつくりして、）

誰か表へ參つた樣子。

九郎　イヤ〱、今二人がお歸りなされたのでござります。

清八　いかさま、さうであつたか。

〽忍ぶその身に氣を配る、折から出で來る肴屋が、

ト下手より以前の小吉、酒に醉ひし思入にて、荷を擔ぎ出て來り、

小吉　今合羽干し場でしまひ物の魚を買つて貰つた上に、月見だから一杯呑めと、御馳走になつてぐつすり醉つた、イヨウ、おらア表へ出る氣だつたが、こりやア池の方へ出た。イヤ、親方さん、毎度有難うございます。

トこの内清八は立退く心にて、戸棚より紋附の着附帯大小を出し、二枚折り屛風の蔭へ置く。

〽いひつゝ思はず顔を見て、（ト小吉清八と顔を見合せ、）

小吉　ヤ、お前さんは天野の旦那。

清八　ア、コレ。（ト押へる。）

〽あたりを憚り止むれば、魚賣りも心附き、

小吉　成程、こりやア飛んだ事を言つた。

〽生酔本性違はずと、おどろくこなたの藪蔭より、非人はのそ〳〵出で來り、

ト小吉驚くつ。下手より以前の非人ぼうだら傳次、菰を着たまゝ出て來り、

傳次　どうぞ一文下さいまし。

トこの聲に三人びつくりして、

九郎　何んだ、今時無遠慮な。こゝは垣根の構へ内だ、早く表へ出ねえのか。

傳次　今朝ツからこゝの家の外に、久しくわつちやア寢てゐたから、内か外は百も承知だ、手の内さへ呉んなさりやア、直ぐに表へ出て行きやす。

ト緣に腰をかける。清八は二枚折の屛風の蔭へ隱れる。小吉思入あつて、

小吉　コレ〳〵、乞食の癖に遠慮もなく、緣ばなへ腰をかけ、身の程を知らねえ奴だ、早くそつちへ行かねえのか。

傳次　呉れせえすりや直ぐに行くから、早く手の内をくんなせえ。

九郎　エヽ、やかましい、ソレ、

ト九郎兵衛文久錢を二文やる。傳次これを取上げて、

傳次　なんだ、こりやア文久二つかえ。

小吉　コレ〳〵、三十貫つたら言分はあるめえ、不足さうな面をするねえ。

傳次　錢を貰ふ了簡でも三十の錢は嬉しがらねえ、惜しくば其方へ返してやらう。

（ト傳次錢を抛りつける。）

九郎　いらずば貰ふな、無理にやらうとはいはねえわ。（ト錢を取る。）

傳次　三十や四十の零碎錢を、おらア貰ひに來たのぢやアねえ。

小吉　さうしていくら呉れろといふのだ。

九郎　何だと。

傳次　その屏風の陰にゐる、清八を貰ひに來たのだ。

傳次　貰ひに來たのは、錢ぢやねえ。

九郎
小吉　エヽ。（トびつくりする、凄みの合方になり。）

傳次　貰ひに來たのは外ぢやアねえ。この夏上野の戰爭から、影をかくした脫走人、形は小さな男だが、大きく言やア天下の朝敵、その時降つた五月雨の水氣に落ちる不忍の鯉同樣に脫れ出で、この本所の割下水、九郎兵衞といふ金魚屋に、一二歲三歲變り物が、圍つてあるといふ噂に、探索方から頼まれて、今日朝ツから探りに來たは、脫れぬ天の四つ手網、大降りがして樋の口か

ら、流れ出さねえ其内に、おれがさでどすくひに來たのだ。

九郎　スリヤ若い者の清八を、脱走人だといひなさるのか。

傳次　流石その名はいはねえでも、今この野郎がうつかりと、口走つたが確かな證據だ。

小吉　それぢやアおれが名をいつたので、

九郎　旦那の素性を知られたか。

傳次　ナント動きはとれめえが。

ヘ又もやこゝへ金魚屋が、姿を變へて入り來り、

ト下手より以前の德松、尻端折り紺の股引、草履、十手をさし、手先のこしらへにて出て來り、

德松　かねて大野八郎が、この家に隱れてゐると聞き、金魚賣に姿をかへ、疾から入込み探つてゐたのだ。

傳次　卑怯未練に隱れずと、

德松　立派に名告つて、

兩人　縛かゝれ。

ヘ菰脱ぎ捨てゝ身構へれば、八郎もはやこれまでと、衣服を改め立出でゝ、

ト傳次衣を脱ぎ捨てキッとなる。この内淸八屏風の蔭にて紋附の着附に着かへ、脇差を差し刀をさげ出てキッとなつて、

淸八　かく露顯の上からは、最早何をか包みかくさん、いかにも前に上野にて、一戰なせしも運來らず、風雨の爲に敵し難く、つひに味方の破れとなり、彈丸の中を切拔けて、姿をかへて今日まで、志願あつて隱れ忍びし、我こそ天野八郎なり。天命盡きればいざ知らず、わい等如きの手にあはうや。

傳次　疾から目串をつけて置く、この家の四方を取圍めば、

德松　最早逃げ出る所はない。

傳次　覺悟極めて、

兩人　繩かゝれ。

淸八　小ざかしき覺悟呼はり、ならば手柄にからめて見よ。

兩人　何を小癪な。

ト　かねて伏せ置く數多の捕手、こゝかしこより現れ出で、打つてかゝるを身をかはし、當るを前後左右へ投げ退け、飛鳥の如き働きは、目ざましかり

ける次第(しだい)なり。

トその内上下より官軍八人好みのこしらへにて出て來り、ツカ〳〵と二重へ上り、屛風の影の淸八の手を取り引出す。これと立廻ってキツと見得。淨瑠璃の切より誂への鳴物になる。金魚池をつかひ、烈しき立廻りとなる。その内九郎兵衞は柄　長き水打柄杓で、池の水を汲んで捕手にぶつかける。小吉に天秤棒を持つて捕手の邪魔をする、立廻りよろしくあつて、德松大きな玉網を持つて來て、淸八の天窓へかぶせる。淸八これを取らうとして取れぬ思入。この隙を見て、傳次小丸太を持つて、淸八の刀を持ちし手を強く打つ。不意を打たれて刀を落す。淸八取らうとするを、傳次手早く拾ひ池へ投げ込む。淸八件の綱を引切り顏を出してキツと見得。これより鳴物替つて、池をつかひ烈しき捕物の立廻り。九郎兵衞は柄杓、小吉は天秤棒にて邪魔をする立廻りよろしくあつて、德松うしろから淸八を羽がひ締めにする。傳次前から掛るを、淸八蹴る。傳次たぢ〳〵として池へ落ち、水の花パツと立つ。これを木の頭。淸八もがくを、大勢で取押へる。九郎兵衞小吉は捕手に引据ゑられ、傳次は池より半身出してホツと思入。淸八は無念のこなし。この見得よろしく、ドンドン早めたる合方にて、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、『これより三十三年相たち、明治二十三年に相成候狂言。』と記したる札を出す事。

七幕目　上野第三博覧會の場

役名　越前屋佐兵衛、天野賢次郎、銀行副頭取境賢實實は酒井稚貞、會社の支配人磐井彦太郎、會津の長吉、家令羽田千彌、同邑井榮藏、待合濱の家の小吉、實は雨乞の小吉、靴屋丑松、新屋の小旦那半左衛門、榎戸の仙平、二合半の八十八、半田村の稻右衛門、館内定夫、高木原源吉、生徒春之助、同松太郎、同花若、廣告小僧ちよこ松、賢次郎令閨おきみ、田宮の姉娘米子、境實の妹稻子、田宮の妹娘重子、賣茶の娘おせん、田宮の下女おふみ、女生徒貞子、半左衛門嫁おくわ、茶屋小女等。

本舞臺、上手繪心に博覧會入口。正面の上に第三回内國勸業博覧會と記せし額。これより下手瓦屋根、上下ガラス窓、外側の張物、この前電氣燈の柱。下手一間札賣場、屋根に入場劵賣場と記せし板札。小判形札賣場の窓、これに『暫時賣切』としたる板札を貼り、上下青葉の楓の立木、すべて上野博覧會入口の體。こゝに接待の床几を二脚置き、田舍者○△□毛布を引かけて草鞋がけ、田舍

婆、田舍の嫁丸髷縞模様にて腰をかけ、洋服姿の田舍の小旦那、ずつと上手に靴磨きの靴屋、小倉の服にて、洋服姿の小旦那に靴を磨ぐことを勤めてゐる。この模様、賑やかな合方へ、大拍子をかぶせ幕あく。

田△　權六どの、飛んだ事がはだつたではござらぬかの。

田○　遠々の所を踏出して、今月の今日となり、窓を締められたさいご、どうする事も出來ましねえ。

田□　よもや博覧會の切手べえ賣切れやうとは思はねえが、お巡り様に聞いて見るべえか。

婆ア　賣られねえといふものを、賣つて下せえといつて、お巡り様にも叱はれめえ。

三人　コリヤマアどうしたものだなう。　ト心遣ひの思入。田舍の小旦那洒着きゐて、

小旦　そんなに騒ぐ事はござらぬ。儂などはこの管内に縣下より出品があるから、誰にでも逢つて言ふから、もう少し待たつしやれ。

嫁　小旦那殿は待合々々と言はつしやるが、先程からべん／＼と、もう二時間も待つてゐましツけえが、いまだに知つたお方もなし、恥をかいて下さんすなよ。

小旦　東京馴れない者ばかり連れて來たので、どこへ行つても脇の下から汗の出る事のみ、田舍者と

見られて、見とむなくてならぬわえ。

靴屋　旦那、暫くお待ちなさいます内、お靴磨きは如何でござります。

小旦　わしらア靴かえ、マアようござりますよ。

靴屋　どうせ此處においでなさいませうから、一錢で磨いて差上げますから、どうぞお願ひ申します。

小旦　今朝宿で磨いておいてくれたから、マア止しにしますべい。

靴磨　直ぐでござりますぜ。舶來の專賣墨で、直ぐ艶が出て皮がしなやかになりますから、ちつとお磨きなさいまし。

小旦　磨いては貰ひたいが、一錢でも出すのは不經濟ぢや。

ト澄ましてゐる。嫁おくわ心遣ひのこなしにて、

嫁　もし旦那どの、わし案じられてならねえが、もし知つたお方に逢はぬ時は、皆樣に濟みましねえよ。

靴屋　失禮でござりますが、大分汚れてをりますから、一錢御散財なさいまし。

婆ア　宿で磨いたか知らないが、わしが見てさへ穢い靴、一錢はずんではどうだんべえ。

小旦　婆様までにさう見られたら仕方ないから、實はいふが、本當は國を出る時磨いたきりぢや。

田〇　それではもう十日になるから、穢えのは尤もだ。

小旦　仕方がねえ、やつてくれさつせえ。

靴屋　ヘイ、畏りました。

ト小旦那半左衛門腰掛へかけ、靴屋へ靴を渡し、靴屋二人にて片足づゝ磨く。やはり右の鳴物にて、花道より參會羽田千彌、同邑井榮藏、兩人、羽織袴、靴にてステッキを突き、學習院生徒春之助、松太郎、花若、洋服にて、貞子同じく學習院女生徒にて、連立ち出て來り、

千彌　本日は非常の雜踏にて、馬車では危ない位でござるな。

榮藏　東照宮の前で下車いたし、これまでやう〳〵參りました。

貞子　もう何時だらうね。（ト榮藏時計を見やり、）

榮藏　もう一時三十分であります。（トこれにて皆々舞臺へ來り、）

榮藏　ハヽア、今日は切符が賣切れたナ。

春之　千彌、博覽會の構內へ、

花若　はひる事が出來るかえ。

千彌　優待券を所持いたしをれば、入場に差支へはござりませぬ。

榮藏　マア、この床几へお掛けなされませ。

トこれにて下手へかける。靴屋側へ行き、皆々の靴を見て綺麗だといふ思入あつて、後へ下る。田舎者は子役三人達のなりを見てびつくりなし、コソ／＼話してゐる。小旦那はシガレットを吸ひたがら、餘り見るなといふ思入。

松太　今權現の脇にあつた、二つ並んだ黑い門は、戰の時にあつたのだねえ。

千彌　左樣でござります。あれは今年で廿三年後、もつと彼方の口元にござりまして、戰の時鐵砲丸が幾つもあたりましてござりまする。

榮藏　また博覽會へおはひりになさいますと、宮樣のお中門に、あの時の鐵砲丸がはひつた儘でござります。

嫁　アレマア幼くせえに、東京者はませてゐさつしやるなう。

小旦　コレ、默つてゐぬかえ。

トはやり唄、大拍子になり、花道より廣告小僧ちよこ松、日の丸とかたばみの紋のフラグをぶつ違ひに附けたる赤い帽子、役者紋盡しの背廣服、布まぜ引幕と見たるズボン、大人と記したる箱へ花

打にしたるを首へかけ、拍子木を持ち出て來り、花道に止りチヨン〳〵と二つ打ち、

廣告　東西〳〵。これは日本橋區蠣殻町一丁目三番地、齋藤長吉と申しまして、新富座の番附の販元で、紅梅散と申す齒磨を賣りひろめます、御贔屓の役者好み、上製の齒磨を賣りひろめますが、こゝではお弘めに進上いたします、もし御用の節は、新富座の運動場と芝居茶屋にござります、評判〳〵々々。（ト拍子木を打ち舞臺へ來る。）

千彌　オヽ、芝居がゝりの廣告小僧は、芝居の販元が新發明だな。

榮藏　幸ひはしりを一つ買つてやりませうか。

廣告　イエ、私のは賣りません、これは進上いたします。

ト箱より出して二包みやる。田舍者これを見て、

婆ア　只程安いものはござらぬ。おらがにも一つ貰ふべえか。

ト廣告小僧五人に一つ宛渡す。嫁これを見て羨しがり、

嫁　オイ小旦那、一と包み貰はツせえよ。

小旦　エヽ見ともない。區長方の附合する者が、そんな不品行な事が出來るものかえ。（ト小言をいひながら、縣令の側へ來り、帽子を取り）當開館はえら盛會でござりますナ。

千彌
榮藏　さうでござりますナ。

小旦　先生方も、やはり入場券をお待兼ねでござりますかナ。

千彌　イヤ、僕らは優待券を持つてをります。

小旦　ヘエ、、兵隊劍を持つてござるとは、ア、劍はステッキにでも仕込みになつてをりますかナ。

榮藏　イヤ、兵隊の劍の事ではござりませぬ。優待券を持つてゐるのでござります。

ト小旦那半左衞門一向分らぬこなし、嫁は心遣ひのこなしにて、

嫁　モシ、知らぬ事なら知りましねえと、言はつしやつたがようござらうのに。

小旦　エ、、何を田舍者のくせに、默つてゐらつせろ。（とハンカチーフにて汗を拭ひながら）ハヽア、左樣なら優待券と申すは、この頃出來た香川縣の俗言でござりましツけえかな。

千彌　イヤ、優待券とは開場中、いつでも通行の出來る、入場券の事でござりまする。

ト これにて家令兩人クス〳〵笑ひ、

子役
皆々　榮藏、早くはひらうよ。

榮藏　ハツ、左樣いたしませう。

小旦　それでは今の齒磨の格で、優待券は只の切符でござりますかナ。（ト家令兩人呆れはて）

兩人　これは失敬。

トやはり右の鳴物にて、榮藏千彌、子役の手を引き入口へはひる。小丑那みな〱見てびつくりしてゐる。こゝへ靴磨靴を仕上げ出て、

靴磨　ヘイ。出來ました。

小丑　ヤア、えら手間がとれたなう。

靴磨　綺麗どころか、ひどい汚れ方で、三足ぶりもかゝりました。

トこれにて小丑那、半左衛門靴磨に一錢渡し穿く。こゝへ廣告小僧ちよこ松後より出て、

廣告　窓の明くのを待つ間、皆さん手を貸して下さい。

田□　よい〱〱と〆るのかナ。

廣告　イエ、これを皆さんへ撒いて下さい。

田□　ア、野良で種蒔く格でやるべえ。

田△　どう世界めとあるからは、種蒔きには違ひない。

トこれにて皆々廣告小僧と共に廣告を撒く。バタ〱にて入口より館内の定夫、博覽會の印袢天、靴にて出て來り、賣場の窓へ出て招く。これにて内より開く。

定夫　一時間程賣出してもようござります。

小旦　オヽ、それでは皆の衆一緒に、

田○　連れ立つて、

皆々　はひられますわえ。

定夫　サア、切符をお買ひなさいよ。

　トこれにてバラ〳〵と窓の所へゆくゆゑ、小旦那ひよろ〳〵として留めるを道具替りの知らせ。

小旦　恐ろしい押しやうぢやわい。

　ト廣告小僧は木を打ち、言立をいふ。この模樣はやり唄、大拍子にて道具まはる。

本舞臺、眞中三間方形の屋根。丸竹の押緣。四方松丸太の柱。内一面の土間、上手折廻し、正面とも一面の半窓、裾廻り杉皮、竹の押緣、下手三尺葺卸しの下家、軒先に『賣茶精撰園』と記せし白金巾に萌黄の暖簾。上手の柱に『神田通新石町。精撰園出店』と記したる聯をかけ、テーブル椅子床几を澤山置き、後ろ一面上野舊本坊庭の中遠見、下手に三尺四方、奈良の校倉の張物。この周りこまよせ。上下樹木の植込み。屋體の横手ペンキ塗の丸太。これに萬國のフラグをかけ、すべて美術館圍中茶店の體。こゝに境賣の妹稻子、束髪女生徒のこしらへ、境賣羽織着流し駒下駄銀行頭

取にて、兩人椅子にかゝり、下手に茶屋娘お仙襷がけ、草履、子役の茶屋小女三人、襷がけ草履にて、茶を出してゐる。この模樣賑かな合方、大拍子にて道具留る。

實　上野の山には珍しいあの神樂の音は、あれはどこのが聞えるのだえ。

お仙　今日は十五日で、權現樣のお神樂が上るのでござりませう。

稲子　今日は中が惡込みで、今美術館を出て此處へ來たら、かッとしたせゐか眼暈がして、ふら〳〵するやうでございます。

お仙　私共も唯今まで一杯でございましたが、やう〳〵今すいたばかりゆゑ、ごゆるりと遊ばしませ。それに眼暈がなさいますなら、大坂町の高木で賣ります清心丸がござりますから、九六粒上つては如何でござります。

實　そりやアよい藥がある、買つて飲んだがいゝではないか。

お仙　唯今持つて參ります。

ト下手の店へはひる。やはり右の鳴物になり、花道より円幕口の天野賢次郎、洋服ステッキ、合同お宿上野帝國の合同のこしらへ、洋傘を持ち、前幕の小吉、羽織着流し。新井喜太郎會社の支配人、好みのこしらへにて出て來る。すこし後より円幕口の會津の長吉、白髪かつら羽織三尺尻端折り

股引、靴にて、みな〳〵を見て不審の思入あつて、考へ〳〵來る。皆々直ぐに舞臺へ集り、天野賢次郎夫婦は下手の床几、小吉磐井彦太郎は上手の後へ下りし床几。長吉は下手後へ下りし床几へ裏向きにかゝる。境實、稻子は天野夫妻を見やり、會釋して、

實　又御一緒になりましたナ。

賢次　一つ道ゆえ、後になり先になりして、行先は落合ひましてござりまする。

お君　餘程草臥れてまゐりましたが、あなたよくおみ足が何ともござりませぬな。

稻子　今朝ほどからまゐつてをりますので、もうがつかりいたしました。

賢次　こゝは美術館の裏手にて、雜踏もしませず、空氣も一番よろしきゆゑ、足休めには適當の場所でござる。

實　筋違ひの萬代軒と、こゝの賣茶は位置がよろしいと見えまして、大分繁昌いたしますナ。

ト その内子役の茶屋小女、上下の彦太郎小吉長吉へ茶を出してゐる。お仙天野夫妻へ茶を出し、清心丸を稻子の側へ湯を添へて持つて來り、

お仙　サア、ようしいだけ召上りませ。

お君　大層御繁昌でござりますね。

お仙　お陰樣で皆樣が、通新石町の精撰園はどこだ〳〵とおつやいまして、いらしつて下さいますので、九時頃からは一杯でござりまする。

ト、やはり右の合方、大拍子をかぶせ、東の假花道より高木原源吉、羽織袴雪踏。以前の學習院生徒春之助、花若に家令千彌、榮藏の兩人附いて出て來り、

源吉　若樣方は、よくお歩きなさいまするナ。

千彌　西館の機械が御意に入つて、餘程時間を費しました。

榮藏　今度讃岐より出品になりました、水難救助の機械は、非常に珍らしいものでござりますナ。

源吉　あゝいふ會社が出來ましては、これから、難風に出會ひましても、難船で死ぬものはござりませぬ。

春之　又あそこへ行つて掛けようよ。

千彌　唯今風月堂でお休みではござりませぬか。

花若　春樣と契約したから、向うで休まんければいかんよ。

榮藏　それでは門並でござりますナ。

ト皆々舞臺へ來り上手の床几にかける。

賢次　オヽ、これは先生に若樣でござりますかナ。（ト皆々會釋なし、）

源吉　唯今中門內でお目にかゝり、御同道いたしました。

榮造　天野君には、最早種々御覽になりましたかナ。

賢次　唯今美術館を廻つて來ましたが、日本畫の內では、玉章の隅田堤などは、實に美術でござるのに、別けて油繪の出來は、格別ようござりますナ。

稻子　昨年巴里の博覽會にも、嘸よい油畫がござりましたらうナ。

賢次　これも非常な陳列品でござつたが、今回の油畫はなか／＼外國にも負けませぬ。

ト實これを聞き、ぢつと思入あつて、

實　わが父なども今日迄、存命いたしをつたなら、この開館を見られませうに、詰らん事をいたしました。

賢次　それは君の御親父も又我が兄の八郎も、御同樣でござるのは、御一新の折當山にて討死せずば、開明のこの結構な世の中に、存命いたしをられませうと、返らぬ事を思ひ出しては、毎度懷舊の思ひをいたしまする。

トこれもぢつと思入。この時實向きにて聞いてゐたる會津の長吉、前を向き下手へ出て、

長吉　天野の若旦那様、お嬢様、御機嫌よろしうございますか。

ト　これにて賢次郎お君思ひ出せぬこなしにて、

賢次　ア、、お前はどなたでござつたかナ。

長吉　へイ、二昔余も経ちますから、御尤もでございますが、私は新門の子分で、會津の長吉と申しまして、お屋敷へは頭と一緒に、仕事にまゐつた者でございます。

賢次　オ、、さういはるゝと思ひ出す、成程さうであつたか、マア此方へ掛けるがよい。

ト　合方になり、長吉下手へかけ、

長吉　久し振りでお目にかゝりましたが、若旦那も大層立派におなりなさいましたなア。

賢次　瓦解の砌りは兄弟が、心一致いたさぬゆゑ、兄八郎は上野へ籠り、僕は洋行いたせしゆゑ、親父はそれが元となり、あの年七月この世を去り、唯今妹が酒井の次男を養子となして相続いたすが、今日となつて見ると、先づ我が方が勝利ぢやわえ。

ト　これを聞き長吉考へ、

長吉　その酒井様とおつしやりますのは、もしや彰義隊の隊長をなされました、酒井宰輔様ではございませぬか。

實　いかにも、その宰輔がわしは惣領の倅にて、當時は或る銀行に副頭取をいたしてをるのぢや。

長吉　ヘエ、、左樣でござりますか、それはよい所でお目に掛りました、實は疾より酒井樣のお身内に逢ひたいと心掛けてをつた所、こんな幸ひはござりませぬ。

實　そりや、どういふ譯でござりますナ。（ト合方キツパリとなり）

長吉　誰でも知つてはをります事だが、今年で二十三年後、慶應四年五月十五日、朝ツぱらから戰が始まり、今でいやア十時頃、山門内で彰義隊の隊長をなすつた酒井樣の體へ二發彈があたり、ぶツ倒れてお出なすつた所へ、わつちが駈附けましたが、隊長のおつしやるには、所詮もういかねえから首を切つて埋めてくれと、飛んでもねえ事を言ひつかり、どう仕ようかと思ふ内、ヒウ／＼ヒウ／＼鐵砲丸が天窓の上を過ぎるので、うか／＼してはゐられませぬから、思ひ切つて首を切り、命から／＼根岸へ逃げ、臥龍隊の本陣になつた、源光寺の墓所へ駈込み、やう／＼埋めは埋めましたが、どうかして身内の衆にお知らせ申して上げてえと、思つてゐた所念が屆き、こんな悦ばしい事はござりませぬ。

實　そんならこなたが親父の首級を、源光寺へ埋めて下すつたとか、知らぬ事とてこれまでは、山王臺へ詣りしばかり、何處の土とも知らざりしが、これにてやう／＼佛事も營め、こんな幸ひ

はございませぬ。（トこゝへ上手の小吉上手へ出て、）

小吉　オイ、長兄イ。久しく逢はなかつたナ。

長吉　オヽ、確かお前は瓦解時分、手子をしてゐた、何とか言つた人だなう。

小吉　エヽ、脊中に雨乞小町を彫つて、それが渾名の雨乞小吉。上野の時はお互ひに、こわえ目に遭つたねえ。

長吉　成程、お前もあの時にやア、酒井様の討死に、かゝりあつた人だの。

小吉　掛り合つた所ぢやアねえ、お前が首を持つて逃げた後で、死骸を片附けたが、二三日経つて一つにして、葬つたといふ噂だつたが、今日となつて見ると、大隅様のお骸は全く山王臺の供養塔へ、納まつたに違えねえ。

實　スリヤ親父の亡骸を匿してくれしか、これにて測らず全體まとまり、こんな目出たい事はない。

春之　上野の戰の顛末は、讀本の十章に詳しく出て讀んではゐるが、先生もあの時は東臺にゐましたかえ。

榮藏　おいでどころではございませぬ。日頃御勉強の神影流、極意を現はされたのでございまする、

源吉　イヤ、わしはあの時は少しも山にはをりませぬ、さる方の御守護いたして、根岸へ落ちたには
でござりまする。

松太　先生、嘘言をいひ給ふな。本日上野へ來てお出での公衆は、皆承知してゐますよ。

源吉　ア、モシ〳〵、そんな事いうてはなりませぬぞ。

ト子役松太郎を留める。合方キツパリとなり、下手より田宮の姉娘米子、丸髷士族の女房のこしらへ、同じく妹娘重子、束髪好みのこしらへ、洋傘をつき、下女お文附いて出て來り、

下女　嬢樣、こゝがよろしうござりまする。（ト下手床几へかける。矢野の令閨お君見附けて、）

お君　田宮樣、よく御姉妹でお出掛けでござりましたナ。（トこれにて互ひに會釋なし、）

米子　やう〳〵のことで、西舘だけ巡つて、これへ、

三人　參りました。

トこの内長吉小吉は米子重子を見やり、顏見合せ思入あつて、

長吉　モシ旦那、今田宮樣とおつしやいましたは、もしやあなた方のお仲間であつた、新八郎樣では
ござりませぬか。

賢次　いかにも、臥龍隊の隊長をされた、田宮新八郎の令嬢ぢや。

長吉　エ、、左樣でござりましたか。それぢやア矢張りやつてしまつたお仲間だ。

ト腹を切る眞似をする。

小吉　此奴ア飛んだ博覽會になつたナ。（ト小吉も愁ひの思入、）

米子　こゝにおいでのお二人も、父を御存じと見えまする。

小吉　ヘイ、戰爭の時、二人ながら上野の山にをりまして、田宮樣にもお心安くいたしました。

亜子　スリヤお前さんが父上を御存じでござりましたか、あの冬產れし私ゆゑ、お顏さへ見る事出來ず、悔しい事をいたしました。

米子　私は居りましたが、まだ五歲でござりましたから、存じませぬも同じ事、今考へると、夢のやうに思ひまする。

ト愁ひの思入。茶屋娘お仙小女に指圖して、始終茶を出す事。

長吉　さうして上野の若旦那樣は、あれからどちらへいらつしやいました。

ト合方キツパリとなり、

賢次　戰爭前父上に、暫しのあひだ暇を貰ひ、わが志願は朝臣ゆゑ、一度洋行を思ひ立ち、神奈川奉行に縁故あるを、幸ひにして彼地へ赴き、それより長崎に滯在中、東臺の戰爭ありて、兄が身の

上案じをつたが、樣子聞くさへ上への恐れ、その內佛蘭西の飛脚船にてマルセールまで舟でまゐり、巴里に於て十年間、機械學を勉強し、滿十二年にて歸國なし、直きに官へ奉職の上、妹が身の上父の年回、何や彼や片附けて、翌年又々洋行を、上より仰せつかりしゆゑ、再び歐羅巴へまゐり、今度は萬國の機械類を悉く一覽なし、昨年佛の博覽會へ臨み、それより歸國の途につきしが、僕は後年の時機を計り、洋行せしばかりに、今日こゝに逢ひがたき、開明の世に逢はるゝも、誠に心一つでござるテ。

長吉　左樣ならお兄いさんのお亡りの事は、お知りなさいませんか。

賢次　長崎にゐる內に、あの秋兄は本所にて捕縛の上、處刑を受けしと承はつたのみなるが、歸國後何れで聞き合せても、一向に樣子も分らず、又存じをる者あつても、罪人ゆゑに遠慮して、樣子を明かしくれぬので、佛事はすれど夢まぼろし、本意なく思ひをるばかりぢや。

小吉　それについて私は、天野樣には顏向けの出來ない事がござりまする、外の事ではござりませぬが、屋敷出入りも上つたりで、魚屋になつて本所を、商ひして歩く內、思はず出逢つた八郎樣、ヤ旦那樣とうつかり言つたを、直ぐに手先の耳になり、其時到頭縛られなすつたが、あの時お呼び申さなけりやア、捕まるまいと思ひますと、實にそれから心經で、忘れた事はござり

ませぬが、其後わつちも新橋の濱の家の庖丁で、待合を出してをりますが、唯氣になるのはこの一件、お兄さんの代り天野様、どうぞ料簡して下さりませ。

賢次　その濟まぬと思ふは私、兄は朝敵の一人なり、其方が呼んだは政府へ對し、却つて功になる事ゆゑ、禮こそ申せ、恨みは致さぬ。

小吉　アヽ、さうおつしやいますと、猶々面目なうござりまする。（ト俯向く。）

長吉　しかしあれから西丸下の、糺問局へ引かれなすつて、若旦那が死ぬ時は、立派なものでござりましたよ。

賢次　ナニ、兄が最期を存じてをるとナ。

長吉　ヘイ、よく存じてをります。

賢次　それは存じがけない事だ、どうぞ話して聞かしてくりやれ。

ト替つた合方になり、

長吉　實はその時私も徳川様のお爲にした、あつぱれ武士を仕置にするかと、癪に障つてたまりませんから、前から化けて草刈となり、其日も屋敷へはひつてゐて、吟味所の隙見をして、盗人同様捉つたら、命懸けで一番飛込み、片端から斬り倒し、旦那を逃がす料簡で手ぐすね引いて

をりますと、天野様へ縄をも掛けず、陣羽織の官軍が丁寧に連れて來て、天野殿、後々へ申殘さる事あらば、在合の者より傳へると、手を突かねえばかりにいひましたぜ、わつちも思惑が違つたから、少し氣が弛んだのさ、すると天野様も偉いものだ、錦旗へ對し奉り、犯罪人の身分といたして、何の申し置く事はございませぬ。唯願はくば武士らしく、切腹仰せ附けられたしと、これも丁寧にいひなさると、官軍も偉えね、火附盗賊とは異り、大和魂磨きし御身、切腹の儀承知いたしたといひました。（ト肱を張つていひ、氣をかへ、）そこでわつちは、すつかり溜飮が下つたね、すると旦那が腹切刀をお持ちなすつて、辭世をお詠みなさいました。（ト考へながら、）「國のため君に捧げし命こそ、けふぞ」（ト考へながら、）「けふぞく。」（ト考へ出せぬこなしにて、）悔しいが、歌なんざあ嫌ひだのに、年をとつて耄碌をしたと見えて、忘れてしめえました、何でもそんな事だつた、それから突込んで、見事にお切りなさいました、それのみならず咽笛まで掻切つて、介錯人が首を切りましたが、天野様もえらいが、その大切に扱つた役人衆もえらいもので、それからわつちも河岸をかへ、天朝贔屓になりましたよ。

トこの時上手の後にゐたる磐井彦太郎前へ出て、

彦太　思はずこゝで天野様の、お亡りの事を承はりましたが、それにつけて天野様へお詫を願ふものがござります。

賢次　ナニ、わしにかナ。

彦太　ヘイ、私は牛皮會社の支配人でござりますが、社の内に皮を晒す男で、傳次と申します者が、心得違ひで御一新時分、天野様の密告をして、それがため本所で捕縛になつたと申す事、今日となつて見るとお氣の毒でなりませぬから、もし御身内でも知れた時は、お詫をしたいと申してをりますが、測らず此處で承はるも、これも不思議な御縁といふもの、どうぞお位牌へその男のお詫をなすつて下さりませ。

賢次　それは感心な者でござるナ。態々其身の非を上げて、詫びてくれとは性は善なり、悦びこそすれ恨みませぬから、よく本人にいつて下さい。

彦太　左様なら、お聞済み下さりますとか。それはさぞ悦びませうわえ。

トこの以前より上手に、下手茶店の縁台へ以前の佐兵衛、更けたる拵へ、羽織着流し、駒下駄にて腰をかけ、茶を呑みゐて、この時前へ出、

佐兵　高木様、天野様、暫くお目にかゝりませぬが、御機嫌よろしうござります。

源吉　オヽ、竹町の湯屋の御亭主か。マア此方へかけるがよい。

佐兵　測らず此處へ掛けまして、あなた方のお話を承はつて、思はずも貰ひ涙をこぼしました。

賢次　竹町の湯屋と申すは、上野の御用を足した、越前屋佐兵衛さんかナ。

佐兵　ヘイ、戰爭の時三河島で、八郎樣にお別れ申し、御出家方のお供して奥州まで參りました、越前屋佐兵衛でござりまする。

源吉　川端の治右衛門の前で、百姓姿で別れたきり、泰平になるまで逢はなかつたが、實にえらかつたノ。

佐兵　あの晩は川端の治右衛門の裏手より、田船で夜半にあそこを出て、上尾久の長兵衛方まで漕切りはひつて押してまゐりましたが、それから市ケ谷のコブ寺以來鐵砲洲の松坂屋から、横濱の蒸氣船をお送り申して、其後に奥州へ參りまして御機嫌を伺つた時、御前樣から御賞美に下さりました、お杖、お笠、お脚袢は、今に家の寶にして、神樣のやうにしてをります。

彦太　とてものことに、お守りにある脚絆を、お目にかけなさいな。

佐兵　おゝ、さうぢや、皆樣、こんなに大事にしてをりまする、（ト懐より腹守りを出し、内より四幕目に潰ひし白の胸脾を出し、）頂戴いたしましたる脚絆、有難いことでござりますナ。

ト出す、賢次郎受取りて押しいただき、これにて皆々辭儀を爲し、思入あつて、

賢次　アヽ、それはよく大切にしてござるナ。

彦太　かく目前に其時の、品を見るのも盡せぬ奇縁。

賢次　けふは五月十五日、御一新より算ふれば、丁度二十三年忌。

源吉　みな縁のある人々が、今日こゝへ集まりしも、

賢　開運進歩を内國の、諸人に知らす博覽會。

お君　第一第二第三と、その開場の度毎に、

米子　機械、織物、書畫、陶器。

雁子　木材、塗物、海産物

箱子　以前に優りし陳列に、

千鶴　外國品にも負けぬやう、

常雄　年々進むその證據は、

佐兵　湯屋まで近頃勉強なして、煉瓦家屋の御布達は、

小吉　不潔をかくす市場の目かくし、

彦太　實にこれ程有難い、

長吉　結構な世に出逢ふといふは、

佐兵　御同然に長生は、

彦太
佐兵　したいものでございますナ。（ト皆々よろしく思入。）

佐兵　唯分らないのはこなたの髷だが、なぜ附けてゐなさるのだえ。

長吉　こりや二十三年忌の、この五月十五日まで、彰義隊へ手向のちよん髷、濟んだら剪つてしまひます。

賢次　流石は會津の長吉殿、そこらの義氣は、

皆々　感心しました。

長吉　旦那、年はとつても若い者に、まだ負ける氣はございませんから、これから百迄生延びて、國民兵に出る積りだ。

千彌　こりやア天窓とは大違ひ、

榮藏　誠のこれが、

皆々　開化人ぢや。

ト　バタ〳〵になり、上手より以前の定夫、鈴を振りながら走り出て來り、

定夫　諸君、閉場時間になりまする。御退場下さい。

ト　捨てゝ下手へはひる。バタ〳〵にて上手より幕あきの田舍の小丑那半左衛門、キョロ〳〵して出て來る。後より嫁泣きながら附いて出て、

小丑　出ろ〳〵と言はッせつても、出所が一向分りましねえ。

嫁　出られなかつたらどうしべえ。（トオイ〳〵泣く。）

賢次　何事かと思つたら、出所が知れぬといはるゝのか。

小丑　ハイ、途方に暮れてをりまする。

嫁　ハア〳〵〳〵。（トしきりに泣く。）

佐兵　皆さん。（ト兩人に指をさす木の頭。）飛んだ開化人でござりますね。

トこの引張りよろしく、はやり唄、鈴の音にて、　　ひやうし幕

上野戰爭（終り）

一刀流成田掛額

いつたうりうなりたのかけがく

大切松田の傳

一刀流成田掛額（松田の仇討）

深川成田開帳の場
大川御座御成の場
久喜萬字假宅の場
南新堀乙女橋の場

序幕

役名　茂々之井門弟梅田雅樂介。將軍家慶公。水主同心内宮新太郎。茂々之井舜藏。大工赤貝の伊太郎。御小姓山名壹岐守。同大山兵部少輔。御小納戸稲本大隅守。同越川一學。成田講中大勢。水主。劍術遣ひ櫻井武雄實は水主同心、村田小八。久喜萬字屋藤吉。鳶頭分銅銀次。小頭分銅紫次。久喜の抱

妓、かしく實は内宮の娘おかよ。御小姓幾江。大御臺睦の方。老女濱の江。中老沖江。久喜の抱妓紫。同新造鳥人。茂々之井の下女お松。引手茶屋女房おくら等。

清元連中

一番目太閤記の幕引き付けると、打込みになり、此上にて成田山開帳の積み物の道具幕を引き、はやり唄鈴の音になり、東西の揚幕より三階二階の役者總出にて、思ひ〳〵の講中旗を立て、其外提げ音、賣出しの弘めものなどの仕出し出て來り、上下へ別れてはひる。

本舞臺一面の平舞臺、正面振よき松の大樹。此後ろ建仁寺垣、市村座奉納地所といふ建札。下手に家根附の茶店、富ケ岡といふ掛行燈、軒口に講中の暖簾、同じく提灯を掛け、竹に結びつけし納め手拭を澤山出し、茶店の正面葭簀張り、下手青簾をかけ、是に賤ケ嶽七本鎗讀切、田邊南龍、一の鳥居定席と記したる寄席のびらを掛け、此蔭出し臺に小竈茶釜擧鑵をかけ、此脇に茶碗を載せし棚を置き、手桶其外茶道具よろしく飾り置き、上の方見世物小屋莚張りにて見切り、すべて深川八幡境内の體。爰に小菅講中といふ小旗を持ちし講中四人、青山講中といふ小旗を持ちし講中四人喧嘩をしてゐる。小頭分銅藥次若衆鳶腹掛股引派手な着附にて尻端折草履、鳶の小頭のこしらへにて、[illegible]芳松金太同じく鳶の者のこしらへにて、三人此中へはひり、双方を止めてゐる。後ろに京橋講中の

人數立ち掛り見てゐる。やはり流行唄鈴の音にて幕開く。

小○ 厭だ〳〵、彼奴等にこめられちやア村の恥だ。

小四 了簡なんねえ〳〵、

芳松 是程俺達が留めるのに了簡がならねえのか。

小四 ア、了簡なんねえ〳〵。

金太 さうして相手のお前達も、矢張り了簡がならねえかえ。

青○ イエ私共の方はお前さん方が、口を利いて下さいますから、

青四 よろしくお任せ申します。

榮次 相手の衆は温順しく、留めにはひつたわつち等に任せると言ひなさるが、お前方はどうあつても了簡がならねえかえ。

小○ 是が日本橋か京橋の講中なら了簡しますが。

小へ 山の手から來た講中に、後から來て乘越されちやア、

小○ 村の名折れになりますから、假令お前等が口を利いても、

小口 後へ歸さにやア了簡なんねえ。

芳松　それぢやア是程口を利いても、了簡がならねえのか。

金太　了簡ならざア了簡するねえ、これから先は此方が相手だ。（ト金太立掛るを榮次留めて、）

榮次　コレ二人共静かにしねえか。人の喧嘩を買つて出ちやア、講中の衆へ對して濟まねえ。

芳松　それだと言つて彼奴等が、

金太　分らねえ事を言やアがるから。

榮次　エヽ待てと言つたら待たねえか。（トキッといふ。是にて兩人後へ下る。榮次思入あつて、）お前方は小僧と思つて俺を馬鹿にするだらうが、親父は銀座の銀次といつて、鬼に緣ある鐵棒の、昔に響いた鳶頭、今日は親父の名代にお迎ひに來た分銅榮次、一番わつちの顔を立つて、了簡して呉んなさらねえか。

京一　コレ／＼お前方も好い加減に、仲人に任して了簡しねえか。

二　折れる時に折れねえと、飛んだ喧嘩に枝が咲き、

三　どんな間違ひにならうも知れねえ、若しさうなつたら第一に。

四　不動樣へ濟まねえから、爰は頭に任せなせえ。

小〇　成程お前等の言ふ通り、不動樣へ濟まねえ譯だ。

小〇　頭へお任せ申すから、よいやうにして、

小四　下さりませ。

芳松　相手の衆も承知かえ。

青〇　此方は頭の顔を立て、さつきからお任せ、

青四　申しました。

柴次　爰で笑つてお呉んなせえ。モシ皆さん、手を借して下さいまし。

皆々　合點だ〳〵。（ト小頭はヤアと聲をかけ、皆々手を打つ。）

小〇　飛んだ事から皆さんの、

青〇　御厄介になりまして

皆々　有難うござります。

京一　お前方は遠方だから少しも早く、

京皆　お出なさい。

小〇　それぢやア皆さん。

皆々　これでお別れ申します。（ト流行唄の合方、鈴の音にて、上下へ小菅と青山の講中はひる。）

芳松　いつも成田のお開帳は、お着きに大層人が出るが、今日は餘計に出たやうだ。

金太　魚河岸から小網町を、やつと通つて深川へ來ると、芋を揉むやうだつた。

京○　そりやアさうと、家の頭は今日はお迎ひに來なさらないか。

榮次　今朝早く出ましたが、組合の者と一緒ゆゑ、今に後から參ります。

京×　今日此やうに人の出たも、一つは假宅のある故だ。

京皆　それぢやア小頭、

芳金　ドレ、御一緒に參りませう。

ト流行唄鈴の音にて、講中を先に榮次芳松金太上手へはひる。後同じく流行唄、八幡の大拍子になり、花道よりお由、島田鬘紋附の着附雪踏にて、桃井の娘のこしらへ、下女お松縞の着附雪踏にて、娘お由に日傘を差しかけ、おむら銀杏髷縞の着附雪踏にて小間使のこしらへ、金六ぼつと鬘縞の着附、草履にて下男のこしらへにて出て來り、花道へ留り、

お由　コレ松や、大層な御參詣で御門の際で人に押され、どうせうかと思うたわいの。

お松　あなたにお怪我をおさせ申すまいと、誠に心配を致しましたが、もう爰へ參りますれば氣遣ひはござりませぬ。

お由　今日不動樣がお着だので、奉納の庭などが餘程出來たやうぢやわいの。
お松　もう五日經ちますと、お開帳が初まりますから、奉納物を見物ながらお詣りに參りませう。
金六　わしは深川は初めてだが、何時もこんな賑かな所かえ。
お松　イエ〳〵不斷は斯うではないが、去年の地震で吉原の假宅がある上に、成田山の御開帳で、それでこんなに賑ふのぢやわいな。
むら　内の村で蛎河岸の厄神樣へ講中が出て來たから、今日のお迎ひが立派だつた。
お松　向うに茶店がござりますから、あれへ參つて休みませうわいな。

ト右の道具にて皆々舞臺へ來る。茶店暖簾口よりおみつ前垂駒下駄、茶屋女の拵へにて出て來り、

みつ　これはいらつしやいまし。これへお掛け遊ばしませ。
お松　大層な人でござりますな。
みつ　今し方まで、往來が出來ませぬ程でござりました。
金六　姐さん、茶でも水でも早く吳れさつせえ。
むら　おらも咽が乾いてなんねえ。
みつ　ハイ〳〵、唯今差上げます。

ト茶屋娘おみつ簾の蔭へはひる。皆々床几へ掛ける。三味線入り大拍子になり、上手より門弟清六大六源彌仁太郎、いづれも馬乘袴大小劍術門弟のこしらへ、二升樽を下げ少し酒に醉ひたる思入にて出て來り、お由を見て、

清六　今日は常になく酩酊致した、爰で一寸休んで參らう。

大六　成程これは休むべしだ。（ト清六態とお由の側へ腰を掛ける。）

お松　此方へお出なされませ。

ト お由の手を取り下手へ行かうとする時、清六足を前へ出す。お由それへ躓き、

ア、お危うございります。

清六　ア、痛い〳〵。（ト清六仰山に言ふ。）

大六　大和田氏、如何召された。

清六　是なる娘が足を踏んで、ア、痛い〳〵。

お由　イエ〳〵私が足などを、

お松　モシ。（トお松お由の言ふを留める。）

大六　武士たる者の足を踏むとは。

源彌　さりとは失禮千萬な、
仁太　こりや此儘には致されぬ。
　　トキッと言ふ。お由お松へ縋るを後ろへ圍ふ。小間使おむらキッとなつて、
むら　そりやアお前等がよくねえよ。お孃樣はよく氣を付けて歩かつしやるが、皆樣は醉つてござらつしやるではないか。
お松　コレ〳〵おむらどん、何を言はしやんす。
むら　それだつて餘り無理言はつしやるから。
お松　エヽ何だねえ（トお松おむらを宥め、）人混ゆゑにつひ粗相を致しましてござります、御免なされて下さりませ。
清六　イヤ〳〵許されぬ〳〵、足の指が切れるかと思ふ程に踏まれたからは、詞の詫では赦されぬ。
大六　此方の足を踏んだ程、娘の足を踏返し、
源彌　指の骨を踏折つて、歩けぬやうにして呉れう。
仁太　さうした事なら、人の足を踏んだ痛さが知れるであらう。
お松　皆樣方のお腹立は御尤もでござりますが、御覽の通り年の行かぬ娘御ゆゑ、どうか御勘辨下さ

りましてお赦しなされて下さりませ。

清六　イヤ〳〵赦されぬ、此儘勘辨致しては、武士たる者の恥辱ゆゑ、赦されぬからさう思へ。

お松　スリヤどのやうに、

皆々　申上げても、

大六　エヽ聞く耳はないわい。（ト　これにて兩人困る。金六おづ〳〵前へ出て、）

金六　ヘイ〳〵御免なされて下さりませ。

源藏　見れば爰へおづ〳〵と蟇を見るやうに、

仁太　這ひ出して來た手前は何だ。

金六　ヘイ、わしは下男でござりますが、今わし共の娘御が足を踏んだと仰有りますが、何所を踏みましてござりますか、泥が着いてをりませぬな。

清六　雪踏の事ゆゑ泥は着かぬが、コレ此足を踏んだのだ。（ト　清六金六の鼻の先へ足を突き出す。）

むら　アラマア嘘べえ吐かつしやる、何處も何ともありもしねえ癖に。

金太　コレサ何言ふだえ。（ト　おむらを金太退けながら、）お前様がさう仰言れば、よもや嘘でもありますまい。わしらがお詫びを致しますから、御免なすつて下せえまし。

清六　イヤ／＼赦す事はならぬ。足を踏んだ此娘をこれから一緒に連れて行き、

大六　思ふ存分に四人で。

兩人　エ。（ト兩人びつくりする。）

源藏　イヤ何も手荒い事はせぬ。

仁太　酌をして貰ひたいのだ。

金六　主人からわし共が預かつて來た此娘御、連れて行くと仰言つてもお渡し申す事はなりませぬ。

大六　エヽしち諄い、ならぬといふに。

ト清六扇にて金六の眉間を打つ。

金六　コリヤわしを打たしやつたナ。

清六　武士に向つて過言をなすから、打つたが如何した。

金六　打たれたからは。（ト金六を掛るをお松留めて、）

お松　アコレ金六殿、お前が腹を立つてはならぬ。

金六　それだと言つて。

お松　旦那樣のお名が出るゆゑ、ぢつと堪へて下さんせいな。（ト お松金六をぢつと留める。金六是非なく

留まる。）

大六　サア各々、お娘を早く連れて參らう。

源彌 仁太　それがよい／＼。（ト源彌仁太郎お由の手を取り引立てる。）

お由　アレエ。

お松　イエ／＼お孃樣は渡されませぬ。

大六　さう言ふ手前も一緒に來い。（ト大六お松を引立てる。）

金六　コリヤモウわしが命を捨てゝも。（ト立ち掛るを清六金六を突倒し、）

清六　邪魔のない内、

三人　少しも早く。

ト早き大拍子になり、大和田清六山倉大六娘を引立て、習志野源彌下女お松を引立て花道へ行きかゝる。金六是を留めるを、芝山仁太郎突廻して蹴倒す。茶屋娘おみつ捨ゼリフにて氣を揉む。小間使おむらは泣きながら附いてゆく。此内花道より茂々之井舜藏好みの裝、羽織大小草履穿劍術先生のこしらへにて出て來り、花道にて行き合ひ、突當りて、

清六　ヤイ／＼晝日中突當り、眼があつても見えぬのか。

大六　無禮な奴め、氣を附け通れ。

お由　ヤア父樣がお出遊ばした。

お松　よい所でござりましたな。

仁太　構はず引立て參らう。

ト是にて皆々行かうとすると、彌藏扇にて女形兩人を持つたる侍の手を拂ふ。是にて立廻りながら舞臺へ來り、四人彌藏を取卷き、

淸六　ヤア手向ひ致さば用捨はせぬ、姓名名告つて、

四人　勝負致せ。

彌藏　名告れとあれば申し聞かせん、身は京橋明河岸にて劍術の指南致す、茂々之井彌藏と申す者ぢや。

淸六　エヽ、そんなら貴殿は茂々之井殿か。

大六　ソレ各々。

ト兩人上下より彌藏を取る。是を彌藏拂ふ。後の兩人切つてかゝるを一寸立廻つて、彌藏扇子にて四人を打据ゑる。是にて叶はず、上下へ逃げてはひる。皆々ほつと思入あつて、

お松　よい所へ、殿様がお出下さりましたので、助かりましてござりまする。

金六　おつぽうてやらうと思つても、若し切られでもすると大變と、手に汗を握りました。

むら　わしは若し叶はなかつたら、此度のお開帳へ出る婆こかしの大女でも頼んでと、手具脛引いてをりましたが、殿様がござらしつたので、ポンと引擻かれた時は、村にゐて角力取して押擱つてやつた時より好い心持でござりました。

舜藏　生兵法の侍共、大分諸所を徘徊なし、町人に難儀をかけるとは憎むべき奴ぢやわえ。

お松　ほんに左樣でござりまする、

舜藏　由、如何にも群集致すから、久朝の内參詣をするとして、今日は早く歸るがよい。

お山　もう／＼是に懲りまして、早々歸宅致しまする。

金六　殿樣はまだお歸りにはなりませぬかな。

舜藏　是より木場の鹿島へ參る約束を致しあれば、介意はず先へ歸るがよい。

お松　どうか道にて今の人に、出逢はぬやうにしたいものだが、心配でなりませぬ。

ト此時下手へ幕明きの小頭と芳松金太出て來り、

芳松　モシ、そのお話の侍は、四人連れではござりませぬか。

お松　オヽ頭の所の皆さんも、御存じでございますかえ、其四人連れでございます。
芳松　それぢやア今橋の方へ、曲つた奴に違へねえ。
舜蔵　丁度いゝ所で逢つた、歸宅致すなら、是を送つて歸つて呉りやれ。
金太　よい所でお目にかゝりましたから、氣を付けながらお送り申しませう。
榮次　ナアニ彼奴等が力んだつて、高の知れた木端野郎、喧嘩をすりやア負けやアしねえ。
むら　小頭は威勢がよくつて、火事へ行く所を見ると、おらア仕事師さんは大好きだよ。
芳松　小頭がいゝならば、お前を女房に世話をしませうか。
むら　そりやア有難え事たが、こんなに人混の中でそんな事を言はれると、皆様におらこツ恥しいや。

ト小間使おむらは顏をかくす。

お松　コレサ、御主人の前で何でござんすねえ。
金太　イヤモウ、中々此子は愛嬌者だな。（ト此時本釣鐘のちやん〳〵を打込む。茂々之井思入あつて。）
舜蔵　ムヽ、早や勤行の知らせの鐘。
お町　暮れぬ内に少しも早う、

金太　此の衆達を力にして、

お松　お供致して、

皆々　參りまする。（ト茂々之井舜藏あたりへ思入あつて、）

舜藏　若し込合ふなら、

ト立上るを木の頭。

船で行くがよいぞ。

ト此模樣流行唄、見世物の鳴物にて、

ひやうし　幕

ト幕引付けると、双盤見世物の鳴物にてつなぎ、直ぐに引返す。

本舞臺一面の波幕。波の音にて幕あく。と波の音打上げ次第になり、知らせにつき波幕切つて落す。本舞臺向う三方鏡通り上總房州海原の遠見、上手に御濱御殿の御庭を見たる切出しの中遠見。平舞臺一面穩かなる波布を敷詰め、眞中に朱塗の御座船、黒塗の欄干、此間金葵の彫物。軒先へ紫地へ白の葵を染め抜きし幕を張り、此内船の面の方一と間、上段揚疊、此下手二た間に仕切り、ずつと艫の方二紺三白の幕を張り、此内に白地へ葵の御紋を朱にて染抜きし幟を建て、舳を上手にして据ゑ

ある。すべてお召船大川御座の體。上手上段の眞中に將軍家慶公、無地の割羽織中小紋の着附、義經袴一本差にて褥の上に住ひ、此左右に御小姓山名壹岐守大山兵部少輔、御小納戸稲本大隅守越川一學、何れも割羽織、將軍と一樣のなり一本差にて住ひ、次の間の眞中に大御臺睦の方、ふきわ髷縫ひ模樣の襠にて褥の上に住ひ、此左右に老女濱の江更けたる髷、襠、中老沖江、咲島ひとえ、同じなりにて住ひ、御臺の下手に御小姓幾江文金高島田振袖、此側に子役の兒附添ひ、此次の間に御坊主三人割羽織野半纏股引一本差にて住ひ、船の表に鵜飼周玄、割羽織野半纏股引にて、前に櫓を置き住ひ、此見得よろしく道具納る。と鼓の入りし靜かなる合方になり、

壹岐　治まる御代の時津風、波靜かなる青海原。
兵部　見渡す御濱の御庭内、いと青々たる秋の色。
大隅　中に彩る紅葉に、山水揃ひし御座船にて、
一學　後ろは房總二ケ國を、一と目に澪の印まで、
壹岐　ことなき詠めに、
四人　ござりまする。
家慶　今日急の思ひ立に、辰の口より乘船せしが、海は疊を敷いたる如く、かく大漁のあると言ふは、又一入の樂しみぢやの。

睦　永代橋を出でし時、御先供の漁船が一時に網をうちしは、見事なものであつたわいの。

濱の　あれは佃の六人船にて、御濱御殿の沖合まで、寄せ打にござりました。

沖江　漁る魚も御納屋にて、生洲へ取置き御濱まで、持參致すと申すゆゑ、

咲島　御上陸の上は、御庭の御茶屋へ御休息の節、獻上致すを、

一重　お側で拜見致しまするは、御供致せし身の冥加。

幾江　いと珍しく、

皆々　存じまする。

睦　今日思はぬ幸ひは、是までつひに例なき、女子に御成のお許し出でしは、此身にとつて冥加なり。幸ひ幾江はお慰みに、上へ舞を御覽に入れよ。

濱江　有難き御詞、お受け致すでござります。（ト辭儀をなして下手へ向ひ、）幾江殿、支度せられよ。

幾江　ハア、。

ト合方キツパリとなり、此時下手より坊主○後ろの手摺の中を通り、壺岐等の側へ來り、

○　申上げまする。唯今御納屋より獻上の生魚、はしけ船にて持參致しましたが、如何計らひませ

うな。

ト是にて御小納戸壹岐守上手へ向ひ、

壹岐　御庭の御茶屋へ廻しませうや、如何計らひませうな。

家慶　いと海中も穩かゆゑ暫時是にて休らへば、持參の生魚是へ持て。

壹岐　畏つてござります。(ト坊主に向ひ、)是へ。

○　ハツ。

ト下手へはひり、やはり右の合方にて○△□の坊主三人にて手の附きし小判形の桶へ魚の入りしを一桶宛持ち出て來り、將軍の前へ並べ、上下の緣の内へ平伏する。皆々是を見遣り、將軍悦ばしきこなしにて、

家慶　いつに替らず今日も、殊の外なる大漁であつたの。

一學　ソレ。御奥へも御覽に入れよ。

坊主　ハヽア。(ト坊主三人少し下寄りへ桶を寄せる。是にて坊主三人桶の内を見て、)

○　イヤ捕れましたナ〳〵、鱚黒鯛ふつこ鰈こちにせいご、オ、あなごもぬら〳〵間にをります。(ト此内坊主両人外の桶より一人は黒鯛、一人は鰈を、跳ねるのをやう〳〵に持つて、)

□　イヤ是はいかな事〳〵、此力の恐しさ。イヤどつこいしよ、さうはならぬ〳〵。
　鱆はぬめりのござるものゆゑ、イヤどつこい三つたか。（ト鱆の跳れ飛ぶのをやう〳〵に押へ附け、）
△　イヤモウぺた〳〵してはどうもならん、アヽ是にはほとんと僻易ぢや。
　　ト此内坊主小鱆の頭を持つて釣し上げ、
○　是に鱆がをりまする、此近海にて鱆はいと珍しき獲物、コリヤ一段とお慰みになります。
　一寸足を數へ、
　やはり足は八本ござりまする、如何にも左樣でござりますな、イヤ鯛鰈などに引替へ、殊の外温順しう致しをりますわえ。
　　ト此内持つたる指取れぬこなし。
　アヽ痛く〳〵〳〵、是はいかな事、吸付かれました。アヽ痛く〳〵、イヤ吸込む事〳〵。アヽ指が千切れるやうぢや、是はいかな事。
　　ト手を振れども鱆取れぬに當惑して手を振ふ。是を坊主□△介抱しながら慌て主人下手へはひる。
　　皆々是を見て笑ふ。
沖江　用意よくば、御上覽に備へられよ。

幾江　ハヽア。

ト此内小姓幾江金烏帽子薄衣の直垂緋の袴金の幣束を腰に差し、静の拵らへにて中啓を持ち、前へ出て下にゐる。是を下座の地へ取る

唄へ晴れ渡る空も翠に常磐なる、松吹く風も穏かに、八重の潮路も浪立たで、静けき御代に民安く、君が恵みを打仰ぐ、日影のどかに真帆片帆、千船百船おちこちに、湊をさして入るぞめでたき。

ト此舞の内静かに御座船上手へ廻る。唄の切れ、揚つた合方になり、バタ〳〵にて船檣の方に水主同心内宮新太郎、少し更けたる顔、白地へ濃鼠にて紋を染抜いたる伊達染の着附浅黄一帯にて、同役村田小八同じこしらへにて、是を引付ける心得、檣の道具に留る。

新太　ヤア何故あつて断りもなく、一番檣を取つたるぞ。

小八　イヤ拙者が取りしは其筋、組頭の許しを受け、今日晴れの御成の御供に、先檣を取りしが如何致した。

新太　オヽ許しを受けしと申すが、同役たる我々共へ、達しのなきは如何なるぞ。

小八　ナニ、まだお触れがござらぬとな。

ト　びつくりして下にゐる。

新太　辰の口より御濱まで御通船中、是非なくも默してをつたが、此沖で御漁の間を幸ひに、皆の出ぬ内申聞かす。素より先艫の許しを受くれば、一統へ組頭より斯々なりと觸れるが當然、コリヤ村田、其方未だ壯年故前後も辨へずして、斯かる不都合を仕出しては、上へ對して濟まざるゆゑ、爲を思ふて申し聞かす、よく承はれ。（ト船桁へ腰をかけ、）其方日頃上役へ諂ひ下の者を眼下に見下し、己れの利のみ計らんとする、心得違ひの振舞なり、そりや組頭へ諂ひなば、先艫の役をさせん位は言うたかも知れざれど、上役ばかり笠に着ても、一統承知せざる時は、此内宮同役に代り不承知を申すぞよ、御身は然も三番艫、何故先艫で是へ參つた。

小八　サアそれは。

新太　コリヤ唯の船人とは譯が違ふぞ、勿體なくも上様の御座船の御供にて、先艫と排は大事の役目。若し粗相のある時は、其身の不爲であらうのに、それでも強ひて先艪を取るか。

ト小八俯向き忌々しきこなし。

長年勤めた其揚句で、やう〱先艪へ出られるのだ、追從輕薄の出世では、いざといふ時役には立たぬぞ、コリヤ村田、耳はないか、イヤサ御身の爲を思ひやる異見が耳へははひらぬか、無

理な出世で、若しひよつと御船の汐路を違えたら、其時こそはコレ此首道具、波の藻屑へ落ちて死ぬのは役柄ゆゑに譽だが、お仕置受けては死にたくねえ、憎まれ口は御身の爲だぞ、よく年寄の言ふ事を忘れぬやうに覺えてゐやれ。（ト立上り思入あつて）ドレ、明櫓へ參つて勤めねばならぬ。

ト上手へ行きかゝるを、村田小八忌々しき思入あつて、内宮の褄を提へ、

小八　新太郎待て。

新太　待てとは何ぞ用でもあるのか。

小八　おのれ滿座の其中にて、よくぞ恥辱を與へしぞ。

新太　恥を掻かせしが何とした。

小八　ム、。

ト息込み、有合ふ小刀を取つて柄へ手をかけるを、内宮新太郎扇にて是を留める。一寸立廻つて拔きかけるを新太郎要にて村田の眉間を打つ。是にて小八の額に疵つくゆゑ、再び立上らうとする所へバタ〳〵にて水主同心三人、同じく揃ひのなりにて出て、小八を抱き留める。此見得合方早めて薄く波の音をあしらひ、此内船上手へ廻る。是にて舳の鴻側は櫓を持つてと掛り、御船の兩人に

刀へ手をかけ、將軍を守護してゐる見得にて船納る。

壹岐　艫の方に一非常の訴へ、容易ならざる物音は。

兵部　コリヤ唯事では。

皆々　ごさらぬぞ。

トキッとなる。此中へ將軍割つて出て、四邊へ思入あつて氣をかへ、

家慶　イヤ氣遣ひ致すな。あれは大方六人の者が寄網の人聲ならん。

ト是にて皆々顏見合せホッと思入あつて下にゐる。鵜飼あたりへ思入あつて、

鵜飼　仰せの通り餘程大漁のやうに見受けまする。

睦　スリヤ非常の事では。

女形
皆々　ござりませぬか。（ト此内將軍は立身にて船へ思入あつて氣をかへ）

家慶　皆の者。

皆々　ハア、。

家慶　よい眺望ぢやの。（少トしもさはらぬ體。皆々恐入つたるこなしにて）

壹岐　寬仁大度の御詞は、

兵部　是ぞ則ち十二代の、

大隅　天下は益々太平に、

一學　流れも清き徳川の、

壹岐　其名も高き、

四人　大川御座。

睦　御供致せし妾まで、

濱江　恐悦申し

皆々　上げ奉りまする。

家慶　ム、目出たい、船唄申し付けい。

鵜飼　ハ、ア、

ト是にて鵜飼立上り扇を高く上げて合図する　此時下座にて御船唄の端唄になり音頭を取る

鵜飼へ高き家に昇りて見れば煙り立つ、民の竈も賑ひて、

ト是より大勢になり、

へソーレ閉ざゝぬ御代こそ目出たいの、御機嫌目出たい、エヽソーリヤエヽ。

ト此御船唄へ薄く波の音靜かなる合方を冠せ、御座船段々と奥へ引込む。よき程に知らせに付、大ドロドロになり、此道具居所にて替る。

本舞臺一面の平舞臺。上寄りに三間の間向ふ一間床の間。好みの掛物をかけ、續いて袋戸棚茶棚次の間一間夜具棚。此下二枚引の杉戸。此次一間廊下口、向ふ座敷の書割。門口の所緣張りの障子上の方折廻し障子で閉切り、下の方中二階の淨瑠璃臺で伊豫簾を下し、上寄りよき所に六枚屏風を立廻し、傍に丸行燈、煙草盆を置き、廊下に掛行燈をかけ、すべて深川仲町久喜萬字樓宅二階の體。下手廊下口に大工赤身の伊太郎着流し三尺、手に腹掛と羽織を持ち、歸ると言つて立掛りゐるを、引手茶屋女房おくら新造音人と留めてゐる。此見得太鼓入り騒ぎ唄にて幕あく。

伊太　厭だ〳〵、おらア歸るから留めて呉れるな。

くら　モシ親方、何がお氣に障りましたか、マア靜かになさいまし。

伊太　あんまり人を莫迦にするから、默つちやアゐられねえ。

くら　誰がお前さんを莫迦にしますものか。

音人　マア紫さんの部屋へお出でなんし。

伊太　厭だ〳〵、誰が部屋へ行くものだ、身分は叩き大工だが、大概な棟梁より仕事の多い伊太郎さんだ、是まで長屋の三州屋へ家のやうに出掛けたが、迚も女郎を買ふならば大きな所で遊ばう

くら　と、當時假宅で一の當り、八幡前の久喜萬字、是から足を近く來る氣で、憚りながらふりぢやアねえ、茶屋から送られて來た俺だ、一寸床へ面を出して、それぎり烟になつてしまひ、あんまり莫迦にしやアがるから、外へ行つて上るのだ　留めずに俺を歸して呉れ。

くら　生憎今夜はお客が落合ひ、お前さんへ濟まないといつて花魁も氣を揉んで、今に行くから些との間、私につないでゐて呉れと、くれ〲もお頼みなさんしたから、マアお部屋へお出でなさいまし。

晋人　今呼んで參りますから、マア兎も角もお出なんし。

伊太　厭だ〱、何でも歸らにやア虫が納まらねえ。

ト此時廊下口より紫部屋着のこしらへ、上草履にて出て來り、歸るといふ伊太郎を引留め、

紫　今に私が參りんすから、少し待つてゝ呉んなましと、あれ程お頼み申したのに、歸る〱と大きな聲して、私しの勤めの惡いやうで、内證へ聞えて叱られんすから、一緒に部屋へお出たんし。

伊太　俺だつて今日初めて女郎を買ひにやア來ねえから、廻しがあれば來られねえも知つちやアゐるが、一寸顔を出した限り、あんまり酷い仕方だから、外へ行く氣で歸るのだ。

紫　それぢやア私に恥を掻かして、それでいゝのでありんすか。

伊太　いゝといふ譯ぢやアねえが。

紫　さういふ譯でないならば、お部屋へ歸つて下さいまし、今お前さんに歸られると、花魁も恥たれば這入つた茶屋も恥になれば、其處を思つてモシ親方、機嫌を直して下さいまし。

伊太　一旦歸るといつたならば、明日來るとも今夜は歸ろ。

紫　それぢやアお前さんは私が厭で、それで歸ると言ひなんすのか。（ト紫思入あつて）是程私が思ふのに、こんな悔しい事はありんせん。

音人　そんなに氣を揉みなんしたら、又癪が起りんせう。

紫　こんなに皆んなが留めるのに、どうでも歸りなんすのか。

伊太　ム、お前せえ來て呉れりやア歸る氣はねえけれど。

くら　お歸りなさる氣がなければ、機嫌を直してモシ親方。

音人　早く部屋へお出なんし。

伊太　それでも歸ると言つたからは。

紫　エ、じれつたい、私と一緒に。（ト紫伊太郎の手を取る。）

ト太鼓入りの鳴物にて、紫伊太郎の手を取り、おくら附いて廊下口へはひる。引違へて廊下口より鳥人新造のこしらへ上草履にて出て來り、

くら　マアお出なさいまし。

鳥人　紫さんの今のお客は、ひつこいらしい厭なお客でありんすね。

青人　大層木の匂ひがするから何商賣かと思つたら、大工さんでありんすよ。

鳥人　座敷のお客は寢てゐるなんすか。

青人　醉つたと言つて先刻から、よく寢入つておいでなんす。

鳥人　今夜雲井さんのお座敷で、清元の淨瑠璃があるといふ事でありんすよ。

青人　そりやア樂しみでありんすね。

ト知らせにつき、下手[illegible]を巻き上げる、爰に清元連中肩衣袴にて居並び兩吟の淨瑠璃になる。

へ東雲の八幡鐘にきぬぎぬの、別れ惜みし深川の、街の假の吉原に、船の送りの佃より、音色やさしきさすがゝきさや、

ト此内鳥人屏風の内を覗く事などあつて、青人とひそひそと話をする思入。

へ宵は[illegible]はふ店先に、二階はしんと汐風に、しめる久壽の奥二階、かしくは

部屋へ歸り來て

ト下手廊下口よりかしく部屋着遊女のこしらへ上草履にて出て來り、

かし　雅樂さんは寢てゐなんすかえ。

音人　御酒をたんと上らぬゆゑ、醉倒れなんしたから其儘にして置きんした。

かし　ほんとに寢なんしたらよからうに、風でも引いたらどうしなますか、一寸屏風を取つて與んなんし。

兩人　アイ〳〵。

〽夏とは言へど風寒く、たてし屏風の蝶番、莊子が夢の花も散り、けふは若葉の木下闇、灯影小暗き緣のはし。

ト此内音人屏風を疊んで後ろへ置く。内に梅田雅樂之助好みの着野暮なるこしらへにて座布團の上に莨の函を枕にして轉寢をしてゐる。かしく傍へ來て寢てゐる顏をぢつと見やり、淨瑠璃の中より合方になり、

かし　モシ雅樂さん、何からなされなんすやうだが、早く目をお覺しなんし。

ト雅樂之助揺り起す。薄き風の音になり、雅樂之助びつくりして起き上り、あたりを見廻し胸を撫

でゝホッと思入。

何をそんなにびつくりしなます。

雅楽　爰は御濱でなかつたか。

かし　ナニ御濱とはえ。

雅楽　御濱御成の夢を見たのぢや。

かし　ナニ、御成の夢を見なんしたとか。

雅楽　今日も一日劍術の稽古をなして夕方より、休息なしてをつたところへ、朋友が來て誘はれ、廓へ來た歸りがけ、連が馴染に同道せしが、拙者は知らず見物につい浮されて酔倒れ、其儘爰へ轉寝の夢に見たのは御濱御成の、符合せぬのは御大名が女中衆迄お供であつたが、女子が主と同衾はつひに是まで聞かざりしが、爰らが夢の證據であらう。（トちつと思入あつて、）唯正夢にありありと、イヤナニついとろ〳〵とした所を、揺り起されてびつくりしたが、是も稽古の疲れと見える。

かし　稽古の疲れと言ひなんすが、何處の稽古の疲れやら、知れたものではありません。

鳥人　コリヤ花魁の言ひなんす通り、大方昨夜何れへか、お出なんして可愛がられ、

音人　そのお疲れでありんせう。

雅樂　其方達までが同じやうに。そんな浮いた事ではない、素より野暮な産れゆゑ、唯の一度外へなど遊びに行つた事はないが、朋友共に勸められ、當家へ二三度來たばかり、それに師匠が堅い氣質に、容易な事では拔けられず、漸くの事で今日來たのぢや。

かし　私も野暮な産れゆゑ、粹な客衆を取らうより、お前のやうな野暮なお方を、取るのも上々此身の力に。とサア此方で思ふ半分も、主は思うて下さんせぬゆゑ、それが病の因となり、此中からの長の煩ひ、もう再びお客樣のお目もじは出來まいかと心細う思うてゐたも、神や佛の御利益と、御贔屓樣のお蔭にて、元の體になりし嬉しさ、有難涙に暮れまする。（ト一寸辭儀をなし）どうぞ此後外の店へ行かずにゐて下さんせ。

雅樂　外へ揚つた事のないは、樣子の分らぬ手前ゆゑ、左樣な事を言はれると、くはつ／＼と逆上あがり、穴へでもはひりたくなるわえ。

かし　その野暮らしいお詞に、思ひ染めしは此三月。

ト是よりくどきになり、

〽しかも櫻の咲き滿ちて、雪か雲かと夕映えの、日影まばゆき道中に、顏見

合せて恥しく、へ芽出し紅葉に誰が色か、うら山吹と信半の、見世へかけしが緣のはし。へ初会馴染の嬉しさも、今は苦勞をます鏡、へ顔のやつれも誰ゆゑぞ。

トかし、雅樂之介を捉へて口說の振よろしく、此内廊下口へ以前の村田小八の僞名櫻井武雄着流しにて出て來り、此體を見て腹の立つ思入あつて下手へはひる。

これほど私が思ふのに、文を上げてもお出はなく、あんまりつれない事でありんす。

雅樂　流石は廓の育ちとて、お主達まで其のやうな事を言ふのが手管とやら、實に感心致したわえ。

鳥人　そんなに主は褒められんしては、何ぞ奢られねばなりんすまい。

音人　梅田さんはお酒より甘味の方がようありんす。

かし　ほんに先刻佐賀町の船橋屋から取寄せた、葡萄製の月の雫が其處にあるからお上げなんし。

音人　當時賣出しの船橋屋から、月の雫をお取りなんしたかえ、それは何處にありんす。

かし　ソレ其處にある持遊びの延喜棚の抽出に。

音人　さうさますかえ。

〽松にかゝりし藤浪を、たとへて言はゞ新造に、ゆかりの色の花房も、夏まだ若く葉隠れに、薄むらさきの二季草。

ト此の箪笥の上にある籠へ持遊びの延喜棚を持つて来て、下の抽出を抜き、月の雫を出し菓子盆へ入れる。雅楽之助は延喜棚へ目をつけ、

雅楽　これは持遊びとは思はれぬ、なか／＼器用によく出来てる。

鳥人　それは仲見世で名の高い武蔵屋でありんす。

雅楽　道理こそよい細工だ。（ト取上げて上をあけて見て、）ヤ、コリヤ中に戒名がある、見れば男の戒名だが誰か思ふ人の戒名なるか。

かし　イエ／＼さうではありんせん、それは私の父さんの戒名でありんす。

雅楽　扨は親御の戒名とか。

かし　表向を佛壇を置く事がなりんせんから、持遊びの延喜棚へ戒名を入れて置き、人目を忍んで朝夕に。（トぢつと思入あつて、）拝んでゐるのでござんすわいなア。

雅楽　それは近頃奇特な事ぢやや。（ト雅楽之介戒名をとくと見て、）「天保十一庚子年九月十一日、頂寒院霧月刃雪居士。」月は違へど今宵は十日、丁度通夜に當るの。

かし　アイ。

ト かしくホロリと思入。

へおいとゞばかりに差俯向き、雨の牡丹の風情にて、まぶた重たに袖濡らす、葉末の雫亡き人に、翌日の忌日の手向水。

ト此間かしく愁ひの思入にて俯向き涙を袖にて隠す思入　雅楽之助香合とかしくとへ思入あつて、

扨はといふこなしにて、

雅楽　扨は今の咄は其方なりしか。

かし　エ。（ト思入雅楽之助顔をかへ）

雅楽　是も心気の迷ひであらう。（ト此時奥にて手を叩く）

かし　其悋気今夜は客衆が御引け、座敷が足らぬ間なれば、二人は是から吾妻さんを供につけておせんなんし。

音人　アイ〳〵、そんなら彼方へ行きんすから、用があつたらお呼びなんし。

ト又奥にて手を叩く。

鳥人　アレ又奥で手が鳴りんすよ。

音人　エヽ忙なうさますねえ。

ヘ卯の花くだし降りつゞく、曇りし空も吹き霽れて、かはる景色の夏木立、
茂る若葉ぞ。

ト音人よろしく振あつて下手へはひる。三重にて伊豫簾を下し、清元連中を消して、

雅樂　丁度幸ひ此内に。

ト譏への合方になり、かしくを上手へ住はせ、雅樂之介は下手へ來り形を改め、

四邊に憚る人なければ、以前をお尋ね申しまするが、若し駿州安住に御住居なされし内宮樣の
御孃樣ではござりませぬか。

かし　エヽ、どうしてそれを。（トびつくりなす。）

雅樂　其驚きは御尤も、私父はあなたの御親父内宮樣のお蔭にて、一命を助かりましたる梅田善兵衛
が悴、雅樂之介にござりまする。

かし　エヽ。

トかしくどうと下にゐて、

子供の折ゆゑ顔は知らぬが、そんなら梅田善兵衛殿の、お前は悴でござんしたか。

雅樂　絶えて久しきお孃樣、以前に變るお身の上はおいとしうござりますが、先づは御無事で何より悦ばしうござりまする。

かし　さうして爰にゐる事を知つての事か、但し又、知らずに遊びに來なさんしたか。

雅樂　先頃圖らず朋友が酒宴の席での談柄に、今深川で評判の久喜萬字のかしくといふ、縹緻勝れし花魁は、不仕合にて駿府へ行きし、元は公儀へ勤めし者のなれの果と噂せしを、聞くにつけて胸に應へ、若しやそれが恩人の孃樣にてはあらざるかと、遊里などへは唯の一度參つた事はござらぬが、いよ／＼それと相違なくば、苦界の勤めをお助け申し、親善兵衞が一命を助けられたる御恩返りを致さんと、友を便りに當春より、樣子を探りに參りし拙者、圖らず唯今御戒名にてお名告り申せし我が本懷。是まで枕交はさぬを、不審に思召しませうが、此譯ゆゑでござりまする、又私も其頃は十二才の前髮で、あなた樣はお乳呑ゆゑ御存じないは御尤、亡き親共の導きか、圖らずお目にかゝりましたは、盡きせぬ御縁でござりまする。

かし　思掛けないお方に逢ひ、名告り合ふのも面目ない、かうして今は賤しき勤め、誰を便りにするものなく、如何なる宿世の因果にて、かういふ憂目を見る事かと、泣かぬ日とてはごさんせぬ。

雅樂　御尤なる其仰せ、我が父臨終の際に臨み、私を枕邊に招き、我れ朋友と果し合致せし時、既

に一命失はんとせしを、内宮新太郎様のお蔭にて、事なう其場を助かりしは、全くあなたのお蔭ゆゑ、我れ亡き跡は其方が必ず御恩を返し呉れと、申すが此世の別れにて、遂に其儘で[illegible]致しましたが、つひに是まで一日だに思はぬ事はござりませぬが、嘸御無念にござりましたらう。

かし　其後彼の話ろを聞くに、父を討つたる同役の村田小八といふ人は、心良からぬ者にて、[illegible]に悪しき事を企て、御上の御為にならざるを、父上再三御異見ありしを、却つてそれを遺恨に思ひ、御成の時に船中にて、争ひせしを上様が、御存じないとの有難い御慈悲の仰せに軽くは済めど、御立ちの後御船蔵にて晝の遺恨に村田殿が父上を切害なし、再び上の御調べ受けしも、相手が死人に負になり、江戸の住居も出來難く、駿府へ逼塞する悲しさ、思へば悔しうござりまする。

雅楽　そのお恨みは御親子ゆゑ御尤にござりまする、シテ此江戸へお出でなされ、かく賤しき勤めをなさるは、如何なる譯のあつての事か、それをお聞かせ下さりませ。

かし　話せば長い事ながら、父上お果なされしより、兎角に悪しき事のみ續き、する事なす事左り前に、殊更跡を引受けて、萬事の世話をして呉れる伯父が慾心深きゆゑ、よいやうな事をして、

所持の金子も費ひ果し、見る影もない姿となりしも、父を討つたる村田ゆゑ、いつか恨みを晴らしたいと思へど女の力に及ばず、憂き年月を送る内、父母様は長年の御苦勞なされしたゝまりが、遂に重き病となり、果敢なくおなりなされし其取片附や何や彼や、多くのお金の入用に、江戸にをつたは三歳の時ゆゑ、世間で知らぬを幸ひに、以前を包み爰へ來て、今は苦界の勤めの身に、愁ひの中の幸ひは、多くの人の入込む廓、密かに敵を尋ねる内、此頃出の所へお出での櫻井武雄といふお客は、以前は公儀へ勤めし者と、聞いて様子を探りしに、多分は村田小八といひし敵にてはあるまいかと、思へど確と證據もなく、心を痛めてゐますわいな。

雅樂　シテ其外に是ぞといふお手掛りはござりませぬかな。

かし　サ、其頃母の物語りに、手利の上に討つたる刀は、和泉守國貞の銘刀、其以前赤穂の義士堀部安兵衛が所持の刀で、一ト目見れば判るといへど、是も年月經ちし事、それを所持する事や分らず、外に手掛りござんせぬ。

雅樂　シテ唯今お話ありし櫻井と申す客に、お身をお任せなされましたか。

かし　イエ初會の時に其以前、上へ仕へし者といふ故、言はず語らず此身を晴らさ、あのゝものゝと言抜けて、身を任せねば意地になり、三日にあげず來なさんすが、早く二人が名告り合ふたら、

かういふ事にはなりますまいに。

雅樂 仰言る通り私も、其後江戸へ參りまして、肥後州なる細川侯の藩中に身寄りござるを幸ひに、劍術修行致す內、承はれば御親父には不慮の御最期なされし上、御家も其儘退轉なされ、當時駿府の安在へ御逼塞と承はり、取るものも取敢へず、再び駿府へ參りし所、其お住居も跡方なく、何れで聞いても御在所分らず、是非なく歸邸致しましたが、圖らず今晩お名告り申し、日比の念の屆きし上は、今に苦界の御難儀を、お救ひ申して亡き親の、御恩報じを致しますれば、必ず御案じなされまするな。

かし 其安心の出來ぬのは、近々私の身請をして、表向妻にすると茶屋樂へ話をした樣子、よい工面はござんすまいか。

雅樂 ナニ近々身受を致しますとな。（トぢつとなり、）心は矢竹にはやれども、自由にならぬはあなたの身請、差當つて金の工面に殆ど當惑致しまする。

かし ム、、スリヤ其お金の才覺に。

雅樂 困ると申すは私も劍道修行に出でし身の上、大した金を借りようと申しましても貸人なく、此才覺に困りまする。

トちつと思入。此時下手廊下口へ以前の櫻井武雄出て、「安在へ逼塞」といふセリフの頃より立聞する。雅樂之介かしくは是へ心付き氣をかへて上下に入替り、

かし　そんなら茶屋衆へ相談して早く身請をして與んなまし。

雅樂　もう大船に乘つた氣で、身請は心配するに及ばぬ。

かし　エヽ嬉しうござます。（ト是を聞き櫻井ムツとせし思入にて、）

櫻井　イヤ其身請は相成らぬ。

雅樂　エヽ。

かし　さう言ひなんすは櫻井さん。（ト是にて櫻井内へはいり、）

櫻井　先達より茶屋へ[illegible]込み、かしく身請の相談は、九分九厘[illegible]ひしぞ。

雅樂　見れば何れのお方やらお前さへも存ぜぬ貴殿・身が合姻の此席へ、案内もなくヅカヅカと、推參あつて[illegible]ありしぞ。

櫻井　如何にも[illegible]へ[illegible]はなく、踏込んだのは[illegible]でもない。我が身請なすかしくが[illegible]

雅樂　何と言はるゝ。（ト誂への合方になり、）

櫻井　近頃[illegible]櫻を[illegible]すやうおそやか、我は以前公儀にて[illegible]を頂[illegible]せし者だが、上の不首尾で、イ[illegible]

二十八、暇を願ひを出し、無禮作行の其節に、長の暇を願ひし上、當時は別に勤めなき、一本差の櫻井武雄、今にも内證へ金子を渡し、身請致せば手前が妻、それ故是へ參つたのだ。

雅樂　成程櫻井殿になられし上は、いかにも貴殿の妻女ゆゑ、殊に遠慮もござるまいが、いまだ身請の濟まざる内は、今宵手前が揚げたるかしく、其處へつか／＼踏込まれしは、チト粗相ではござらぬか。

櫻井　ム、貴殿の申すも尤もだが、後とも言はず唯今、身請をしたら言分あるまい。

雅樂　扨は唯今かしくが身請を。

櫻井　金子取寄せ渡すであらう。

かし　イエ／＼私や梅田さんに身請をされる約束あれば、心に濟まぬお前の方へ、私や行く氣はありいせん。

櫻井　心に濟まうが濟むまいが、身請の金を並べたら、もう否應は言はさぬぞ。

かし　そんなら今宵身請の金を爰へ持つて來なさんしたかえ。

櫻井　爰へは持つて來ぬけれど、豫て師匠の耳へも入り、好いた女子があるならば、何時でも金を出してやるから、身請をなして女房にしてと、弟子を憐れむ師匠の情、人さへやれば直ぐにも來

るのだ。

かし　そんなら私が厭といつても。

櫻井　金で面を張る心算だ、それとも約束したといふ、梅田氏が今宵で、かしくの身請をさつしやるか。

雅楽　サア約束なせど今と言つては。

櫻井　それぢやア金は出來ねえか。

雅楽　サアそれは。

櫻井　但しは金を並べるか。

兩人　サア〳〵

雅楽　金がなければそれまでだ、かしくは手前が身請致すぞ。」

雅楽　ムウ。

かし　そんならお前が今宵で。

櫻井　ム、茶屋を呼んで金を渡さう、コリヤ信半はゐねえか〳〵。

ト手を叩く、下手より以前のおくら出て來り、

くら　櫻井様お呼びなさいましたか。

櫻井　牛込まで御苦勞ながら主に行つて貰ひたい。

くら　ソリヤ何の御用でござりまする。

櫻井　用と言ふのは外でもない、是から師匠の所へ行つて、金を受取つて來て貰ひたい。

くら　參る事は參りますが、明朝でもよろしいではござりませぬか。

櫻井　イヤ明日の朝では間に合はん、是非とも今夜身請するのだ。

くら　それぢやと申して引過ぎゆゑ。

櫻井　エヽ身請を急ぐのだ。行けといふに。

ト、キツと言ふ。此時廊下口へ久喜萬字の亭主藤吉羽織着流しにて、以前の紫を連れ出て來り、

藤吉　イエ此お身請はどちらへも御相談は出來ませぬ。

ト是にて兩人びつくりなし、

櫻井　誰かと思へば此家の主、此相談が出來ぬとは。（ト合方替つて下にゐて、）

藤吉　不思議な縁で私共へ一昨年から來て三年越し、唯の一度悪い耳を主人へ聞かした事もなく、お客を大事に朋輩の、しめしまでもして與れるので、二階の風儀も以前と替り、家の爲には大事

の花魁、假令萬兩積まれましても手放す事は出來ませぬ、然し一旦泥水を呑んだ體でございますから、間夫があるなら其方へやるまいものでもございませぬが、此お二人には上げられませぬ。

櫻井　スリヤ爰へ金を積んでも。

雅業　二人へ身請はさせんと申すか。

藤吉　上げられませぬは外でもない、我が物を我が改めて、かしくの身請は私が致しますでござりまする。

櫻井　ム、抱主の其方が身請とは、味に搦んで來つたな。

くら　エ、そんならお前が花魁のお身請でなさいますとか、是には何ぞ仔細のある事。

藤吉　イヤ別に仔細にも何もないが、知つての通り子がなければ、今夜限り見世を退かせ、わしが跡にしますのサ。（トかしくびつくりなし不審のこなし。）又其處にある雅業を二代目かしくにして、立派に弘めさせますから、どうぞ仲間へ言つて下せえ。

業　そんなら私を二代目に。

藤吉　お主も否やはあるまいな。

紫　エヽ、嬉しうござます。（ト櫻井心惡き思入にて、）

櫻井　兩手に花の口論を、散らす主が此場の納まり、八重にからんだ春の末、花の詠めももう是迄、是から歸つておれも又、中萬字か甲子屋で、かしくに增る花を詠め、此面當をせねばならぬ。

くら　それではあなたは是限りでお歸りでござりますかえ。

櫻井　遊里でなくば落花微塵に致す所も花を持たせ、此儘綺麗に歸ると致さう。

くら　お歸りならばお送り申しませう。

櫻井　かしくが間夫の梅田氏。

雅樂　御緣があらば又其內。

櫻井　今夜の御禮は屹度致すぞ。（ト唄になり櫻井を先におくら附いて下手へはひる。）

雅樂　シテ主にはいよ〳〵かしくを。

藤吉　現在身請のお客を斷り、娘となすも是までに、家の爲になつたかしく、望みを叶へてやりたいゆゑ。

かし　それでは若しや先刻の話を。

藤吉　サアそれゆゑ身儘にしてやるのだ。（ト雅樂之介感心せし思入にて、）

雅樂　流石は久喜の。主でござる。

ト皆々引張りよろしく、「あれ又憎や」の唄にて此道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺。上の方貸藏で見切り、下の方納屋の見切。向ふ北新堀の川向乙女橋より永代を斜に見たる書割。すべて乙女橋際南新堀夜の體。是へ誂への十日の月を出し、時の鐘題目太鼓の合方にて道具留る。と、上下より夜商人、開帳歸りの仕出し出て下手へはひる。本釣鐘誂への合方になり、上手より以前の茂々之井舞藏少し酒に醉ひし思入にて出來り、

舞藏　川上と此川下や月の友と、其角が句にもある通り、川邊の月は又一段、水に映りてよい詠めや、本町の家に連れられて平清で飲み過し、思ひの外暇取致した、然らば泊れと留められたを、辭退しに歩いて來たが、川風がよい心持ぢや。（唄）「春雨の音もしきりに更くる夜の、東寺の前を打過ぎ、九條表に打つて出で。

ト唄をうたひながら舞臺中へ來る。此内花道より清六等四人の侍、頬被り尻端折にて附いて來り、上下へ別れ窺ふ、舞藏ちらりと見て下座の前になり、

〽羅生門を見渡せば、物凄じく南落ちて、僅かに吹き來る風の音に、

ト此内上下より四人拔きつれて斬つてかゝる。爰へ上手よりホイ〳〵と聲して四つ手駕籠を擔ぎ出て來り、此中へ擔ぎ込みびつくりして舁夫駕籠を上手へ下し逃げてはひる。是にて駕の垂を捲り上げ、内に以前の雅樂之介乘つてゐて、此樣子を見て感心せし思入。此内舜藏は矢張り四人を相手に本手の立廻り、誂への合方搦めて波の音。トゞ舜藏侍の刀を引取り峰打にする、是にて四人下手へ逃げてはひる。此立廻りの内雅樂之介舜藏先生と心附き、駕籠より出て見てゐて、トゞ四人の逃げ行く後を見送り、舜藏につたり笑ふ所へツカ〳〵と出て下にゐて、

雅樂　先生にござりましたか。

舜藏　コレ。

ト舜藏押へる。此時月に雲かゝり暗くなる、舜藏刀を下手へ抛る。爰へ下手より鳶銀次郎着附尻端折草履にて出て來り、雅樂之介へ行當り、びつくりして飛退き、上手より以前の櫻井出て來り、舜藏と行會ひ、左右へ除け合ひ、鳶頭搔きのけて行くを櫻井引戻し、左右へ別れてキット見得。誂への騷ぎ唄へ稽古囃子を冠せし鳴物になり、是より有合ふ鶴を使ひ、世話だんまりの立廻りあつて、トゞ櫻井花道へ逝れ行き、つまづいて下にゐる。舞臺は是を見込むを木の頭。櫻井はホッと思入。此引張り個、波の音にてよろしく。

ひやうし　幕

幕一杯に櫻井揚幕へはひる。後シャギリ。

二幕目

蜊河岸茂々之井宅の場
同茶席師弟別れの場

役名 梅田雅樂之介。茂々之井舜藏。同下男金六。門弟藤井龜之介。同富喜田丹藏。門弟大勢。岡田鏡之介。久喜萬字屋藏吉。茂々之井の妻おりか。同娘お由。同下女お松。同小間使おむら。

竹本連中

本舞臺上寄に二間常足の二重。板羽目の蹴込み、正面唐紙、平舞臺の正面板羽目。下手一間の附屋體杉戸の出入り。上手の欄間に門弟の姓名を記したる黒塗の額を掛け、下手の板羽目に「今日朝五つ時より大試合之事」と記したる張紙。すべて蜊河岸茂々之井道場の體。二重の眞中に茂々之井舜藏羽織袴にて住ひ、上手に門弟藤脇龜之介羽織袴にて順を認めたる帳面を調べ、下手に門弟富貴田丹

藏同じく勝負を帳へ附け、平舞臺に門弟大勢面小手稽古着にて、四ヶ所にて試合をなし、下手に門弟大勢控へゐる。此見得三味線入り白囃子竹刀の音にて幕明く。と、四ヶ所の試合立廻りあつて勝負を丹藏留める。

鏡之　今朝より數番の立合に、多くの御門人の勝負を御記憶なされまするのは、恐入つてござります。

丹藏　かやうに認めをつてさへ、中々覺え切れませぬのに、流石先生、驚入ります。

龜之　次は梅田雅樂之助殿に稻垣傳兵衛殿。面を拂ひて立合召され。

ト此内下手大勢の門弟の内に混りゐたる、前幕の梅田雅樂之介稽古着胴小手、後ろ鉢巻竹刀を持ち前へ出て平伏する。

舜藏　雅樂之助は當大試合に勝利とならば、一ヶ所へ道場開くとも苦しからぬ腕前、今日は大事な場所、しかと立合はれよ。

雅樂　ハツ。

鏡之　唯今先生の仰せの如く、日頃よりお心掛の功顯はれ、相も變らぬ御勝利は恐れ入つた事でござる。

龜之　一刀試合の後、兩刀試合を致されよ。

雅樂　ハツ。

ト辭儀をする。此内上手より稻垣傳兵衞後ろ鉢卷同じきこしらへにて、双方型の如く辭儀をなし、一刀試合にて立上る。是を三絃入り白囃子になり、一寸立廻つて、

傳兵　參つた。

ト是にて傳兵衞下る。爰へ入替つて門弟一二かゝり立廻つて同じく參つたと下る。此時龜之介一々留める。

龜之　次は二人掛り、雅樂之助殿は兩刀、並びに後は四人掛りの事。

皆々　ハツ。

ト上手より兩人眞中へ出て雅樂之介竹刀を一本差し、一刀にて双方構へる。是より鳴物になり、二人掛りの立廻りあつて、トヾ兩人突かれてチ〳〵となる。是にて外四人一時に打つて掛るを兩刀にてあしらひ、雅樂之介危くなる事あつて、トヾ四人を打据ゑる。

龜之　是にて殘らず勝負相濟み、

丹後　お目出たう、

皆々　存じまする。

鏡之　今日圖らずもお招きに與り、久々にて大試合を拜見なし、大いに樂しみな事でござりました。手前も先生の御丹精にて、先年中當道場に修業致してをりましたが、其頃の事を思ひ出しますと、何れも方にはなか／＼御上達な事でござりまする。

舜藏　雅樂之助は先頃より申出でし儀もあれば、今日の祝ひ旁々今に奥へ參られよ。

雅樂　ハツ、畏つてござりまする。

舜藏　點數の調べ判り次第、わが手許へ持參致しやれ。

丹藏　委細承知致しました。（ト此時下手の杉戸より前幕の下女お松出て來り、）

お松　唯今木場の廣島樣のお手紙を御持參にて、萬字屋の主人が見えましてござりまする。

舜藏　左樣か、奥へお通し申せ。

お松　畏りました。（ト引返してはひる。）

鏡之　左樣ならば私は、もうお暇致しまする。

舜藏　是より一層打寛ぎ、大試合の祝盃致せば、マアゆる／＼として行くがよい。

鏡之　有難うはござりまするが、宅に稽古を致す者も定めし參つてゐませうから、何れ後日上りまするでござりまする。

龜之　久々にて御盃を頂戴しながら、四方山のお話も致したければ、マアよいではござりませぬか。

鏡之　有難うはござりまするが、近日ゆる／＼上りまする。

龜之　それは殘念な事でござるな。（ト此内鏡之介平舞臺へ下り）

鏡之　左樣ならば先生、何れも方。

龜之　いづれ近日、

皆々　御意得まする。

舜藏　各々休息せられよ。

皆々　ハツ。（ト合方になり舜藏は奧へ、鏡之介は下手杉戸の内へはひる。後合方彈き流し）

龜之　イヤ今日は朝から二人帳面を控へてゐるので、身動き致す事も出來ず、膝がメリ／＼致すやうぢや。

丹藏　それに先生の側ぢやから、常談一つ言ふ事出來ず、ほとんと當惑仕つた。

門一　然し順番附と點數掛りは勝敗の苦勞がなくて、そこに一つの德がござるて。

二　不斷と違ひ今日は年に一度の大試合、手習ひ師匠の席書同樣、各々一生懸命でござつた。

三　去年の試合と相變らず、又梅田殿にやられたが。

四　實に貴殿の御上達には、

五　我々ほとんと、

皆々　閉口致した。

雅樂　イヤモ其仰せでは痛み入る、是も全く先生のお蔭、是が田舍にをつたなら、各々方と御一緒に、此大試合は申すに及ばず、隅田の雪三つ股の月、又は辰巳の假宅と、諸所へ同伴出來ませぬが、お膝許へ來たるお蔭でござる。

龜之　シテ田舍と仰言らるゝは、慥か駿府でござつたな。

雅樂　いかにも産れは駿河にて、幼少の折父母に別れ、其後肥後の熊本に、身内ござつて其れへ參り、劍術修業せしが、此兩國にゐるよりも、當時江戸で名の高き、茂々之井先生の門に入り、一心を貫かば上達も出來ん事と、長の暇を乞ひ受けて、三年後先生の內弟子となり修業せしが、今日までの御丹精は實に詞に盡されませぬ。

丹藏　勝利の點數調べずとも、貴殿の勝は知れたる事、こりや御出世のお祝ひに、御酒下されでもござらうてな。

門六　左樣々々、其御酒よりも迚もの事、假宅は如何でござるな。

七　承はれば此程より、久喜へ度々お出との事、女郎の出來は存ぜぬが、

八　我々共も御同伴を致したいものでござるが、

九　今日是より平清か二軒茶屋にて開き致し、

十　勝利のお祝ひ旁々に、女將軍の戰ひに、

一　押出したいものでござるが、

二　御同伴は

皆々　如何でござるな。

雅楽　貴殿方に誘はれ、兩三度深川へ参りし事はござれども、元より廓は不案内、その上ならず望みもござれば。イヤナニ望んで参る譯でもなく、料理店ならお供致すが、遊里は御免下さりませ。

亀之　そりやもう貴殿の御都合次第、料理店でも苦しうござらぬ。先づ近邊では京橋の松田でもよろしいが、又はうはずつて木挽町の醉月でもよろしうござる。

雅楽　それならいと易き事、必らず御同伴致しまする。

ト此時下手より前幕の下男金六、手を拭きながら出て來り、

金六　皆さア奥から御酒が出ました。早く此方へござらつせえまし。
丹波　イヤ噂をすれば影とやら、こりや前表が當つたと見える。
鐵之　左樣なればお奥へまゐり、御祝儀の御酒下されを。
門一　頂戴致すで、
皆々　ござらうテ。
雅樂　是は金六殿。（ト立上るを道具替りの知らせ、）大きに御苦勞でござつたな。

ト此模樣賑かな合方にて道具廻る。

本舞臺六枚飾常足の二重、本庇本緣附。正面上手一間の床の間、次に三尺地袋戸棚。續いて少し後へ下げて一間二枚太鼓張りの襖。此下腰張の茶襖。下手廻り緣。上手の棲肱掛窓。本舞臺の上手揚通り四つ目垣。此向ふ眞福寺橋より隅の稲荷を見たる河岸の遠見。下手土塀の出入り。常磐木石燈籠つくばひよろしく、すべて茂々之井奥座敷の體。上手に以前の茂々之井舜藏、次に前幕の久喜萬字屋の亭主藤吉、羽織着流し、次に内室おりか着流しにて住ひ、後ろ棚の脇に前幕のお由、風爐釜を据え茶を立てゝゐる。此模樣琴の合方にて道具留る。

りか　折惡しく取込みをり、お介意ひ申しも致しませず、お氣の毒でござりまする。

藤吉　木場の鹿島様に親共より御懇意結びしお蔭にて、圖らず先生にお目通り叶ひ、私身にとりましては冥加至極にござりまする。

舜藏　圖らず先夜はお近附になりました、毎度木場へ參つては歸宅が夜に入り戻りますが、先月などは戻りがけ、乙女橋を通行の節、侍體の者四五人出で、我に手向ひ致せしが、其後兎角夜に入ると物騒と申す事、御商賣柄にはお難儀でござらうの。

ト此内妻のおりかは藤吉の前へ菓子器を出す。

藤吉　市中の噂を承はるに、牛込邊の道場にて破門されし侍衆が、其日のたつきに困じ果て、辻斬ならぬ押借をいたす由、全くそれでござりますと、町人などは夜に入つて迂濶に外出が出來ませぬ。

ト前内娘お由茶を立て、おりか茶碗を取次ぎ、藤吉の前へ出す。

これは先生より。

舜藏　先づ〳〵其許より。

藤吉　左樣なら、お先へ頂戴致しまする。

舜藏　承はれば貴殿を狙はれしと申す事ぢやが、結構な事でござるな。

藤吉　それにつきまして先生に貢に願ひ上げたきは、貰ひましたる娘が身の上、父なる者は其以前、由ある者にて勤役中、朋輩の遺恨を受け、御船藏にて手討にあひ、いと不仕合なる其上に、末は家も斷絶なし、勤めを致す程の不幸。其討つたる刀は和泉守國貞の銘刀にて、其者江戸の道場にて、劍術修業致す由、御門下多き御當家ゆゑ、若しお心當りもござりましたら、不便な娘と思召され、御助力下さりますやう、偏に願ひ置きまする。

舜藏　久喜萬字の御主人は商賣柄に似合はざる善根者と承はりしが、其娘御の志を感じ、よくも救ひやられしぞ、其事柄を承はる上は、チト此方にも心當りあれば、とも〴〵御助力致すでござらう。

ト奥より以前の下女お松出て來り、

お松　御門弟衆は頂戴の御酒を上つてゞござりまするが、雅樂之介殿は殿樣より御內意あれば、御沙汰を待つとて差控へてをられまするが、如何斗らひませうな。

りか　御客來ゆゑお歸りまで、控へさせて置きやいの。

藤吉　イヤ御用とあれば私は、もうお暇致しまする。

舜藏　ほんの內輪の用事ゆゑ、先づゆる〴〵となさるがよい。

藤吉　此上願ひ置きまするは、呉々も娘が身の上　日頃の望みを叶へやりたく、證據に致すは刀のみ、お含みの程願ひ上げまする。

舜藏　委細承知致してござる。

藤吉　左樣なれば御機嫌よろしう。

りか　初めてお出にお愛想もなく。

お由　又ゆる／＼と近日に、

藤吉　伺ひまするでござりまする。

ト合方にておりかお松附いて藤吉奥へはひる。お由は藤吉の茶碗を取り後を立てる。是より庭の淨瑠璃になる。

〽春過ぎて夏まだ若き芽出し時、深き望みの雅樂之介、猛き心もしとやかに、常磐の松の色かへぬ、飛石傳ひ出で來り、庭前に控ゆれば、

ト此文句の内お由茶を出し舜藏呑んでゐる。よき程に下手土塀の引戸をあけ、以前の雅樂之介侍たりにて出て來り、下手緣の際に辭儀をする。

舜藏　遠慮に及ばぬ、近う參れ。

雅樂　ハツ。

　　ト合方になり、雅樂之介よろしく進み寄り二重下手へ住ひ、

舜藏　是へ招ぎしは餘の儀にあらず。當春中長の聞暇を與れいと申出でしが、此大試合の當日まで、我が所存あつて日延べせしが、何地へ赴く所存であるの。

雅樂　ハツ、餘の儀にもござりませぬが、三年以前熊本より江戸表へ參りし限り、書状の便りも致すのみ、義理ある父母に一度は會ひたく存じをつたる所、當春ふと夢に見まして、それより一層逢ひたく存じ、歸國の願ひ出致しましてござりまする。

舜藏　然らば熊本の父方へ、其方參ると申すのだな。

雅樂　左樣にござりまする。

　　ト未然を察す茂々之井が、深き巧に座を進め、

舜藏　今日の大試合に充分の勝を得たる其方が太刀前、先づあれなれば何地へ參り立合をなすとも、恐らく退を取る事なし、心置なく出立せよ。

雅樂　イエ手前が願ひは熊本の義理ある父母に面會致さば、再び江戸へ立歸り、修業致す心得にござりまする。

舜藏　御身一命だにあるならば、再び江戸へも來られんが、若し存念果さゞれば、一命は覺つくまいな。

雅樂　エヽ。（トギツクリ思入。）

舜藏　其方望みある事を、我れは疾より察したり、それ故今日大試合まで大事を取つて留置きしが、先づ是にては大丈夫。雅樂之介、ナント見込みは違ふまいな。

＼屋を指されし一言に、

ト舜藏キツト言ふ。雅樂之介ちつと思入あつて、

雅樂　かくお見込の上からは、今は何をか包みませう、實は先月深川の開帳の折、朋友に誘はれまして、萬字屋へ參りし節に、圖らずも出逢ひましたは父の敵。ト言ひ掛けるを、

舜藏　アイヤ、其仔細聞くに及ばぬ、唯今圖らず萬字屋より、イヤ如何なる望みあらうとも、明德の道天下に明らかにせば、決して恥づる所なし、充分に事をなせよ。

雅樂　スリヤそれ故に今日の、大試合までお許しなきは。

舜藏　わが道々の井の名折とならば後世までの恥辱ゆゑ、今日まで留置きしが、愈々暇を遣はすぞよ。

＼底意を見拔く言の葉に、聞きゐる娘は心ならず、

ト此内娘は茶を立てゐて、よき所へ茶碗を引きに出て、居所へ戻り、

お由　スリヤ雅樂之介は、今日限りお暇になりまするか。

舜藏　豫ての願ひ、今日こそ速かに聞き濟んだり。

お由　やう／＼足掛三年にて、高弟衆にも勝りしに、此國へ歸るとは、本意ない事でござんすな。

〽芽出し紅葉も卯の花の、雨にしほるゝ思ひなり。雅樂之介は面を上げ、

ト お由ぢつと思入。此内雅樂之介俯向きゐて、床のメリヤスになり、

雅樂　委細は申上げずとも、我が胸中お案じありし先生の御眼力にて、速かにお暇下され、是より歸國致す上は、故主の爲に報いんと存じつきし一儀ござれば、再び見ゆる事ありや、又は此儘拜顏を得まする事の出來ませぬか、其處は判りかねますれば、先づ一生のお別れと、思召して下さりませ。

舜藏　ハテ潔き其詞、今更愚痴を申すやうぢやが、牛込の道場では高弟櫻井武雄を始め四人迄、門弟を破門せしと承はる、それとこれとは裏うへに、惜しき汝を手放すは、如何にも殘念至極なり。

雅樂　その櫻井武雄と申すは、最早免許を受くべき腕前、先頃面會致しましたが、いと逞しき人物に

て、事をなすべき侍にござりまする。

舜藏　是にて思ひ出せしは、先頃牛込の道場にて刀劍の會を催せし時、櫻井武雄が所持の刀、陳列せしを見し事ありしが、中身は慥かに和泉守國貞と鑑定せしが、なか〳〵彼も一方の敵を防ぐ侍ぢやが、破門となりしは惜しいものぢや。

〽歎息なすを聞耳立て、

ト是を聞き雅樂之介思入あつて、

雅樂　先生伺ひまするは其劍、御覽になりし櫻井が所持の刀は、慥に國貞にござりましたか。

舜藏　國貞は赤穗討入の節、堀部安兵衛が用ゐし銘刀、なか〳〵よい切味ぢや。

雅樂　スリヤ、アノ、いよ〳〵。

〽ぎつくり胸に合點の、樣子見てとる此方には、

ト舜藏雅樂之介へ思入あつて、

舜藏　其方國貞を承知であるかな。（ト雅樂之助ハツと思入あつて氣をかへ）

雅樂　イエ、先頃淵藩の屋敷にて見ました事がござりますので、一寸お聞き申しましたが、中身の寸はどの位でござりましたな。

舜藏　長さは二尺二寸、身は少し厚き方にて鎬より胸の具合、燒刄金色勝れし業物、有名なる刀である。

雅樂　ヘエ左樣でござりまするか。

〽扨は一つの手掛りと、胸に一物雅樂之介、心の刄研澄ます、折柄妻も一間を立出で、

ト是を聞き雅樂之介悦ばしきこなし、此前よき程にお由は茶道具を片附け、灰器を持つて茶立口へはひる。再び出て茶立口にて辭儀をなしはひる。舜藏奧へ向ひ手を打つ。奧より妻おりか出來り。

舜藏　二段目の棚の、袋入を持つて來てくりやれ。

りか　ハツ。

〽と間へ立つて入る後に、勇む心の武士が、心中はかる其所へ、

ト妻おりか奧へはひる。此内雅樂之介ぢつと思入。直ぐ奧より内室袋入の刀を持ち出て來り、舜藏の前へ置く。是にて舜藏自身に劒を解き中身を改めて、

舜藏　此一刀は我家に父の代より傳はりたる關の孫六兼光、其方へ餞別に遣はすぞ。

雅樂　エヽ、スリヤ御餞別を下さりますとな。

舜藏　近う。

雅樂　ハツ。（ト進む。舜藏思入あつて、）

舜藏　コリヤ、兼光はよく切れるぞよ。

〽心ありげな言の葉に、はつとばかりに跪き、名殘りを惜しむ師弟の誼、胸にこたゆる思ひなり。

ト此内舜藏件の刀を出す、雅樂之介側へ行き受取らうとして互ひに顔見せ、ぢつと思入あつて、雅樂之介刀を持つて下手へ下り、

雅樂　有難く頂戴致しまする。

〽悦ぶ面を打見やり、不便いや增す思ひにて。

ト此内舜藏ぢつとなり、

舜藏　雅樂之介、其方やそれ程に悦ばしいか。

雅樂　盲龜の浮木を得し如く、一層力を增してござりまする。

舜藏　オヽ、左樣か。

〽實に尤もと茂々之井は、賞さんとして心付き、

ト感心せし思入あつて氣をかへ、

一層力を得しと申すが、相手によらば兼光では、容易く討つ事は叶はぬぞ。

〽始終を察し宣へば、雅樂之介は實にもと思ひ、

雅樂　シテ和泉守國貞に向ひましたら、孫六とは何方が勝るでござりませうな。

舜藏　先づ國貞には劣らぬ心算、然し譬に申す通り、莫耶が劍も持手によらん。

雅樂　御尤なる御仰せ、先づ例へて申さば、仰せありし免許近き櫻井などの腕前に掛りましたら、如何なものでござりませう。

舜藏　一心の外味方なし、心の劍の鈍らぬやう。

雅樂　磨き上げなば其時は。

舜藏　極意をもつて。（ト討てといふ思入にて呑込ませる。）

雅樂　ハツ、有難うござりまする。

〽海より深き師の恩は、渡りに船を得し心地、悦び限りなかりけり。傍に聞きゐる内室は、共に涙の雨催ひ、

ト雅樂之介悦ばしきこなし。内室はぢつとなり、

りか　我夫御聞濟の上は、國許へ行かるゝとやら、シテ何時頃出立致さるゝぞ。

雅樂　一と先屋敷へ引取りまして、用事片附かば早速に、出立致したうござりまする。

りか　其儘國へ落着いて、再び江戸へは戻らぬかいの。

雅樂　イエ國許の兩親に暇乞の致しますれば、早速江戸へ參る心得、それと申すも日頃より。

へ言はんとせしが邊りを窺ひ、

目指す相手はお膝許、猶豫致さず歸國致しまする。

りか　亡父の恩を返さんと、思ふ其方の志、必ず神の加護もあらんが、無事息災にて又再び、望を遂げし物語を。

へ聞きたいものと言掛けて、後は詞もなかりけり、聞く雅樂之介はかくまでも、此身を思ひ下さるかと、平身なすこそ道理なり、やゝあつて容を改め。

ト此内内室おりかよろしくこなしあつて、雅樂之介有難涙に暮れ、ちつとなつて氣をかへる。此時柱時計七つの時を打つ。是にて聞耳立て、

雅樂　出立前それぐ\へ、暇乞もござりますれば、一と先屋敷へ引取りまする。

舜藏　今日は幸ひ大試合に、祝す杯酌み交し、目出たく屋敷へ戻られよ。

雅樂　ハア、。

舜藏　杯是へ。

りか　畏つてござりまする。

〽折柄次の一と間にて、けふ祝日の大一座、ざんざめくやら謡ふやら、聲勇ましき賑はひに、銚子杯取揃へ、慇懃に差出し、

ト此内内室奥へはひる。此時文句へ冠せ鼓入り謡になり、時々謡の聲する。よき程に以前の娘お由先に遠山臺へ杯をのせしを持ち、茂々之井の前へ置く。後より内室銀の銚子を持ち出て來り、兩人下手へ住ひ、茂々之井杯を取上げ、内室酌をして呑み干す。お由三方を雅樂之介の前へ出す。

お由　仰せつけられましたるお杯、持参致しましてござりまする。

雅樂　ハツ、有難く頂戴致しまする。

〽手に取上げは上げたれど、此祝盃も是限り、見ゆる事もならざるかと、胸に滿ち來る汐頭、しめりがちなるばかりなり、

ト此内杯を受け、内室酌をして飲まうとして愁ひの思入あつて是を隠すこなし。雅樂之介飲干し。

舞藏　御返杯致しまする。

舞藏　オヽ。（ト杯を受け以前の通りあつて、）
　杯相濟む上からは。

雅樂　直ぐ此所より拙者めは。

お由　そんならどうでも此場より。

りか　オヽ、もう行きやるか。

雅樂　ハツ。

舞藏　ムヽ、目出たく歸國致されよ。

〽實に有難き師の仰せ、頭に仰ぐ鎗劍の、道は直なる雅樂之介、勇む心の其内に、別れともなき隔ての外、思ひ殘して出でゝゆく、折柄小蔭を立出る二人、

ト此内四人別れを惜しむ事よろしく、雅樂之介下手の縁より下へ下り、心の殘ることなしあつて、刀を抱へ、下手の土堺の口へ行き、二重の三人は本縁の角に立上り見送る。此内知らせなしに此道具静かに廻る。

本舞臺上手九尺本屋根、腰掛待合閑座を置き、柱に暖簾をかけ、是より後ろ大谷町の向ふ河岸を見たる中遠見。裾通り四つ目垣つくばゐ石燈籠常磐木の樹木よろしく、此の内前の土塀上手になり道具留る。と、上手土塀の出這入り口より、雅樂之介出て來り、文句の留りバタ〳〵にて下手より幕あきの下男金六、前幕の小間使おむら走り出て、左右より雅樂之介に縋り、

金六　モシ雅樂之介樣、もう行かつしやりますかえ。

むら　殘り惜しいこつたねえ。

〽右と左に縋りて、歎きに沈むをさこそと察し、

ト兩人雅樂之介へ縋り泣く。

雅樂　お前方にも長の間色々厄介になつてをつたが、今日はいよ〳〵お暇願ひ、一度國へ赴いて、運に叶へば又江戸へ、歸つて來まいものでもないから、又其時逢ふであらう。

金六　お前樣さう言はつしやるが、三百里もある肥後の熊本、何時又江戸へ來さつしやるか知れたものではありましねえ。

むら　多くある門弟衆の內でも、可愛がつて吳れるのはお前樣ばかり、後の人はいぢめていかねえ。

―其可愛がつて呉れるお方が、行かつしやるとは悲しいこんだの。

金六　第一外の人達は人使ひが惡くつて、ヤレ金六、竹葉へ行つて鰻飯を誂へて來い、ヤレ金六、大根河岸の大黑屋へ行つてしやもを買つて來い、ソレ金六杉田へ行つて肴を誂へて來い、中橋へ行つて泥鰌汁を買つて來いのと、足が棒のやうになるまで使ふので、實に耐つたものぢやアござりましねえ。

むら　オヽさうだとも〳〵、わしらにはヤレおむら、白魚屋敷へ行つて筐の目藥を買つて來い、水谷町の萬兵衛さんへ行つて膏藥を取つて來い、太刀伊勢屋へ行つて紙を買つて來いと、えらひッ使はれたよ。

金六　そんな人達は何處へも行かねえで、お前樣が行かつしやるとは、世の中は自由にならねえものだが、どうか行かねえ譯には行きましめえか。

雅樂　さう言うて呉れるは忝いが、死んだ親父が御恩返しをせねば、子として濟まざるゆゑ、今日の大試合を待兼ねて、出立せねばならぬゆゑ、殘り惜しいが別れねばならぬ。

金六　それではどうでも止まりませぬか。

むら　金六どん、

金六　おむらどん。是から二人は。

兩人　こつぱいだなう。

〽正直面に顯はれて、しやくり上げたる涙雨、小止みも何時か知れざりき。

ト此内兩　はやりともなき愁ひのこなし。雅樂之介ぢつとなり、

雅樂　ム丶、スリヤそれ程までに我を思ひ呉れるとか。

金六　ハイ、御主人樣とお前樣は實にわしら二人は。

二人　有難いと思つてをりまする。（ト是を聞き雅樂之介思入あつて、）

雅樂　亡父が受けしも主人の恩、からでなければ。

ト思はず下手へ行きかける、是にて金六仰向けにひつくり返る。雅樂之介びつくりして起しながら、

イヤ是は粗相致した、許して呉りやれ。

〽折柄此方を立出る二人。

ト上手土塀の内より、以前のおりかお由の親子出て來り、

お由　雅樂之介暫く。

雅樂　ハツ。（ト下に居る。）

りか　是へ。

雅樂　ハツ。

ト雅樂之介おりかの側へ來り下にゐる。

りか　些少なれども旅用の足に。（ト袱紗包みの金を出す。）

雅樂　何から何まで、有難うござりまする。

ト側へ行き平伏する。爰へ下手四つ目垣の間より、舜藏袴股立襷掛草履にて、たんぽ槍を持へ、不意に雅樂之介に突掛ける、雅樂之介隙さず刀の袋を左へ抱へ扇にて是をあしらひ、一寸立廻つて上下へ分れ、双方おつと槍と扇子をつけた儘睨み合ひ、隙のなきを見すまし、

舜藏　ム、見事。（ト槍を引く。）コリヤ、我が鏡心明智流の後日に腕を見せられよ。

りか
お由　返すぐも、

舜藏　堅固でゐやれ。

雅樂　ハツ。

ト是より二上りになり、

へ名殘り惜し氣に立上り、便りを待つの時鳥、啼音の思ひいとしうて、是か
一世の見納めと、見返り見送る庭の面、猛き心の武士も、催す空の卯の花
くだし、別れてこそは出で〻行く。

ト此内雅樂之介袴の塵を拂ひ、茂々之井三人へ辭儀をなす。内室は件の金包を渡し、是にて雅樂之介ツカ〳〵と下手へ行くを、金六小間使左右より縋り泣く。是にて下手へ行きかけ、ぢつとなつて後へ戻り、肚で愁ひのこなしよろしくあつて、トヾ下手へ行く。此模様三重風の音にて

ひやうし幕

三幕目

京橋松田見勢の場

同表二階廣間の場

役名　梅田雅樂之介。鳶頭、分銅銀次。久喜萬字屋藤吉。大工赤身の伊太郎。茂々之井下男金六。大和田清六。山倉大六。習志野源彌。芝山仁太郎。榎戸

の胴六。二合半の八十八。大道占中はつたり半次。薦。下り藤の芳松。同、背負の金太。松田の若い者、竹松。成田講の世話人四人。同講中大勢。櫻井武雄久喜萬字の娘、おかよ。實ハ内宮の娘、おかよ。松田の女房、おきみ。同下女、お京。同、お松。同、お酉。

本舞臺眞中一間、松田と記せし紺暖簾をかけし入口。左右一面出格子。此下さゝら子の下見。前側一面本庇、二階の手摺の張竹。入口上手の柱に「御料理、京橋松田」と記したる掛行燈。よき所に薄縁を敷いたる床几。すべて銀座一丁目松田店先の體。上手に三尺四方程の縁臺を置き、此上に腰掛けゐたり半次、吉原冠り着流し、脱ぎたる夏羽織にて箱の内へ最中を六つ程置き並び、平舞臺に横戸の胴六、二合半の八十八の兩人身装ひ尻端折り、草鞋がけにて荷物を持ち、野商の前に立掛りゐる。此見得「取えゝ」の唄に拍子を聞く音にて幕あく

半次　モシ〳〵、身の上が當つた褒美に最中を買つて、若しそれが當つたら、買つたお足を二層倍にして返して上げますから、もう一つお取りなさい。

胴六　何だえ、四層倍つけるえ、それ偉えね、どうだ八十八どん、身の上がよく當つたから、もう百買つてやるべえか。

八十　よいかえ、身の上のやうに速かに當りましッけえかの。

半次　お前さんは後ろ厄ゆゑ當年の吉凶を試すため、二百ばかり買つて御覽なさい、運がよければ赤い紙のはひつたのに當り、二百を八倍にしてお返し申しますから。モシ運定めぢや。やつて御覽じろ。

ト臺の上より胴六の袖を引張る。

胴六　鰒は喰ひたし命は惜しゝ、だが、マア百買つて見べえか。

ト財布より百錢を出し臺の上へ置く。半次箱を出し最中を選らせる。此内見物に見えるやうに親指の腹へ赤い紙を貼ける。胴六一つ取り、

サア是にしますべえ。

半次　ハヽア是でござるか、是が若し何もなければ、當年は氣を付けさつしやれ、又赤い紙がはひつてをれば無事息災の上に、四層倍にして、四銅お返し申しますぞ。

胴六　どうか赤紙のはひつた方で、好運の上褒美を取りたいものぢや。

ト此内半次指の腹を見せぬやうに最中を一つ毀し、指の腹を見せ、

半次　オヽ又赤紙がござつた、是は幸運な事でござる。サ、約束通り四銅献じまするぞ。

閑六　ヤア、こんな旨え事はありましねえ。

八十　コリヤわしも運試めをするべえ。（ト此度四百天保にて閑六に渡す。）

閑六　これは有難い、今度は此四百そつくり貰うべえ。

寧文　コレ／＼貰ふた上は申す事に博奕に耽らぬ様しく、御上へ献して済まぬ、きつと気をつけさつしやれ。

八十　わしも四百が所、寄進をお取りなすつて下されさつせえ。

寧文　コレ／＼其寄方と申す事はいかん。[illegible]しませんければならんよ。（ト両人四百宛出すを一つにして。）サ、[illegible]に心の内に信心して、一つ宛[illegible]のあるのを選りなさい。

ト是にて両人迷ふ事あつて、一つ宛取り上げる。

サ、よく信心して割りなさるがよい。

ト是にて両人製す。此内に何もなし。

ヤ、こりや[illegible]もござらぬ。

閑六　ホイ[illegible]つた、こりや運が悪いたか。

八十　アヽ割めてやつて、[illegible]がはだかつたわえ。

ト八十八がつかりする。此内半次臺の下より拇指へ赤い紙を附けて、兩人に知れぬやうに最中を一つ壊し、指の腹の赤い紙を見せ、

半次　アヽ爰にござつた、惜しい事を致したの。

トゆう〳〵と八百の錢を臺の下へ仕舞ふ。兩人是を見やり口惜しきこなしにて、

胴六　エヽ自棄だ、もう二百づゝ買ふべえ。

八十　度胸定めだ、出すべえ〳〵。

ト財布を出し錢を出さうとする。此前より、後ろ出格子の内にて、序幕の大工赤身の伊太郎流し三尺腹掛にて、少し醉ひたるこなしにて見てゐて、此時暖簾口より出て來り、

伊太　オイ〳〵お前達は好い加減にしねえのか、こんな者に掛つてゐると、今に殘らずふんだくられるぜ。

半次　モシ〳〵人聞の惡い事を言はつしやるな、ふんだくるとは何の事だ、何時人の物をふんだくりましたな。

伊太　莫迦言へ、何時も爰の角にゐたり太刀伊勢屋の向う角で、田舎者の錢を取るのは餓鬼の時分から知つてゐるのだ、可哀想に近在から金比羅樣へ出て來た者の錢を胡麻化して吸上げるから、

氣の毒で見てゐられねえのだ、オイよしねえ〳〵、胡麻化された錢は仕方がねえから、乞食にやつたと思つて吳れてやんねえ。

ト是にて野師の半次癪に障りしこなしにて本音を顯はし、

半次　ヤイ胡麻化すとは何のこつたえ、ちやんと此通り最中を割つて中の當りを見せるのぢやアねえか、よく商賣の邪魔をしやアがつたな、サア唯は濟ませねえぞ。

ト羽織を脫ぎ臺の上へあぐらをかく。

伊太　人をよく朝偏木にしやアがつたな、中に何もねえ最中を並べて置きやアがつて、いくら明けたつて何があるものか、當りといふのは汝の指へ赤え紙を附けて置いて、割る時に見せる事は、擦鳥の外は誰でも知つてゐるのだ、此横着野郎め。

ト伊太郎は出し臺へ兩手をかけひつくり返す。是にて半次と最中の箱一緒に落ちる。百姓兩人はびつくりする。

半次　荷を邪魔されては商賣が出來ねえ、サアどうして吳れるのだ。（ト往來へ突込む。）

伊太　誰を脅かしやアがるのだ。

ト矢張り一寸見えと、上手に拍子の音にて兩人摑み合ふ。此内暖簾口より序幕の藝者松金太、半纏股

ト奥より芳松、鉄田の紫い合作出羽二重尺にて出て來り、捨ぜりフにて留める。

芳松　親方、腹も立たうが、マア了簡しておやんなせえ。

伊太　サア俺と一緒に自身番へ來い。吃と仕樣を附けて見せるのだ。

半次　篦棒め、汝等にこめられて堪るものかえ。（ト威張りながら半次コソ〳〵荷を片附ける。）

金太　コレサ、お前も黙つてゐねえのか、是が自身番へでも行つて見ねえ、あんまり威張つた譯でもねえから、マア黙つてゐなさるがいゝ。

半次　相對で商賣してゐるに、横合から喙を出しやアがつて、人の邪魔をしやアがるから、打措つて置かれねえのだ、サア俺が先へ行つてゐるから、汝後から來やアがれ、どうするか見やアがれ。

ト此途に彼等續く気味わる〳〵出し盃を殘し、慌てゝ下手へ逃げてはひる。

伊太　先へ行つて待つてゐると言つて何も言はねえで、茶迦にしてゐやアがる、態ア見やアがれ。

勝六　是はハヤえら御厄介になりまして、

八十　大きに助かりましてござりまする。

芳松　あの最中も昔から変か向うの飯屋の角で、よく瞞してやつてゐるが、今日は正五九の十日で田舎の人が多いから、いくらも引掛る者があります。

竹松　親方、マア機嫌を直して、二階へ行つておやりなさいまし。

伊太　さうしてお前達は、ホゾをもう詰めたのか。(トいへども田舎者兩人はすまして草鞋を直してゐる。)

オイ田舎の人、ホゾを詰めたのかよ。

芳松　親方、ホゾと言つても此人達には分るめえぜ。

伊太　違へねえ、さうだつた、オイ田舎の人、もう飯を喰つたのか。

駒六　まだ支度致しませぬから、向うの飯屋へ寄つて支度する心算で爰を通り、最中へ差掛りましてござりまする。

伊太　そりやア可哀想に、丁度俺や一人だから、一緒にはひつて一杯やりねえ。

駒六　どう致しまして、松田などへ田舎者が上りましては、勿體なうござります。

伊太　お前に御前などを出させやアしねえ　神田の大工で赤身の伊太郎と言つちやア、弱え者と見ると飛込んで、助けてやるのが俺の氣性、それで最中を毆つてやつたのだから、安心して一緒に來ねえ。

駒六　どうしべえ、御馳走になつてもよかんべえか。

八十　よもやぽん引でもあんめえから、一緒に連れられべえか。

伊太　面白えへ、ぽん引でもあんめえとは正直でいゝ、そんな事は大丈夫だ。

兩人　是は飛んだ事申しました。

伊太　飲んだ酒がすつかりさめてしまつた。

トやはり「櫻えゝ」の唄にて、伊太郎ひよろへしながら田舍者兩人を連れて店へはひる。此唄にて花道より序幕の大和田清六山倉大六習志野源彌芝山仁太郎、羽織着流し大小、中下駄にて出來り、直ぐ舞臺へ來て、

清六　もう時分どきになつてまゐつたが、何處かで支度をせんならんの。

大六　それはよいが、拂ひ方に差支はござらぬかな。

源彌　イヤ隨分そこらに差支を生じてをるぢや。

仁太　眼前に食店のありながら、此籠城には僻易致すな。

清六　一服やつて奇計を巡らさうかな、オイ炱借りてもよいかな。

芳松　御遠慮なくお掛けなさいまし。

ト是にて四人床几へかけ、蔦の者の火を借りて煙草を喫む。やはり右の合方にて花道より前幕久喜萬字の亭主藤吉、羽織着流し雪踏、序幕のかしくのおかよ堅氣の娘のとしらへ、雪踏日傘にて出

て來り、花道にて

藤吉　是から銀座通りは群集するから、頭の物を氣をつけたがよい。

かよ　大層な人でござりますが、田舎の人が多く見えますな。

藤吉　梅田樣がお國よりお歸りといふ報せがあつたから、今日らはお目に掛るかも知れぬ、よう氣をつけて行くがよい。

かよ　少しは手掛りがござりましたか、金比羅樣の御利益で、安否が聞きたうござります。

藤吉　さうぢやとも、何でも神信心より外はないわい。

ト此内舞臺へ來る。淸六等四人に是を見やり顏見合せ、それに違ひないといふ思入あつて、

仁太　オヽ此方は久峰のかしく殿ではござらぬか。

かよ　エヽ。（トギックリ思入あつて氣をかへ、）イヽエ、左樣ではござりませぬ。

仁太　先頃假宅へ參つた時、勤めをしてゐたかしく殿に、寸分違ひはない筈ぢやが。

ト是を藤吉かいとり、

藤吉　何方樣か存じませぬが、是は私の貰ひ娘。何かお目違ひでござりませう。

淸六　かうもよく似た者はない、一體分身と申す位、シテお住居は何方でござるな。

藤吉　へイ、宅は深川の、イエナニ深川へ假宅を、イエ假越致してをりましたが、唯今は此近邊へ住居を尋ねてをりまする。（ト汗を拭ひながら藤吉よろしく思入。）

清六　ハヽア、それでは愈々。

四人　間違ひかな。（トみな〳〵不審の思入。）

藤吉　先を急ぎますから、失禮御免下さりませ。

清六　是は人違ひで失禮でござりました。（ト是にて藤吉おかよ上手へ行き、）

藤吉　すんでの事に、イヤまだ虎の門まで餘程あるの。

ト藤吉おかよと連立ち上手へはひる。四人後を見送り、

大六　櫻井が足を近く通つたかしくに瓜二つ、彼奴がゐたら嘸思ひ出すだらう。

仁太　どうもあの女郎に違ひないが、樣子がすつかり變つてゐるので、何分胸に落ちぬわえ。

ト此内源彌松田の入口を見やり、

源彌　ヤ、下足の内に、櫻井の履物が見えるぞ。

大六　オ、櫻井ぢや、オイあの履物の客はどんな男ぢやの。

竹松　あのお客は三十近い、いゝ男のお武家樣でござりまする。

大六　オヽそれでは慥かに櫻井ぢや、イヤ是は地獄で佛の譬、かしくを土産に押上り、知らせてやると致さうわえ。

源彌　是はいゝ思付、サ直ぐはひるがよい。

清六　實に天の、

四人　助けでござつた。

トやはり右の唄にて、若い者竹松案内して四人の者入口へはひり、

竹松　お四人さん。(ト呼して、若い者下足をつける。)

芳松　侍でもこちとらでも、文なしの時は同じ事で、よく〱彼奴もひつてんと見えるの。

ト替つた合方になり、入口より序幕の鳶頭分銅銀次着流し駒下駄にて出て來り、

銀次　ヤヽ芳に金公、俺は四丁目まで行つて來るから、十日で店が忙しいから、よく氣をつけて呉れ。

芳松　今四人揚つた侍などは、人氣が惡さうでございますぜ。

銀次　オヽ惡さうと言へば、今一緒になつた二階の侍は、此春成田の開帳でとつぷり暮れて乙女橋を通つた時に、往來の者へ喧嘩をふつかけた奴に違えねえ、酒の上が惡さうだから、あの客

も氣を附けねえよ。

金太　今の四人と一緒になつちやア、此方ア思ひ遣られますね。

銀次　松田も日増に繁昌するが、長ツ尻と酒の悪い客は、出入の者には禁物だの。

芳松　おまけに今日は悪込みで。

金太　もう番附は。

芳松 金太　餘程ございませうね。

銀次　今に彼是。（ト指を折るを道具替りの知らせ）三百番だらうよ。

ト此時ワアツと鬨の聲を上げる。やはり幕あきの唄にて賑かに道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、上手一間の床の間。此しも緒心に腰張の茶壁、正面襖通り手摺附の廊下。向ふ銀座通りの屋根を見たる中遠見。下手一間の附屋體。腰窓。いつもの所二階の上り口。三方手摺附。壁に小判六十日の張札。すべて銀座松田二階の體。上手に以前の大工赤身の伊太郎、百姓胴六八十八の兩人酒肴を並べ酒盛をしてゐる。此間に衝立を置き、下手に序幕の櫻井武雄袴大小にて松田の下女お京を捉へ、少し酔つてゐるこなし。傍に以前の清六等四人の侍車座になり、酒肴を置きともぐ\からかつてゐる。上手後ろの方に矢張り衝立にて仕切り、前幕の下男金六同じく酒を飲ん

でゐる。下手の後ろに序幕の成田講中四人酒盛をしながら藤八を打つてゐる。此模様角力甚句にて道具留る。と、後ろの講中しきりと拳を打つ。櫻井等五人うるさいと云ふ思入あつて、

清六　ヤイ〳〵ちつと靜かにせんか、騷々しくて話が出來んわ。

櫻井　コレ下女、ちつと尻を落附けて酌をして呉れてもよいではないか。

お京　お酌をしないとは申しませぬが、正五九の十日ゆゑ、金比羅樣で此通り混合つてをりますから、少しでも空きますと直ぐ此方へ參ります。

ト此時上手の伊太郎手を叩く

ヘ――イ。唯今まゐります、ソレ御覽なさいましな、あの通りお手が鳴りますから、どうぞお放しなすつて下さいまし。

櫻井　イヽヤ放さぬ、何だ、あんな職人と田舍者の客を遇ひ、用があるなら自身に誂へに行くがよい。

お京　それでもあなた、お客樣でござりますもの。（ト行かうとしても櫻井放さぬゆゑ、）一寸お松どん、二百二十番へ行つて下さいよ――。

お松　アイ〳〵。

ト聲して下より下女お松襷がけ前垂にて出て來り、上手へ行かうとするを、仁太郎其袖を捉へ、

仁太　コレ、淋しくつていかねえ、手前も爰にをつて酌をして呉れ。

お松　そこにお京どんがをるではございませぬか、外のお客様の間が缺けますから、御常談をなすつては困ります。

大六　ナニ間が缺けたつて介意やアしねえ、相手は町人、此方は侍、上と下で位が違ふぞ。

ト此内上手の大工伊太郎始終癪に障るこなしにて、下手を睨む。此後ろの衝立の蔭より金六立上り手を叩きながら、

金六　オイ〳〵姐さん、酒の替りをつけて呉んなせえ、オイ〳〵。（ト頻りと手を打つ。）

お京　ヘイ〳〵畏りました。（ト階段の口へ思入あつて、）一寸、二百七十番へ御酒が替りますよ。（ト階下にてアーイと返事する。金六又手を打つて、）

金六　オイ〳〵姐さん、早くして下さい。

櫻井　エヽ煩え、靜かにしろ、爰は野原ぢやねえ、松田の二階だぞ、下女も爰にをつて酌ではないわい、莫迦者め。

トキツと言ふ。是にて金六びつくりしてそつと衝立の蔭へはひる。

清六　折惡しく金比羅の緣日に當るので、近在から百姓共が參詣に來る輩が、爰へどか／＼揚つて來るので、是にはほとんと閉口した。

大六　左樣々々、銀座通りの砂埃で表二階は恐れるのに、日向ツ臭い一座では弱ります。

源六　肴が雜しいと評がよいから外へ行かずに爰へ來るが、此後十日だけは除かねばいかん。

仁太　田舍者や職人を見ながら、酒を飲むのはどつとせんから、二人とも爰にゐろ／＼。

ト此内大工伊太郎じり／＼しながら、

伊太　何處の唐變木か知らねえが、御大層な法螺を吹きやアがつて、乙う侍風を吹かす客があるが、松田の二階でも貸切りやアしめえし、人をつけ、ちやんちやら可笑しいごたくを吐きやアがらア。オイ姐さん／＼、誂への物があるのだ、來て呉んねえ／＼。

ト田舍者兩人は心遣ひのこなしにて、氣を揉みながら、

駒六　ア、モシ／＼。何だかお腹が立つか知りましねえが、何事も酒の上の事、了簡してやらつせるがよい。

八十　わし共ならもう先刻から呼ばれましたから、是で儂を呼ばれてお暇致しますべえ。

伊太　莫迦言ひねえ、こんな肴で俺が喰へるものか、俺アお前のやうなびく／＼可愛なる人は大嫌え

だ、何事かありやア俺らが背負つて立つから、いゝから默つて任して置きねえ。

ト鉢卷をして肌を脱ぎ腕を叩く、百姓下女心遣ひのこなし。是にて櫻井四人聞耳立て、

清六　コリヤ隣りの町人、靜かに致さんか、一座の客へ無禮であらうぞ。

ト是にて大工伊太郎居直り、少し下手へ向ひ、

伊太　モシ旦那、何が無禮でござりますえ。

清六　無禮ではあるまいか、何か我々五人の者へ差障りのある物の言ひやう、餘り申し募ると其分には置かんぞ。

ト刀を取つてキツとなる。是にてびつくりとして飛びのく。下女二人中へはひり、

お京　アヽモシ旦那樣、マアお待ちなさいまし、間違ひでもござりますと、主人が迷惑致しまする。

清六　イヤ斯樣な奴は懲らしてやらんければ癖になるわえ。

お京お松　それでは私共が難儀を致しますわいなア。

伊太　エヽ打遣つて置け〱、二本差と火事が可恐くつては江戸の住居が出來るものかえ、から見えても圖體の大きいのと、積りものをするんぢやア、何處の丁場でも引を取つた事のねえ兄哥だ、憚りながら腕には筋鐵がはひつてゐるぞ、笑かしやアがる、人を見損なやアがつたか。

ト田舎者両人震へながら伊太郎を宥め、早く階下へ行けといふこなし。伊太郎は氣味の惡きを隠し威張る、此時下手の講中又拳を打ち出す。上手の衝立の蔭より金六顔を出し手を叩きながら、

金六　オイ酒の替りを呉れさつせえと言ふに、何うしたえ。

ト手を打つ。下手にては拳を打つ。櫻井煩いといふ思入あつて、

櫻井　エ、喧しい、汝等までぶつた斬るぞ。

金六　エ、。

トびつくりして又衝立の蔭へはひる。下手にても拳を止める。下女金六へ心遣ひのこなしにて、

お京　あなた唯今參りますから、少々お待ちなすつて下さりませ、お酉どん／＼。

ト呼ぶ、アイ／＼と梯子の口より下　お酉襷がけにて出て來る。

二百七十番の御酒を早く出してお呉れよ。

お酉　階下が込むので法返しが附かないよ。

ト是にて梯子の口へはひる。お松は上手へ行き、

お松　誠にお氣の毒様でござります、却つて御迷惑でござりませうから、少々此方へお寄りなすつて下さいまし。

伊太　ナアニちつとも恐れる事はねえのだから、くツついてゐても構やアしねえが、客の事の遠慮になつては氣の毒だ、何處へでも行つてやらうよ。

お松　生憎階下も込みますから、どうぞもう少々其方の方へお寄りなすつて下さいまし。

お京　どうかあなた樣も、何分お取成を願ひます。

ト百姓へ頼み伊太郎を宥めながら少し上寄りへ酒肴を片附ける。此内階下より下女お雨枕煙盆を持ち出て來り、金六の所へ置いてはひる。櫻井等五人は上手を見やり笑ひながら、

櫻井　ア、やう／＼の事で合長屋が少し先へ引越して、邊りが涼しくなつて參つた、各々チト寢轉んではどうでござるな。

清六　貴殿は餘程廻つてゐるが、身共等は新入ゆゑ、是より十二分に飲むつもり。

大六　手前等にはお介意ひなく、横におなりなさるがよい。

源彌　コリヤ、枕を一つ貸して呉れ。

お京　ハイ畏りました。（トモヂ／＼してゐる。）

源彌　エヽ早く持つて來んかえ。

ト是にて下女兩人顔見合せ困つてゐる。此内櫻井は手枕にてゴロリとなる。此時階下にて、

呼び　お一人さん。

ト藥して賑かな合方になり、階段の口より以前の下女お酉案内して、前幕の梅田雅樂之介袴たり紺足袋、大小にて扇をつかひながら出て來り、

お酉　今日は金比羅様で此通り一杯でござりますから、お狭いのは御勘辨なすつて下さいまし。

雅樂　ア、よい／＼、一寸支度を致すばかりぢや、どんな隅でも苦しうないから、邪魔にならぬ所へ案内して呉れ。

お酉　お京どん、何處がよからうね。

お京　彼方へ願つてお呉れよ。

ト上手大工の伊太郎の衣へ指圖する。是にてお酉案内して雅樂之介を上手へ伴ひ行く。此時横になりたる櫻井下女の足の所へ刀をづッと出す。是にて下女踏むまいとするはずみ、思はず跨いで向うへ行く。櫻井その裾を捉へ突た儘にて、

櫻井　ヤイ待て。

お酉　是は誠に粗相致しました。眞平御免なすつて下さいまし。

櫻井　イヤ了簡ならん、輕輩にも武士たる者の刄を女子に跨がれては、此儘では了簡ならん。

トキツといふ。此時雅樂之介櫻井を見やりハツと思入。女中はブル〳〵震へながら心遣ひの思入。雅樂之介是を見兼ね素知らぬ振にて下手下にゐて、

雅樂　唯今手前を案内致す下女が粗相致せし由、手前もとも〴〵お詫び申せば、どうぞ御勘辨下さりませ。

ト此内講中の客は後ろより見やり、伊太郎は上手に立上り、金六は下手へ出て、双方より此樣子を見やり、雅樂之介へ心づき、恂りなし、

伊太　ヤ、あの人は久喜で見掛けたお侍だ。

金六　オ、此方樣は、

ト言掛けるを雅樂之介コレと制す。此内櫻井起上り心附いて。

櫻井　ム、成程、貴殿は深川の久喜萬字で出逢うた御仁か。

雅樂　思ひがけなく又爰で。

櫻井　圖らず面會致せしは、

雅樂　よく〳〵盡きせぬ

兩人　御縁でござるな。（ト兩人よろしく思入。）

清六　ム、、然らば貴殿は此仁とお近附でござるかな。

櫻井　いかにも當春假宅で、わが敵妓のかしくより買論致した事がござつた。

清六　ア、扨は評に承はつた、彼の色男でござるかな。

櫻井　所がそれも大違ひ。二人共に身請も致さず、虻も取らず蜂も取らず、其場は其儘別れたのだ。

雅樂　知らぬ御仁と存ぜしに、圖らず御目に掛る上は、下女が粗相もお許し下され。

櫻井　そりや勘辨も致さうが、シテ其許は何れの御藩たな。

雅樂　サア、それはな。

櫻井　何れの御藩か承はり、其上御挨拶致すでござらう。

清六　西國でござるか中國でござるか、但しは北國か。

大六　主人の姓名承はり、

源藏　仕儀に依りなば唯今の、

櫻井　無禮は此詫、

四人　致すでござらう。

雅樂　是は又改まつたる其御挨拶。何か下女が粗相より、成行つてお詫び致すに、それ程までお糺しな

くとも、よからうやうに存じますが。

櫻井　貴殿は下女の粗相と言ふが、此方の相手は其方だ。

雅樂　何と仰せらるゝ。（ト合方キツパリとなり。）

櫻井　よく聞かれよ、爰らにゐる職人とか、又江戸に馴れぬ田舍者とか、あれにゐる町人などなら虫けら同然相手にならぬが、貴殿は立派な武士ではないか、何故此前を通る時挨拶を致さぬのだ、それで人の扱ひが出來ると思ふか、考へて見るがよい。

雅樂　是は又迷惑千萬。まだ其許の前へも行かぬに、何で御挨拶が出來ませうぞ。

清六　イヽヤそりや言拔だ、此仁の前へは行くまいが、我々の前へは參つたぞ。

源彌　左すれば無禮であるまいか、サア主人の名前を言はつせえ。

大六　サア何れの御藩だ。

四人　承はりたい。

　トキツと言ふ。是にて金六と伊太郎忌々しいといふ思入ある、

雅樂　實は先頃深川にて、お出會ひ申せし其時より、我が不身持に江戸にをられず、據所なく國許へ、戻りし後は寄邊なき、浪人者にござりまする。

櫻井　ナニ浪人者でござる。こりや面白い。浪人でござれば猶了簡相成らぬ。
雅樂　そりや何故でござるよな。
櫻井　此方五人も浪士でござる。
雅樂　エ。
櫻井　互ひに浪士の身の上なれば、主人に憚る所はござらぬ、立合の上勝負を附けよう。
雅樂　是は又思ひも寄らぬ、素より武術も未熟の拙者。無禮をお詫び申すのみ、立合などゝは望みにござらぬ。
櫻井　然らば相手は貴殿故、無禮を致した其代り、此方でも銘々に無禮を致すがよろしいか。
雅樂　そりや手前が無禮致したと、お見込あらばどのやうにも。
櫻井　言分はござらぬか。ム、然らば無禮を致すでござる。

ト櫻井片足を雅樂之介の胸の邊りへ突出す。是にてびつくりなし、

雅樂　こりや武士たる者の面前へ。
櫻井　足を出したが何とした、無禮をしても介意はぬと、おのれの口から申した上は、よもや手出しはなるまいがな。

雅樂　ム、。

ト是にて金六伊太郎怺へかね立掛るを、雅樂之介コレと制し、櫻井の足を拂ひ双方キッと見得。此内皆々心遣ひのこなしにて、女中階段の口へ行き、

下女　誰ぞ來て下さいまし／＼。

トワヤ／＼言ふ。合方バタ／＼になり、梯子の口より松田女房お君前垂がけにて急ぎ出て來り、此樣子を見てびつくりなし、

お君　是は何の間違ひでござりましたか、手前方の行屆かぬのでござりませう。どうか御双方とも御了簡なすつて下さりませ。

櫻井　貴樣は何だ。

お君　ハイ、私は當家の家内でござりますが、折惡しく連合が他行致してをりますから、代りにお詫びに上りましてござりまする。

櫻井　最所は女の無禮だが、今の相手は此侍、決して案じるには及ばねえ。

お君　イエ／＼何方に致せ、間違ひがあつては濟みませぬ、どうぞ穩便にお願ひ申上げまする。

伊太　俺ア先刻から癪に障つてならねえのだ。旦那、何を愚圖々々してゐるのだ、どうか片を附けて

お仕舞ひなせえな。

　　トやつきになるを田舎者止める。

お君　あなた方までさう脇から御立腹では困ります。どうぞお靜かになすつて下さりませ。

金六　モシ名を言つて惡けりや申しますめえが、此金六も附いてゐますぜ。若し危くなつたならば、主人の所へ驅付けて、先生樣にお願ひ申しますぜ。

　　ト言掛けるを雅樂之介心遣ひのこなしあつて、

雅樂　コリヤ〳〵何を申す。以前ならば知らぬ事。當時は頼る所なき居所定めぬ浮浪人。何處にも知邊はあらざるぞ。

金六　それでも見す〳〵先生樣の、

雅樂　まだ〳〵申すか、控へてをれ。（ト是にて金六拳を握り）

金六　ア、業が煮えるこんだな。（ト手下にゐる。）

櫻井　イヤナニ各々、現在武士が足を出しても一言半句も申さぬは、高の知れたる豆腐侍、是が所謂田樂武士だ。

清六　左樣でござる。當春江戸にをつた者が、再び國へ行つたとあれば、申さば勤番同樣な國侍も

同じ事。

大六　江戸の味が忘られず、浪士の身として遙々と御膝許へ再び來て、麥飯擧句で松田とは、ちつと奢りの沙汰であらう。

源彌　虎の門の御濠縁、甘酒店の婆アを相手に、小網の鮨か久保町の、一膳飯が相應だらうよ。

仁太　勝手も知れぬ松田へ揚り、貴殿は眼が眩んだのか。イヤサ、武士の前とも氣が附かぬか。

櫻井　武士の口から手出しはせぬ、と申したからは相違はあるまい。是でも異議はあるまいな。

ト雅樂之介差置いたる刀の柄を踏飛ばす、皆々憤りして、

金六
伊太　コリヤもうどうも。

ト兩人立上るを伊太郎を田舍者止め、金六は雅樂之介抑へ、

雅樂　コリヤ他人の此方の志、親身も及ばぬ忝いが、怺へてゐるも師の教へ、決して武士の恥辱でないわえ。（トぢつと思入。）

金六　何處まで堪辨強い事だか、わしや堪忍袋の緒が切れたに。

伊太　いけねえまでもやつて見るが、職人とは了簡が違ふな。

ト雅樂之介櫻井四人に向ひ、

雅樂　かくまで御立腹なされしを、唯今の振舞にて御了簡下されば、身共は元より當家の仕合せ、有難うござりまする、是は御內儀、此方も却つて迷惑であつた、爰にをつてもお邪魔であらう、一寸支度を致す內、何處でもよい、案內して呉りやれ。

お君　御聞き違いあなた樣で、私共まで助かりました、左樣なれば御案內致しますから、階下へお出で下さりませ。

雅樂　失禮御免下されい。（ト立上り、女房お君案內して下手へ行きかゝるを、）

櫻井　イヤ暫く待たつしやれ。

雅樂　何御用でござるな。

櫻井　[illegible]するともしないとも、返答なき內ツカ〳〵と、何で此場を立つて行くのだ、ア、聞えた、こりや何ぢやな、身共を穢多か乞食同樣忌嫌つて立つたのぢやな。

雅樂　是は思ひも寄らぬ事、再三詫入る程の事、何で隔てを致さうぞ、こりや御手前が御酒の上で、何か間違ひでござらう、此方左樣な覺えござらぬ。

櫻井　イヽヤ見下げて立つたに相違ない、さう見下げられては了簡出來ぬ、どつちが見下げる腕前だか、此場に於て勝負を致さう。

ト此にて雅樂之介思入あつて、

雅樂　コリヤ何か遺恨があつて申さるゝか。

櫻井　いかにも、かしくの遺恨がある。

雅樂　シテ其仔細は。

櫻井　かしくの身請の事よりして、恥辱を受けし其返報、折がなあらば返さうと、思ひ設けし此出會、遺恨を晴らさにや相成らぬ。

雅樂　扨はあれを根に持つて、そりや其許の心得違ひだ。

櫻井　何だと。（ト替つた合方になり。）

雅樂　素より無骨の某ゆゑ、遊里へ立入りし事なきを、開帳かけて朋友が、勸めに一二度誘はれ、娘に揚る久喜の奥座敷、圖らず落合ふ相客に、身請の話の買論も、中へはひりし主人が詞に、するとの一言に、其爭ひも解合つて、互ひに其場は別れし故、遺恨殘らう筈はござらぬ。

櫻井　イヽヤ左樣ではない。貴殿がかしくに熱くなり、足を近く來ると聞き、身共も武士の恥辱ゆゑ、遊里の意地に萬字屋へ、通ひ詰めたる其果が、遂に師匠に破門され、今日かゝる浮浪の身の上。事の起りは其許ゆゑ、一度ならず二度までも恥辱を。

清六　浪人同士が落合つて、互ひに腕を磨いた上。

大六　切られて死なばそれまで故、イデ腕くらべを、

四人　致すでござらう。

雅樂　サアそれは。

櫻井　浪人しても魂は、錆びぬ鍛えの直燒刄、覺えの腕前見せて呉れん、イザ此所で立合はつせえ、誠の武士の魂は、斯くの通りだ、是喰へ。

トキツと思入あつて刀を拔き、雅樂之介の目の前へ突出す。雅樂之介思はずぢつと刀を見込み、扨はといふ思入あつて、指にて寸をとり、

雅樂　ヤ、コリヤ和泉守國貞の銘刀。（トぢつと見込む。）

櫻井　鑑定通り和泉守國貞、堀部安兵衛所持の一刀、然も今年で十七年前、公儀へ勤役致す砌、御船藏にて狼藉者を討果したるわが腕前、中身を見たら震へようがな。

雅樂　ム丶、スリヤ十七年前御船藏にて討果したは此一刀。

トぢつと見やり、無念の思入。

櫻井　サア立合へ、それとも一命惜しいのか。

清六　立退れが致したか。ト雅樂之介を見る。是にて雅樂之介キッとなり、

雅樂　村田小八、よくも恥辱を與へたな。

櫻井　ヤ、我が本名を存じをるは。

雅樂　過ぎし天保十一年、御成の戻りに遺恨より、内宮新太郎殿を討ちし其方、それ我が父の恩人なり、又二つには御身を慕ふ息女の復讎、まつた是にて我が受けし武士の恥辱に捨置き難く、かた〴〵以つて此所で、イデ返報の致して呉れん。

櫻井　それ知られたら、もう是迄。

ト切つてかゝる。此時雅樂之介一方を引拔き双方見得へ、キッと見得。是を謠への合方になり、四人慌てゝ後ろ鉢卷下げ緒の襷掛け身にて身構へなし、金六伊太郎は尻端折り鉢卷、あたりを片付け加勢をすることなし。是を田舍者兩人震へ〳〵心遣ひの思入、女房女中はうろ〳〵して、

お君　誰ぞ男を呼んでお呉れ〳〵。

ト障子の口へ逃げてはひる。後ろにゐたる講中の客も一統上り、氣味わる〳〵逃げようとする。此内双方睨み合つた儘見合つてゐる。バタ〳〵にて階下より幕あきの若い者印半纏六尺棒を持ち上つて來り、此體を見てびつくりなし、後へ下る。此内櫻井の方チリ〳〵と後へ下る。清六等四人心遣ひの

こなしあつて、一人此中へ打つてかゝるを雅樂之介一刀に斬下げ、上下へ分れてキツと見得。是より竹笛入り誂への合方になり、雅樂之介に櫻井四人がゝりの立廻り。内仁太郎又討たれ倒れながら。

仁太　參つた〳〵。

ト聲かける。相客は皆々上下へ逃げてはひる。大工の伊太郎と金六殘り、やつきとなつて三尺帶を解いて足がらを掬はうといふこなし、金六は立廻りの間へ衝立を邪魔に出す事よろしくあつて、トヾ雅樂之介は兩人の侍を切倒し、敵役一人後ろへ逃げてはひる。後櫻井と烈しき立廻りあつて、櫻井を二階の上り口へ押してゆく。爰にて一刀に斬下げる。是にて櫻井階子段へ落ちる。雅樂之介片足踏みかけるを道具替りの知らせ。拔身を持つて階下を見込み畫面の見得。金六と伊太郎は上手に飛上つて、

金六　偉えものだ〳〵。

伊太　こんな好い心持な事はねえ。

ト此模樣前の合方にて此道具廻る。

本舞臺上寄りに常足六枚飾り、上手大臣柱より斜に幅廣の段階子。此下一面出格子を見たる張物。下手落間、此向う一間の入口。是に揚戸を下ろし、是より下手同じく出格子の内、すべて松田店先の體。二重に以前の櫻井肩先を斬られ糊紅になり、二階を見込み刀を差付けてゐる見得。門

口の外戯棒の音、人を制してゐる聲ワヤ〳〵する。此模様前の合方にて道具留る。と、二階より雅樂之介拔身にて悠々とおりて來り、邊りへ思入。櫻井は起上り斬つてかゝり、双方手利の立廻りあつて、トヾ一刀に櫻井を斬倒し、止めを刺さうとしてぢつと見やり、止めには及ばぬといふ思入ベタ〳〵になり二階にて、

まだ一人ゐた〳〵。

ト騷ぐ。ベタ〳〵にて二階より以前の侍一人拔身にておりて來り、是を金六伊太郎心張棒を持ち追ひかけ來る。是にて侍下手へ逃げ行くを雅樂之介一刀に斬倒す。是にてほつと思入。大工伊太郎上手へはひり、盃洗へ水を汲んで來り、

伊太　旦那、嘸お草臥れなすつたらう、マア息繼に水を一杯お上りなせえまし。

ト汗を拭きながら出す。

雅樂　イヤ忝いが、別に息も切れぬわえ。

伊太　エヽ何ともねえエ、素晴しいものだねえ。（ト此内手足の血を拭きながら）

雅樂　金六殿、刀の血を洗ひたうござれば、水を一杯お持ち下され。

金六　刀の血なら介意ひましねえ、此死骸の着物で拭いておやりなされませ。

雅樂　イヤ左樣な無禮は武士の法にござらぬ、どうぞ水を下され。

金六　ハヽア義理固いものでござりますな。

ト金六下手へはひり、直ぐ銅盥へ水を入れ持つて來り、手先震へ水を溢しながら下へ置く。是にて雅樂之介手を洗ふ。伊太郎持合せの手拭を出し、

伊太　旦那、テ、、、手拭をお使ひなせえまし。

ト同じく震へて渡す。是にて雅樂之介刀と手とを悠々と洗ふ。此内門口の外にてワヤ〳〵人聲して鐵棒の音する。此内よろしく手を拭ひ雅樂之介眞中へ住ひ、拔身を構へる。兩人見てびつくりなし、仰向に引くり返る。バタ〳〵になり、入口の潜りより幕あきの蔦頭銀次、尻端折りて走り出て來り、刀を持つたる雅樂之介の手を捉へ、

銀次　梅田樣、御切腹なされずとも、マアお待ちなされませ。

雅樂　オ、銀次殿、其心遣ひは忝ないが、決して切腹などは致さぬ。是より速かに申開きを致すから、安心して下され。

銀次　ア、それでは御切腹ではござりませぬか、私は恟り致しました。

ト此内雅樂之介刀を鞘へ納め、

雅樂　此大小は調べまで、金六殿預かつて置いて下されい。

金六　ハイ〳〵畏りました、慥かにお預り申しまする。

ト バタ〳〵にて、上下より以前の松田の女房お君を先に、若い者、講中の客四人、田舍者二人高張を持つて出て來り、

お君　實に飛んだ事になりまして、申上げやうもござりませぬ。

雅樂　手前は素より覺悟なれど、當家へ對して氣の毒にござる。

伊太　旦那の事については、何處までもわつち共二人が。

金六　出る所へ出て證人に立ちまするから、お案じなさいますな。

ト 鐵棒の音バタ〳〵にて、入口より幕あきの芳松尻端折りにて出て來り、

芳松　二階にゐた講中の衆が斬られたといふ噂で、惣出で押して來ましたので、通り町は大騷ぎ、何とか言つてやつて下せえ。

雅樂　左程群集致すとなれば御同道下されて、京橋の若松まで參るでござらう。

お君　若松でござりますれば、一つ家も同樣ゆゑ、少しも遠慮はござりませぬ。

銀次　私始め一統で、

伊太　お送り申して、

皆々　參りまする。

雅樂　然らば支度を。

ト立上るを道具替りの知らせ。

致して參らう。

ト袴を脱く。皆々氣味の惡き思入。女房お君死骸を見てゾッとする。此模樣鐵棒の音、木遣りくづしにて道具廻る。

本舞臺元の店先の道具。潜戸を締切り、松田の高張二本入口に建て、爰に成田歸りの講中袢纏にて其提灯を持ち、此內に竹の先へ小提灯を附けたるも混り、其外竹葉又は大根河岸市場の印半纏、思ひ〳〵の仕出し大勢ワヤ〳〵言つてゐる。入口に幕あきの鳶の金太鐵棒にて制してゐる。此見得やはり木遣りくづし樂天にて道具留る。

金太　成田歸りと店の騷ぎが、ごつちやになつて大混雜、往來が通りきれねえから、通つて吳んねえ〳〵。

講一　イヽヤ通られねえ、講中の者が二階に居合せ、斬られたといふ噂。

講二　其安否を聞かねえ內は、仲間の誼で歸られねえ。

講三　一統店へ。

皆々　入れて呉んねえ。

トバタ〳〵になり、潜り戸より銀次先に、芳松講中四人出て來り、

銀次　案じなさるのは尤だが、此通り無事だから、皆さん靜かにして下せえ。

客　オヽ、此方の連中は無事だから。

四人　どうぞ安心して下さい。

講一　其奴アまあよかつた。さうして誰が斬られたのだ。

客一　斬つた侍は蜊河岸の茂々之丞の門弟で、滅法界た手利であつた。

客二　何でもそれと初まると、一刀に斬下げてしまつた。

芳松　何でも此奴ア近い内松川か喜代竹あたりで、貞山か花晴の讀物になるのだ。

銀次　今京橋の若松まで行きなさるから、よく道を氣を付けて呉れ。

芳松　御出役のねえ内に、早く連れて、

金太
芳松　行きてえものだ。

トやはり右の合方バタ〳〵になり、上手より幕あきの久喜萬字の亭主藤吉、娘おかよの兩人足早に出て來り、皆々の中へ割つてはひり、

藤吉　モシ〳〵頭、今松田で間違ひのござりましたは、何處のお侍か御存じはござりませぬか。

銀次　詳しい事は知りませぬが、舊茂々之井の門弟で大層な手利だと申しますが、今直ぐに京橋の待合まで行つて、御出役を待つ心算でござりますから、爰にゐて御覽なさい。

藤吉　有難うござります、ア、、どうかあのお方でなければよいがの。

ト入口の内にてワヤ〳〵いふ。鳶の者入　を制す。

モウ出て來るぞ〳〵。

ト鳶の者鐵棒にて警固して、入口より若い者松田の弓張を點け、雅樂之介無腰、金六後より雅樂之介の大小を抱へ、伊太郎田舍者兩人附添ひ出て來る、これを藤吉おかよ見てびつくりなし、

藤吉　オ、、梅田樣でござりましたか。

かよ　どうしてかういふ事になりましたか。（ト兩人下にゐて愁ひの思入）

雅樂　おかよ樣、お悦びなされませ、御親父を討つたる敵を、討果してござりまする。

かよ　エ、、スリヤ兼ての望をお前樣が、有難うござりまする。

藤吉　娘の行末お案じなく、御吟味お受けなされませ。

雅樂　出役出張なき内に、

銀次　お供致して參りませう。

トバタ〳〵になり、上手より幕あきの野師はつきゞ半次逃げて出て來るを、後より手先追ひかけ來り、手早く繩をかける。

見物　ヤア、やらずの最中がふんじばられた。

皆々　態ア見やアがれ。

トワヤ〳〵云ふ。銀次是を制し、

銀次　サア往來を明けて與れ〳〵。

ト蔦の者鐵棒を突く。是にて皆々上下へ別れ、雅樂之介を眞中に皆々引張りよろしく、

先づ今日は是限り。

目出たく打出し

松田の仇討（終り）

大正十五年三月五日印刷
大正十五年三月八日發行

『世話狂言傑作集』第七卷
定價金參圓

檢印

著作權者　竹柴其水遺族
岡田まつ

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
和田利彥

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
瀧澤一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
春陽堂
（電話本局五一一番
振替東京一六一七番）

河竹繁俊氏
濱村米藏氏　共編
渥美清太郎氏

歌舞伎劇大系（全三十卷）

時代・世話狂言傑作集各十五卷

各冊

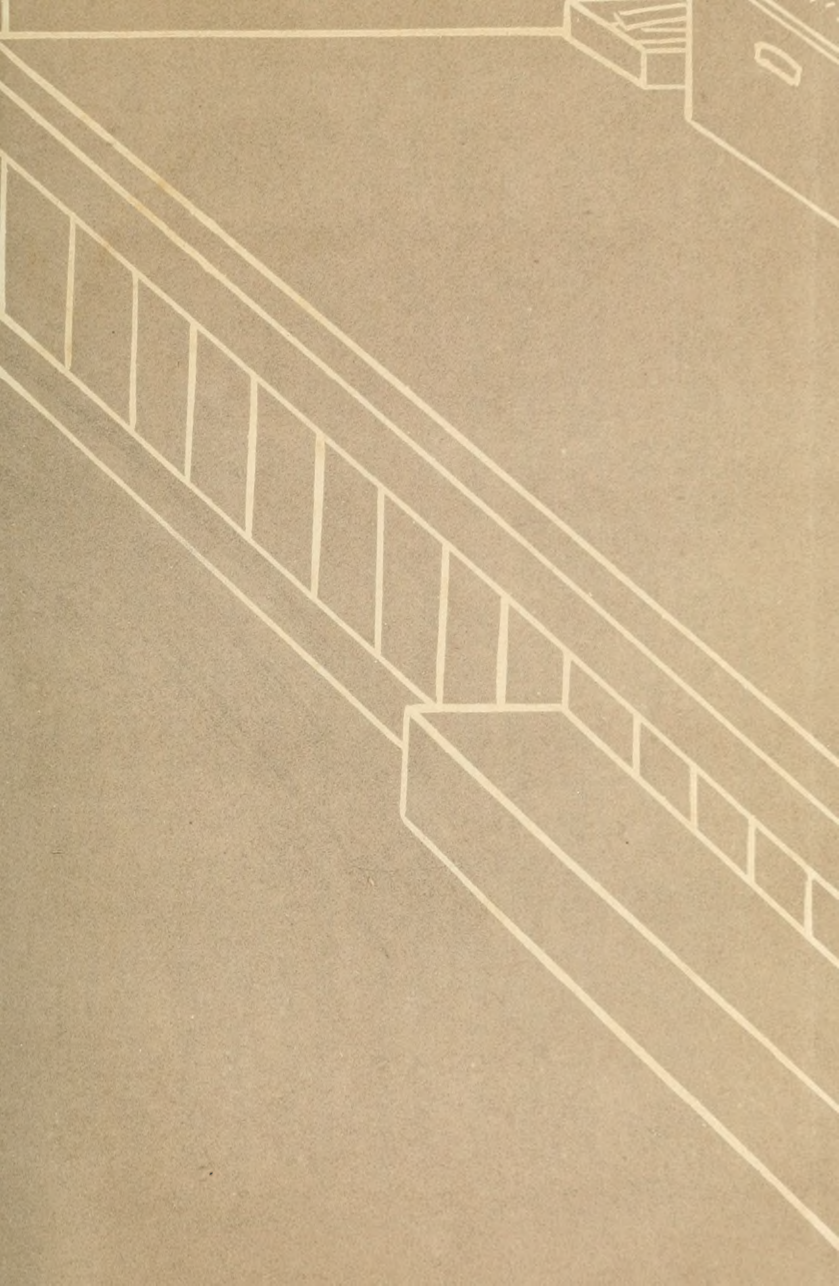
[illegible] 四百頁乃至四百八十頁[illegible]
[illegible] 最新解說詳細・插繪豐富
[illegible] 定價參圓、送料八錢
[illegible] 春陽堂發行

世話狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　四谷怪談。法界坊。嫁切り。梅川忠兵衞。
第二卷（同）　天笠德兵衞。幡隨院長兵衞。酒屋。清玄。
第三卷（同）　八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無團七
第四卷（同）　唐人殺し。堀川。野崎村。五大力。
第五卷（同）　女歌舞伎。殿樣[illegible]次。[illegible]山。名工柿右衞門、鼓の里、裏表[illegible]曲尺。（榎本虎彥集）
第六卷（同）　累物語。白石噺。鬼神お松。夏祭り。
第七卷（同）　お紺の喧嘩。一人片輪。上野戰爭。松田の仇討。（竹柴其水集）
第八卷（續刊）　朝顏日記。敵討噂高松。廓文章。梅の由兵衞。
第九卷（同）　大經師。お妻八郎兵衞。千兩幟。かしく六三。
（以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし）

時代狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　義經千本櫻。石切梶原。扇屋熊谷。逆生物語。卅三間堂。
第二卷（同）　高野山。嫗山姥。玉三、義經腰越狀。新薄雪物語。
第三卷（續刊）　阿漕、菅原。板額。山門五三桐。
第四卷（同）　先代萩。國性爺。辨慶上使。蘭平物狂。彥山權現
第五卷（同）　忠臣藏。小野道風。六彌太。娘景情。
第六卷（同）　廿四孝。平家女護島。宅兵衞上使。鎌倉三代記。
第七卷（同）　ひらがな盛衰記。伊勢物語。岸姬松、輝虎配膳、
第八卷（同）　伊賀越。阿古屋。盛綱。安達ヶ原。有職鎌倉山。
第九卷（同）　一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。
（以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし）



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8138